九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—13—

小郡市所在薬師堂東遺跡の調査

中　巻

1988

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—13—

小郡市所在薬師堂東遺跡の調査

中　巻

例　　言

1．本書は，九州横断自動車道路線内の遺跡について日本道路公団から委託されて，福岡県教育委員会が発掘調査を実施した，13冊目の報告書である。

2．本書に収録した遺跡は，昭和59年度から60年度にかけて発掘調査を行った薬師堂東遺跡（第６地点）である。なお，同遺跡内で同時に調査を行った近世高松家墓地の分については，今回は割愛し，別冊にすることとした。

3．発掘現場での遺構の実測には，中間研志・森山栄一・小田和利・日高正幸・平嶋文博・田中康信・宮田浩之・向田雅彦・高田一弘・木村幾多郎・樋口秀信・武田光正・高山浩一があたり，遺構の写真撮影には，中間・森山・平嶋・小田があたった。なお，空中写真はフォト・オオツカ撮影による。

4．遺物の整理は，発掘作業員及び岩瀬正信の指導のもとに文化課甘木事務所・九州歴史資料館の整理作業員が行った。出土遺物の写真撮影は九州歴史資料館の石丸洋・藤美代子が担当した。

5．出土遺物の実測は，平田春美・原富子・松岡生子・鬼木つや子・若松三枝子・小田・田中・中間が従事し，図面の整理浄書等は，豊福弥生・鶴田佳子・関久江・塩足里美・大田育子が行った。

6．本書で使用する方位は，すべて真北に統一している。

7．本書の執筆は，中間・森山・小田・平嶋が分担し，各文末に記名した。また本書の編集は中間と小田が担当した。

本　文　目　次

〈中　　巻〉

頁

C　土　　壙……175

D　落し穴状遺構……296

E　土　壙　墓……305

F　溝……317

G　井　　戸……338

H　道路状遺構……342

I　円形周溝遺構……344

J　埋　　甕……345

K　馬歯埋納遺構……346

L　風倒木痕……347

M　その他の遺構と遺物……348

Ⅳ　各　　論

A　集落の構造と変遷……391

B　落し穴状遺構……401

C　道路状遺構……405

Ⅴ　結　　語……410

挿　図　目　次

〈中　　巻〉

頁

第191図　土壙配置図（1/1,200）……175
第192図　第1号土壙・第1号土壙遺物出土状態実測図（1/60，1/30）……177
第193図　第1号土壙出土土器実測図（その1）(1/3)……180
第194図　第1号土壙出土土器実測図（その2）(1/3)……181
第195図　第1号土壙出土土器実測図（その3）(1/3)……182
第196図　第1号土壙出土土器実測図（その4）(1/3)……183
第197図　第1号土壙出土土器実測図（その5）(1/3)……184
第198図　第1号土壙出土土器実測図（その6）(1/3)……185
第199図　第1号土壙出土土器実測図（その7）(1/3)……186
第200図　第1号土壙出土土器実測図（その8）(1/3)……187
第201図　第1号土壙出土土器実測図（その9）(1/3)……188
第202図　第1号土壙出土土器実測図（その10）(1/3)……189
第203図　第1号土壙出土土器実測図（その11）(1/3)……190
第204図　第1号土壙出土土器実測図（その12）(1/3)……191
第205図　第1号土壙出土土器実測図（その13）(1/3)……192
第206図　第1号土壙出土瓦実測図（その1）(1/3)……193
第207図　第1号土壙出土瓦実測図（その2）(1/3)……194
第208図　第2～10号土壙実測図（1/60）……196
第209図　第3号土壙出土土器実測図（1/3）……197
第210図　第7号土壙出土土器実測図（1/3）……197
第211図　第8号土壙出土土器実測図（1/3）……198
第212図　第10号土壙出土土器実測図（1/3）……198
第213図　第11～14号土壙実測図（1/60）……199
第214図　第11号土壙出土土器実測図（1/3）……201
第215図　第12号土壙出土土器実測図（1/3）……202
第216図　第12号土壙出土瓦実測図（1/3）……203
第217図　第13号土壙出土土器実測図（1/3）……205
第218図　第14号土壙出土鉄器実測図（1/2）……206

頁

第 219 図　第15～19号土壙実測図（1/60）……207
第 220 図　第15号土壙出土土器実測図（1/3）……208
第 221 図　第17号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)……209
第 222 図　第17号土壙出土土器・瓦実測図（その２）(1/3)……210
第 223 図　第18号土壙出土土器実測図（1/3）……212
第 224 図　第19号土壙出土土器実測図（1/3）……213
第 225 図　第20～22号土壙実測図（1/60）……214
第 226 図　第20号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)……216
第 227 図　第20号土壙出土土器実測図（その２）(1/3)……217
第 228 図　第20号土壙出土土器実測図（その３）(1/4)……218
第 229 図　第20号土壙出土土器実測図（その４）(1/3)……220
第 230 図　第20号土壙出土土器実測図（その５）(1/3)……221
第 231 図　第20号土壙出土土器実測図（その６）(1/3)……223
第 232 図　第20号土壙出土土器・瓦実測図（その７）(1/3)……224
第 233 図　第20号土壙出土紡錘車・鉄器実測図（1/2）……225
第 234 図　第21号土壙出土土器実測図（1/3）……226
第 235 図　第21号土壙出土鉄器実測図（1/2）……227
第 236 図　第23・24号土壙実測図（1/60）……228
第 237 図　第23号土壙出土土器実測図（1/3）……229
第 238 図　第24号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)……230
第 239 図　第24号土壙出土土器・瓦実測図（その２）(1/3)……232
第 240 図　第24号土壙出土鉄器実測図（1/2）……233
第 241 図　第25・26号土壙実測図（1/60）……233
第 242 図　第25号土壙出土瓦実測図（1/3）……234
第 243 図　第26号土壙出土土器実測図（1/3）……234
第 244 図　第30～33・57号土壙実測図（1/60）……236
第 245 図　第36号土壙実測図（1/60）……237
第 246 図　第36号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)……239
第 247 図　第36号土壙出土土器実測図（その２）(1/3)……240
第 248 図　第36号土壙出土土器実測図（その３）(1/3)……241
第 249 図　第36号土壙出土土器実測図（その４）(1/3)……242
第 250 図　第36号土壙出土紡錘車実測図（1/2）……243
第 251 図　第37・38号土壙実測図（1/60）……244

頁

第 252 図　第37号土壙出土土器実測図(その１)(1/3)……246
第 253 図　第37号土壙出土土器実測図(その２)(1/3)……247
第 254 図　第37号土壙出土土錘実測図（1/2）……247
第 255 図　第38号土壙出土土器実測図(その１)(1/3)…… 249
第 256 図　第38号土壙出土土器実測図(その２)(1/3)……250
第 257 図　第38号土壙出土土器実測図(その３)(1/3)……253
第 258 図　第38号土壙出土土器実測図(その４)(1/3)……254
第 259 図　第38号土壙出土土器実測図(その５)(1/3)……255
第 260 図　第38号土壙出土土器実測図(その６)(1/3)……256
第 261 図　第38号土壙出土土器実測図(その７)(1/3)……257
第 262 図　第38号土壙出土鉄器実測図（1/2）……258
第 263 図　第42・43号土壙実測図（1/80)……259
第 264 図　第42号土壙出土土器・瓦実測図（1/3）……260
第 265 図　第42号土壙出土土錘実測図（1/2）……261
第 266 図　第43号土壙出土土器実測図(その１)(1/3)……262
第 267 図　第43号土壙出土土器実測図(その２)(1/3)……263
第 268 図　第43号土壙出土瓦・砥石実測図（1/3）……264
第 269 図　第43号土壙出土鉄器実測図（1/2）……265
第 270 図　第44～46号土壙実測図（1/60)……266
第 271 図　第44号土壙出土土器実測図（1/3）……267
第 272 図　第45号土壙出土土器実測図（1/3）……267
第 273 図　第46号土壙出土土器・軽石実測図（1/3）……268
第 274 図　第47号土壙実測図（1/80)……270
第 275 図　第47号土壙出土土器実測図(その１)(1/3)……272
第 276 図　第47号土壙出土土器実測図(その２)(1/3)……273
第 277 図　第47号土壙出土土器実測図(その３)(1/3)……275
第 278 図　第47号土壙出土土器実測図(その４)(1/3)……276
第 279 図　第47号土壙出土土器実測図(その５)(1/3)……279
第 280 図　第47号土壙出土土器実測図(その６)(1/3)……280
第 281 図　第47号土壙出土土器実測図(その７)(1/3)……281
第 282 図　第47号土壙出土土器実測図(その８)(1/3)……282
第 283 図　第47号土壙出土土器実測図(その９)(1/3)……284
第 284 図　第47号土壙出土瓦実測図（1/3）……285

頁

第 285 図　第47号土壙出土砥石・鉄器実測図（1/2）……286
第 286 図　第49～51号土壙実測図（1/60）……287
第 287 図　第49号土壙出土土器実測図（1/3）……288
第 288 図　第51号土壙出土土器実測図（1/3）……289
第 289 図　第52・56号土壙実測図（1/60）……290
第 290 図　第52号土壙出土土器実測図（1/3）……291
第 291 図　第56号土壙出土土器実測図（1/3）……291
第 292 図　第57号土壙出土土器実測図（1/3）……292
第 293 図　落し穴状遺構配置図（1/1,500）……296
第 294 図　第１・２号落し穴状遺構実測図（1/30）……297
第 295 図　第３・４号落し穴状遺構実測図（1/30）……299
第 296 図　第５・６号落し穴状遺構実測図（1/30）……300
第 297 図　第７・８号落し穴状遺構実測図（1/30）……301
第 298 図　第９・10号落し穴状遺構実測図（1/30）……302
第 299 図　第11・12号落し穴状遺構実測図（1/30）……304
第 300 図　土壙墓配置図（1/1,200）……306
第 301 図　第１～３号土壙墓実測図（1/30）……307
第 302 図　第２号土壙墓出土土器実測図（1/3）……308
第 303 図　第３号土壙墓副葬土器実測図（1/3）……308
第 304 図　第４～６号土壙墓実測図（1/30）……309
第 305 図　第６号土壙墓副葬土器実測図（1/3）…… 311
第 306 図　第７・８号土壙墓実測図（1/30）……312
第 307 図　第７号土壙墓副葬土器実測図（1/3）……313
第 308 図　第８号土壙墓出土土器実測図（1/3）……313
第 309 図　第９～11号土壙墓実測図（1/30）……314
第 310 図　第９号土壙墓出土土器実測図（1/3）……315
第 311 図　第11号土壙墓出土土器実測図（1/3）……316
第 312 図　溝配置図（1/1,200）……317
第 313 図　溝土層実測図（1/30）……318
第 314 図　第１号溝出土土器実測図（1/3）……319
第 315 図　第３号溝出土土器・瓦実測図（1/3）……319
第 316 図　第４号溝出土土器実測図（1/3）……319
第 317 図　第５号溝出土土器実測図（1/3）……321

頁

第318図　第5号溝出土瓦実測図(その1)(1/3)……322
第319図　第5号溝出土瓦実測図(その2)(1/3)……323
第320図　第5号溝出土石器・土錘等実測図（1/2）……323
第321図　第7号溝出土瓦実測図（1/3）……324
第322図　第10号溝出土瓦・磁器実測図（1/3）……324
第323図　第14号溝出土瓦実測図（1/3）……325
第324図　第15号溝出土瓦実測図（1/3）……326
第325図　第16号溝出土土器実測図（1/3）……326
第326図　第17号溝出土瓦実測図（1/3）……327
第327図　第18号溝出土土器実測図（1/3）……328
第328図　第18号溝出土瓦実測図（1/3）……329
第329図　第28号溝出土土器実測図（1/3）……329
第330図　第33号溝出土瓦実測図（1/3）……329
第331図　第34号溝出土瓦・青磁実測図（1/3）……330
第332図　第37号溝出土石戈実測図（1/2）……330
第333図　第38号溝出土土器実測図（1/3）……331
第334図　第39号溝出土土器・瓦実測図（1/3）……332
第335図　第41号溝出土土器実測図（1/3）……333
第336図　第42号溝出土瓦実測図（1/3）……334
第337図　第43号溝出土土器実測図（1/3）……335
第338図　第45号溝出土土器実測図（1/3）……335
第339図　第48号溝出土土器実測図（1/3）……335
第340図　第50号溝出土土器・瓦実測図（1/3）……336
第341図　第52号溝出土土器実測図(その1)(1/3)……336
第342図　第52号溝出土土器実測図(その2)(1/4)……337
第343図　第53号溝出土土器実測図（1/3）……337
第344図　第1・2号井戸実測図（1/60)……339
第345図　第1号井戸出土土器実測図（1/3）……340
第346図　第1号井戸出土石鏃実測図（実大)……340
第347図　第2号井戸出土土器実測図（1/3）……341
第348図　道路状遺構実測図（1/120，1/900)……343
第349図　円形周溝実測図（1/60)……344
第350図　埋甕出土状態実測図（1/30)……345

頁

第 351 図　第 1 号埋甕実測図（1/3）……346
第 352 図　馬歯埋納遺構実測図（1/15）……347
第 353 図　第 1 ・ 2 号風倒木痕実測図（1/60）……348
第 354 図　柱穴群出土土器実測図（その 1 ）(1/3)……350
第 355 図　柱穴群出土土器実測図（その 2 ）(1/3)……352
第 356 図　柱穴群出土土器実測図（その 3 ）(1/3)……353
第 357 図　柱穴群出土土器実測図（その 4 ）(1/3)……355
第 358 図　柱穴群出土土器実測図（その 5 ）(1/3)……356
第 359 図　柱穴群出土土器実測図（その 6 ）(1/3)……357
第 360 図　柱穴群出土土器実測図（その 7 ）(1/3)……359
第 361 図　柱穴群出土土器実測図（その 8 ）(1/3)……360
第 362 図　柱穴群出土土器実測図（その 9 ）(1/3)……362
第 363 図　柱穴群出土土器実測図（その10）(1/3)……363
第 364 図　柱穴群出土土器実測図（その11）(1/3)……365
第 365 図　柱穴群出土土器実測図（その12）(1/3)……366
第 366 図　柱穴群出土土器実測図（その13）(1/3)……369
第 367 図　柱穴群出土土器実測図（その14）(1/3)……370
第 368 図　柱穴群出土土器実測図（その15）(1/3)……372
第 369 図　柱穴群出土土器実測図（その16）(1/3)……373
第 370 図　柱穴群出土土器実測図（その17）(1/3)……375
第 371 図　柱穴群出土土製品・石製品実測図（1/2）……376
第 372 図　柱穴群出土石器実測図（2/3）……376
第 373 図　北西部落込み土層実測図（1/120）……377
第 374 図　北西部落込み出土遺物実測図（1/3）……378
第 375 図　高松家墓地周辺出土土器実測図（その 1 ）(1/3)……380
第 376 図　高松家墓地周辺出土土器実測図（その 2 ）(1/3)……381
第 377 図　高松家墓地周辺出土瓦実測図（その 1 ）(1/3)……382
第 378 図　高松家墓地周辺出土瓦実測図（その 2 ）(1/3)……383
第 379 図　高松家墓地周辺出土瓦実測図（その 3 ）(1/3)……384
第 380 図　包含層出土土器実測図（その 1 ）(1/3)……386
第 381 図　包含層出土土器実測図（その 2 ）(1/3)……387
第 382 図　包含層出土土器等実測図（その 3 ）(1/3)……388
第 383 図　包含層出土土器等実測図（その 4 ）(1/3)……389

頁
第384図　包含層出土石器実測図（2/3）……390
第385図　薬師堂東遺跡集落変遷図（1/1,800）……393
第386図　溝に囲まれた平地住居（1/400）……399
第387図　カマド築造序模式図……400
第388図　落し穴状遺構の分類……401
第389図　第11号落し穴状遺構概念図……402
第390図　各地の落し穴状遺構例……403
第391図　薬師堂東遺跡落し穴状遺構の群（1/2,500）……404
第392図　下原遺跡落し穴状遺構の群（1/800）……404
第393図　立野遺跡落し穴状遺構の群（約1/3,300）……404
第394図　道路状遺構集成図（1/720）……407

付　　図　薬師堂東遺跡遺構全体図（1/400）

表　目　次

〈中　　巻〉

頁
第 4 表　薬師堂東遺跡土壙一覧表……292
第 5 表　薬師堂東遺跡落し穴状遺構一覧表……305
第 6 表　薬師堂東遺跡土壙墓一覧表……316

C　土　　壙

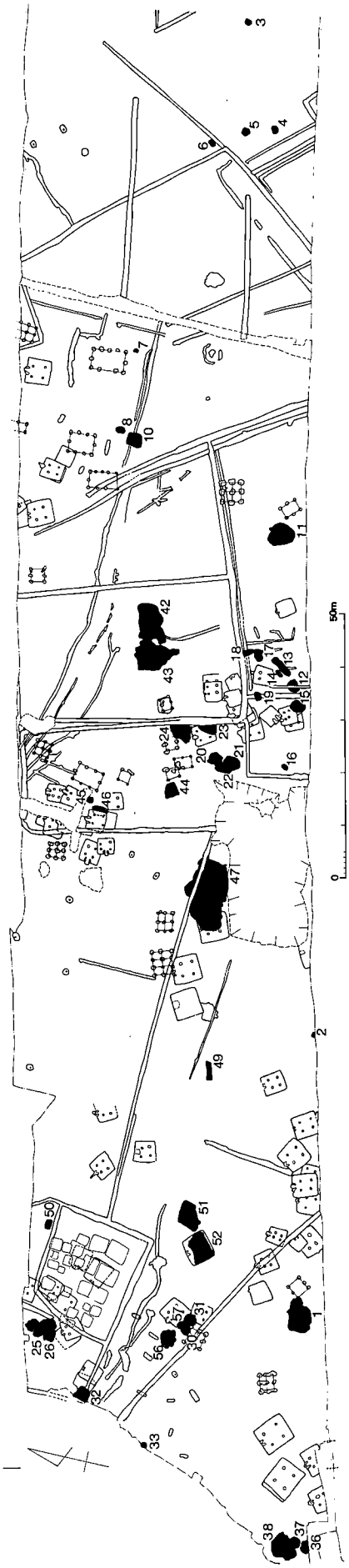
本遺跡では，竪穴式住居・掘立柱建物などの明確な古代遺構の他に，不整形の大型掘り込み遺構や長方形に近い小型の掘り込み遺構が多く検出され，これらをひっくるめて土壙と称して対応した。本報告では，これらの中から，墓と思われるもの，或いは井戸と推定されるものを分離して，別項目の中でとりあげた。その結果，大半がごみ捨場としての機能が考えられる遺構を土壙として取り扱うこととなった。

本遺跡では，総数57基の土壙を検出した。これらの時期は，７世紀初～平安時代まで及ぶが，大半は８世紀末までのものである。更に集中するのは７世紀後葉～８世紀前葉の間であり，竪穴式住居の盛期とほぼ一致する。

また，その配置は，住居群としてＡ～Ｇ群にグループ分けしたが，それらの各群の中にほぼすべてが含まれる。即ち，各住居群の周縁に当たる範囲や，その住居群の中で１～２個所を決めて，ごみ捨場としている状況が認められたという事である。という事は自ずから，各々の住居群それぞれにごみ捨場を近くに掘っていたという理解ができる。

（第191図参照）

更に，大きな土壙は，それ自体当初からそのような形状・規模を呈していた訳では決して無く，何回にも及ぶ大小の掘り直しや拡張によって現状を呈するに至ったという事を認識しておかねばならない。そして，小さい土壙も群をなしている場合が多く，それについ



第191図　土壙配置図（1/1,200）

てもごみ捨場範囲内におけるその時々の掘削が多少ずれただけであって，基本的には大型土壙における掘り直しの意識と全く同じであったと理解すべきである。

詳細な検討は後論に譲ることとして，以下各土壙について記述してゆきたい。（中間）

第１号土壙（図版95～98，第192図）

調査区の西端に位置し，第21号掘立柱建物に西接する。東西側が長軸で4.72m，短軸3.98mを測る。平面形は隅丸の不整長方形を呈し，東側には23cm程の浅い段が付く。また，土壙の中には小穴があり，最深部で60cm，土壙底より30cmの深さである。

埋土は黒色土を基調とし，１・２層には炭・焼土粒がかなり含まれていた。その中より，軒丸瓦・平瓦等の瓦類を初めとして，夥しい量の須恵器・土師器が出土した。

出土遺物（図版152～156，第193～207図）

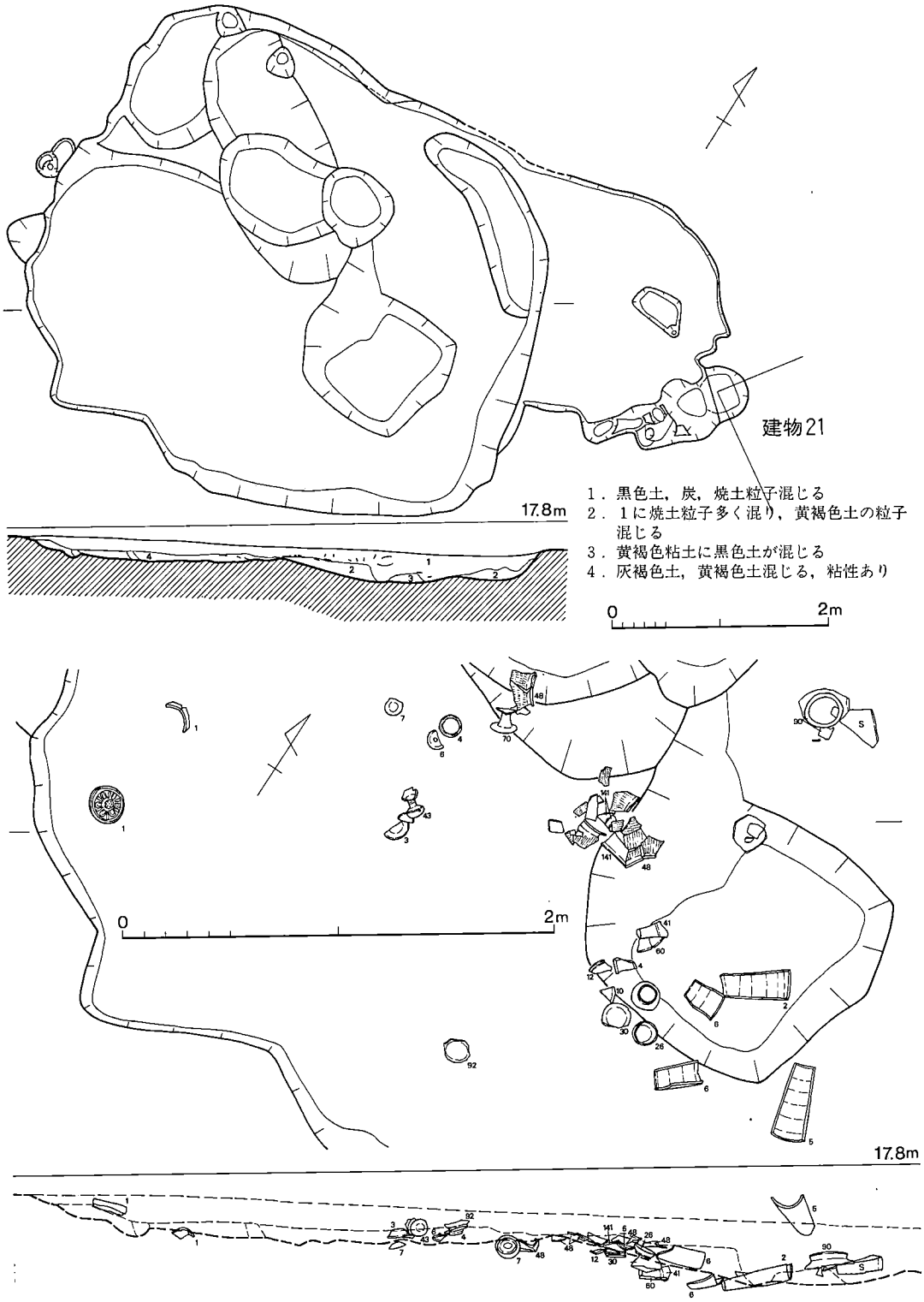
須恵器

杯　蓋（1～18）　１・２は口唇部が丸く，天井部はドーム状を呈する。２は器高3.3cm，口径11.0cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ，内面ナデ，外面回転ヘラケズリによる。焼成は良好で，灰色を呈する。また，２の外天井部にはＸ字形のヘラ記号を付す。

３～16は口縁部内面にかえりを有するもので，口径により大――口径が15cm前後のもの（10～13・16）・中―口径が12～13cmのもの（８・９・14）・小―口径が９～10cm前後のもの（４～７）に大別できる。また，擬宝珠つまみを付すもの（５～７・10・11・13～15）と付さないもの（３・４・９）の二者がある。３・４は前段階の杯身を逆転させた器形で，かえりを有する杯蓋の中では最も古く位置付けられる。逆に，かえりが退化している12～16は新しい傾向にある。調整は口縁部ヨコナデ，内面ナデ，天井部回転ヘラケズリを基調とするが，13の外面は回転カキ目による。また，４の外天井部にはＺ字形のヘラ記号を付す。６は内面に，９は外面にヘラ記号を付している。17・18はつまみ部の破片であるが，かえりを有する杯蓋になろう。

杯　身（19～34）　高台を付すもの（24～32）と付さないもの（20～23）とがある。20～23は前段階の杯蓋を逆転させた器形を呈する。20は口径が21～23に比して小さく，底部は丸みを帯びることから蓋になるかも知れない。21～23の底部はやや平底で，口縁部は直立気味である。また，口唇部は丸い。調整は口縁部ヨコナデ，内面ナデ，外底部回転ヘラケズリによる。20・22は外底部に，23は内底部にヘラ記号を付す。

24～32は八字状高台を付すもので，口縁部は外反気味に開く。24は高い高台と深い体部を持つ。器高6.7cm，口径12.8cmを測る。25～28は底部の中央よりに高めの高台を付しており，底部端に低い高台を付している29～31より古い様相が伺える。口唇部は何れも丸い。調整は口縁部ヨコナデ，内面ナデ，外面ナデによる。また，27の外体部にはヘラによる沈線を２条施す。ヘラ記号は27・29・30の外底部にみられる。33・34は口縁部の破片であるが，外反気味に開くこ



第192図　第1号土壙・第1号土壙遺物出土状態実測図（1/60, 1/30）

とから高台付の杯身になろう。

高　杯（35・36）　35は無蓋高杯の杯部破片である。口縁部は45°位に開き，体部は口径の割には浅い。36は脚部であり，裾部はラッパ状に大きく開く。

甕（37・39・42・44・46～52）　大型のもの（39・44・47～52）と小型のもの（37・42・46）がある。37は口縁～肩部の破片であり，口縁部は「く」字状に大きく開く。46は口縁部と底部を欠く。肩部はやや撫で肩である。外面調整は37が平行タタキ目→回転カキ目で，46は格子タタキ目→回転カキ目であり，46は内面に格子タタキ目がみられる。37は円弧タタキ目をナデ消している。42は甕としたが，横瓶の口縁部破片かもしれない。口唇部は上方に立つ。

39・44・48は大型甕の口縁～肩部及び口縁～胴部の破片である。口縁部は鉤状に外反し，口唇部は屈曲する。49は頸部～胴部中位，50は胴部，51は底部付近，52は胴部中位～底部の破片である。52の底部は尖底気味である。調整は何れも口縁部ヨコナデ，内面同心円タタキ目，外面格子（平行）タタキ目→回転カキ目であるが，49の外面はタタキ目をハケでナデ消している。44の口縁部内面と肩部外面には他の土器片が付着しており，外面には厚く灰を被る。また，48の頸部外面には，ヘラ記号状の沈線が付く。

長頸壺（38・40・41）　40は口縁部を欠くが，ラッパ状に開く長い頸が付くものと思われる。肩部は張りをみせ，内窪みの底部に移行する。調整は内面ナデ，外面回転ヘラケズリによる。41は頸部破片で，上位に2条のヘラ描き沈線を巡らす。38は胴部破片であるが，そのカーブからして横瓶になろう。

瓶（43）　口縁部はよく締まった頸部からラッパ状に開き，頸部端で段をなして立ち上がる。基部と頸部に2条のヘラ描き沈線を巡らす。胴部は球状をなし，上位に円孔を穿つ。調整は口頸部ヨコナデ，肩部回転カキ目→ハケ状工具による刺突文，底部ヘラケズリによる。また，胴部内には穿孔した際の粘土片が残っている。

鉢（45）　胴下半～底部の破片であり，平底の底部から直線的に立ち上がることから，鉢形の器形になろう。調整は内面ナデ，外面回転ヘラケズリによる。

土師器

杯（53～62・64～66）　口径が小さく深目のもの（53～55），口径が大きく浅目のもの（56・57・59～61），両者の中間に位置するもの（58・62）がある。53～55の口縁部は，内湾するのみであるが，56～62の口縁部は直立気味に屈曲する。口唇部は何れも丸い。調整は口縁部ヨコナデ，内面ナデ，外底部手持ちヘラケズリによる。胎土は精良である。

64～66は須恵器の器形を土師器に取り入れたもの。64は口縁部，65は高台の破片である。66の底部はナデ調整による。

椀（63）　口頸部を欠くが，直線的な胴部から平坦な底部に移行することから椀形の器形になろう。内面にはユビオサエ痕がみられる。

高　杯（67～70）　67は鉢形の大きい杯部にラッパ状に開く脚が付く。口縁端部は丸く納める。また，脚端部は小さく立つ。調整は口縁部ヨコナデ，内面ナデ，杯部外面回転ヘラケズリによる。胎土は精良。焼成は悪く，須恵器の生焼けに類しよう。68～70は脚部の破片である。70の脚裾部は水平方向に開く。

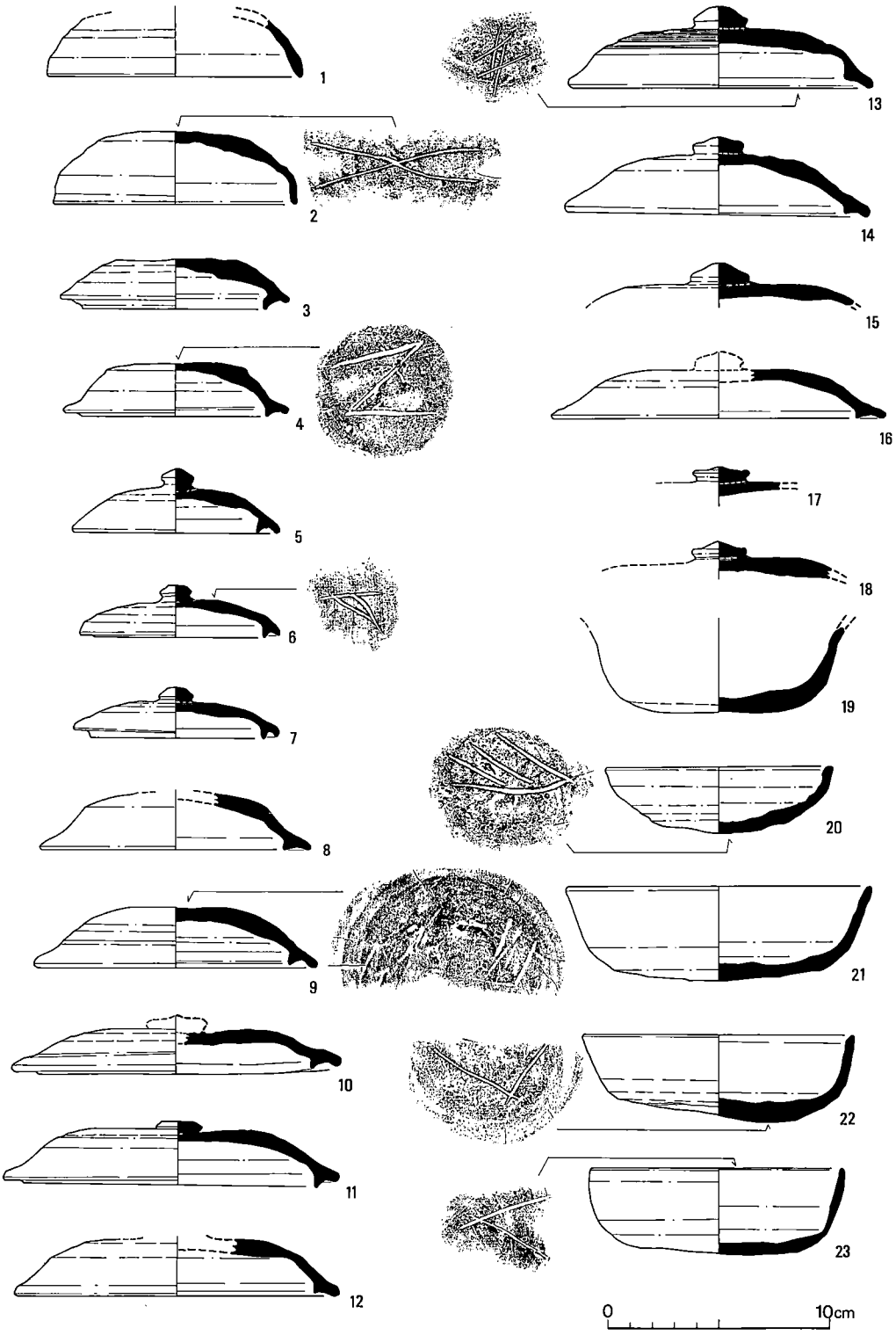
高台付椀（71）　口縁部は屈曲部から垂直気味に立ち上がり，底部には八の字形の高い高台を付す。器高6.5cm，口径11.4cmを測る。器面が磨滅しているために調整は不明であるが，ナデによるものと思われる。胎土は精良である。焼成は良好で，暗褐色を呈する。

甕（72～107・111～115・122・127・132・140・143）　口径により小型―口径が15cm前後のもの（72・73・74），中型―口径が18～25cmのもの（88～92・100～105・111・112），大型―口径が29～32cmのもの（114・115）に大別できる。小型甕の口縁部の形状は72・78・79・82・84のように端部のみ屈曲するものと頸部から緩やかに外反するもの（74）がある。中型甕はよく締まった頸部から鉤形に外反する口縁部を有するもの（88～91・93～97・104）とさらに端部が水平近く屈曲するもの（98～102）がある。大型甕の頸部は中型甕ほど締まらず，口縁部は大きく外反するのみである。127・132・140は底部の破片である。外面は加熱を受けて赤変している。調整は何れも口縁部ヨコナデ，内面ヘラケズリ，外面ハケ目による。

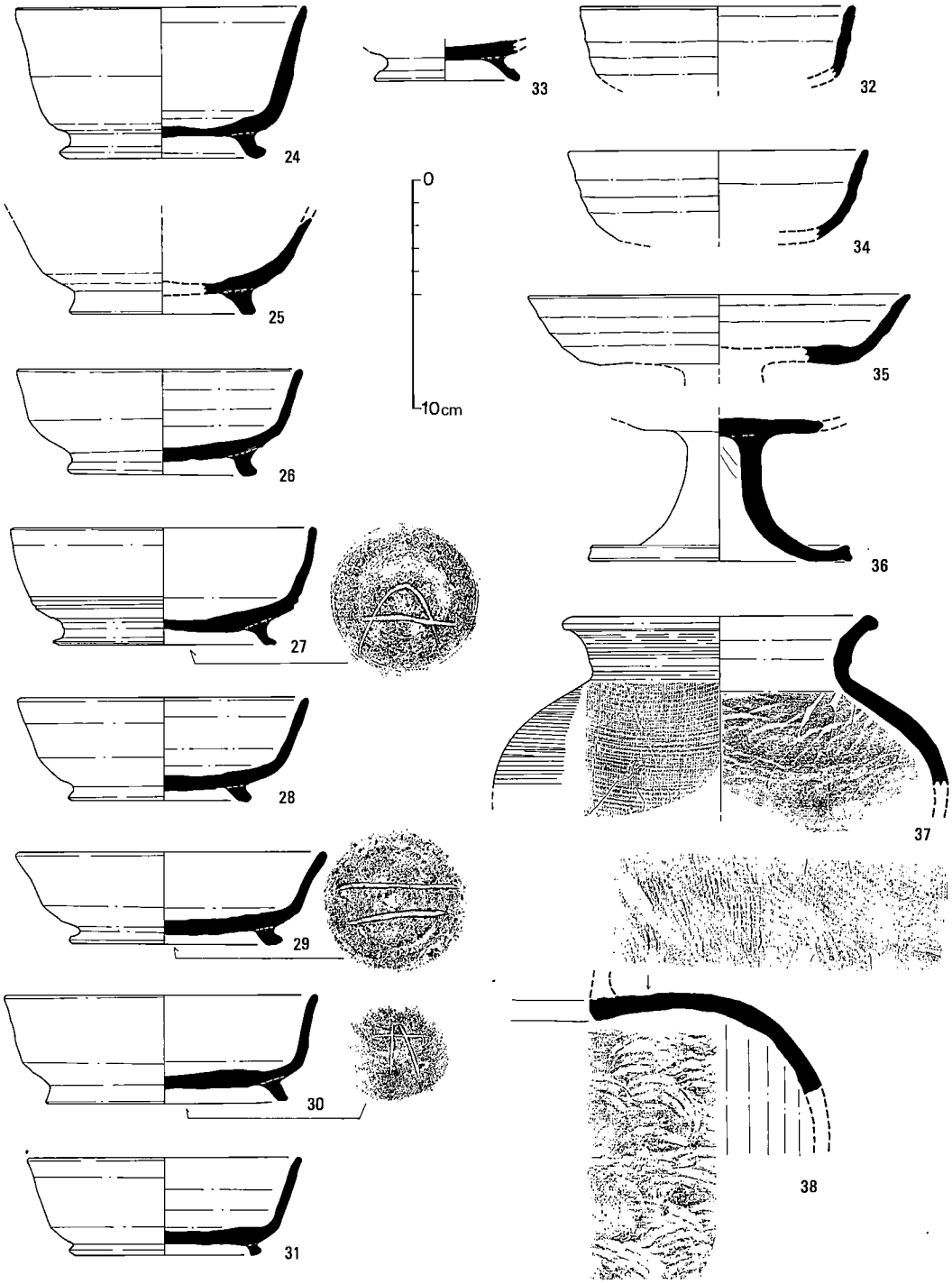
甑（108～110・116～121・123～126・128～131・136～139・141・142・144）　136の口縁部は水平近く開き，取っ手は器高の1/3の部位に付していた痕がある。器高31.1cm，復原口径30.6cm，底径15.0cmを測る。141は136の口縁部ほどは開かない。犀角状のやや大きめの取っ手を付している。調整は口縁部ヨコナデ，内面ヘラケズリ，外面ハケ目による。144は底部の破片である。内面は横方向のヘラケズリ，外面はハケ目による。123～125・130・142の口縁部は水平に開き，頸部から直線的に胴部に移行することから甑になろう。また，口縁部が直立する137，少し外反する126・138も甑になろう。108～110・118～121・128・129は取っ手部破片であるが，甑もしくは取っ手付甕の破片であろう。

鉢（133～135）　口径に比して器高が浅目であることから鉢とした。135は口縁部が肥厚して外反する。頸部から直線的に胴部に移行し，底部は丸みを帯びる。器高16.6cm，口径23.0cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ，内面ヘラケズリ，外面ハケ目による。胎土は砂粒を多く含み，雲母・赤褐色粒もみられる。焼成は良好で，黒茶褐色を呈する。133は口縁部が水平に開き，外面には細かいハケ目調整がみられる。134は133と同様に頸内面に明確な稜をつくらず，丸みを帯びて底部に移行するものとなろう。

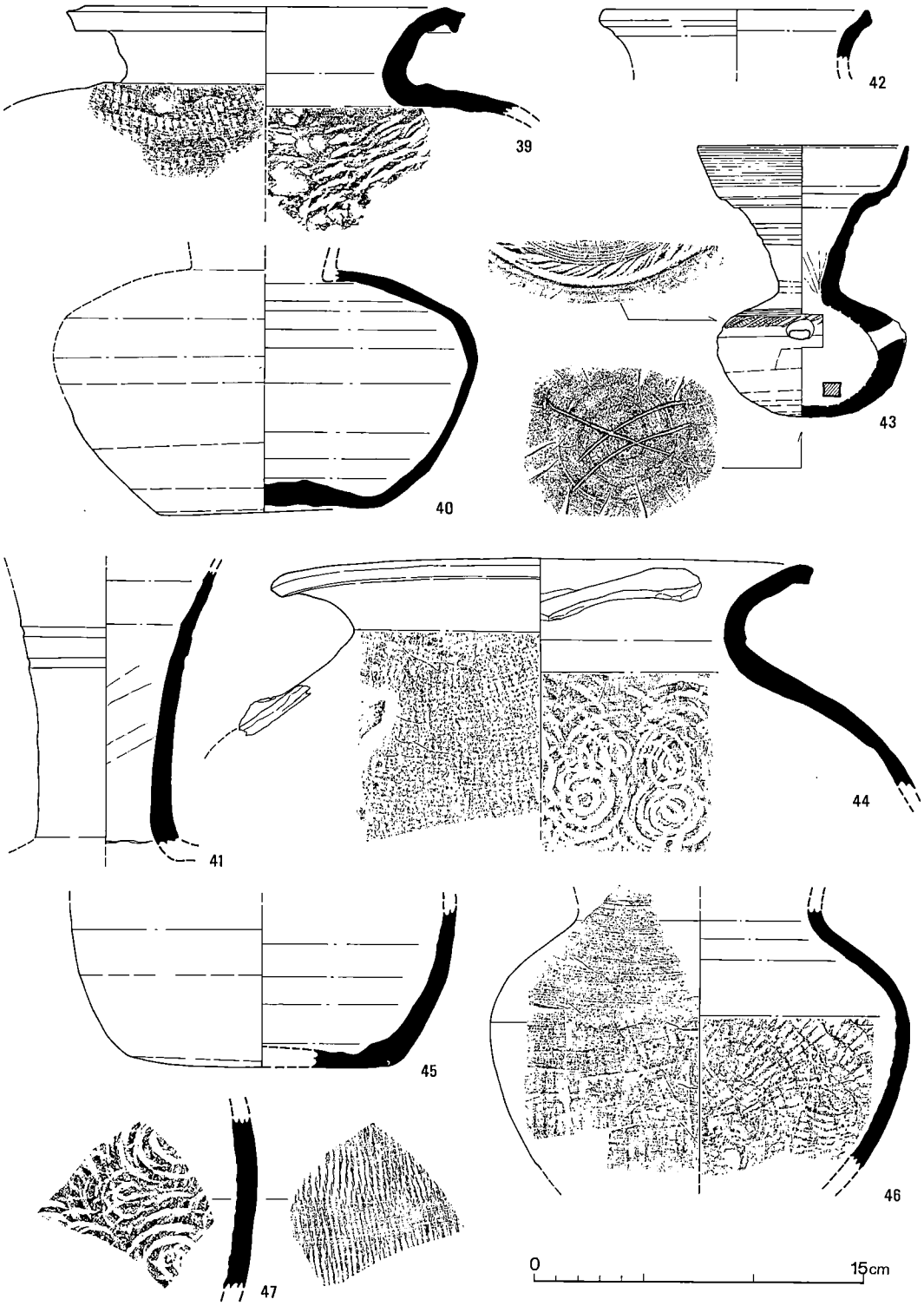
有口異形壺（145）　肩部に口唇を持った円孔を有する異形の壺である。口縁部は短く外反し，頸部から肩部に移行する部位に口唇を付加した楕円形孔を有する。胴部は球状を呈し，底部は丸い。器高26.7cm，口径17.3cm，口唇短軸8.1cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ，内面ヘラケズリ，外面ハケ目による。また，口縁部内面の屈曲部にはユビオサエ痕がみられる。胎土に長石



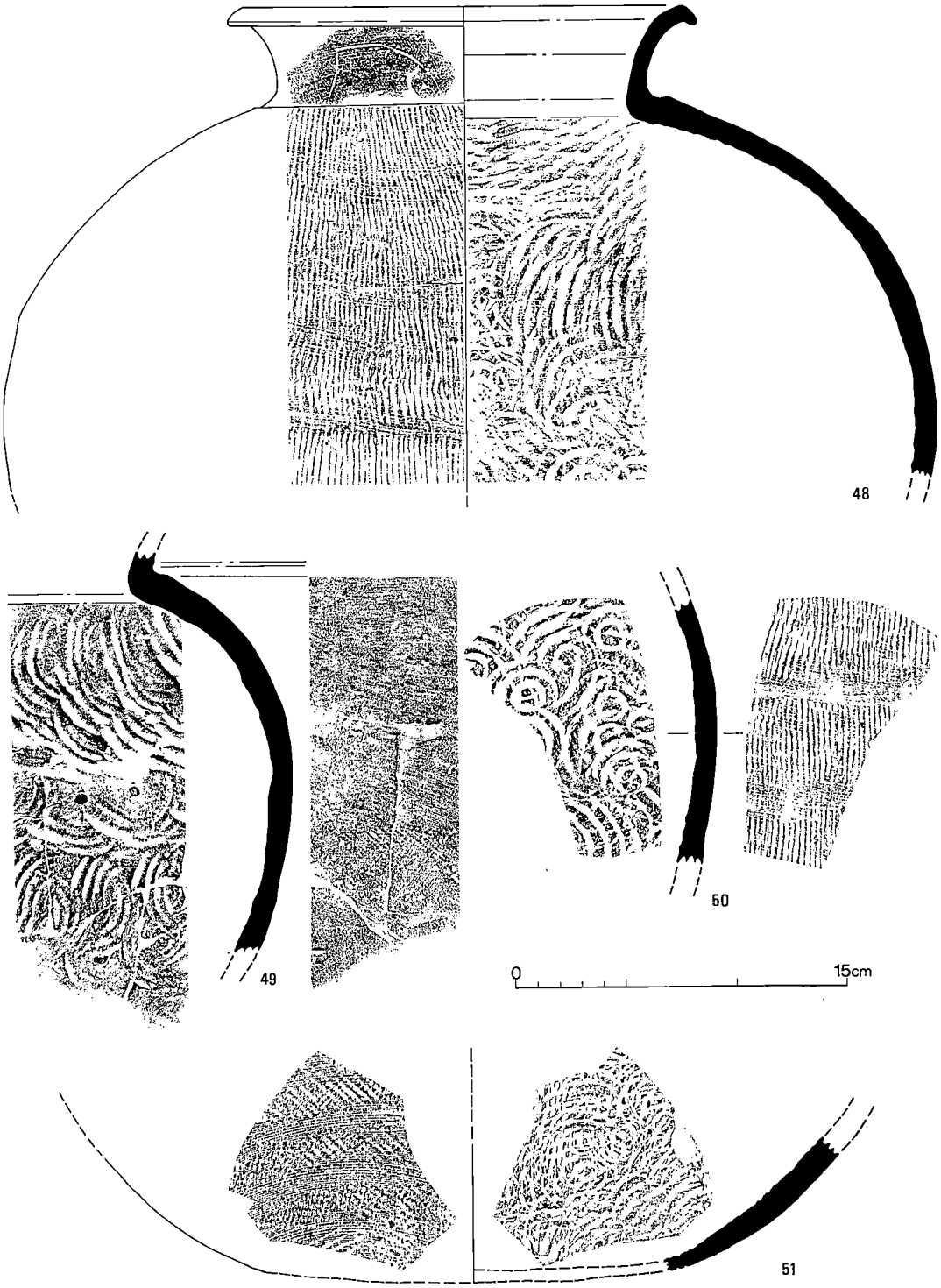
第193図　第１号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)



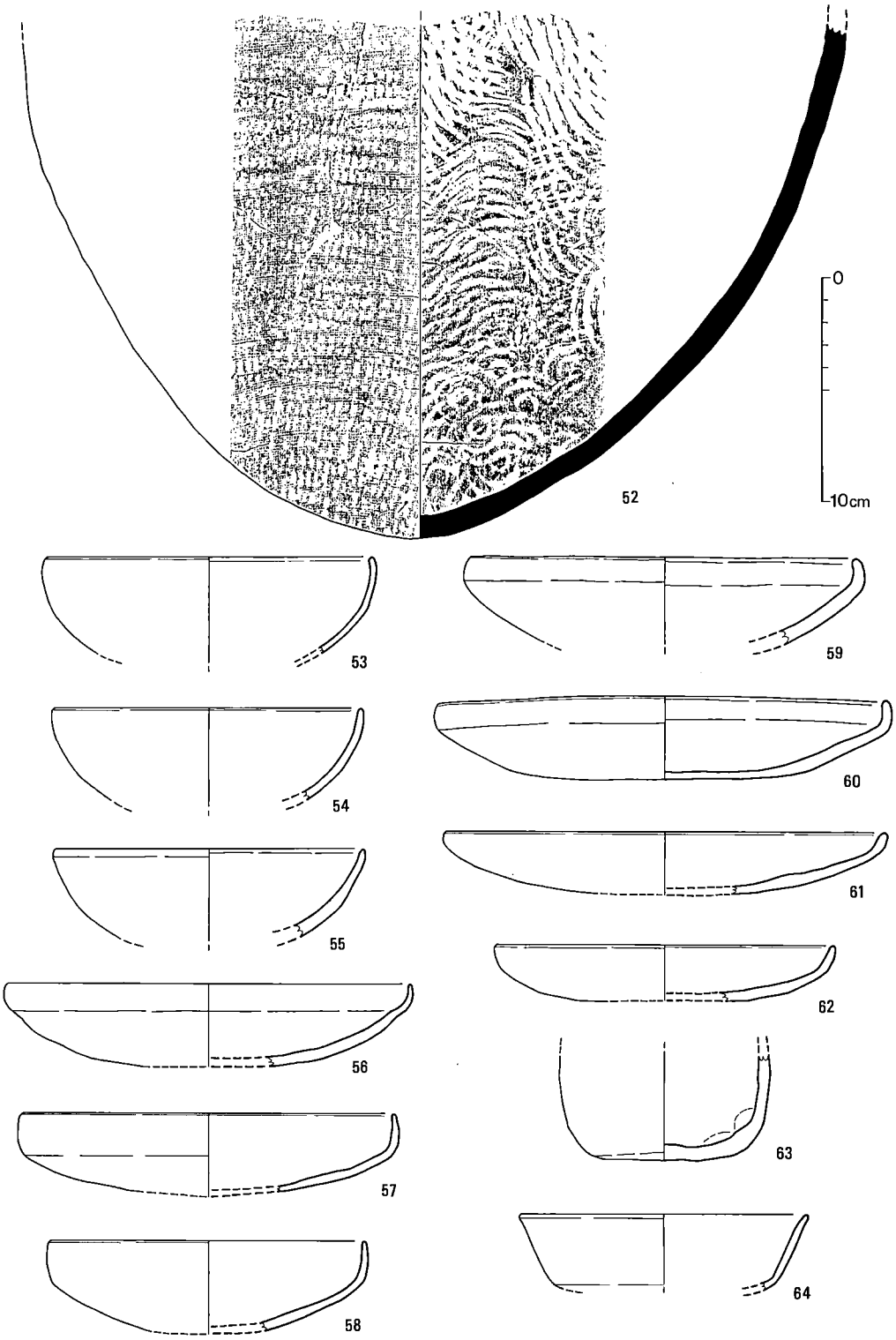
第194図　第１号土壙出土土器実測図（その２）(1/3)



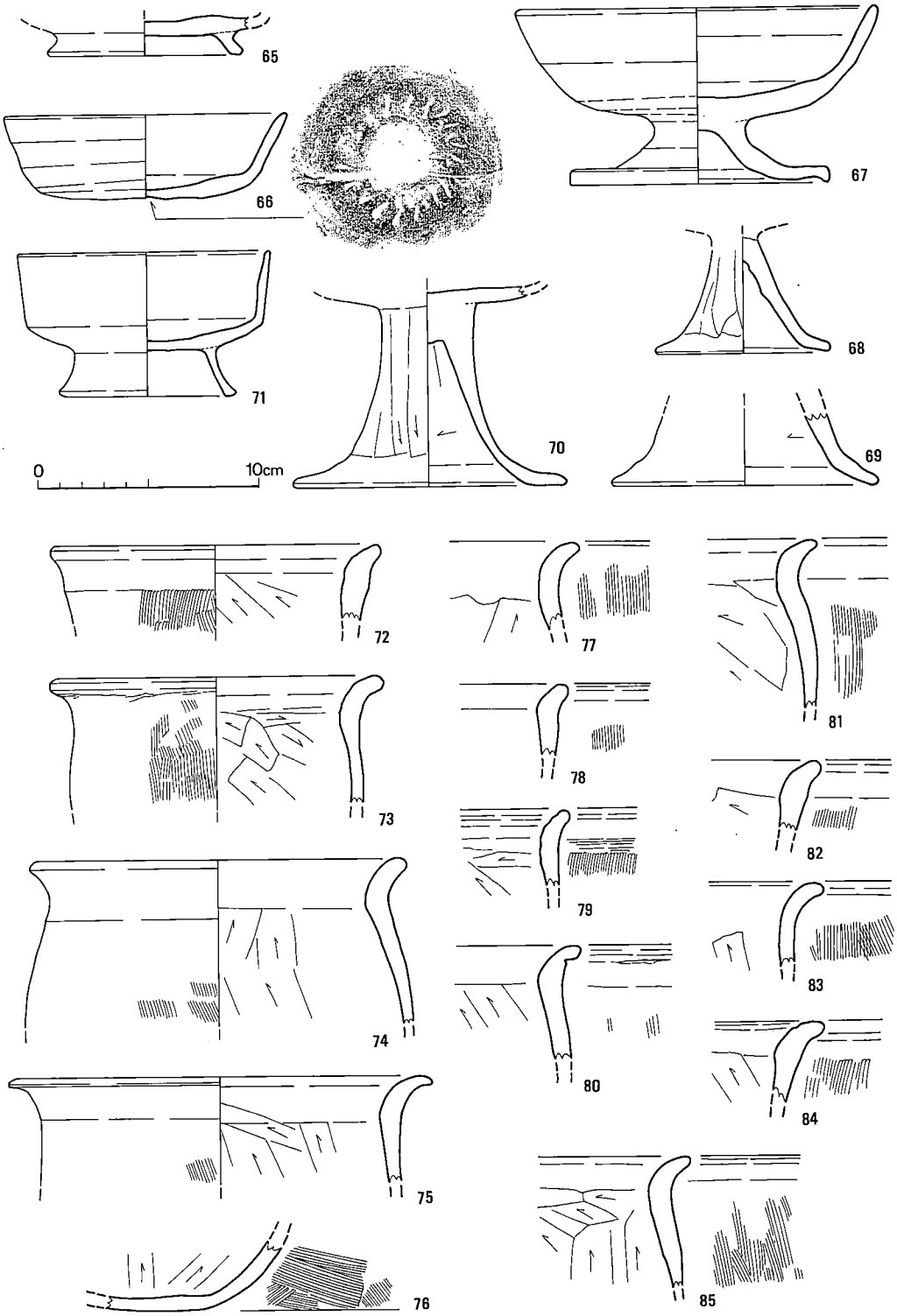
第195図　第１号土壙出土土器実測図（その３）(1/3)



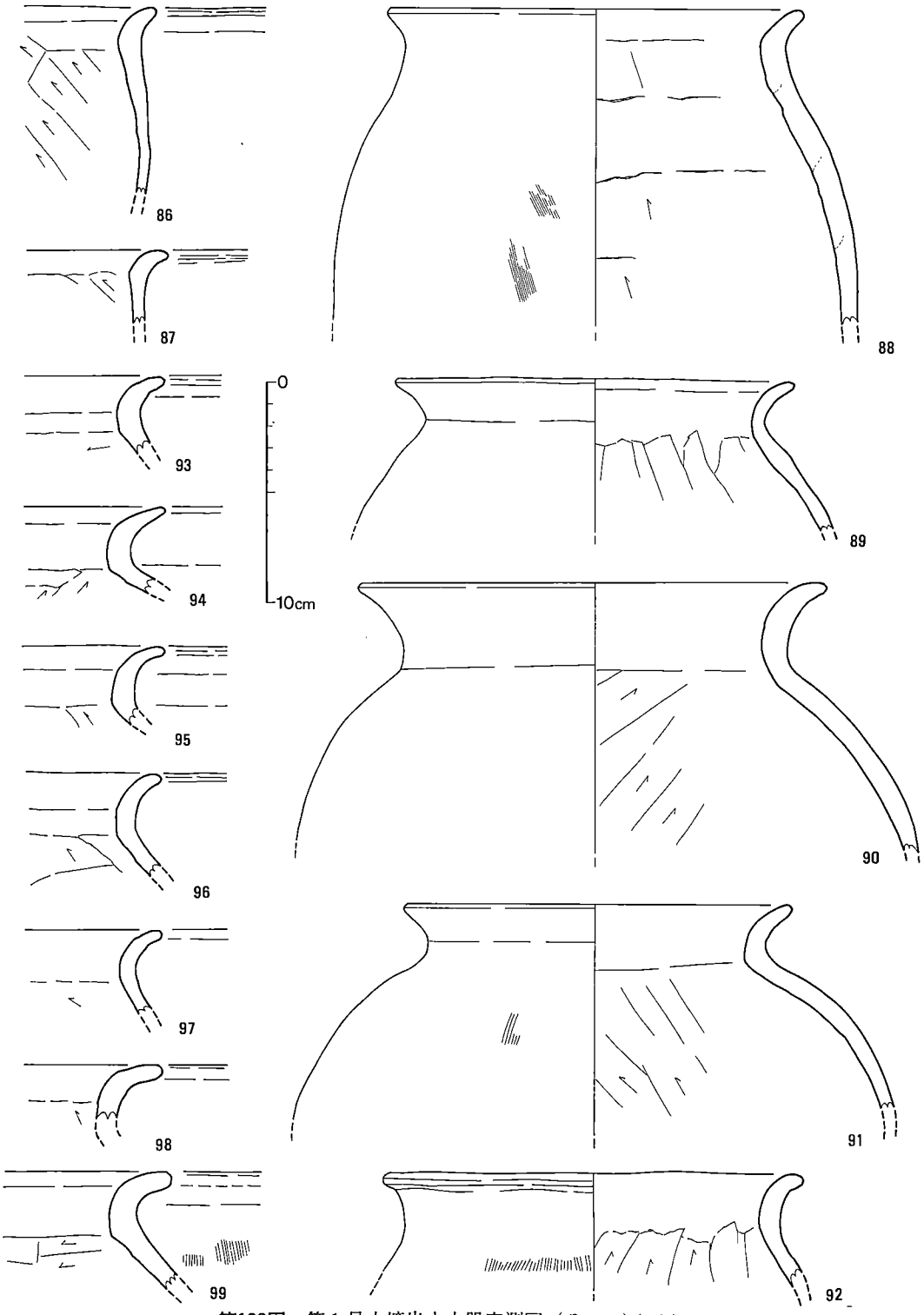
第196図　第１号土壙出土土器実測図（その４）(1/3)



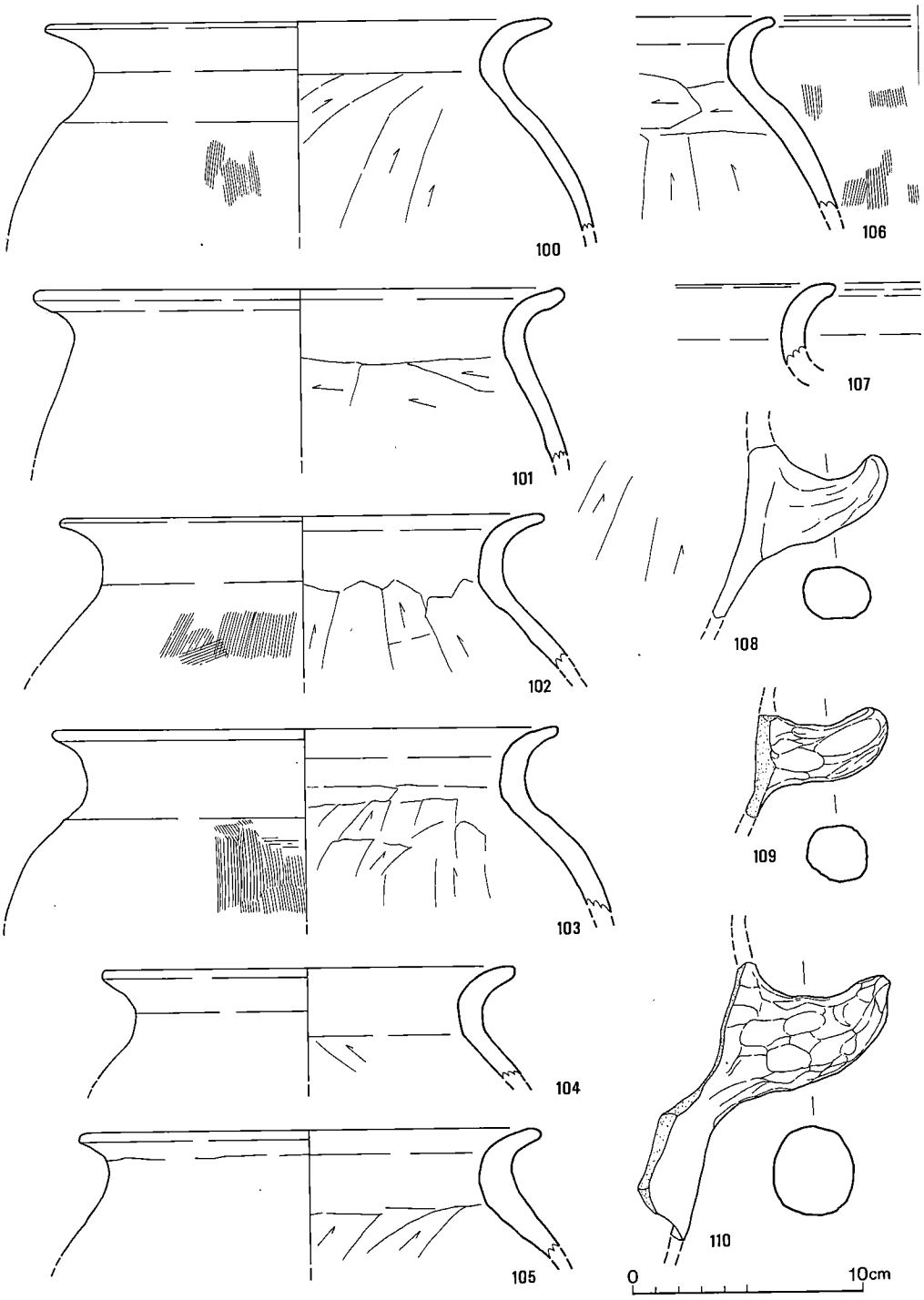
第197図　第１号土壙出土土器実測図（その５）(1/3)



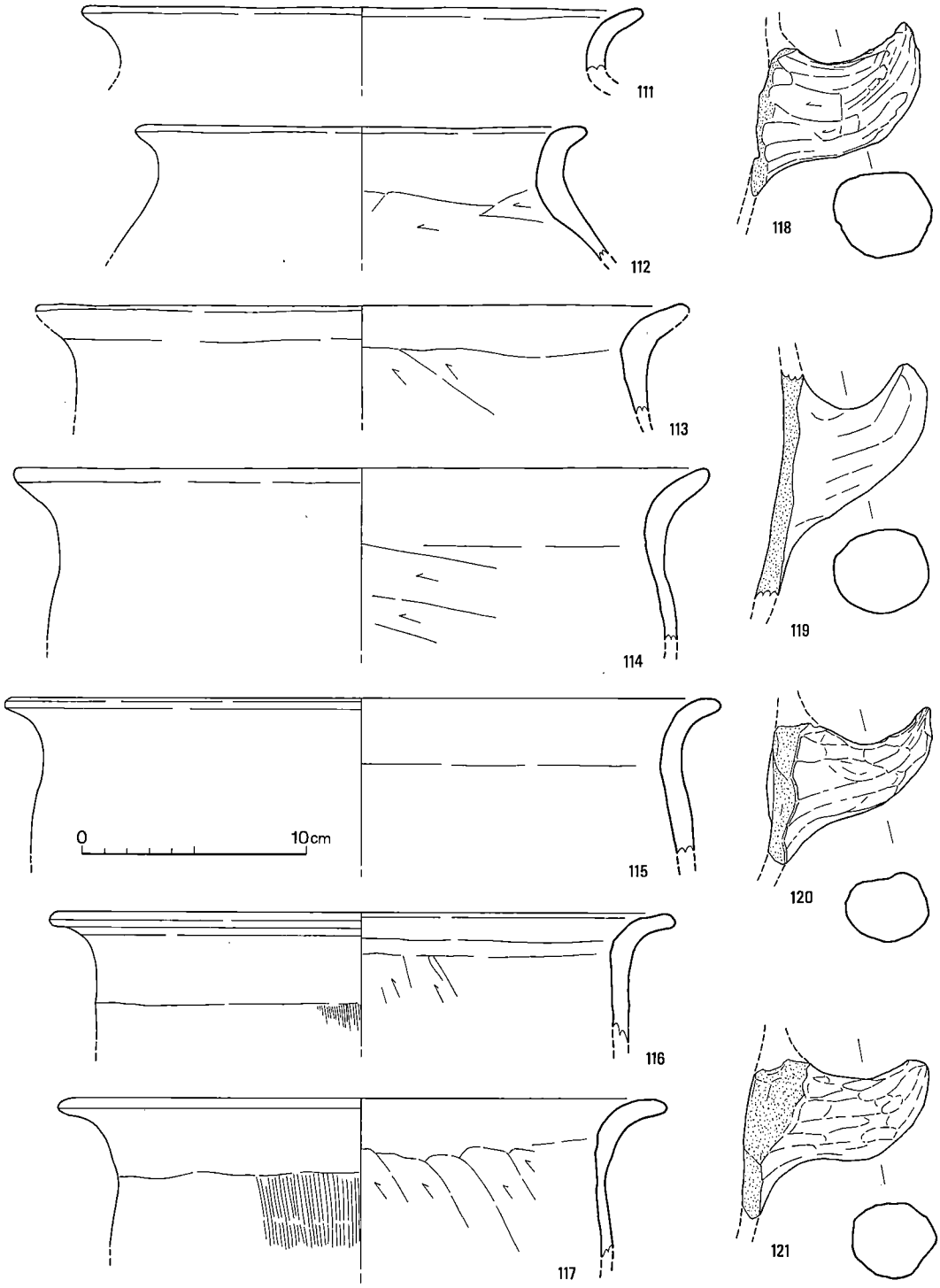
第198図　第１号土壙出土土器実測図（その６）(1/3)



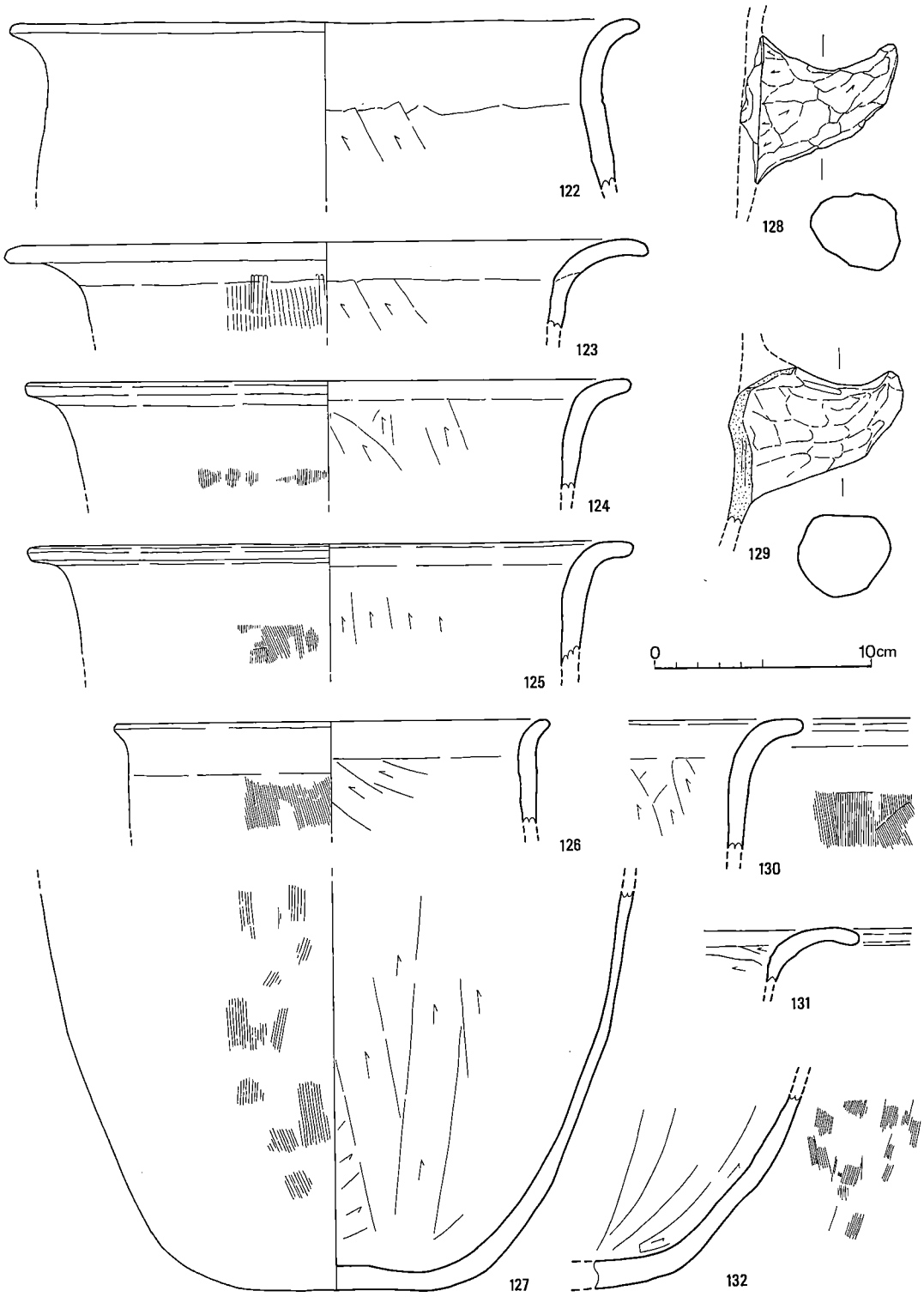
第199図　第１号土壙出土土器実測図（その７）(1/3)



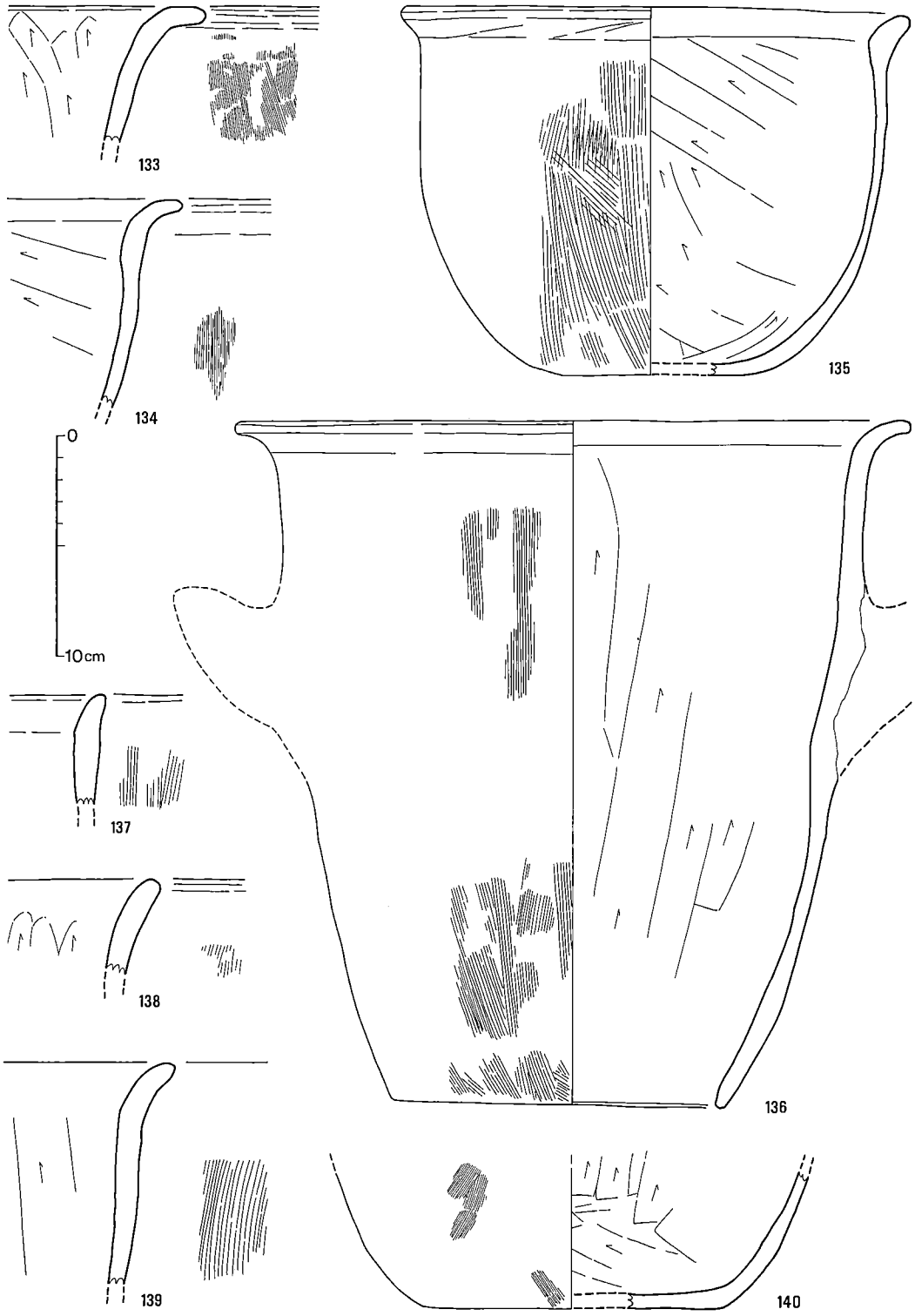
第200図　第１号土壙出土土器実測図（その８）(1/3)



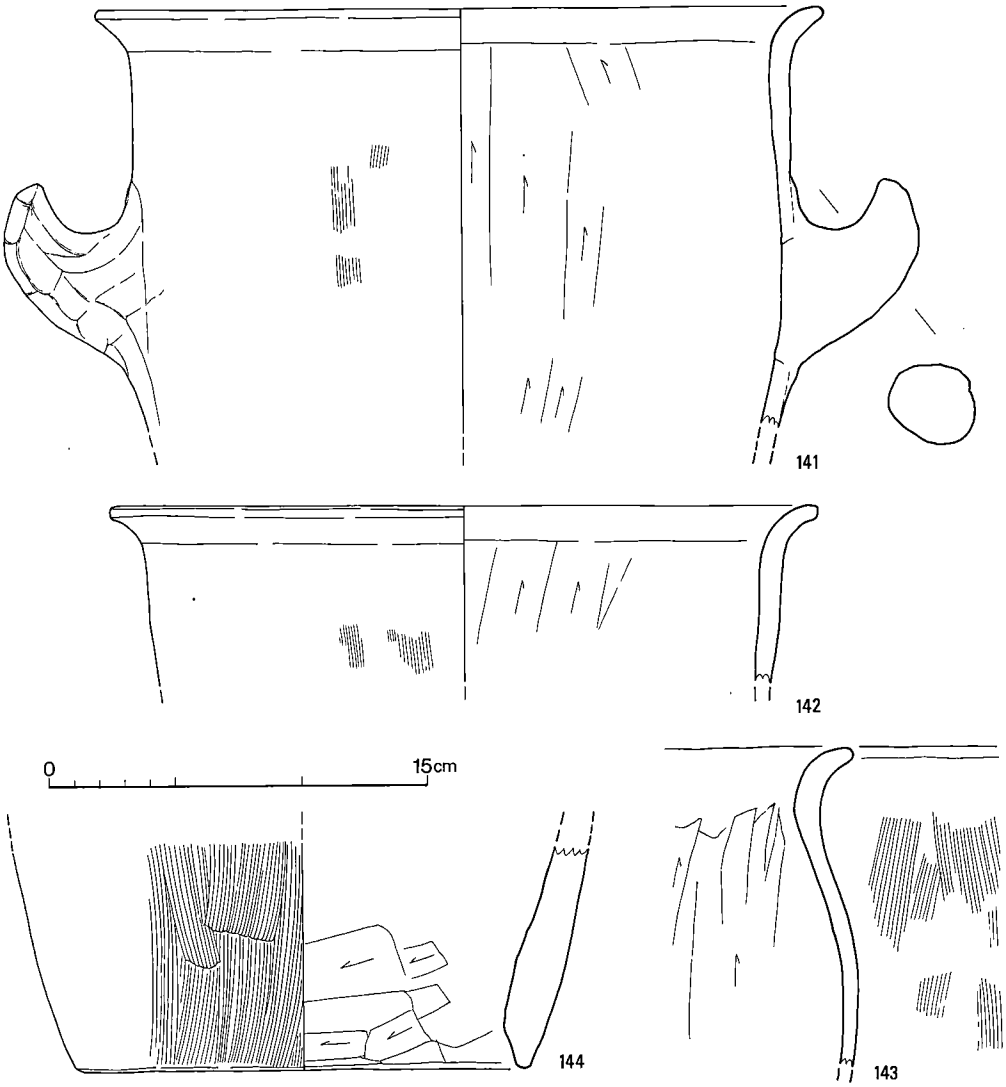
第201図　第１号土壙出土土器実測図（その９）(1/3)



第202図　第１号土壙出土土器実測図（その10）(1/3)



第203図　第１号土壙出土土器実測図（その11）(1/3)

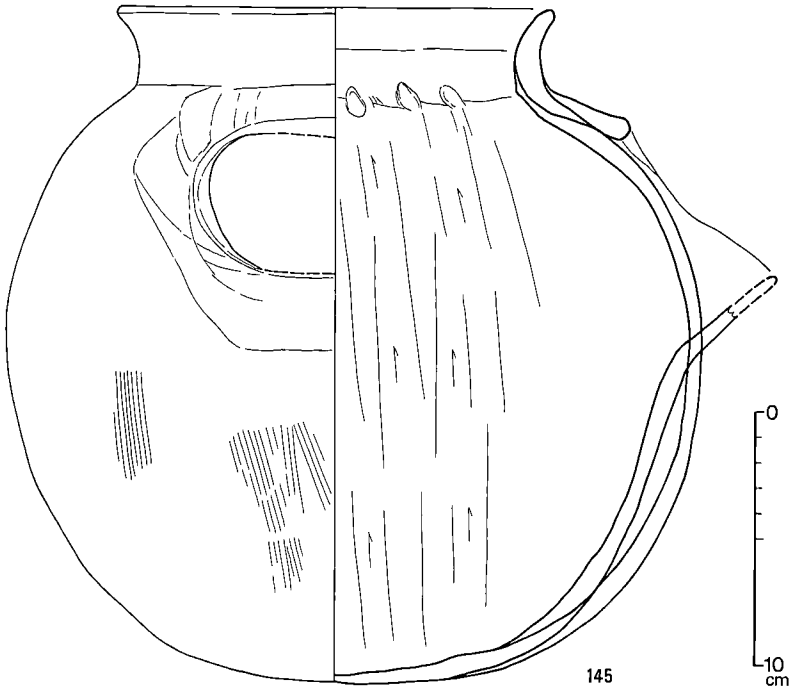


第204図　第１号土壙出土土器実測図（その12）(1/3)

・石英を含む。焼成は良好で，暗黄褐色を呈する。

瓦

軒丸瓦（１）　１は六弁重弁蓮華文の軒丸瓦である。内区は中央の一段高くなった中房に１＋６の蓮子を配し，蓮弁の先端左右に配される珠文（12）からなる。また，蓮弁は重弁を保ちながらも退化傾向にある。外区は深目の圏線が一重巡るのみ。瓦当面の直径は15.6cmを測り，瓦当内面には高さ3.2cm，幅1.4cmの極めて高い顎が残る。調査時においては，瓦当と顎部は離れて出土した。

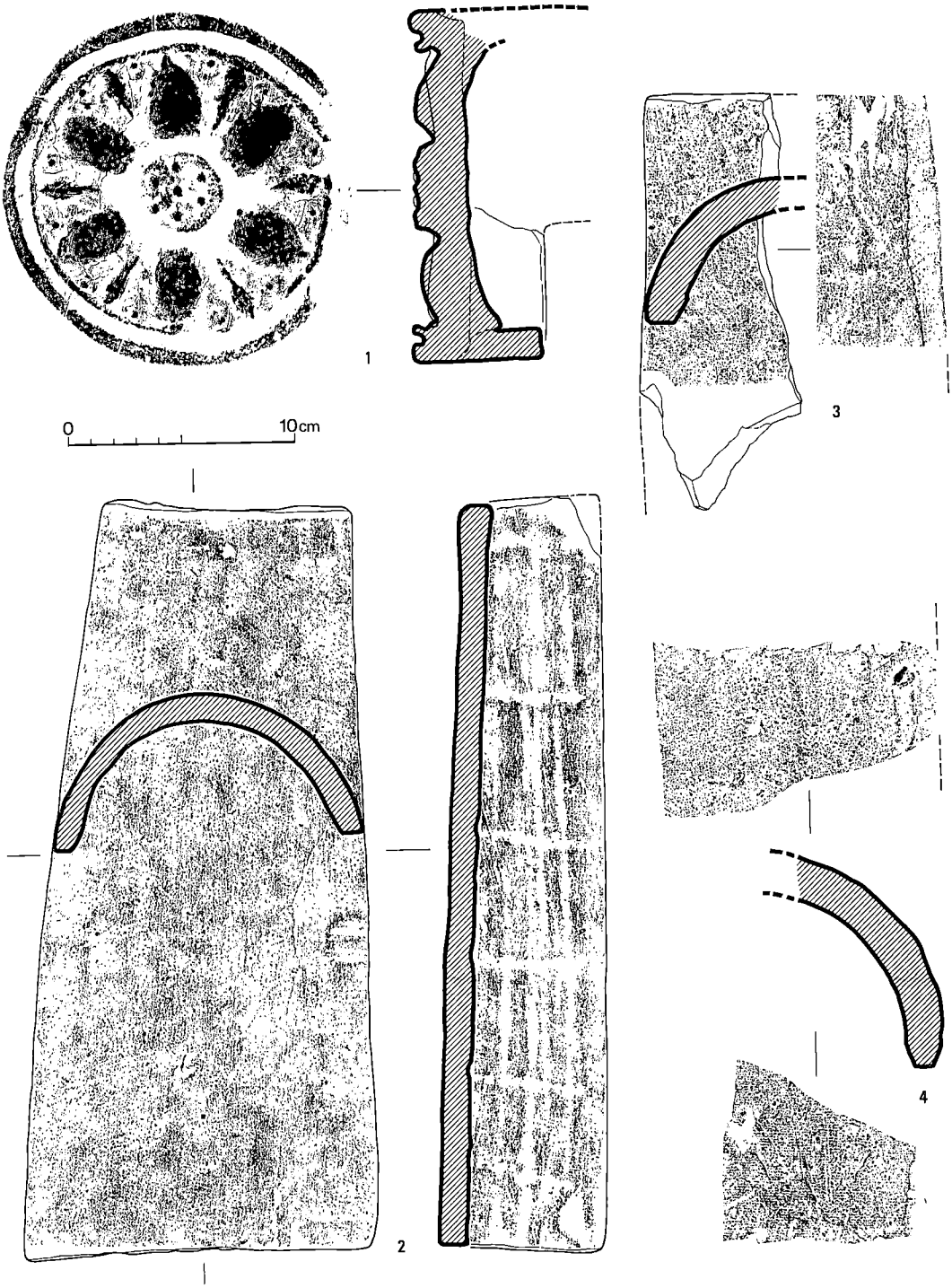


第205図　第１号土壙出土土器実測図（その13）(1/3)

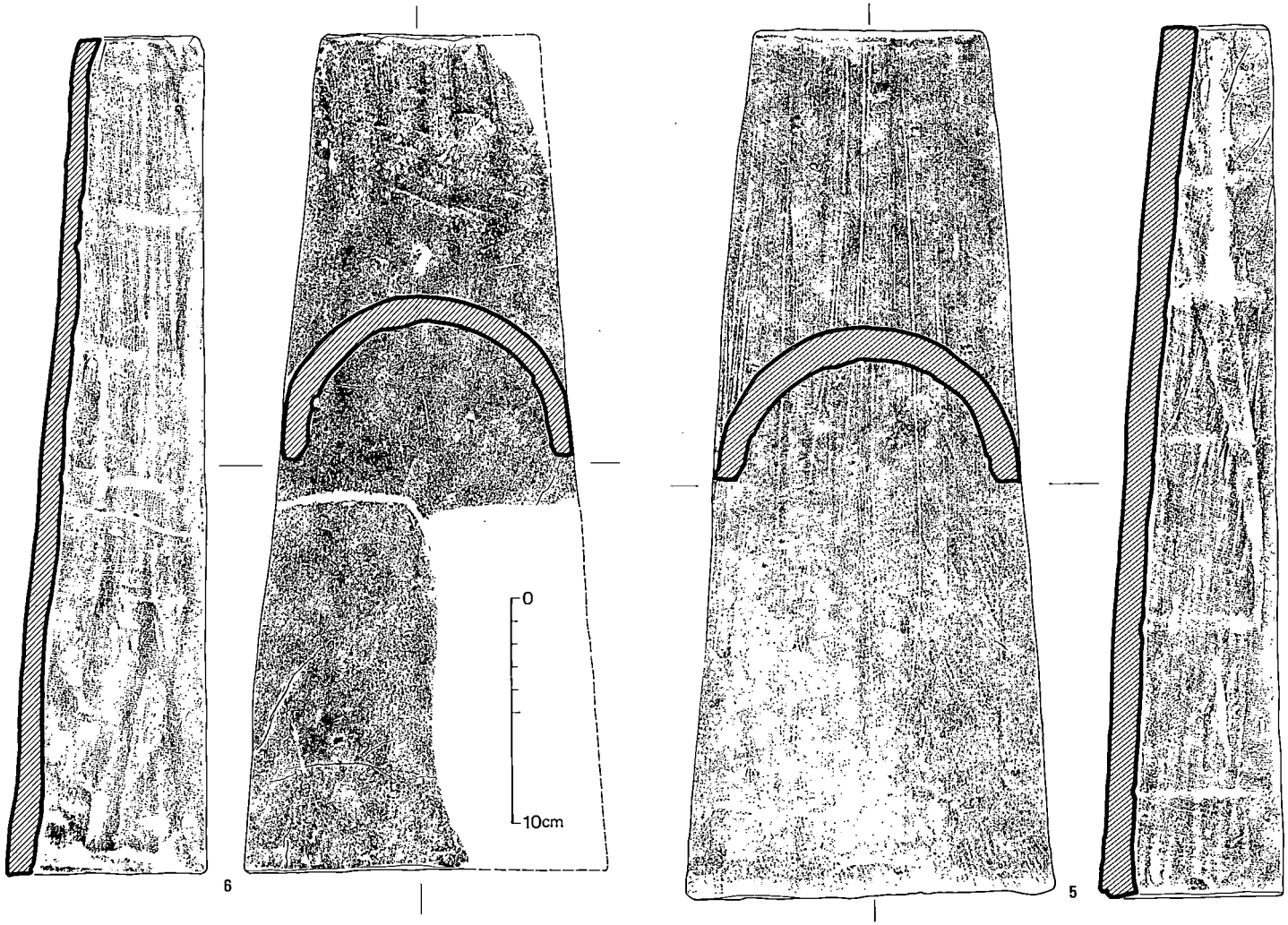
瓦当と丸瓦部との接合は，飛鳥寺出土瓦にみられるように直接接合している。次に，顎部を残して円筒下半を半裁し，瓦当内面を厚い支持土で補強するという技法をとっている。焼成はやや軟質で，淡黄灰色を呈する。

丸　瓦（２～６）　２～６は所謂「行基式」丸瓦で，２・５は完形品，６は一部欠損，３・４は破片資料である。２は長さ33.3cm，５は38.3cmを測る。円筒形のものを２分割にしたもので，凸面はタタキ目→縦方向の丁寧なケズリ調整であり，凹面には細かい布目が残る。また，側面及び小口面はヘラで調整されている。胎土は砂粒を含むものの精良である。焼成は堅緻で，灰青色を呈する。

当土壙からは，須恵器・土師器・瓦類の夥しい量の遺物が出土した。土器は一括投棄（古い時代の遺物も含まれてはいるが）という状況を呈しており，軒丸瓦はともかく丸瓦は果然土器投棄の時期に伴うと考えられる。１・２の杯蓋及び43の甕は，古い時期の所産で，６世紀末。口縁部内面にかえりを有する８～16の杯蓋とそれとセットになる24～32の高台を有する杯身は７世紀後半の所産であろう。また，口径が小さく，かえりが確りしている３・４の杯蓋は，７世紀後半でも古い所におけよう。また，土師器杯においても53～55の深目のものは，56・57



第206図　第１号土壙出土瓦実測図（その１）(1/3)



第207図　第１号土壙出土瓦実測図（その２）(1/3)

・59～62の浅目で，口縁部が直立する杯に比して古い形態を有する。

以上のことから，当土壙における土器投棄は，７世紀後半になされたものと推察される。

（小田）

第２号土壙（第208図）

Ｂ群の東方にはずれて位置する。幅80cm，深さ20cm程の，長方形プランをなす小さな土壙である。南半は調査範囲外となり，全容は定かでない。

出土遺物は無く，時期，性格は明らかでない。（中間）

第３号土壙（図版98，第208図）

調査範囲の最東端に近い部分に位置する。幅１ｍほどの長方形に近いプランで，深さは76cmとかなり深い。埋土は上半に黒色土がたまり，その中から須恵器片が出土した。

底部中央に１柱穴を有する落し穴状遺構と称する遺構がこの低い遺跡東端部に南北に点在しており，当土壙をも含めた第３～６号土壙も，底部中央に柱穴を持たないタイプの落し穴状遺構となるものかとも考えられる。

出土遺物（第209図）

上層から落ち込んだ黒色土中出土品である。復原口径14.5cm，器高5.0cm，高台部径9.7cmを測る須恵器高台付杯である。低く内端で接地する高台を付け，体部から口縁へとかなり開く。８世紀後葉の時期が与えられる。

この須恵器は，当土壙上層に堆積する黒色包含層の落ち込みで混入したものであり，下限を示すものでしか無い。よってこの第３号土壙は下限を８世紀後葉とする時期が考えられる。しかし実際には，同様な遺構の周辺の配置状況などから，ずっと古い時期（おそらく縄文時代）の遺構ではないかと考える。（中間）

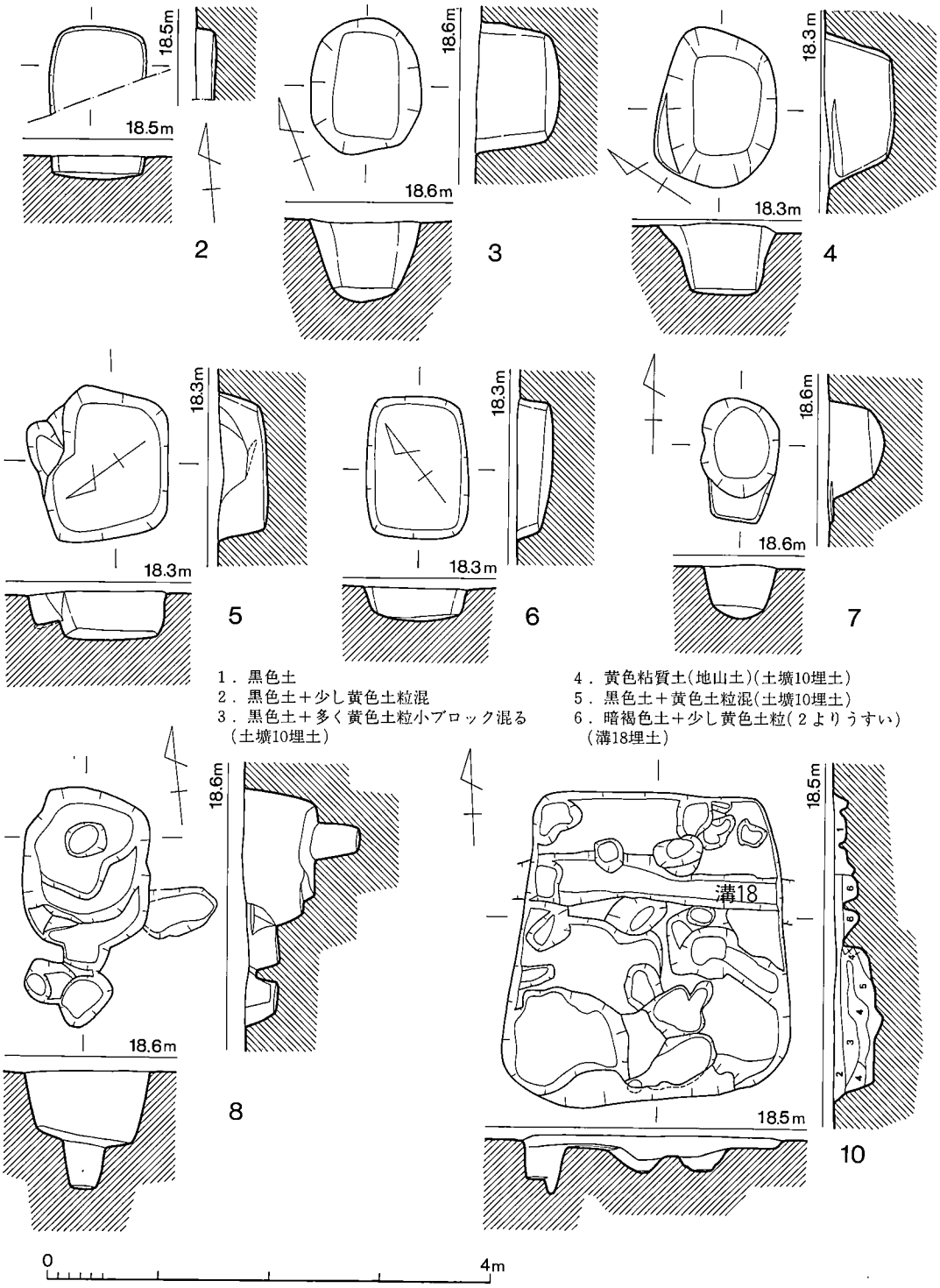
第４号土壙（図版99，第208図）

遺跡の東端で，第４～６号土壙が南北に並ぶうちの南端に位置する。幅1.0m，長さ1.4m，深さ55cmの略長方形プランで，埋土は黒色土である。全体にしっかりした形状である。

出土遺物は無く，第３・５・６号土壙同様，古い時期の遺構で，落し穴状遺構としてよいものかもしれない。（中間）

第５号土壙（図版99，第208図）

遺跡東端に近く，前記第４号土壙の北に位置する。長さ1.4m，幅1.1m，深さ0.45mの略長方形土壙である。埋土の中央部に大きく黄色粘質土ブロックが入っている。

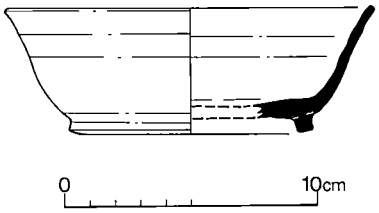


1．黒色土
2．黒色土＋少し黄色土粒混
3．黒色土＋多く黄色土粒小ブロック混る（土壙10埋土）
4．黄色粘質土（地山土）（土壙10埋土）
5．黒色土＋黄色土粒混（土壙10埋土）
6．暗褐色土＋少し黄色土粒（2よりうすい）（溝18埋土）

第208図　第2～10号土壙実測図（1/60）

第３・４号土壙に比べ浅いので，墓の可能性も考えられるが，この群の配置状況からやはり，古い時期の落し穴状遺構の可能性も考えた方がよさそうである。

出土遺物は皆無で，時期は確定できない。(中間)



第209図　第３号土壙出土土器実測図（1/3）

第６号土壙（図版100，第208図）

遺跡東端の前記第５号土壙の北西隣に位置する。長方形プランで，長さ1.28m，幅は0.93m，深さは0.3mと浅めである。埋土はやや赤味がかった暗褐色土で，他と比べ異質である。

第３・４号土壙にくらべて浅いため，墓の可能性もあるが，埋土が古い感じで，これら一群の遺構の配置状況からみて，落し穴状遺構の一種と考えた方がよいかもしれない。

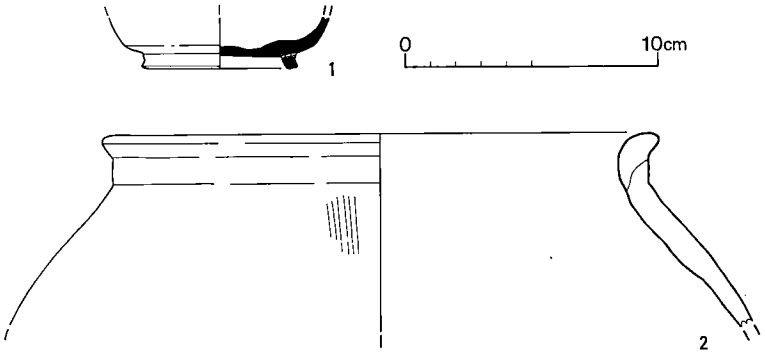
出土遺物は皆無で，時期は確定できない。(中間)

第７号土壙（図版100，第208図）

Ｇ群南東端で第２号掘立柱建物の南隣に位置する。径80×70cm，深さ50cmの楕円形小土壙である。全体に小型であり，性格不明のものである。中から若干の遺物が出土した。

出土遺物（第210図）

１は須恵器高台付杯身である。高台径6.2cmの小ぶりのタイプである。高台は内端で接地し低く外方へやや踏ん張り気味となる。２は，土師器甕で，復原口径22.0cmを測り，短かく外反する口縁を有する。内外面磨滅著しいが外面には縦ハケが僅かに残る。胴が強く張るタイプで，古相を示す。



第210図　第７号土壙出土土器実測図（1/3）

以上の出土遺物から，この第７号土壙は７世紀後葉代の所産と考えられる。(中間)

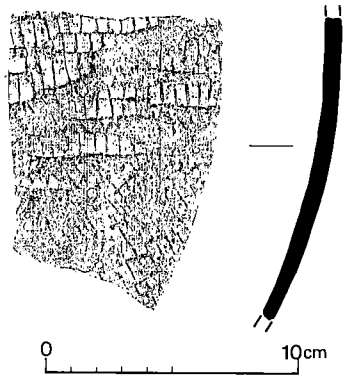
第８号土壙（図版101，第208図）

Ｇ群の南端近く，第８号掘立柱建物の南側，第10号土壙の北隣に位置する。長さ1.6m，幅が

1.2mで，深さ0.65mとわりと深い。底部の中央やや北寄りに深い柱穴状小ピットがみられ，一見落し穴風にもみえるが，遺跡東端の一群や中央部の一群などともかけ離れており，一応否定的に思われる。

出土遺物（第211図）

須恵器甕胴部片が出土している。器壁が薄手で，外面は強く丁寧なナデ仕上げで叩きを消している。内面は，幅5mm，長さ11～8mmほどの短線状文が連続したアテ具圧痕を残す。焼成堅緻で内面灰色，外面は黒色を呈する。



第211図　第8号土壙出土土器実測図（1/3）

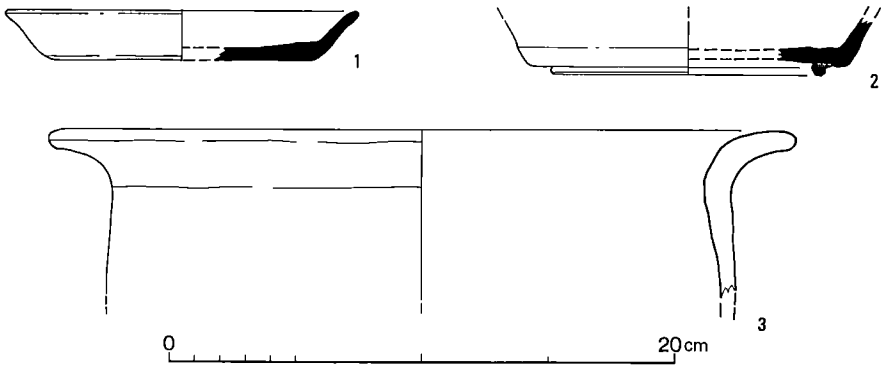
この土器片から，第8号土壙は8世紀以降の所産と考えられる。北隣の第8号掘立柱建物が8世紀中頃と考えられており，これに伴う土壙と考えられる。（中間）

第10号土壙（図版101，第208図）

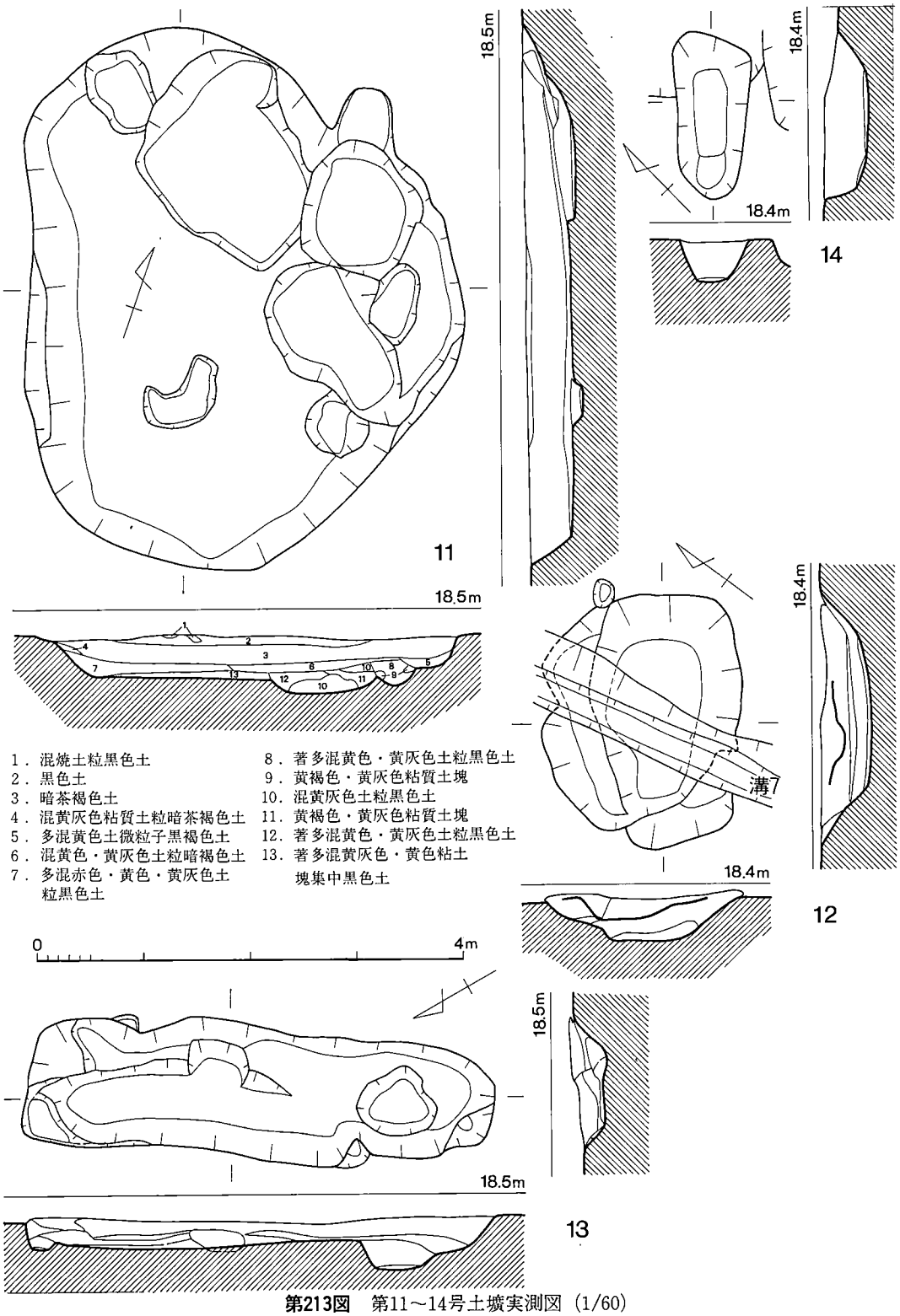
G群の南端，第8号土壙の南隣に位置する。当時の道路遺構の北側溝と思われる第18号溝を切っている。長さ2.85m，幅は2.1mと寸詰まりの方形に近いプランをなし，底面は凹凸著しく，あたかも住居跡床面の下層状態の如きでもある。特小型住居である第3・39号住居跡にその規模は近似し，竪穴式住居の可能性も捨てきれないが，確証は無い。この土壙が住居であるとすれば床面積6.7㎡程となる。

出土遺物（第212図）

1は，須恵器皿で，復原口径14.0cm，器高2.0cmを測る。底外面は回転ヘラ削りの後にナデ



第212図　第10号土壙出土土器実測図（1/3）



第213図　第11～14号土壙実測図（1/60）

ている。8世紀中頃前後のものであろう。2は，平らな底の内側寄りに小さく低い高台を付けた須恵器杯である。復原口径10.8cmの大きめの部類で，底外面は回転ヘラ削りのままである。焼成やや軟質で灰白色を呈する。8世紀後葉の所産である。3は，復原口径29.4cmを測る土師器甕である。全体に磨滅著しいが，殆んど張らない胴部から頸部でそれ程肥厚せずに，長く外方へ開く口縁となる。奈良～平安初頭期の特徴を示している。

以上の出土土器より，第10号土壙は8世紀中頃～後葉の時期が考えられ，新しい方をとると，8世紀後葉の年代が与えられよう。この土壙が切る第18号溝の出土土器が，7世紀中頃～8世紀前半の時期を示していることからも矛盾は無い。（中間）

第11号土壙（図版102，第213図）

E住居群の東方，第3号掘立柱建物の西隣に位置する。わりと大きな不整楕円形土壙であるが，深さはそれ程でもない。

土層断面から観察すると，まず現状に近い大きな土壙が掘られ，それがある程度埋没した段階で北～北東側部分で最低3回の小規模な掘り直しが次々に行われている。最後に全体に大きく，当初底面から15cm上ぐらいまでを掘り直している。北～北東側底面にみられる窪み部分をすべて掘り直しと考えると，都合7～8回の掘り直しが行われたことになる。

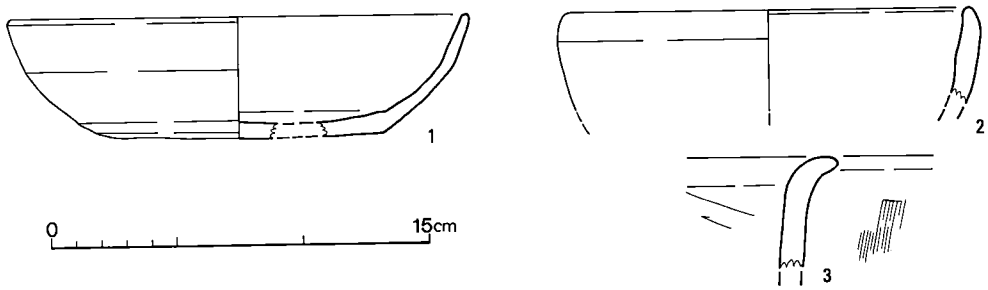
このように，所謂不整大土壙では，ごみ捨場としての機能を持続させる為に，何度もの掘り直しを行っているのが通常と考えられる。よって，そこから出土する土器も時期幅があり，土壙掘削当初の時期を決定するのは困難な場合が多い。掘削以前の遺物も混入するし，時期をおいて掘り直されていれば，より新しい型式の遺物も多量に入る可能性もある。以上の観点から本報告において土壙の当初掘削の時期を示す場合は，最も古い段階の遺物が全体からみてごく少量の場合は，一応混入品とみて，当初掘削の時期を示すものではないとしたい。そして古い段階の遺物がある程度の量に達する場合にその年代をその土壙の当初の掘削時期としておきたい。

出土遺物（第214図）

大きな土壙のわりには出土遺物が少ない。1は，土師器杯で，復原口径18.4cm，器高4.8cm，底径11.5cmの大型品である。底部はやや丸味を持ち，体部は内湾気味に開く。体部外面下端は回転方向のヘラ削りを残し，底外面は回転方向のヘラ切りの後に手持ちのヘラ削りを施す。体部内外面横ナデ，底内面はナデツケる。2は，土師器で，小型鉢状の器形となるかと思われる。復原口径15.8cmを測る。内面横ナデ，外面は磨滅して調整不明。3は，土師器小甕片で，頸部で肥厚せず短かく外反する口縁となる。

以上の出土土器のうち1は，8世紀中頃前後と考えられるが，遺物量が少なく当初の掘削時期は周辺の住居群の時期からみて，もっと古い年代が想定される。よって最終使用時が8世紀

中頃前後であったと考えておく。(中間)



第214図　第11号土壙出土土器実測図 (1/3)

第12号土壙 (図版103, 第213図)

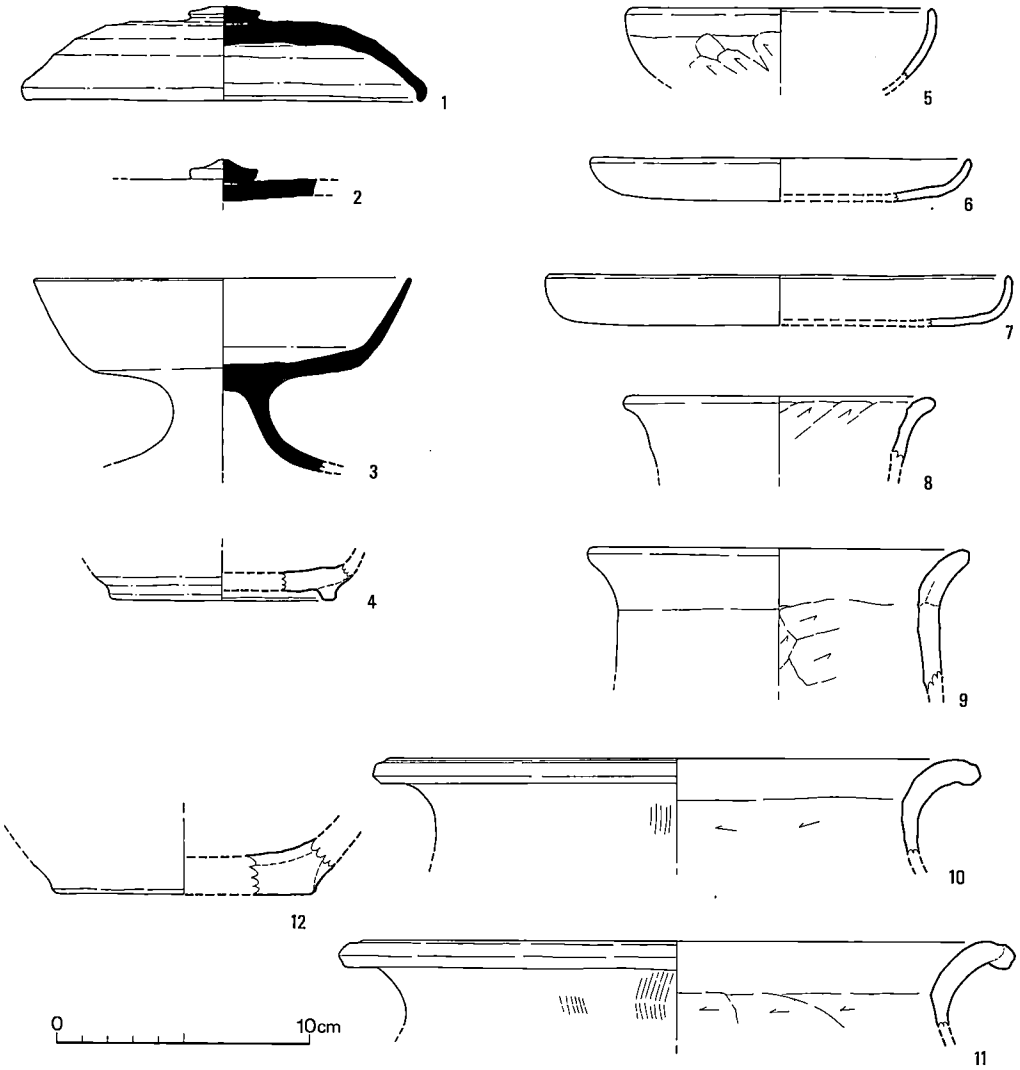
E住居群の南端近くに位置し，新しい第7号溝に中央部を切られる。長径2.4m，幅1.8mと小さめの不整形土壙である。全体の掘り込み状況からみて，1～2回の掘り直しがあったと思われる。

出土遺物 (第215・216図)

わりと小ぶりな土壙にしては出土遺物が多い。1・2は須恵器杯蓋で，1は浅橙色を呈した生焼けで，やや扁平な撮を付ける。端部は丸味を帯び，復原口径15.0cm，器高は3.7cmと高い。3は須恵器高杯であるが，脚端部は短かく屈折して直立するものとなろう。復原口径14.9cmを測り，調整は全体に磨滅するため明らかでない。

4は土師器の高台付杯である。復原底径8.8cmを測り，底外面は回転方向のヘラ削りを残す。5は土師器の薄手の椀状の器形で，復原口径12.0cmを測る。体部外面は手持ちのヘラ削りが施されている。6・7は土師器皿で，口径は各々15.0cm，18.3cmである。7は体部がやや内湾気味に立ち上がる。8・9は土師器小甕片である。8は小型の鉢状，或いは逆転して脚台付の器種になる可能性もあるが，明らかではない。各々復原口径12.3cm，15.0cmを測る。9の胴部外面は磨滅して調整不明。10・11は土師器甕口縁片で，各々復原口径24.0cm，26.6cmを測る。いずれも頸内側に稜をつくり，丸く屈曲して外反する特徴的な口縁をなす。胴部はあまり張らず，内面ヘラ削り，外面は縦ハケを施す。

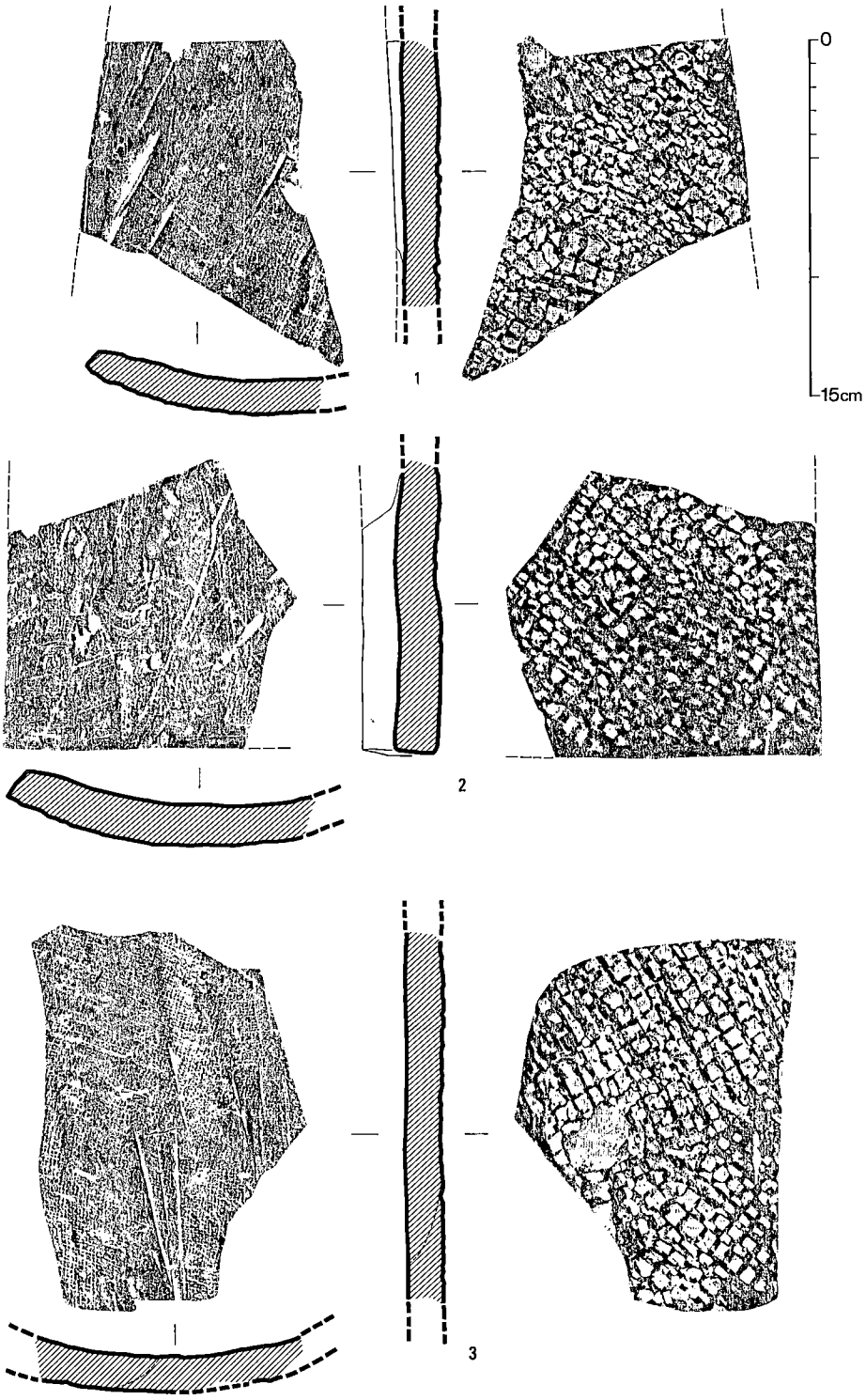
瓦は平瓦3点が出土している。いずれも凸面に正格子目の叩きを施している。1は凹面の側端部から凸面側端部にかけてヘラ削りで面取りする。凹面は布目圧痕の上からヘラ状工具によるナデで部分的に布目を消す。2は凹面側端部をヘラ削りするが側面は横位ナデが施される。凹面は布目の上を縦方向に部分的にナデ消す。3は凹面が1と同様に布目の上をヘラ状工具によってナデ消されている。3点ともやや薄手で，焼成やや不良，灰白色がかった橙色を呈する。



第215図　第12号土壙出土土器実測図（1/3）

12は弥生土器底部で，復原底径10.2cmを測る。本遺跡からは，弥生時代の遺物は極く数える程しか出土しておらず，遺構も皆無である。しかし西隣の井上薬師堂遺跡では弥生時代住居もわずかに検出されており，この土器片はこれら他地点からもたらされた遺物であろう。

以上の出土遺物は，弥生土器を除いて，多くは8世紀前半代のもので，4のように8世紀末近くまで下るものもある。ただ，土師器甕や瓦類は7世紀後半代まで上る可能性もあるが，瓦は井上廃寺から拾ってきたものであろうし，当土壙掘削当初の時期を示すとは限らない。ここ



第216図　第12号土壙出土瓦実測図（1/3）

では一応８世紀前半代の土壙としておく。(中間)

第13号土壙（図版103，第213図）

Ｅ群の南端近く，第12・14号土壙の西隣に位置する。長さ4.4m，幅1.2mの長楕円形のプランを呈し，底面は凹凸が多い。第12～15・17・18号土壙が近接していることから，このＥ群の中で南端近くにあたるこの辺りが，ごみ捨場として意識され，次々に掘削されていったものかと思われる。

また，第15号住居跡，第13・14・17号土壙に切られる黒色土落込み部（最大深さ20cm）がこの間に拡がっているが，これも一種の土壙と考えてもよさそうである。

出土遺物（第217図）

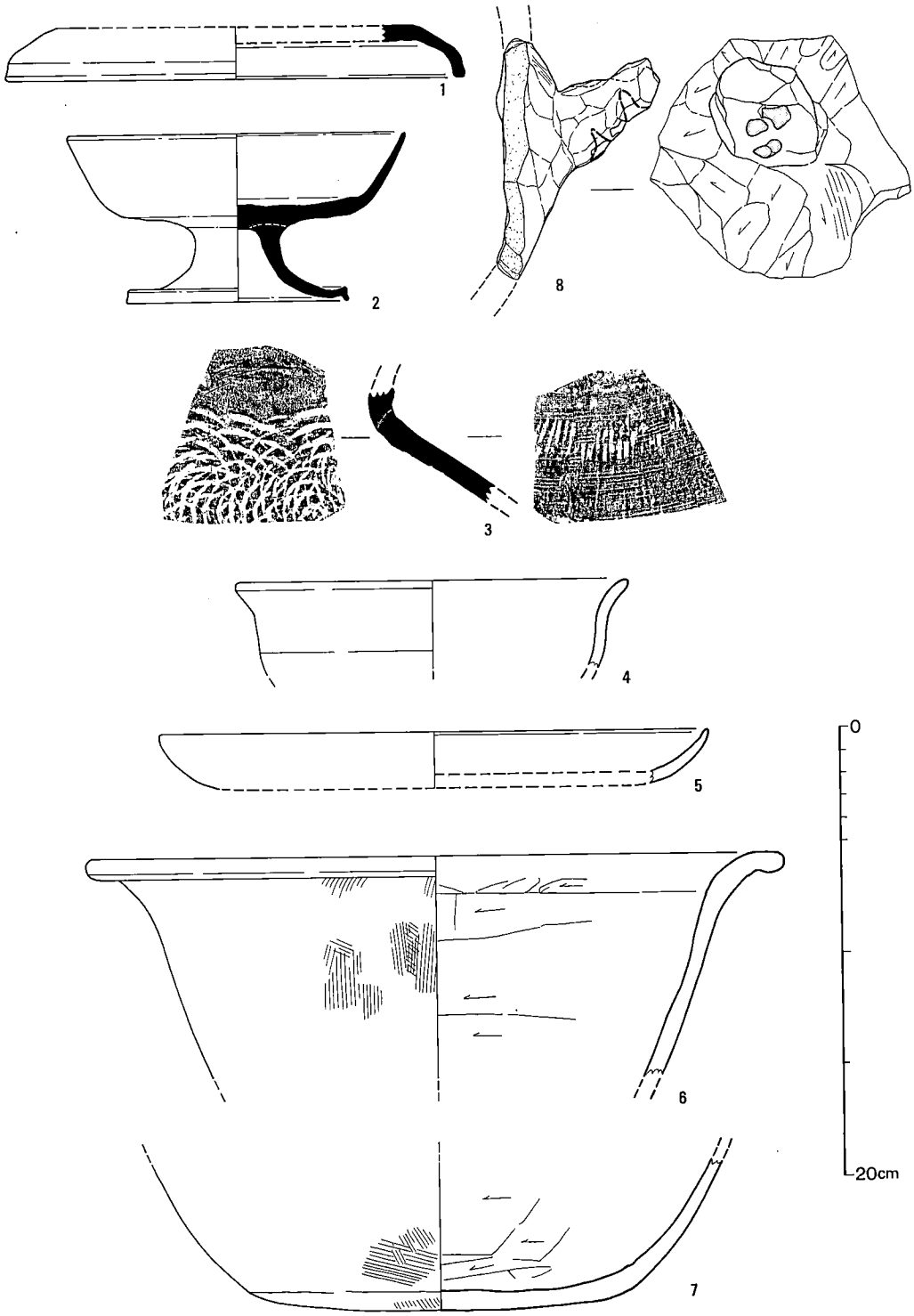
１は須恵器の短頸壺等の蓋になるかと思われる。端部は角ばっており，天井外面は左廻りの回転ヘラ削りを施す。復原口径20.4cm，器高2.3cmを測る。２は，須恵器の生焼けの高杯で，内外面とも灰白色を呈する。杯部口径15.0cm，器高7.5cm，脚端径10.0cmを測る。脚端は鳥嘴状に短かく屈折する。杯部底外面は回転ヘラ削りの後に横ナデを施す。３は，須恵器甕頸部片で，焼成堅緻で灰色を呈する。胴部外面は平行線状叩きの上にカキ目調整を施し，内面は青海波あて具痕を残す。

４は，土師器の鉢乃至椀状の器形で，復原口径17.4cmを測る。内外面横ナデ，胴外面屈曲部以下は調整不明で，全体に薄手である。５は土師器皿で，８世紀前葉以降の須恵器皿の出現に影響を受けた土師器であるが，器形は須恵器皿ほどには定型化していない。６はやや平底風となる土師器鉢であるが，頸部でそれ程肥厚せず，胴部が直線的にすぼまって，その傾きも急である。このタイプは８世紀中頃以降の所産と考える。復原口径31.0cmで，外面には黒斑部があり，煤も多くこびりつく。７は土師器甕底部で，それ程厚くなく，平底風となっている。７世紀初頭段階からの古い様相を残したものなのか，或いは８世紀中頃以降に一時現われる平底風のものなのか判然としないが，薄手であることから，恐らく３や８などと共に古い段階のものなのであろう。８は，土師器把手部分であるが，把手下面に３ヶ所の刺突孔を有するタイプである。本遺跡例としては珍しく，７世紀のものであろう。

以上のように，この第13号土壙からは，７世紀後半及びそれを溯る遺物が若干出土しており，８世紀前葉・中頃までの土器もみられる。よって，当土壙は８世紀前葉頃に掘削されたものではないかと考える。（中間）

第14号土壙（図版104，第213図）

Ｅ群の南端近く，第13号土壙の北隣，第15号住居跡の南隣の小型土壙集中部分に位置する。長さ1.58m，幅0.73m，深さは0.42mと規模は小さい。墓とも考えられるが，周辺に土壙墓等



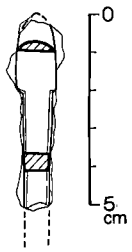
第217図　第13号土壙出土土器実測図（1/3）

みられず，遺構自体が墓壙的な整美な形状をなしていないので，この辺りに集中して次々に掘られたごみ捨穴と考えておく。

出土遺物（第218図）

鉄鏃１点が出土している。全体に銹が著しく，詳さな形状は明確さを欠く。鋒先は片丸造りになると思われ，細根式のタイプとなろう。残存長5.0cm，鋒身幅1.0cm，厚さ（推定）0.25cm，鋒部長さ2.1cm程となろう。

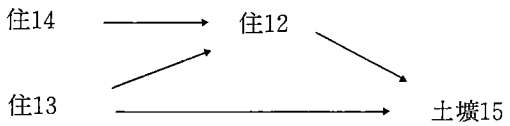
この出土遺物は，古墳時代後～末期の鉄鏃と形態は変らず，少くとも８世紀段階まで下がるものとは思われない。この土壙そのものは周辺の状況から８世紀前半頃に掘削された可能性が強いと思われる。よって７世紀代の鏃が混入したものと考えておく。（中間）



第218図
第14号土壙出土鉄器実測図（1/2）

第15号土壙（図版104，第219図）

Ｅ群最南端に位置し，北西側で第12・13号住居跡を切る。この辺りの切り合い関係は以下の通りである。（古→新）



長さ2.77m，幅2.3m，最大深さは0.4mで，倒卵形のプランを呈する。底面も平らでわりとすっきりしており，他の土壙と若干趣きが異なる。

出土遺物（第220図）

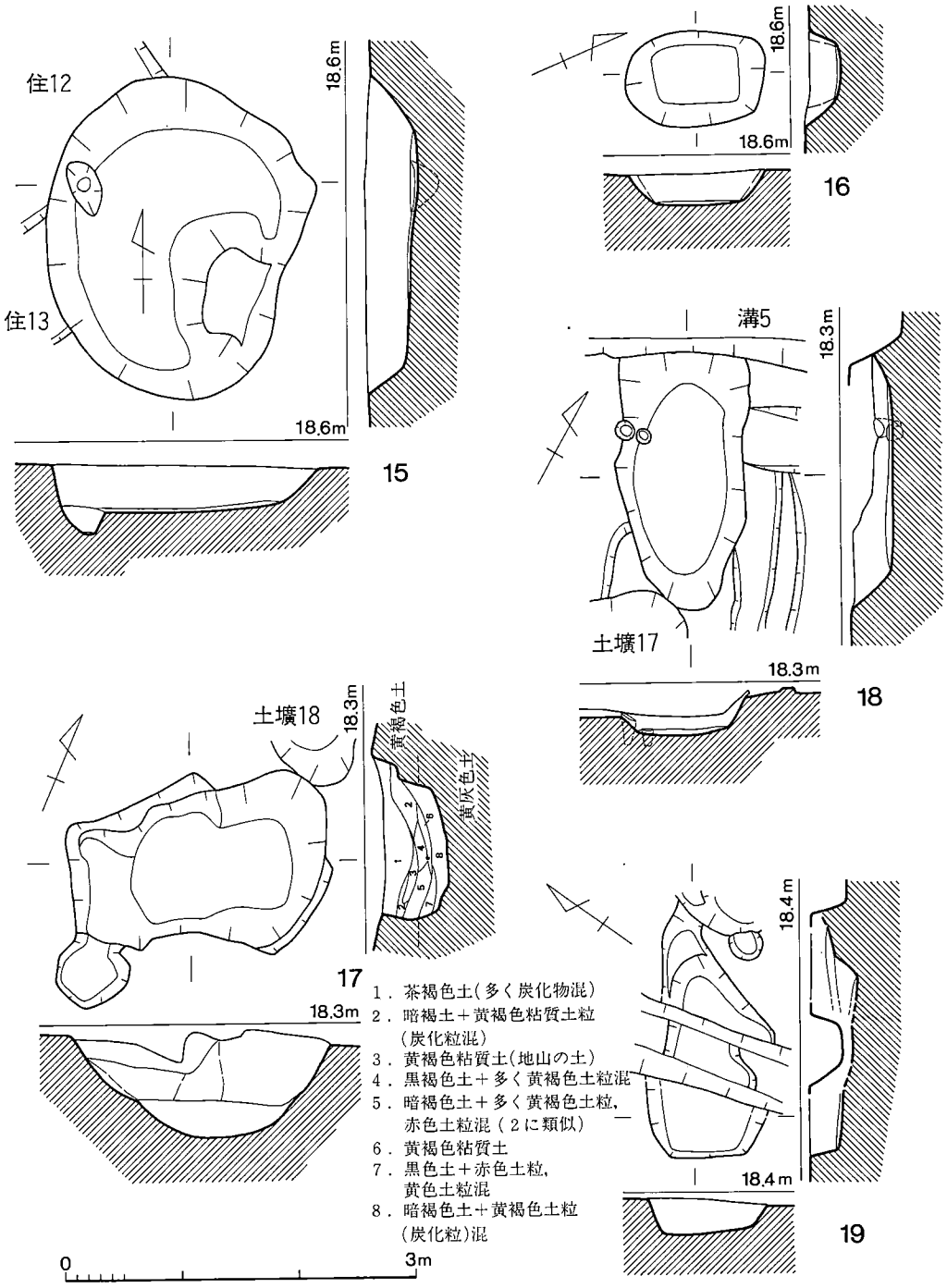
１は，須恵器高台付杯で，高台径8.8cmを測る。底部から体部へ丸く屈曲して立ち上がり，外方へ踏ん張る高台を付ける。底外面には２本の平行線を組み合わせた，斜交の井桁状のヘラ記号が施されている。

２は，土師質焼成の緑釉椀である。肌色の地で，口縁端外面付近のみに松葉色の緑釉が残り，他面は殆んど剝落している。小片であるとはいえ，このような普通の集落で緑釉製品が出土したことは特筆すべきである。おそらく，西方の井上廃寺と関連する遺物なのであろう。

３は，須恵質焼成の揑鉢である。内面は密にハケ目が施され，外面上半は横ナデ調整を行っている。細かい砂粒を多く含み，内面茶灰色，外面は灰色を呈する。

以上の遺物のうち，１は７世紀の中頃に近い後半代の所産であり，後の２点と全く時期を異にしており，混入品であろう。３の平安後半代の遺物から，この第15号土壙はその頃に掘削されたものと考えておく。（中間）

第16号土壙（図版105，第219図）



第219図　第15～19号土壙実測図（1/60）

第220図　第15号土壙出土土器実測図（1/3）

Ｅ群の南西端に位置するが，他のＥ群遺構とは若干かけ離れているようである。長さ1.18m，幅は0.81m，深さ0.28mと規模の小さい土壙である。出土遺物も全く無く，その性格・時代等，皆目推定できない。（中間）

第17号土壙（図版105，第219図）

Ｅ群の東南近く，第18号土壙と接して営まれる。長さ2.23m，幅1.6m，深さは0.97mと中央部がかなり深くなっている。不整長方形プランの，それ程大きくない土壙であるが，遺物の出土量が多い。特筆すべきは「殿刀」と刻字された土師器杯が出土していることである。

出土遺物（第221・222図）

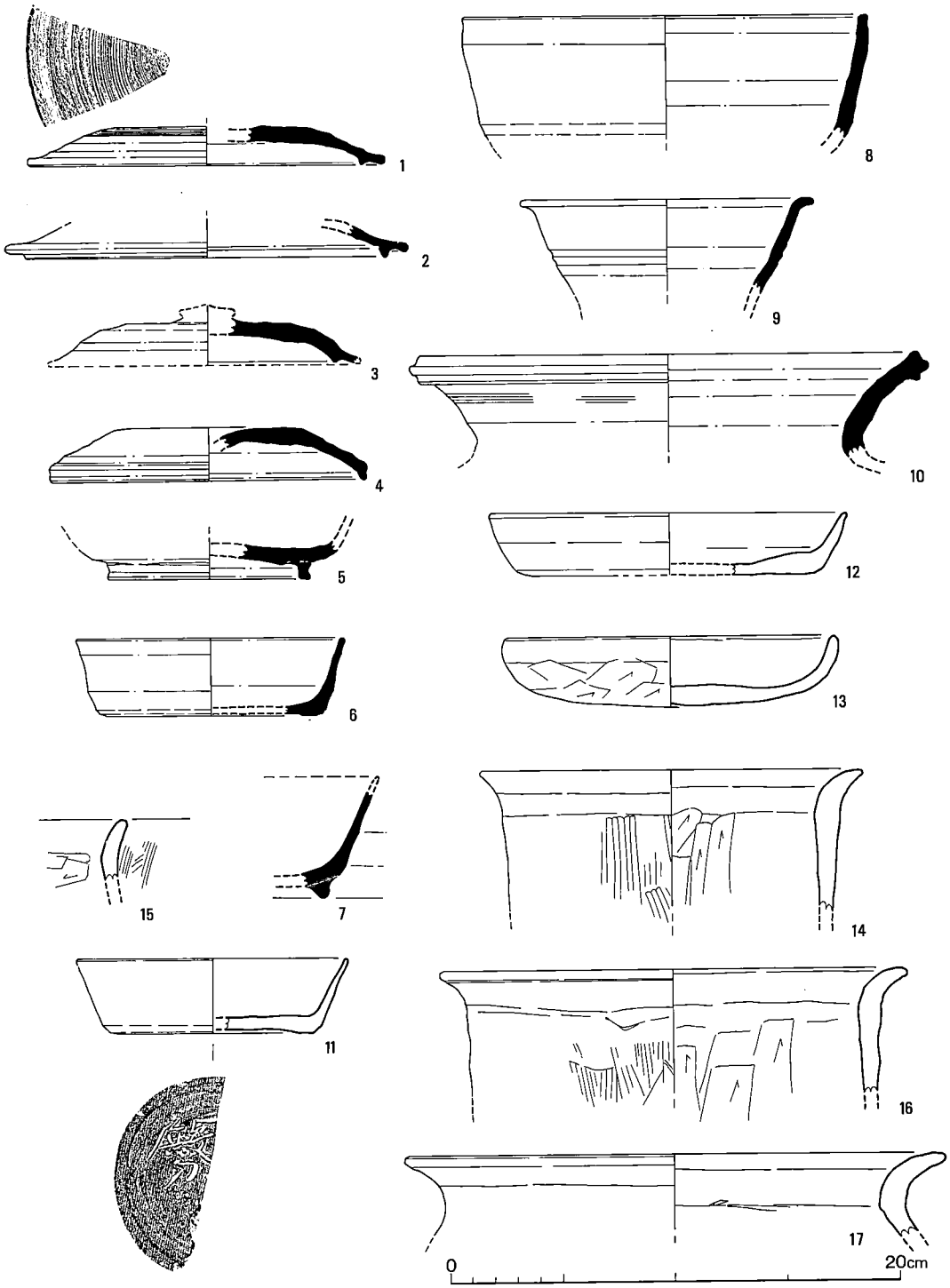
１～３は，内面に返りを有する須恵器杯蓋である。いずれも返りは短く退化している。１の天井外面にはカキ目を施す。３は撮を付けており，天井外面は回転ヘラ削りを施す。いずれも焼成堅緻で，灰色を呈する。４も須恵器杯蓋であるが，端部がやや丸っこい鳥嘴状をなす類である。復原口径14.0cmを測り，天井部は焼け歪んでいる。

５・７は須恵器高台付椀で，５は外端が突出する高台を付け，その径は9.0cmとなる。７は，短いが外方へ踏ん張る高台を付ける。焼成あまく，白灰色を呈する。

６は，高台の付かない須恵器杯で，復原口径12.0cm，器高3.5cm，底径9.6cmを測る。体部はあまり外傾せず，体部外面下端から底外面は回転ヘラ削りを施す。この６は，後述する土師器杯11（ヘラ刻字あり）と焼成の違いは明瞭ではあるが，法量・器形・手法ともに極めて酷似している。

８は，口径18.0cm程になる大口径で深い椀乃至鉢状の器形となるもので，体部外面下端以下は回転ヘラ削りを施す。

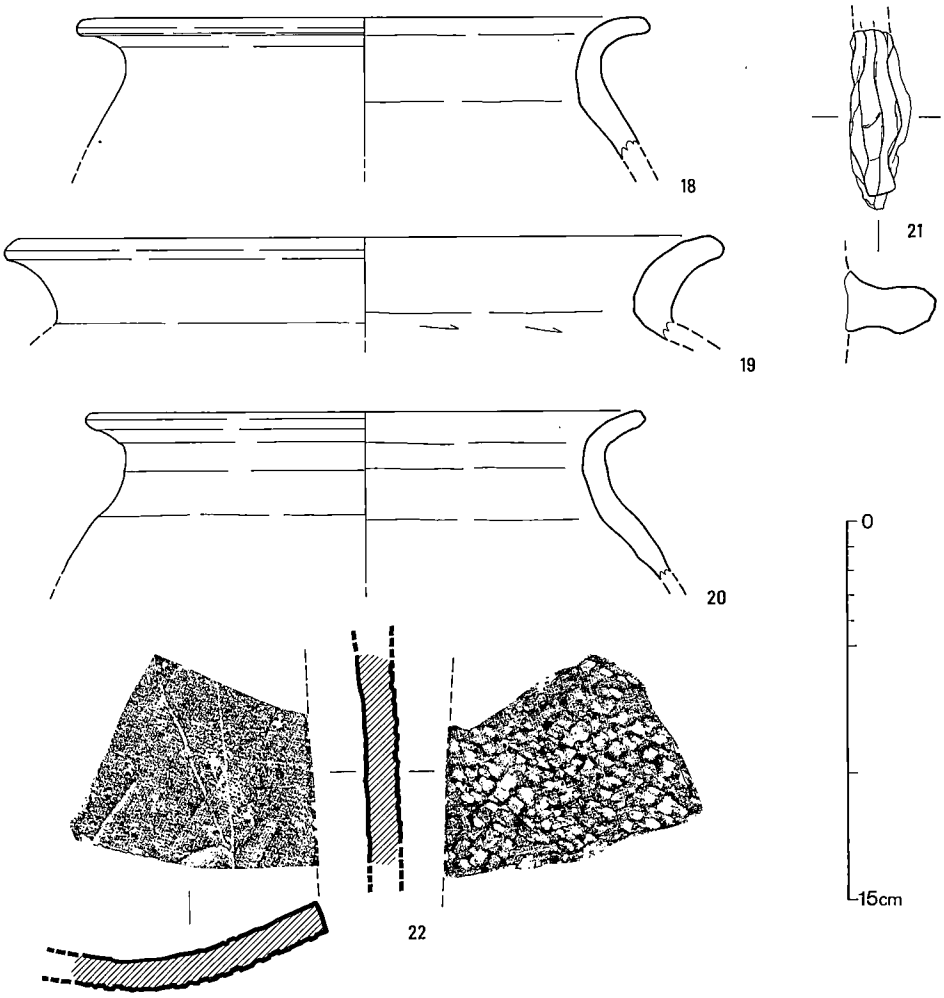
９は，長頸壺口縁で,復原口径13.0cmを測る。図示したより外傾度がもう少し立つような器形となるかもしれない。口縁部は短かく折れて外へ開き，頸部外面に２条の沈線を連接してめぐらす。



第221図　第17号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)

10は，須恵器壺口縁部で，この土壙が切る周辺の黒色土中出土品である。口縁外端を凸帯状にするなど，古相を示している。頸部外面には一部にカキ目がみられる。復原口径23.0cmを測り，胎土に細砂粒をいくらか含む。

11は，土師器杯で，口径12.0cm，底径9.0cm，器高3.4cmを測る。須恵器の６よりもやや外傾度が強く，体部外面下端は横位ヘラ削り，底外面は回転方向の丁寧なナデ仕上げである。全体に丁寧でシャープなつくりである。底外面には「殿刀（殿部）」と読めるヘラによる焼成前の刻字が施される。これは西側の谷である井上薬師堂谷遺跡からも浅い器形の土師器杯底部に記されたものが２例出土している。行書体の筆跡で，いずれも同一人の手によるものである。土



第222図　第17号土壙出土土器・瓦実測図（その２）(1/3)

器形式から８世紀前半に比定できる。

12は，土師器杯で，底部は回転方向のヘラ切りがみられる。復原口径15.8cm，底径13.5cm，器高2.8cmを測る。13は，不安定な底部から丸く内湾気味に立ち上がる体部を有する土師器杯である。復原口径14.8cm，器高3.1cmを測る。口縁は丸く厚みを持ち，体部下半以下は手持ちのヘラ削りが施される。

14・15は土師器小甕で，14は復原口径17.0cmを測り，胴部は全く張らない。16も胴部の張らない土師器甕で，復原口径20.8cmとなる。

17～20は，胴部が強く張る土師器甕である。17は復原口径24.0cmで，頸部内面に稜をつくり外反する口縁へとのびる。19は28.3cmの復原口径をなし，部厚い口縁となる。18と20は，胴部から頸部つけ根で立ち上がり，更に口縁部が開く所で折れ曲って外方へ延びるタイプである。いずれも復原口径22cm前後で，全体に磨滅著しく調整不明である。

21は，土師質焼成で，移動式土製カマドの廂の下端部分である。器表は指による強い押圧痕が著しい。

22は，平瓦片で，凸面は正格子目叩きを斜位に施している。凹面はヘラ状工具による削り上げが施され，その端部痕が明瞭である。２条の交叉するヘラ描きの沈線がみられる。厚さ1.3cmとかなり薄手で，胎土には細砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で淡灰色を呈する。

以上の第17号土壙出土遺物は，７世紀後葉代のものが半数近くを占め，他は６・11・12などを始めとする８世紀前半代のものである。よって第17号土壙は７世紀後葉に掘削され，８世紀前半代にも使用されたものと理解できる。（中間）

第18号土壙（図版106，第219図）

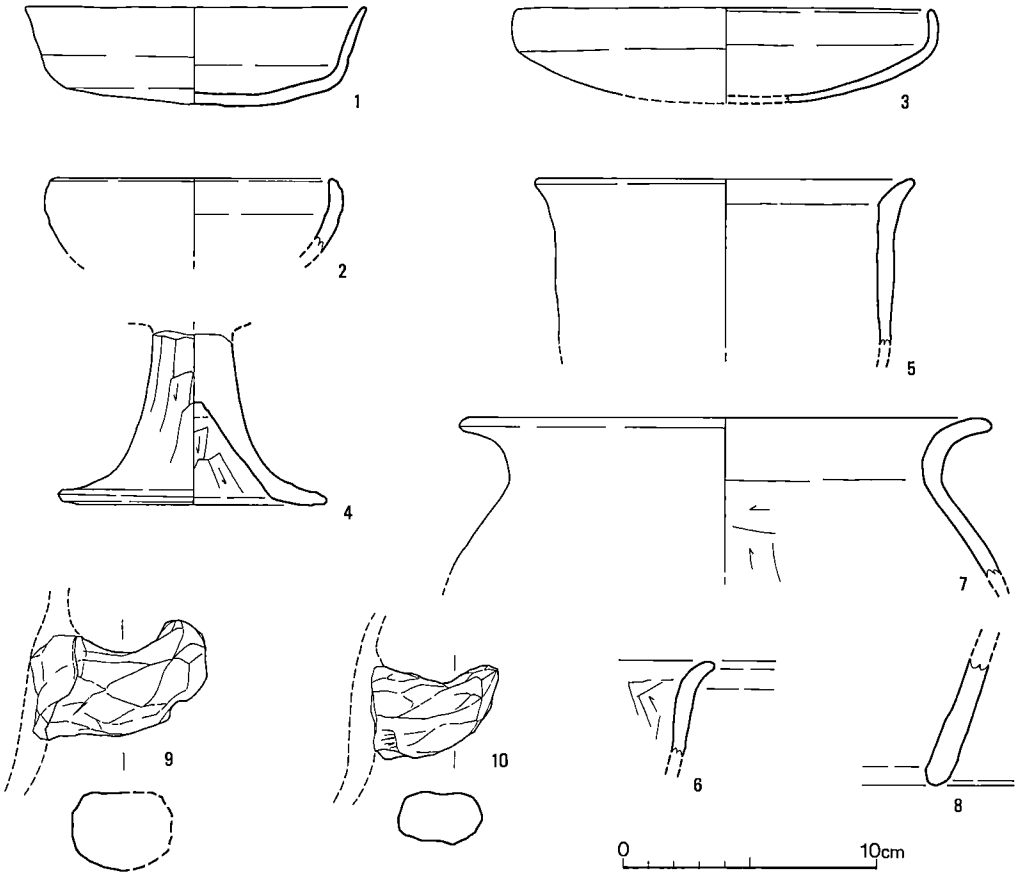
Ｅ群の南東端近くで，第17号土壙の北隣に接する位置に検出された。長さ2.2m，幅1.12m，深さ0.36mのやや小さめの土壙となる。底はわりと平らで，全体に舟形状のプランを呈する。

出土遺物（第223図）

１は土師器杯で，口径13.5cm，器高3.9cmを測る。底部は丸味をおびる。全体の器形は須恵器を模したものである。２は，土師器の小型椀乃至鉢状の器形で，復原口径11.3cmを測る。胎土精良である。３は，底部が丸く不安定で，体部で屈折して内湾気味に内傾する土師器杯である。口径16.5cm，器高3.8cmを測り，端部は丸くおさめる。

４は，土師器高杯で，脚端径10.6cmを測る。脚柱部外面と内面はヘラ削りのままで，上半は粘土を充填したタイプである。７世紀前葉代の古い様相を残す。

５・６は，胴部が全く張らない土師器小甕で，５は復原口径15.0cmを測る。６は頸内面で肥厚せず，強い稜を残さない。７は頸部のつけ根から丸く屈曲して外反するタイプの土師器甕である。５と同様に全体に磨滅著しく，調整は定かでない。



第223図　第18号土壙出土土器実測図（1/3）

8は，土師器甑の下端部分で，内外面かなり磨滅して調整不明である。最下端付近は横ナデを施しており，煤が付着している。9・10は土師器甕もしくは甑の把手部分で，10は小さく平べったい類である。9は器壁に挿入するタイプ，10は貼り付けるタイプである。

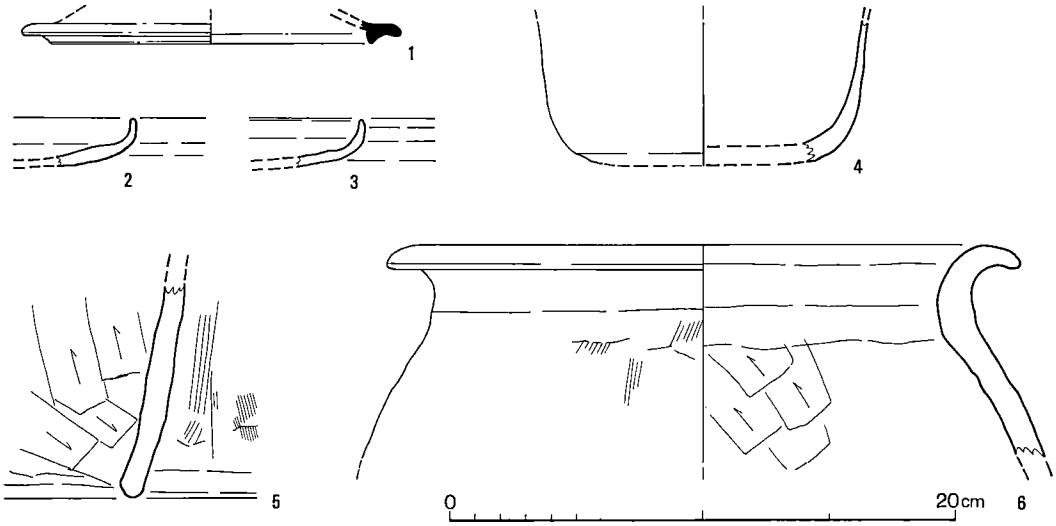
以上の出土遺物は，全体に古い様相を示すものが多く，7世紀後半代でもずっと中頃に近い時期のものが多い。よって，これが第18号土壙の当初使用時期を示すものと考えておきたい。

（中間）

第19号土壙（図版107，第219図）

E群の中央南寄りに位置し，土壙の中心部分を新しい溝に切られている。長さ2.2m，幅1.1m，深さ0.4mの不整長方形気味のプランをなす。小型の類で，第18号土壙と同規模である。

出土遺物（第224図）



第224図　第19号土壙出土土器実測図（1/3）

1は生焼けの須恵器杯蓋で，復原口径15.0cmとなる。断面三角形の短い返りが付く。2・3は同形態の土師器杯で，体部が短く内湾気味に立ち上がる。底外面はヘラ削りを施し，丸い不安定な底となろう。

4は，須恵器高台付杯を模した土師器，或いは椀形の器形となるもので，全体に磨滅著しく調整は不明である。5は土師器の甑下端部分で，端部内～外面は横ナデ調整を施す。最下端部内側周辺には煤が付着している。6は，土師器甕で，胴部が張り，丸く屈曲して外反する口縁を有する。内面は頸部のやや下がった位置からヘラ削りを施している。

以上の土器は7世紀後葉代の特徴をよく示しており，この第19号土壙の掘削時期を示すものと言えよう。（中間）

第20号土壙（図版107，第225図）

E群の中央西端に位置する。当初第20～22号土壙が連結した状態で検出したが，それは最終埋没の黒色土が広く堆積していたためである。後に土層確認の際に，中央の浅い第22号土壙が両側の第20・21号土壙に切られていることが判明した。しかし，第20・22号土壙の土層図にみる通り，それも掘り直し後の切り合いであって，当初のことは必ずしも確定的ではない。

径2.5×2.0m，深さ0.6m前後の不整円形プランを呈し，北西側底面は更に一段掘り窪められており，その辺りの壁はオーバーハング気味となっている。このような状況から，1～2回の掘り直しが行われたことが考えられる。

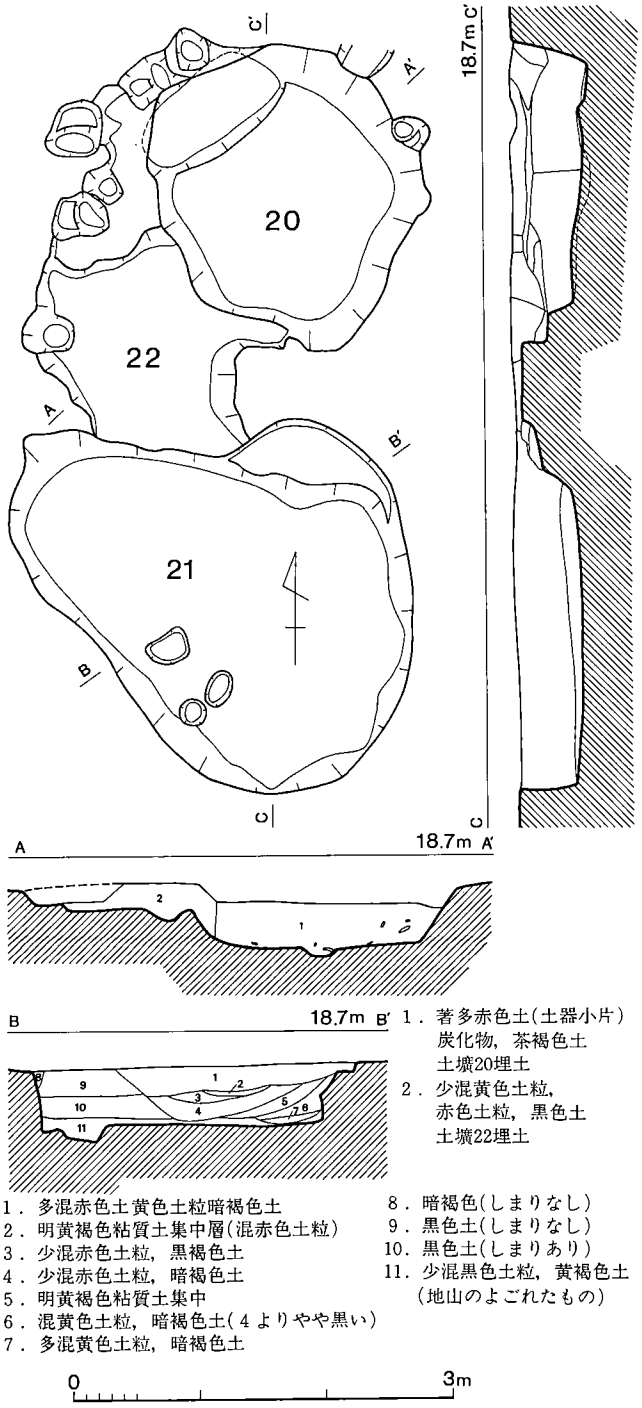
また，土器類が異常な程多量に出土しているが，その多くは下半部や底近くから出土したも

ので，ほとんど一括投棄と言える状態であった。それは図示した土層図を見ても判かる。レンズ状堆積はみられず，底まで土層を分離できず，ただ茶褐色土のみが堆積しており，掘り直し後に大量に投棄されて，この土壙の役目が終了したことを示している。

出土遺物（第226～233図）

須恵器

杯　蓋（1～9）　1～5は内側に返りを有するもので，6～9は鳥嘴状形態をなすタイプである。1は，撮を付けず，口径14.5cm，器高2.8cmを測る。天井外面は丁寧にナデている。2は，生焼けで全体に磨滅気味で，返り部分も完全にすり減っている。やや高い擬宝珠撮を付け，天井外面は回転ヘラ削り，その外側は細かいカキ目調整を施す。口径16.0cm，器高3.2cmを測る。3は，天井外面に回転ヘラ削りを残し，復原口径17.0cmを測る。4・5は焼成堅緻で，作りは3と同様である。6は，鋭い鳥嘴状口縁につくり，口径15.6cm，器高2.9cmを測る。天井外面は回転ヘラ削りを施す。7は復原口径15.1cmで，天井外面は丁寧にナデている。8もシャープな口縁を有し，17.0cmの復原口径と



第225図　第20～22号土壙実測図（1/60）

なる。9は，8mmほどの高い口縁を有し，天井外面は回転ヘラ削りを施す。1～5は7世紀の中頃に近い第3四半期，6～9は第4四半期の末に近い時期と考えられる。

高台付杯（10～19）　10～12は，ほぼ同法量・同器形の小型類で，同一工人の手によるかとも思われる。口縁上半で僅かに外反気味となり，外方へ強く踏ん張る高台を付ける。口径9.5～10.3cm，器高4.1～4.5cm，高台径5.7～7.0cmを測る。いずれも胎土に細砂粒を少量含み，焼成堅緻である。10・12の底～体部外面には灰かぶりがみられ，伏せて焼いたもののようである。12は焼き歪みが著しい。これらは7世紀の後葉でもやや末に近い頃の所産と考えられる。

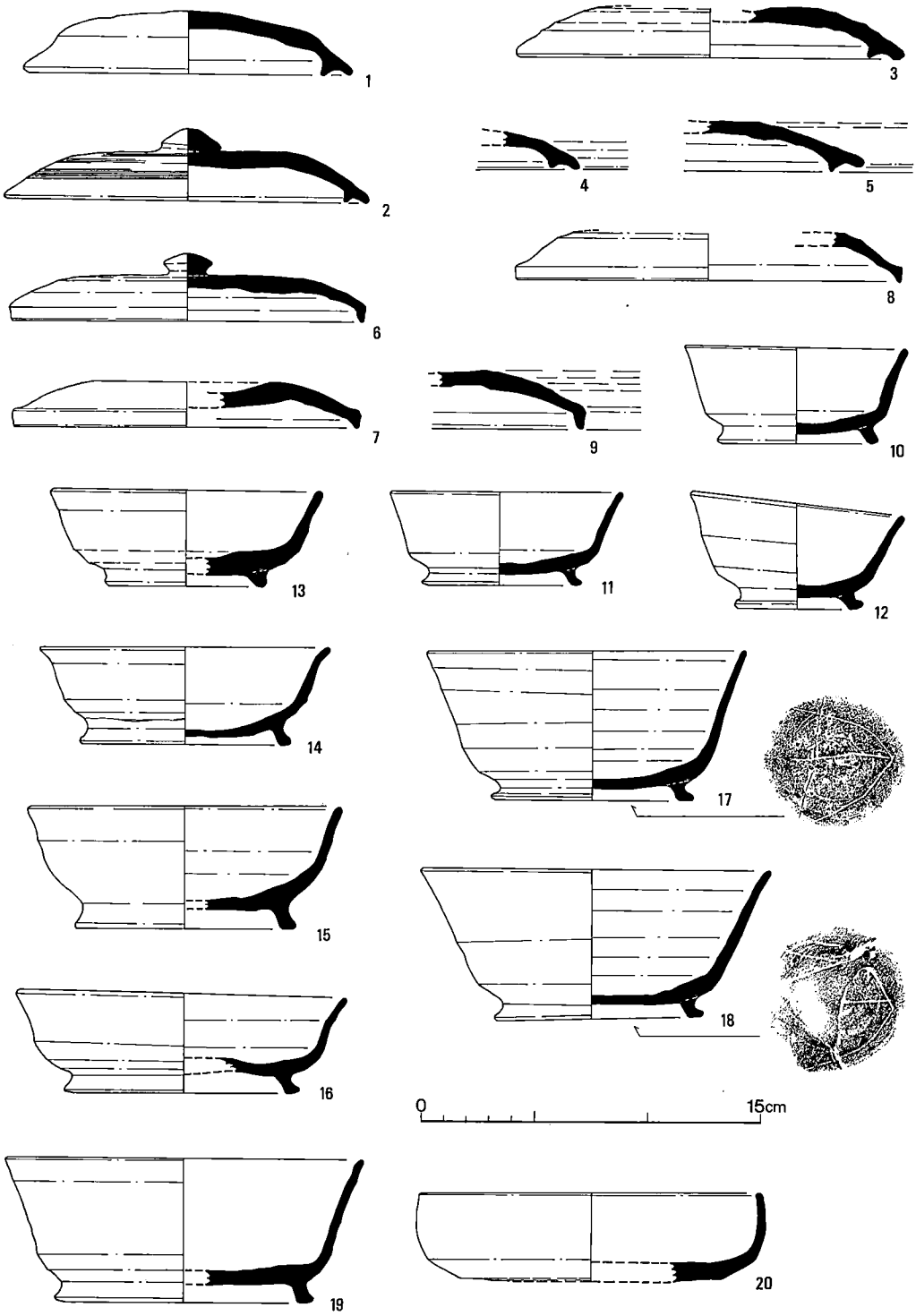
13～16は，底部まで丸味を持ち，口縁部が更に外方へ開くタイプ（特に14・16）である。高台は長く外方へ踏ん張り，全体的に7世紀の後半でも中頃に近い時期を示している。13は体部外面下端に回転ヘラ削りを残し，口径12.0cm，器高4.2cm，高台径7.1cmを測る。高台は他例ほど長くなく，全体にやや小ぶりの法量を示す類となる。14は，この一群の中で最も古い様相を示し，最終的調整は横ナデ・ナデツケで丁寧に仕上げている。口径12.8cm，器高4.3cm，高台径9.4cmを測る。15は13.9cmと大口径の部類に入るが，17～19と違って未だ体部中途での屈折が明瞭であり，高台も高い。器高5.5cm，高台径9.7cmを測り，酸化焔焼成を受けて茶褐色を呈する。16は，口径14.5cm，器高4.4cm，高台径10.4cmを測る。口縁は外方へ開き，14・15同様に体部外面下端に回転ヘラ削り痕を残さず，横ナデ調整で仕上げている。

17～19は，大口径で深い器形を示し，特に17・18は高台外端が外方へ突出し，底外面のヘラ記号も同一で同一工人の手による可能性がある。17は口径14.1cm，器高6.6cm，高台径8.9cmを測る。体部外面下端に回転ヘラ削り痕を残さず，横ナデで仕上げている。18は口径15.4cm，器高6.7cm，高台径9.2cmを測り，生焼けで灰褐色～黄土色を呈する。底部外面には17と同じヘラ記号が施されている。体部外面下端に回転ヘラ削り痕を残さない。19は口径15.7cm，器高6.3cm，高台径11.4cmを測り，体部内外面は横ナデで仕上げている。外面は灰かぶりがみられる。これら17～19は，7世紀後半でも末に近い時期の所産である。

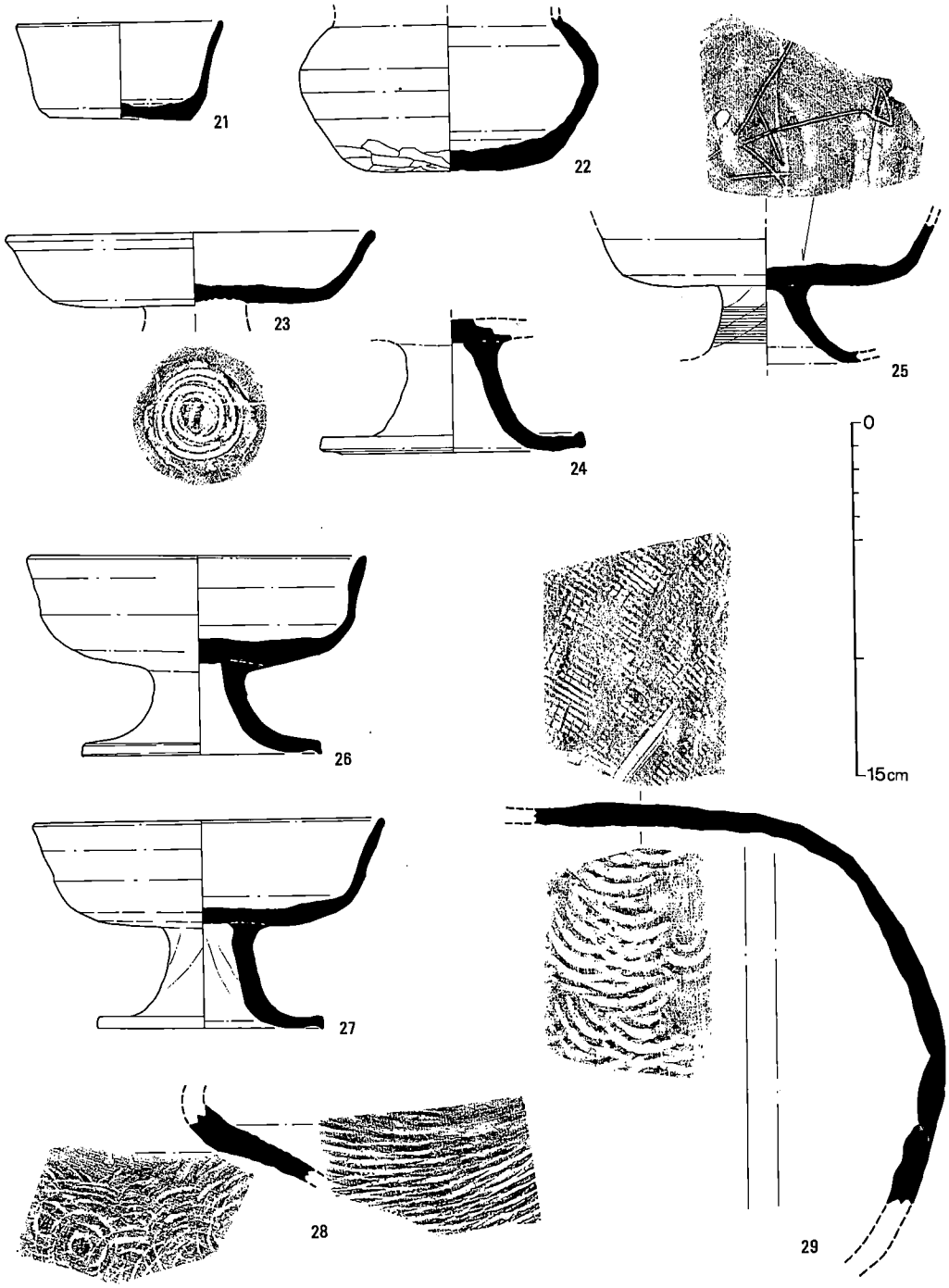
椀（20・21）　20は，土師器の椀から変化する杯の形状を模したような類で，内湾気味に立ち上る体部を有する。復原口径15.1cm，器高3.9cmを測る。底部外面は回転ヘラ削りで，内面にはナデツケが施される。口唇内端は僅かに突出気味となる。21は，口径8.8cm，器高4.1cm，底径6.0cmの小型品である。体部内外面横ナデ，底部内面はナデツケ，底外面も丁寧にナデている。

短頸壺（22）　胴部最大径12.6cmを測り，胴部内外面横ナデ，底部外面は手持ちヘラ削りを施す。焼成堅緻で灰色を呈する。

高　杯（23～27）　23は口径15.8cm，杯部器高3.0cmを測る。底外面には脚部接合のための同心円状の沈線が施され，その外側には回転ヘラ削り痕を1.2cm幅だけ残す。24は脚部のみで，脚端径11.3cm，脚柱径3.9cmを測る。内外面ともに横ナデ調整で，脚端部は上方へも突出して



第226図　第20号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)



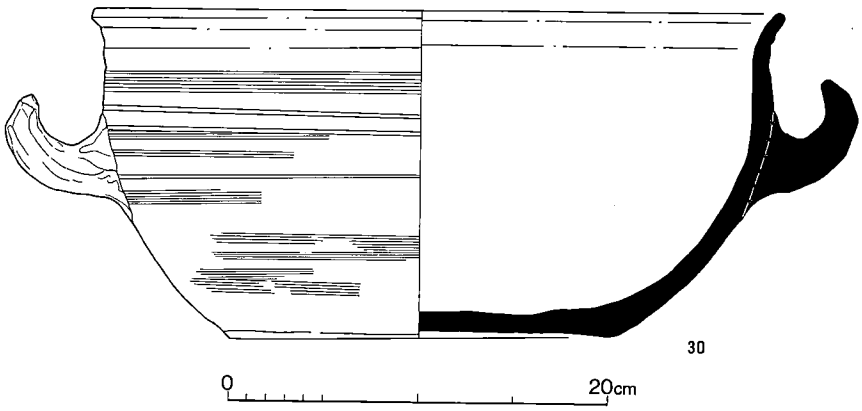
第227図　第20号土壙出土土器実測図（その２）(1/3)

いる。25は焼成軟質で灰色を呈する。杯部内底面には大きくヘラによる沈線がみられる。即ち，小さな三角文から延びる直線とそれに交叉する4本の直線が組み合わされているが，通常のヘラ記号とも異なり，意味不明である。杯部底部外面には回転ヘラ削りが残り，脚柱部には斜位のシボリ痕が明瞭で，その上にカキ目が施されている。26は，杯部口径14.5cm，器高8.5cm，脚端径10.2cm，脚柱径3.9cmを測る。杯部底外面に回転ヘラ削り痕を残さず，全体に横ナデ仕上げを行う。脚端はシャープな鳥嘴状形態を呈する。27は，杯部口径15.0cm，器高8.9cm，脚端径9.7cm，脚柱径3.5cmを測る。杯部底外面に回転ヘラ削り痕を残し，脚柱部にはシボリ痕がみられる。これらの高杯は，7世紀中頃までに盛行する脚柱の細い小型のタイプから完全に脱脚した形状をなしている。しかし，8世紀段階以降の長脚化・杯部の皿状化はみられず，全体に7世紀後葉代の所産とみられる。そのうちでも，カキ目のみられる25や，26・27などは杯部の形状から7世紀の中頃により近い後半代，23は末に近い時期と考えられる。

甕（28）　頸部付近の小片である。胴部外面は横方向の平行条線状叩目が密に施され，内面は細身の青海波あて具痕が明瞭である。

横　瓶（29）　7世紀前葉までの盛行期の横瓶より小型のものである。胴部長径両端部の内外面はナデており，外面には同心円状カキ目は施されていない。頸部寄りの胴部外面は目の細かい正格子目の叩き，内面は太身の青海波が施されている。焼成堅緻で，内面数ヶ所に焼きぶくれがみられる。

鉢（30）　把手付盤とでも称すべき，平底の大型品で，口径36.3cm，器高17.2cm，底径20.4cmを測る。焼成堅緻で，胎土に細砂粒を多く含み，灰色を呈する。口縁内外面横ナデ，胴～底部内面は縦方向のナデ，胴部外面はカキ目の上を横ナデ，底外面は丁寧なナデ仕上げである。把手はやや扁平で，上方へ丸く強い屈曲をみせる。底部は僅かに上げ底状をなす。類例が少なく，



第228図　第20号土壙出土土器実測図（その3）(1/4)

時期が明瞭でないが，他の一括遺物等からみておそらく７世紀の末に近い後半代の所産と考えられる。

土師器

杯（31～48）　同一器種で把握できない程に各種ある。31は前代の椀の形状を残すもので，口縁端部は丸く，全体に内湾状に立ち上がる。底外面は手持ちヘラ削りで，体部外面には細い沈線を４本組み合わせた，ヘラ記号が施されている。32は，口縁近くで短かい屈折をみせるもので，33～38の器種への過渡的形態を示す類である。全体に磨滅著しく，調整不明である。31は口径16.2cm，器高5.2cm，32は口径12.2cm，器高4.0cmを測る。いずれも胎土は精製されている。

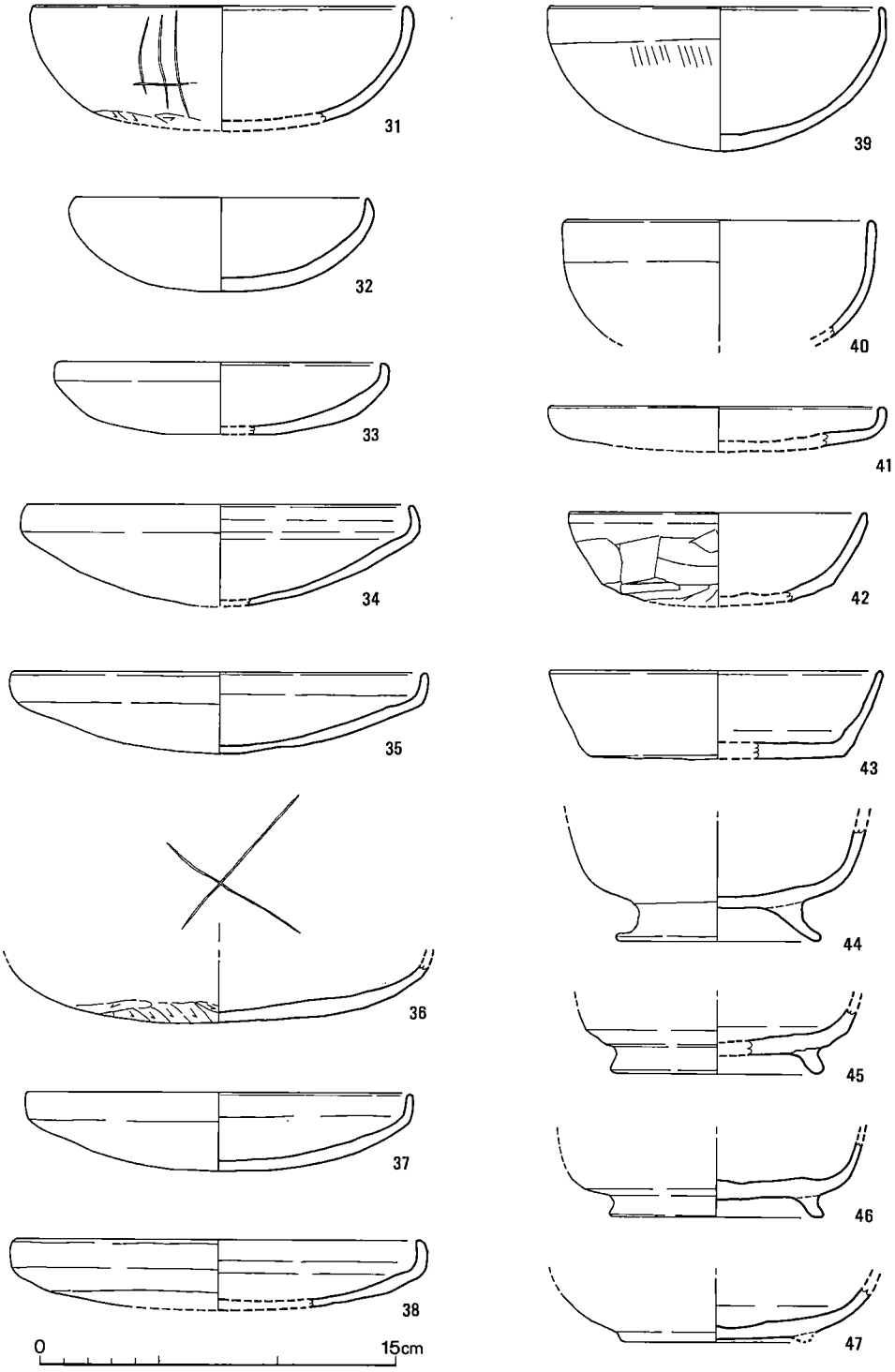
33～38は，口縁部で内湾気味に屈曲し，不安定な丸底をなすタイプである。41も傾きがもう少し内傾するとしたら，このタイプに含まれるかもしれない。33は復原口径14.1cm，器高3.0cmを測り，口縁内外面のみ横ナデで他は丁寧にナデ仕上げを行う。34～38は大口径の部類である。34は復原口径16.0cm，器高4.3cmを測り，口縁内外面横ナデ，以下内外面ともに底部までナデ仕上げである。35は復原口径17.7cm，器高3.4cmを測り，土壙の底面直上出土の土器である。胎土精良で，口縁内外面横ナデ，他はすべて丁寧なナデ仕上げである。36は，内底面に大きく，細い鋭利な工具による×印の沈線を施す。底外面は手持ちヘラ削りで，胎土は精製されている。37は，口径16.3cm，器高3.4cmを測る。口縁は内傾せずに立ち上がる。内外面とも磨滅著しく調整不明である。38は，復原口径17.0cm，器高3.0cmで，口縁内外面横ナデ，底外面は手持ちヘラ削りを施す。

39・40は，深く不安定な丸底の，椀・小型鉢とでも称すべき器形である。39は，口径24.2cm，器高6.1cmを測り，外面の一部に縦ハケが残る。他は丁寧にナデている。40は，口縁が直に立ち上がり，その外面のみ横ナデで，以下外面はヘラ削りのようである。内面は丁寧にナデており，復原口径18.1cmを測る。胎土精良である。

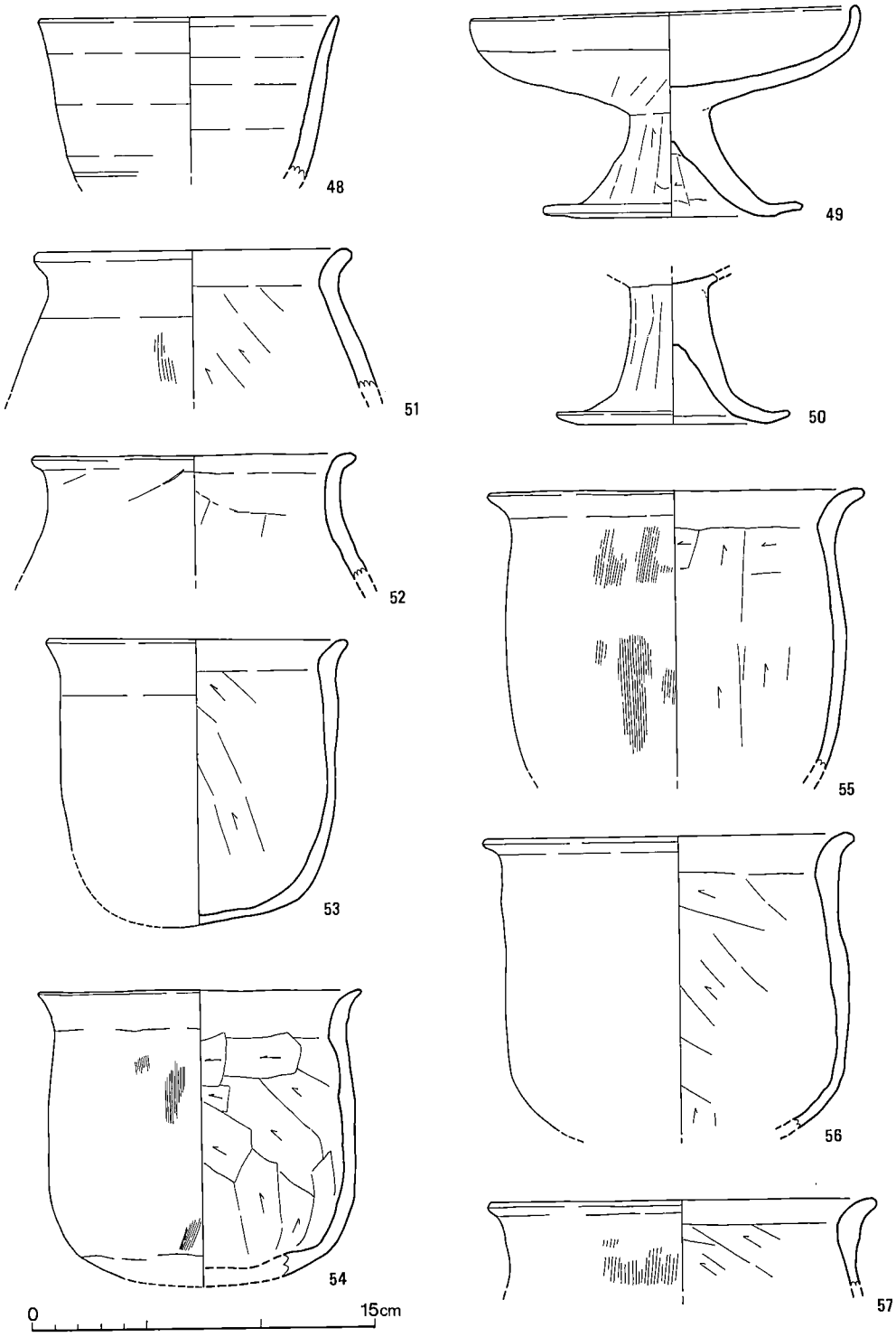
41は，復原口径14.2cmを測るが，図示したような浅い皿型ではなく，33～38のようなより深い不安定な丸底風となるタイプと考えられる。42は，口縁外面下から以下を削り，底部近くで屈折をみせるタイプで，７世紀後葉の須恵器杯を模した意図が汲みとれる器形となっている。胎土精良で，復原口径12.5cmを測る。

43は，上層出土品で上面を覆う黒色包含層からの混入品であろう。底部と体部の境にシャープな角をつくり，底外面は回転ヘラ削り，他は全面横ナデ調整を施す。復原口径14.0cm，器高3.7cm，底径10.6cmを測り，明らかに須恵器杯を模したものである。当土壙内の多量の出土品のうち，この１点のみが８世紀前半代の所産である。

44～47は，高台付杯で，須恵器を模したタイプである。胎土がかなり精選されており，須恵器と異る。44は体部全体が丸味を帯び，高く長い高台が外方へ強く踏ん張る。高台径8.7cmを測る。45は，高台の接合面に２本の沈線が施されている。46は，高台径9.0cmで，全体に磨滅



第229図　第20号土壙出土土器実測図（その４）(1/3)



第230図　第20号土壙出土土器実測図（その５）(1/3)

著しい。47は焼成不良で，高台部分が欠けた上に殆んどすり減っており，旧状を留めない。以上のうち，44と47は７世紀後半でも中頃に近い頃と考えられ，45・46は，より末に近い時期となろう。

48は，口径13.0cmで，深い器形となる鉢状の器種である。胎土精良で，内外面横ナデ，下端に沈線がみられる。

高　杯（49・50）　49は，杯部口径17.1cm，器高9.0cm，脚端径11.4cmで，脚柱上半が充実したタイプである。杯部口縁内外面横ナデ，杯部底内面は丁寧なナデ仕上げを施す。底外面は手持ちヘラ削り，脚柱外面も縦位のヘラ削りのままである。脚部の成形・調整技法は，７世紀中頃以前の高杯と全く同じであり，古い様相を残すが，杯部は７世紀の中頃に近い後半期の大口径の土師器杯の形態そのものである。50もほぼ同工であるが，脚部の高さがいくらか49よりも高い。

小　甕（51～59）　51・52は胴下半でふくらむタイプである。51は復原口径14.0cmで，外面にはハケ目が残り，煤が付着する。52は全体に磨滅著しく，復原口径14.2cmを測る。

53～58は，頸部内面に稜をつくり，胴部は殆んど張らずに，下端近くで屈曲して平底風の安定感のある器形につくる。53は，口径13.2cm，器高12.6cmを測り，胴部内面はヘラ削り，外面はナデている。内面と，外面底部に黒斑部がみられる。54は，口径14.1cmで，胴部外面は磨滅するが一部に細かい縦ハケが残っている。55は口径16.5cmで，胴部外面に縦ハケがみられる。56は，口縁内面から胴部外面中位まで横ナデ，以下は不整方向ナデを施す。口径16.2cmで，口縁部には煤が付着する。57は復原口径17.0cmを測り，短く外反する口縁となる。58は胴部外面に縦ハケを施し，復原口径14.8cmを測る。

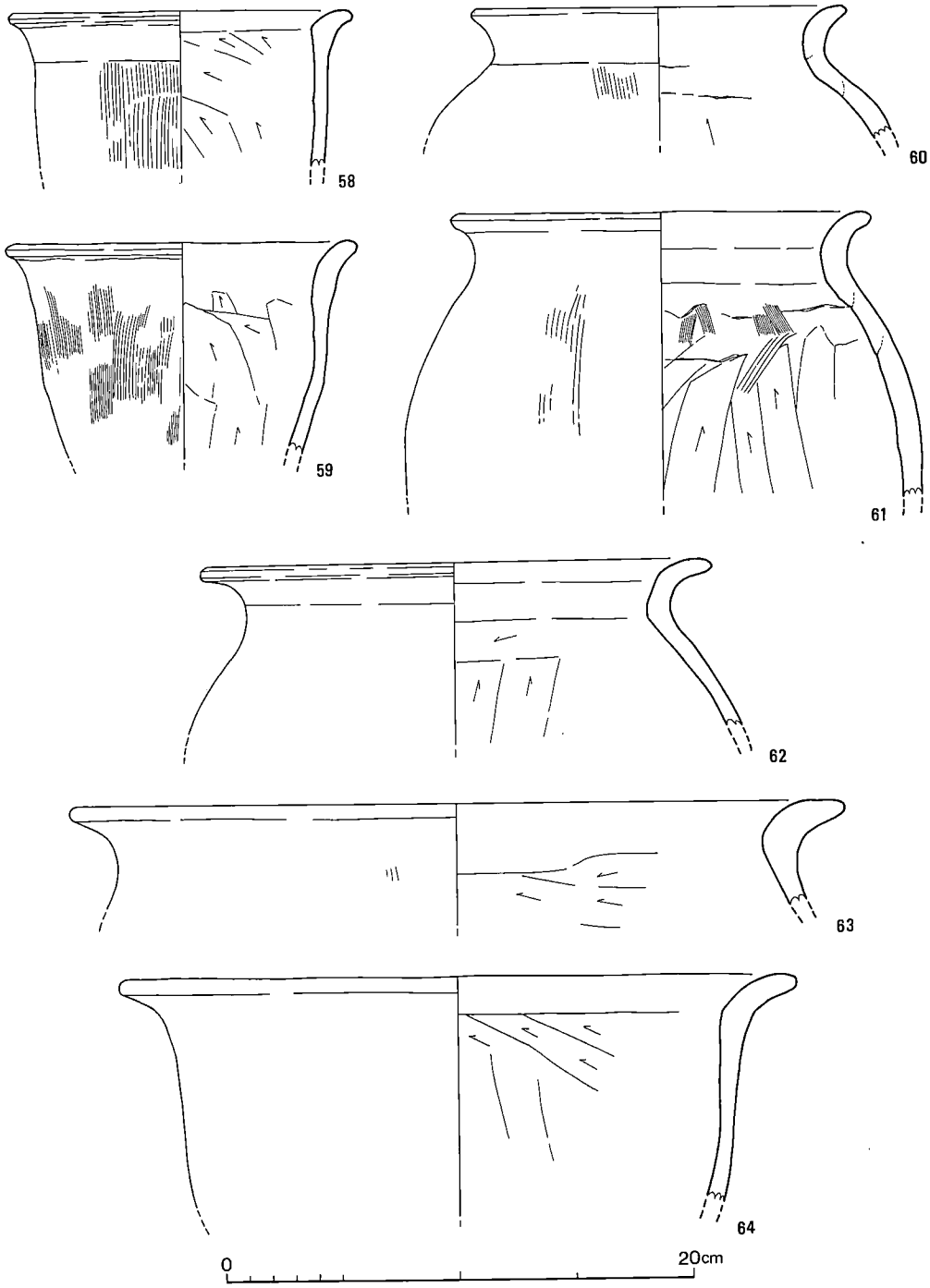
59は，頸部内面に稜をつくらず，胴部以下が全体に底部へとすぼまる形態をなす。口径14.8cmで，胴部外面は縦ハケの上を部分的にナデている。

甕（60～69）　胴の強く張る甕が殆んどであるが，64は鉢に，66は甑となると思われる。60は，復原口径16.1cmを測り，胴部外面には縦ハケが一部残る。61は，胴部内面上端に細かいハケ目がみられ，外面は磨滅するが一部に縦ハケが残る。外面には煤が付着している。62は，この土壙の底面直上出土のもので，口径21.8cmを測り，口縁は２段に屈折して開く。胴部外面は磨滅している。63は，復原口径33.0cmを測る大型品で，口頸部も部厚い。

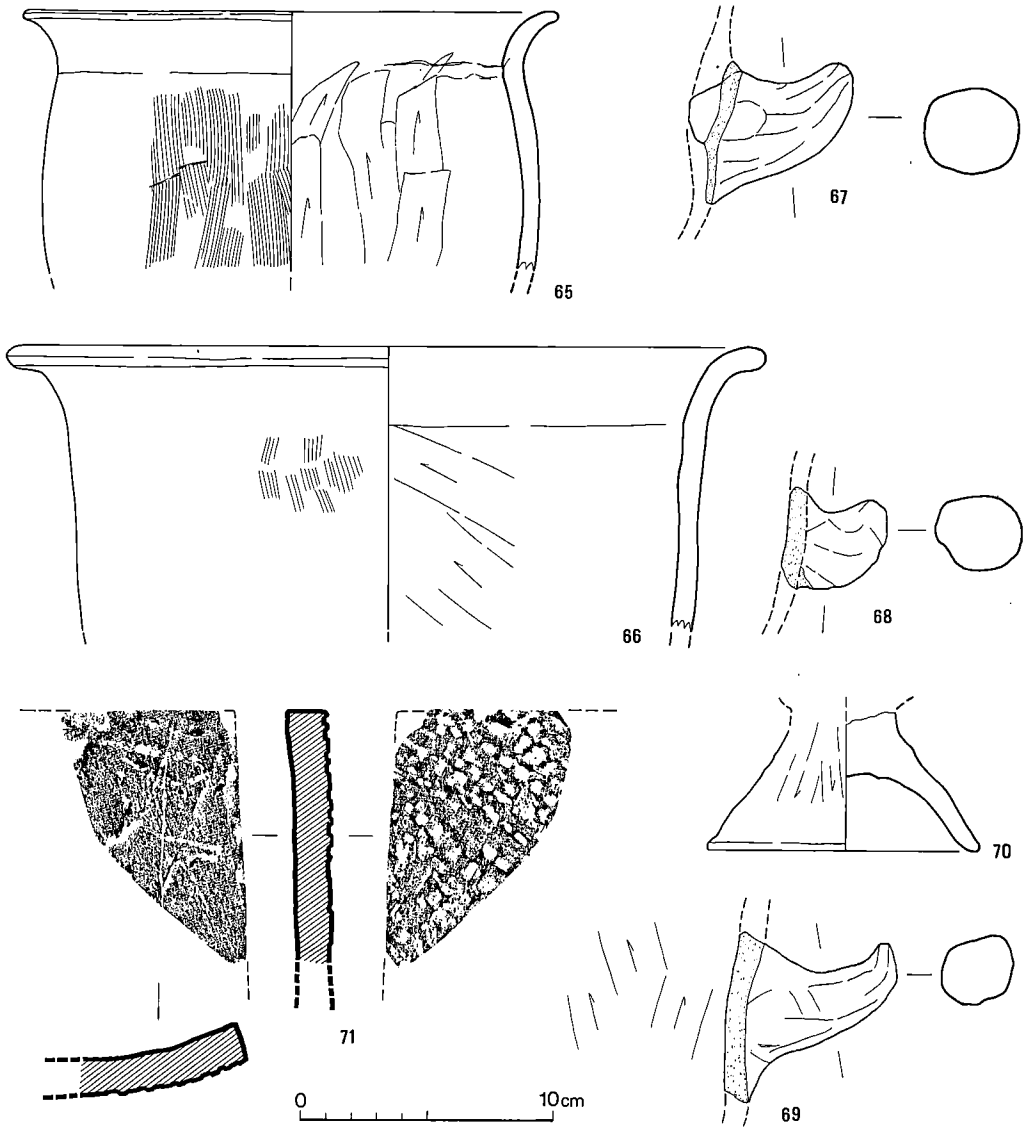
64は，復原口径29.0cmを測り，口縁が長く開き，胴部も張らないが，全体に傾斜がもっと外開きであるとすると，丸底の鉢となる可能性が強い。65は頸部で肥厚せず，胴部もゆるやかにふくらみを見せる程度である。復原口径21.0cmを測り，外面には煤が付着する。

66は，全体に直線的にすぼまる胴部から，肥厚せず長くゆるやかに外反する口縁につくる。復原口径30.0cmで，胴部外面には細かい縦ハケがみられる。甑の上半部と考えられる。

67～69は，把手部分である。67は器壁に挿入するタイプで，68は，短かく小さい。69は断面がやや扁平気味となる類である。



第231図　第20号土壙出土土器実測図（その６）(1/3)

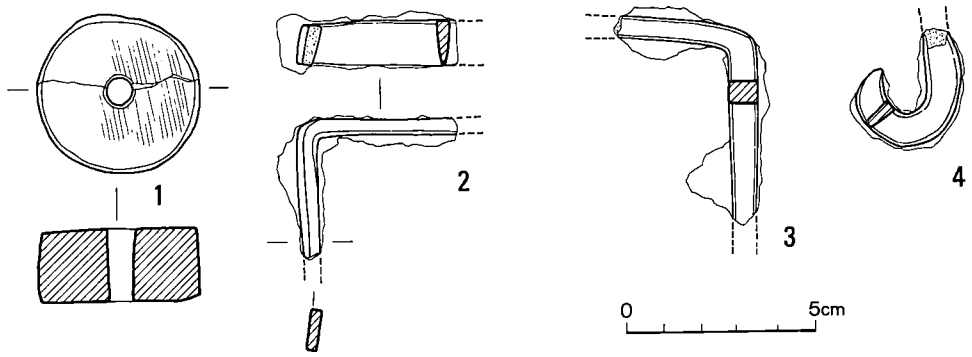


第232図　第20号土壙出土土器・瓦実測図（その７）(1/3)

脚台部（70）　脚端径10.7cmを測り，この上に厚手で椀状の器種が載るものであろう。外面上半は縦方向のヘラ削りを施す。胎土に細砂粒を多く含む。

瓦（71）　凸面に正格子目叩きを斜位に施し，凹面は布目の上を縦ナデでかなりの部分消している。胎土に粗石英粒を僅かに含み，生焼けで淡灰色を呈する。側面はヘラで切っている。

紡錘車（１）　乳白色のシルト岩製である。直径4.3×4.1cm，厚さ1.9cm，孔径0.7～0.6cmで，全面を丁寧に研磨しており，厚手円盤型の精品である。重さ37.4g となる。実は，この紡錘車



第233図　第20号土壙出土紡錘車・鉄器実測図（1/2）

の半分は，第17・18号土壙周辺の黒色土から出土したもので，それは当第20号土壙から住居群をはさんで20mほど東方の位置である。このことは，E群の中央部の住居で使用されていたものが破損したため，捨てられ，半分は東方に片方の半分は西方の各ごみ捨場に埋没することになったものと思われる。

鉄　器（2～4）　2は直角に折れ曲がったもので，片半分は片刃を持っており，片方は断面長方形をなす。幅0.7cm，厚さ0.3cmほどで，鉄刀子が曲げられて捨てられたものか，或いは直角にまがった柄を持つ，特殊な形態の工具なのか明確でない。3は角棒が直角に曲がったもので，断面は0.75×0.6cmの長方形をなす。閂の鍵かとも思われるが，用途は定かでない。4は鉤状を呈するが，銹ぶくれがひどく，今ひとつ明確さを欠く。用途は判からない。

これらの鉄器の他に，この第20号土壙からは，鉄滓が少量出土しており，付近で小鍛冶が行われたことが知れる。しかし調査範囲内ではそのような遺構は検出されなかった。

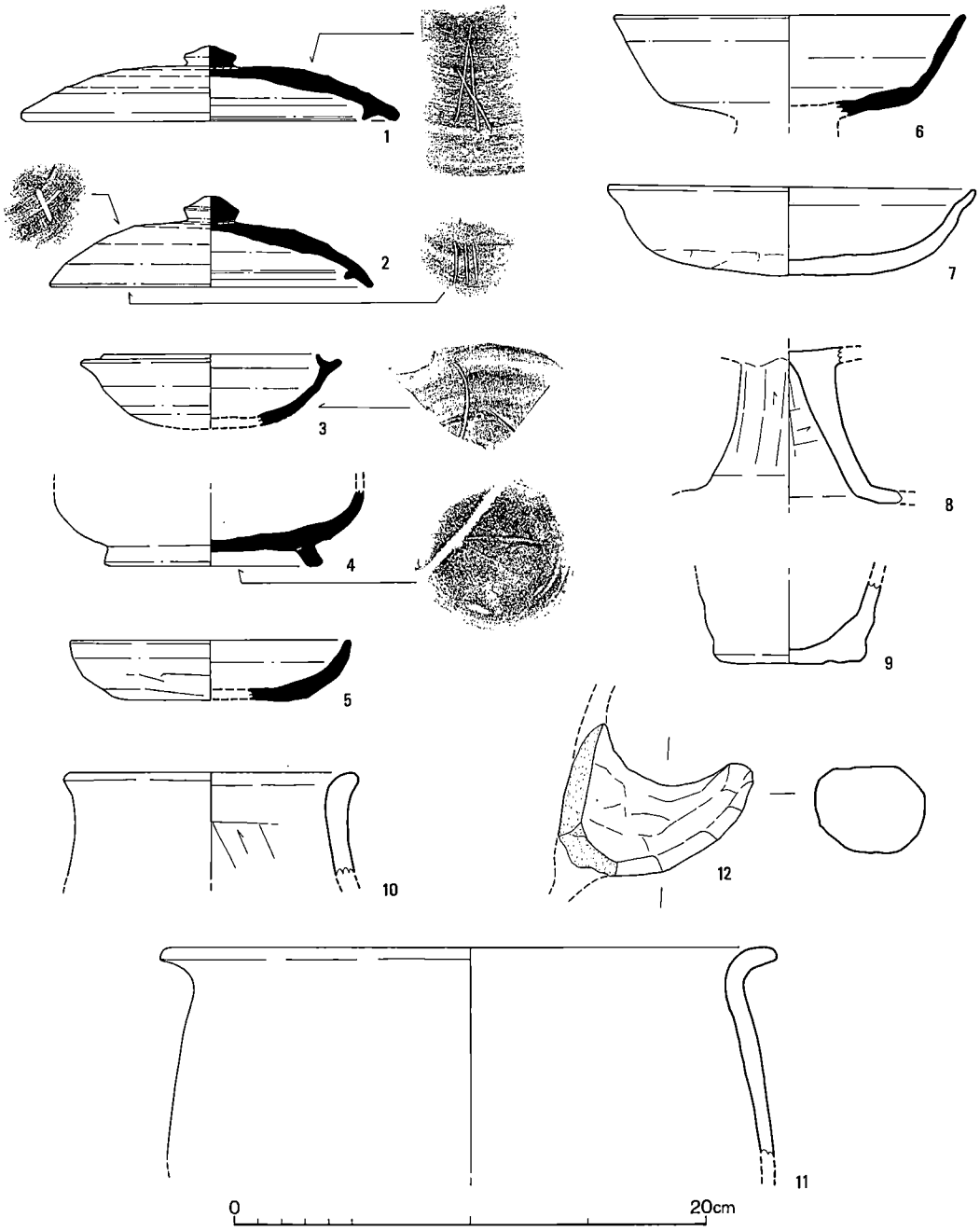
以上の第20号土壙の出土品は，他の土壙にくらべると極めて多量で，土器のみならず，鉄器・紡錘車等多様である。これらの遺物は2時期に大別できる。即ち，7世紀中頃に近い後葉と，7世紀末に近い時期とである。量的にはほぼ半々程度である。既に掘り直しの痕跡があることは指摘したが，出土遺物の上からもそれが知られた。以上のことから，第20号土壙は，7世紀中頃に近い後葉に掘削され，末頃に掘り直されて大量の一括投棄が行われたと考えられる。

（中間）

第21号土壙（図版110，第225図）

E群中央西端に位置し，第22号土壙を切る。土層断面図で見る如く，北西側で大きく掘り直しが行われている。長さ3.6m，最大幅2.5mのやや大きな土壙であるが，北側の第20号土壙と比べると出土遺物量がかなり少ないようである。

出土遺物（第234・235図）



第234図　第21号土壙出土土器実測図（1/3）

須恵器（1～6）　1・2は擬宝珠撮を付ける杯蓋で，短い返りを持つ。1は，復原受け部径14.4cm，器高3.2cmを測り，天井外面は回転ヘラ削りを施す。外面に3本線を組み合わせたヘ

ラ記号がみられる。2は，受け部径12.1cm，器高3.8cmを測る。天井外面には回転ヘラ削りを施す。胎土に細砂粒を多く含み，天井内面には短かい3本線を平行にした「川」字形のヘラ記号を施し，その外面には短かい1本沈線がみられるが，後者がヘラ記号かどうかは疑わしい。これら2点は7世紀後葉と考えられる。

3は，受け部端径9.0cmを測る杯身である。器高3cm強となろう。底外面はナデている。外面に曲線状の1本線のヘラ記号がみられる。7世紀初頭～前葉の所産で，小片で，他にこの時期の遺物もないことから，混入品と考えられる。

4は高台付杯身で，体部外面下端に回転ヘラ削り痕を残さず，横ナデ調整で仕上げている。全体に丸く立ち上がって，高台も長く外方へ踏ん張っており1・2と同時期のものである。焼成軟質である。底外面に1本線のヘラ記号を施している。

5は浅い小型杯で，口縁内外面横ナデ，以下下半は手持ちヘラ削りが施される。復原口径11.8cm，器高2.6cmを測り，胎土精良である。

6は，高杯で，復原口径14.8cmとなる。生焼けで白黄色を呈する。

土師器（7～12）　7は口縁内面で稜をつくり短く外反する特徴的な杯で，体部外面下端から底部は手持ちヘラ削りが施される。復原口径15.6cm，器高3.7cmを測る。

8は高杯脚部片で，脚柱外面は縦方向のヘラ削り，内面は横方向のヘラ削りが施されている。脚柱内部は充実しておらず，全体に古い様相が窺える。

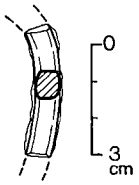
9は平底の小さな鉢形をなし，底径6.5cmを測る。底部外面には黒斑部がみられる。

10は小甕口縁で，復原口径12.5cmを測る。丸っこく短い口縁が僅かに外反し，胴部は下半でふくらみをみせるタイプである。胴部外面はナデている。

11は肥厚しない頸部から丸く外反する口縁につくり，胴部はゆるやかにふくらみをみせる。全体に磨滅著しく調整不明である。復原口径26.0cmを測る。

鉄製品（第235図）　断面が楕円形に近い鉄の棒を曲げたものである。現存長3.5cm，径0.8×0.65cmを測るが，用途不明品である。

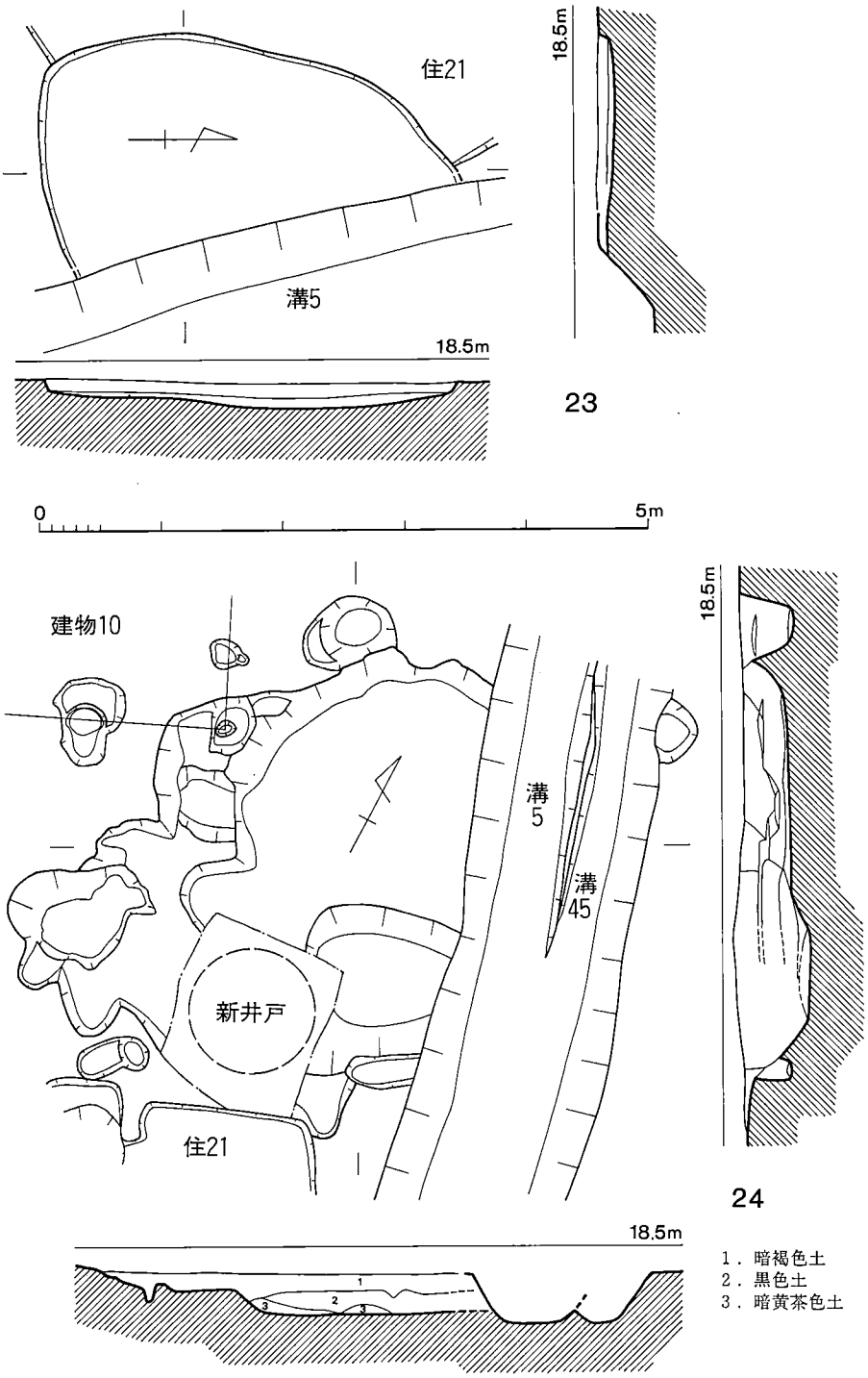
以上の出土遺物は，3が7世紀初葉の混入品として，その殆んどは7世紀の中頃に近い後半代のものであり，北隣の第20号土壙出土品の古い時期のものと符合するところである。よって，その時期に両土壙は掘削されたものと考えられる。（中間）



第235図
第21号土壙出土
鉄器実測図（1/2）

第22号土壙（図版109，第225図）

E群西端の中央に位置し，南北両側を第20・21号土壙に切られる。全容はつかめないが，幅2.0m弱の浅い土壙である。底面は凹凸著しい。埋土は黄色・赤色土粒の混ざった黒色土で，出土遺物もなく，時期は確定できない。（中間）



第236図　第23・24号土壙実測図（1/60）

第23号土壙（図版36，第236図）

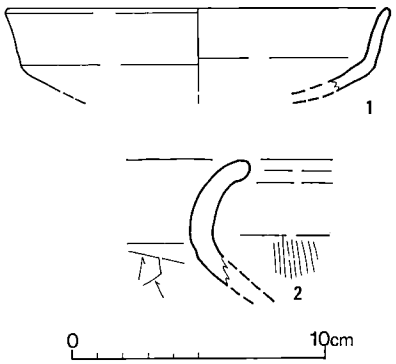
E群のやや北寄り中央に位置し，東半を近代の第５号溝に切られており，全容は明らかでない。平面形は楕円形を呈し，深さ20～25cm前後と浅く，底面は平らで，他の土壙の凹凸状態と様相を異にする。第21号住居跡の南東側を切っており，この周辺での各遺構の切り合い関係は以下の如くとなる。（古→新）

建物10 → 土壙24 → 住21 → 土壙23 → 溝５

第10号掘立柱建物は第19号掘立柱建物との関連から７世紀後葉を下限とする時期と想定され，第24号土壙は７世紀後葉の遺物が最も多いが最新の遺物は８世紀段階まで下がり，第21号住居は奈良末～平安初の土器を伴っている。以上のことから，この切り合い関係に矛盾は無さそうである。よって当第23号土壙は，奈良末～平安初期以降と考えられるのだが，残念ながら出土遺物が少なくて，この年代観の確証は得られない。

出土遺物（第237図）

１は，土師器杯で，体部中位で屈折して立ち上がり，直線的に外傾する口縁をつくる。底部は不安定な丸底となろう。復原口径15.2cmとなり，屈折部から上位は内外面ともに横ナデ，以下は内外面ともに丁寧なナデ仕上げを施している。２は，土師器甕で，張る胴部から丸く屈曲外反して口縁へと開く。口縁外端は丸くふくらむ。



第237図　第23号土壙出土土器実測図 (1/3)

これらの土器は７世紀後半代のものであるが，いずれも小片で，切り合い関係からみても掘削時期を示すものではなかろう。よって出土遺物では実証できなかったが，この第23号土壙の掘削時期は，切り合い関係の方を尊重して，奈良末以降の年代を考えておこう。

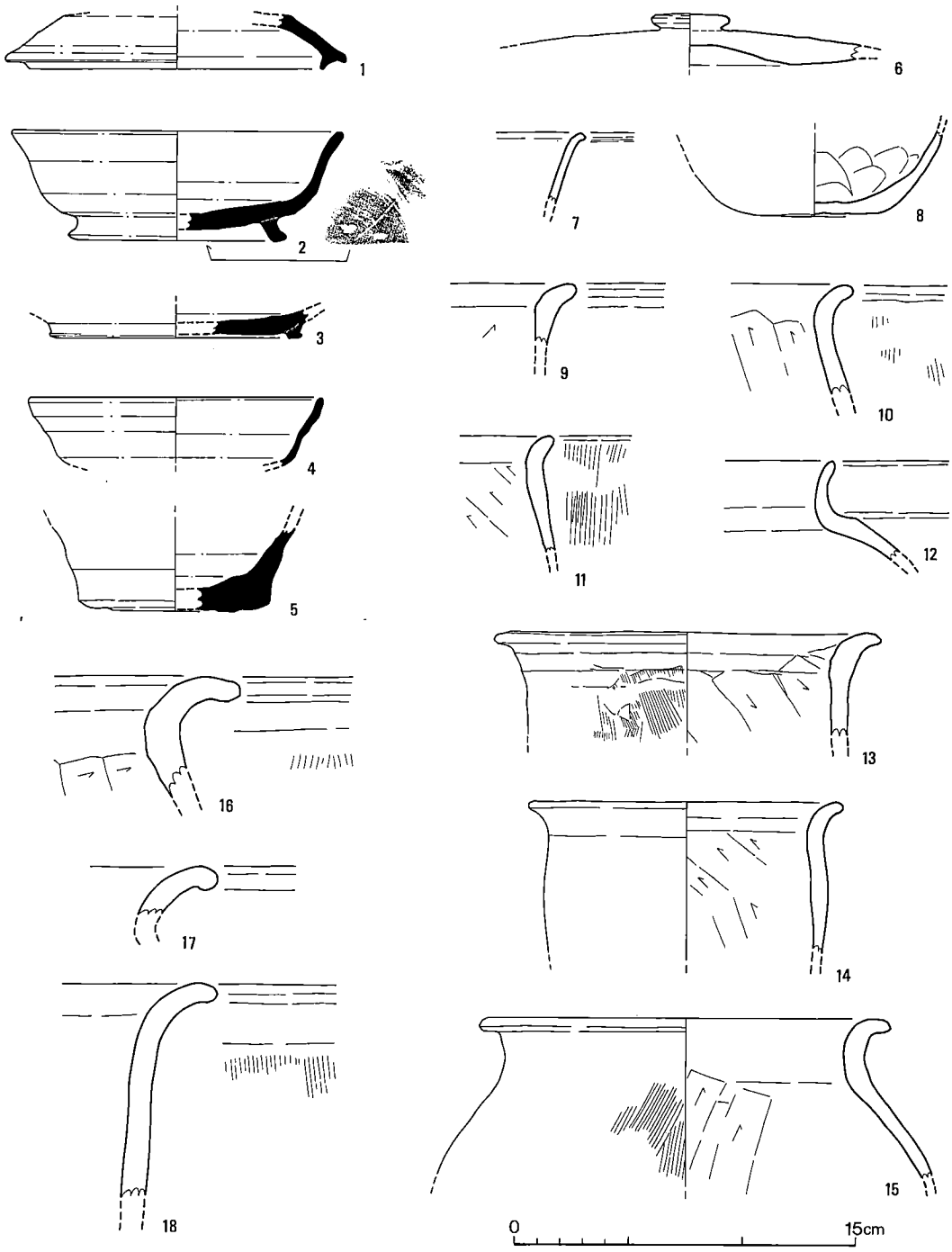
（中間）

第24号土壙（図版111，第236図）

E群の北寄り中央部に位置し，近代の第５号溝に東半を切られ，南端を第21号住居跡に切られる。また南側中央部には近時まで使用された畑灌の井戸がコンクリート製枠によって設置されていた。更に北西端では第10号掘立柱建物の南東端の柱穴を切っている。

最大長4.5mのやや大きめの土壙であるが，北側寄りには直径2.5mほどの円形深掘り部分があり，基本的にはこの部分が主体で，周縁に何回かの浅い掘り直しを行ったものである。

出土遺物（第238～240図）



第238図　第24号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)

須恵器（1～5）　1は，杯蓋で，短かい返りを付ける。天井外面は回転ヘラ削りを施す。復原口径12.8cmとなりやや軟質である。2は，高台付杯で，口径14.4cm，器高4.8cm，高台径9.5cmを測る。底部は丸味をもち，高台は長く外方へ踏ん張る形状をなす。底内面はナデツケ，他全面横ナデ調整で，底外面には1本直線のヘラ記号がみられる。胎土に細砂粒を多く含む。1・2は7世紀の中頃に近い後葉の所産である。

3は，極めて低い高台を付ける杯身片である。底面は平らで体部への屈曲部付近に高台を接合している。高台径11.0cmを測り，8世紀末前後の遺物である。

4は，薄手で復原口径13.0cmとなる杯である。体部中途で妙な屈曲をみせる異様な形態をなす。焼成堅緻で細砂粒を多く含む。7世紀後葉に中途で屈曲をみせる須恵器鉢があるが，その特徴を示す一種だとすれば，1・2と同じ7世紀後葉の所産とも考えられる。5は厚い平底の鉢で，焼成甘く白灰色を呈する。復原底径8.4cmを測る。

土師器（6～25）　6は大口径の蓋で，扁平なボタン状撮を付ける。天井外面の一部に黒斑部がみられ，調整は磨滅著しいため明瞭でない。少なくとも8世紀中頃以降の所産であろう。

7は椀形となる口縁片である。薄手で，口縁上端が小さく外反する特徴を示す。8は，やや丸底気味となる椀の底部片で，外面は丁寧なナデ，内面には指頭圧痕が残される。二次火熟を受けており，一部に煤が付着する。

9～11，13・14は小甕で，頸部であまり肥厚せず胴部にふくらみをみせるもの（10・11・14）と，頸部で肥厚して内面に稜をつくり，胴が張らないもの（9・13）などがある。11は外面の縦ハケが口縁直下まで残されている。13は，復原口径17.0cmで，内面には煤がこびりつく。14は復原口径13.7cmで，胴部外面は磨滅しており調整は不明である。これらは，いずれも胎土に細砂粒を多く含み，胴部内面はヘラ削りが施されている。

15～17・19・20は甕で，いずれも胴上半で強く張るタイプである。17は，或いは18・21と同様に甑となる可能性がある。15は復原口径18.0cmで，内面に煤が付着している。16・19は頸部で部厚く肥厚している。19の口径46.0cm，外面には煤が付着している。胴部外面は磨滅して調整不明である。20は復原口径22.0cmで，全体に磨滅しており調整は判からない。

18・21は甑の口縁と思われ，全く肥厚しない頸部からゆるやかに外反する口縁につくる。18の内面は磨滅して調整不明である。21の外面には煤が付着する。

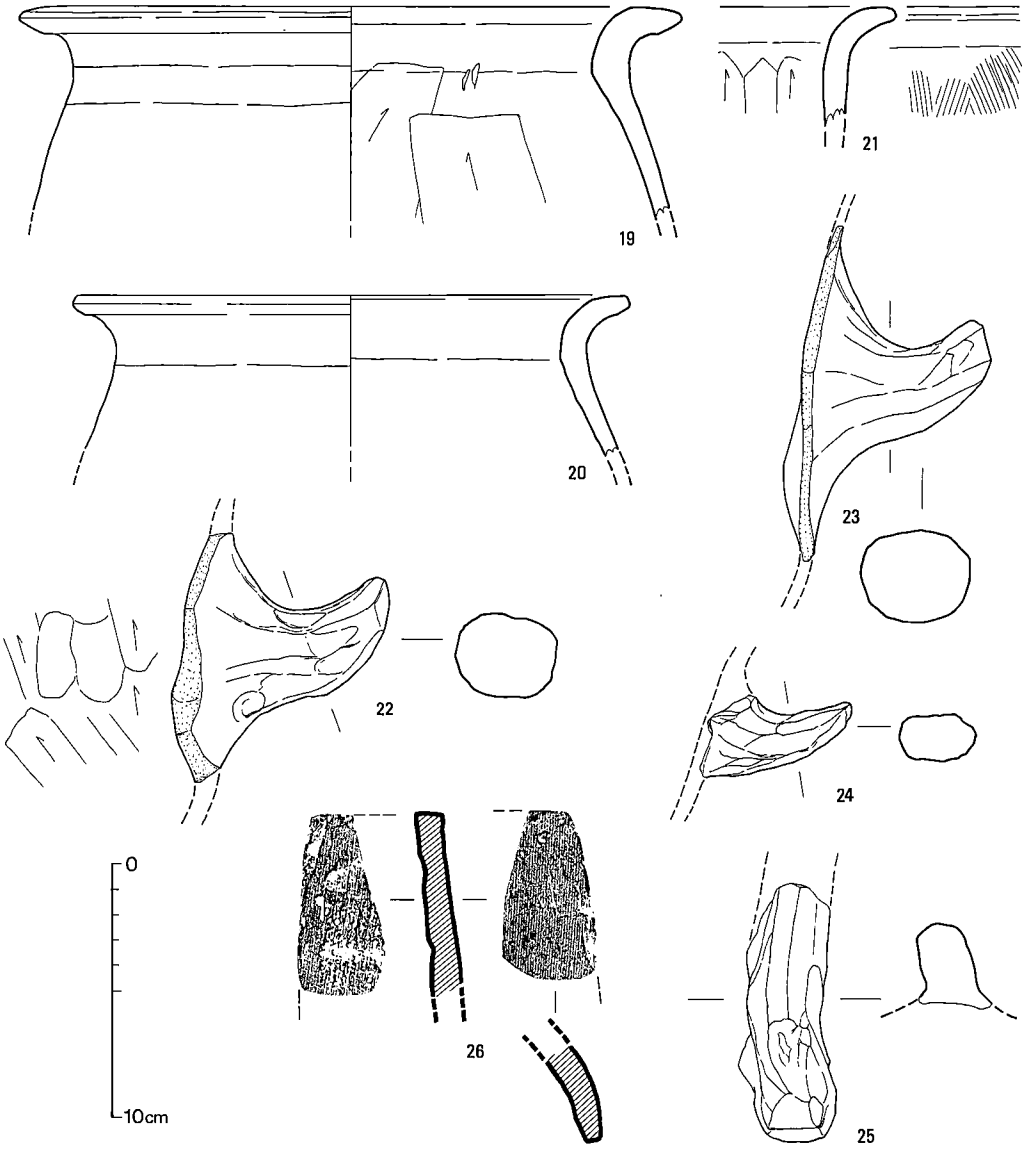
22～24は甕或いは甑の把手部分である。22・23は大きめで断面がやや円形に近いが，24は小さく断面が扁平となるタイプである。

25は，移動式土製カマドの貼り付け廂の下端部片である。指頭による強いナデが器表全面にみられる。下端部は黒く変色している。貼り付け廂のタイプは一般に古い様相を示すものであり，これは7世紀後半代のものと考えられる。

瓦（26）　丸瓦の小片である。凸面は板状工具による縦位の擦過が施され，凹面は布目が明瞭

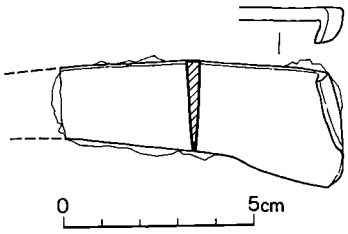
で，3.3cm間隔で横位のタガ痕がみられる。側面と凹面側端にはヘラ削りが施される。生焼けで淡茶色を呈する。

鉄　鎌（第240図）　現存長7.7cm，最大幅3.0cm，厚さ0.3cmを測る。基部をわずかに折り曲げたもので，小型の鉄鎌となろう。



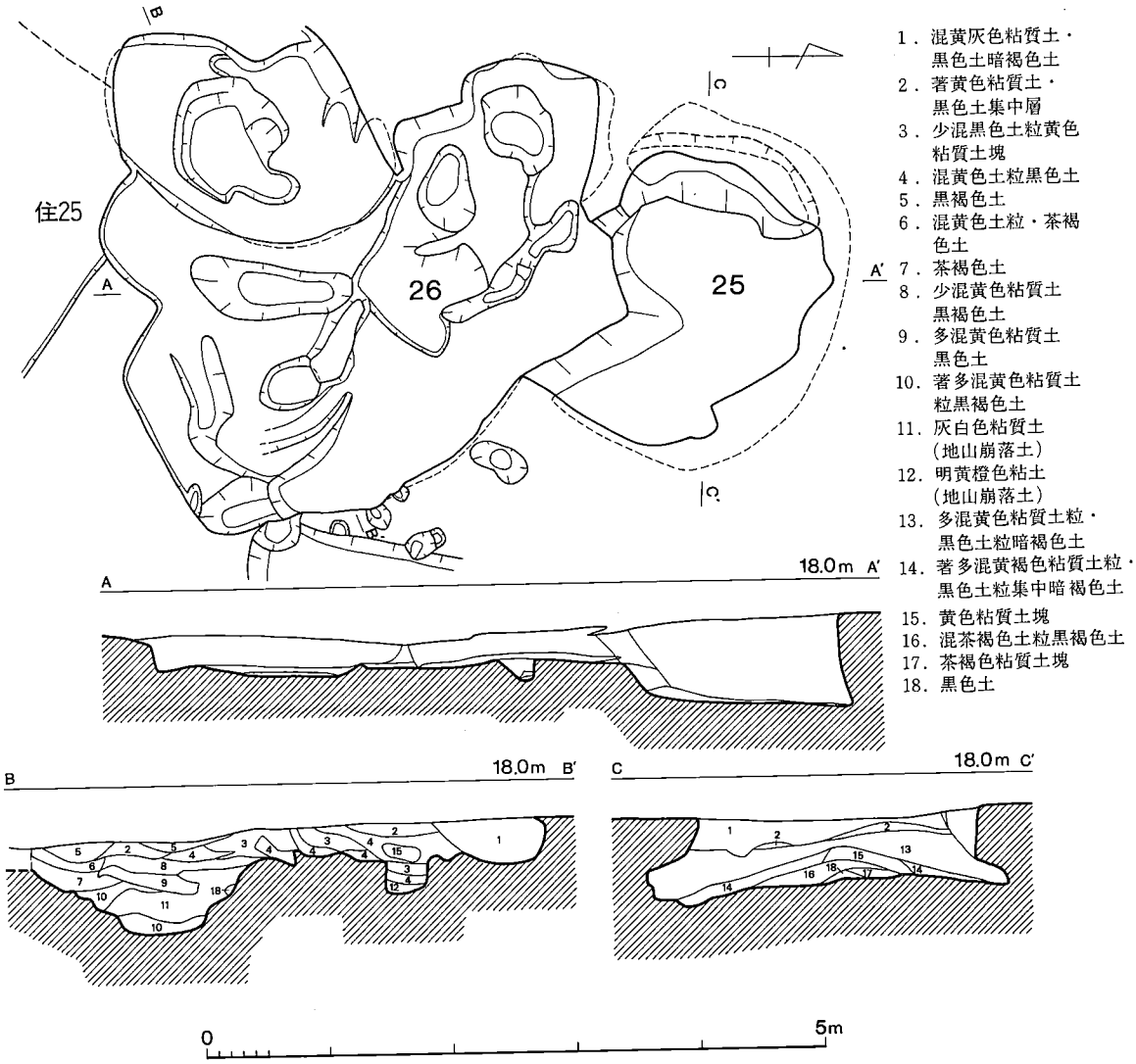
第239図　第24号土壙出土土器・瓦実測図（その２）(1/3)

以上の出土遺物は，７世紀後葉代が最も多く，８世紀後半～末の時期のものも少量みられる。土壙の何回かの掘り直しの状況から，各時期の遺物が混在することはもっともであり，この第24号土壙も上記の各年代毎に掘り直して使用されたものと思われる。（中間）



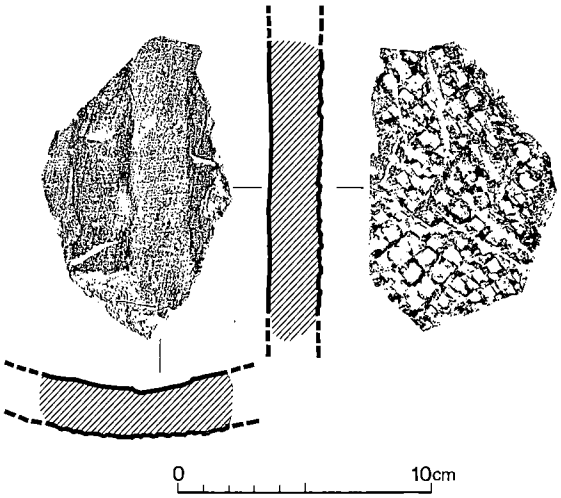
第240図　第24号土壙出土鉄器実測図 (1/2)

第25号土壙（図版111，第241図）



第241図　第25・26号土壙実測図（1/60）

調査区北西端近くに位置し，第26号土壙と一部重複して検出した。土層観察では，最上層の１層が第26号土壙の南東側遺構まで延びて切っており，本土壙が第26号土壙よりも新しいと考えられる。平面形は出入りが著しいが略長方形を呈し，南側を除く三壁は上端より床面下端が拡がり，断面袋状を呈する。検出面での上端は180～237cm，床面113～296cmを測り，深さ60～70cmを残す。西側壁寄りに略楕円形の浅い落ち込みが検出でき，長さ165cm・幅50～60cm・深さ４～５cmを測る。(森山)



第242図　第25号土壙出土瓦実測図（1/3）

出土遺物（第242図）

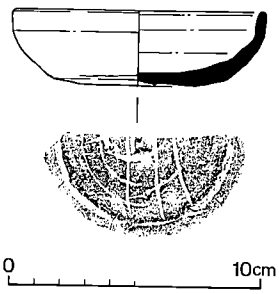
平瓦１点である。凸面に正格子叩きを施し，凹面に幅2.1cmの模骨圧痕がみられ，高い部分が縦ナデされている。焼成やや軟質で灰白色を呈する。

この１点で土壙の掘削時期を決定することはできないが，南側の第26号土壙と連続して使用されたものと考えられる。（中間）

第26号土壙（図版111，第241図）

第25号土壙の南側で重複して検出した。南側では第25号住居跡を切っている。調査時は同一の遺構として扱ったが，大きく３つの遺構の切り合いと考えられる。

その一は北西側に位置し，長軸方向を北西～南東に取る略長方形の遺構である。検出面での平面形は不定形であるが，下面では南側から東側にかけて長方形を呈し，浅いながらも２～５cmの深さを残している。北西側に行くに従い高くなり，南東側との差約12cmを測る。中央および北西側にピット状の落ち込み２個が検出されたが，床面からの深さ２～３cmと浅いものである。北東側には長軸に平行して長さ140cm，幅13～27cmの溝状の落ち込みが走る。下面での状況から，長さ約260cm・幅約130cmを測る遺構であり，検出面からの深さは20～26cmを残している。



第243図　第26号土壙出土土器実測図（1/3）

その二は南西側に位置し，長軸方向を北東～南西に取る略楕円形の遺構である。長さ234cm・幅130～170cmを測る。床面は壁

側から中央に行くに従い低くなり，中央部では更に深さ約20cmの落ち込みが検出された。

その三は南東側に位置する遺構である。土層観察において把握できたものであり，南西側の遺構を切っている。下面での溝状の落ち込みなどからして，長さ170cm以上・幅約120cmを測る，東西方向に長軸を取る略方形の遺構かと考える。（森山）

出土遺物（第243図）

須恵器杯身１点である。口径10.1cm，器高は2.9cmとなる。底部外面はヘラ切り後に部分的にナデている。３本平行線とその直角方向の１直線とを組み合わせたヘラ記号が施されている。細砂粒を多く含む。

この土器は７世紀中葉のものであるが，これがこの第26号土壙の掘削当初の時期を示すものとは判断できない。第25号住居跡を切っているが，住居の方が無遺物で年代が確定できないため，この土壙の上限はわからない。一応，７世紀中葉の時期にも使用された土壙である，とだけ記しておこう。（中間）

第30号土壙（図版70，第244図）

調査区西端近く，第58号住居跡の南側に位置している。第57号土壙を切って，かつ第５号掘立柱建物に切られて検出された。平面形はやや長めの円形を呈し，長径165cm・短径145cmを測り，深さ20cmの断面皿状を呈する。北側壁は２個のピットによって切られている。床面南側より小ピットが検出された。（森山）

第31号土壙（図版70，第244図）

第30号土壙の東側に位置し，第57号土壙，第31・58号住居跡を切って検出された。平面形はやや長めの円形を呈し，長径235cm・短径200cmを測り，深さ約20cmの平らな床面を成す。床面中央部には段を有する不定形な落ち込みがあり，長径175cm・短径135cm・深さ23cmを測る。（森山）

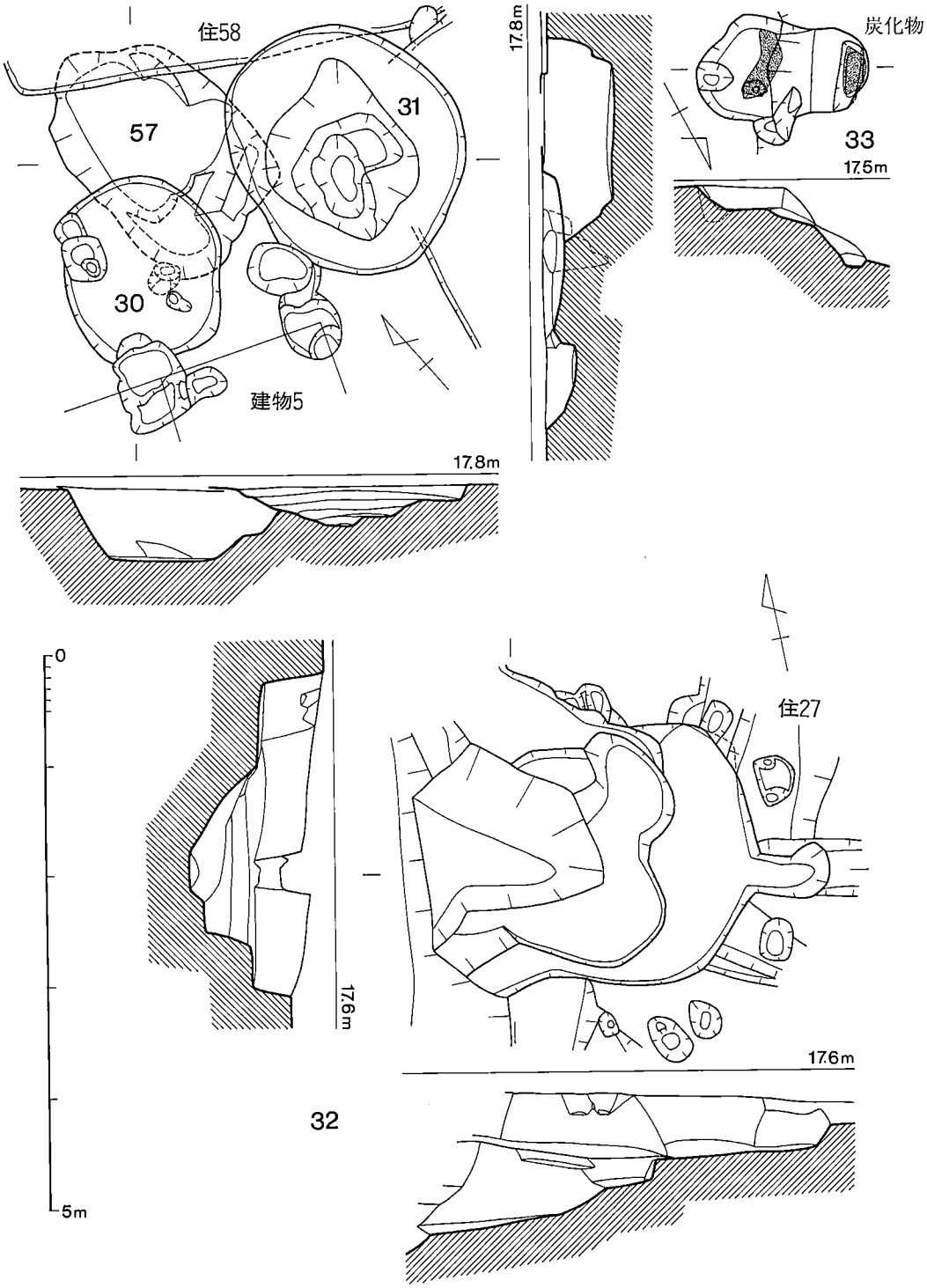
第32号土壙（図版41，第244図）

調査区北西端部に位置し，第27号住居跡を切って，かつ第34号溝に切られて検出された。断面では３段の床面を有しており，あるいは３つの遺構の重複かとも考えられるが，調査においては把握し得ていない。西側は薬師堂遺跡谷部分の段落ちで切られているため，遺構の全形は不明である。

１段目は南北232cm，東西225cm以上の方形を呈し，深さ40～55cmを測る。

２段目は１段目床面よりの深さ18～40cmを測り，南側に行くに従い深くなっている。平面形は瓢形に近く，長径210cmを測る。

３段目は西端側に位置する。平面形は台形を呈し，短辺90cm・長辺150cmを測るが，長さは



第244図　第30～33・57号土壙実測図（1/60）

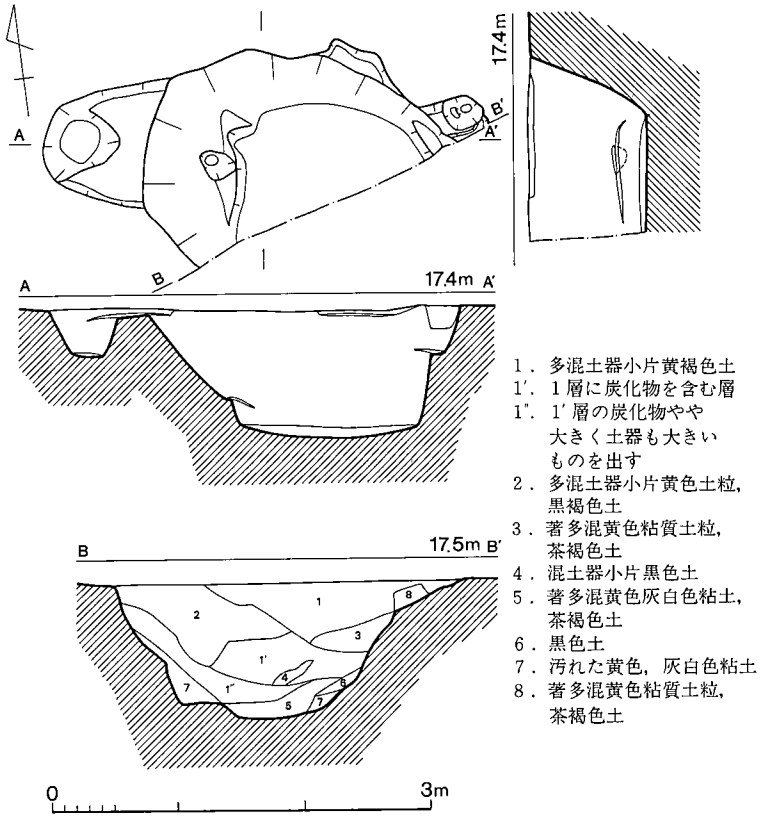
西側を切られているため不明である。(森山)

第33号土壙（図版112，第244図）

調査区西端のほぼ中央で検出した。西側は谷部側から切られており，全形は不明である。幅95cm・長さ65cm以上の方形を呈するものと考えられる。深さ20cm前後の床面には，長さ約60cm・幅約20cmの範囲に炭化物の集中がみられた。さらに，上面より60～65cm下の西側斜面にも長さ約60cm・幅20～25cm・深さ約10cmの溝状の落ち込みがあり，その中に炭化物の集中がみられた。この２ケ所の炭化物集中から，同じ性格の遺構と考えられるが，全く同一遺構とする確証はない。（森山）

第36号土壙（図版112，第245図）

調査区南西隅近くに位置している。南側は側溝工事によって切られており，北側半分のみ検出できた。検出面では東西240cm・南北145cm以上を測り，平面形円形を呈すると思われる。しかし，壁斜面途中で部分的に段を持ち，床面は東西142cm・南北93cmの方形を呈している。この検出面と床面における平面形の違いは当初からのものではなく，方形遺構埋没後（あるいは埋没途中）に再度拡張掘削されたものと考えられる。このことは，土層観察からも肯首でき，下層の６・７層を切って掘られた落ち込みの堆積土１～４層に遺物が集中して出土することから上層



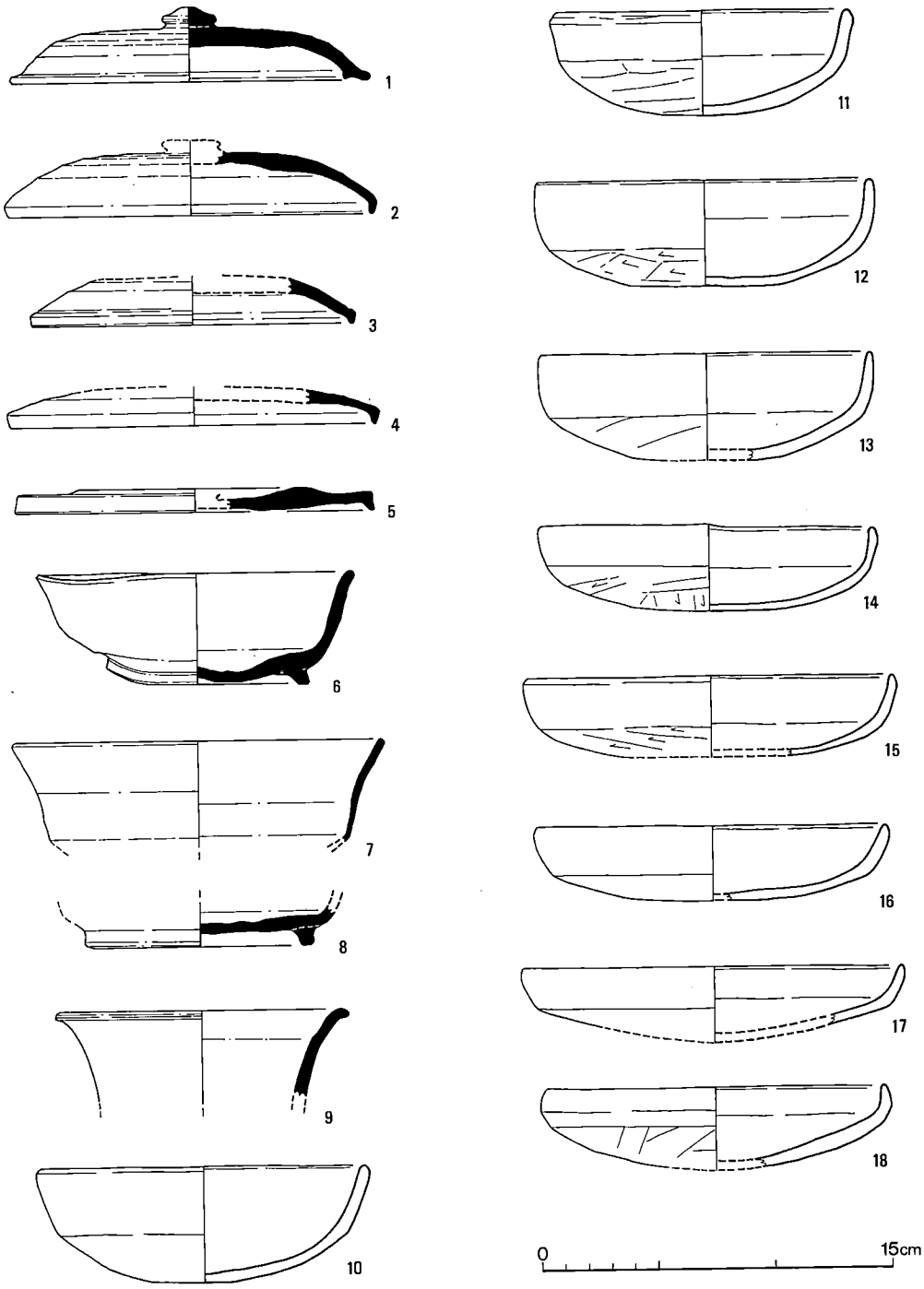
第245図　第36号土壙実測図（1/60）

の落ち込みを土器廃棄の場として考えたい。　（森山）

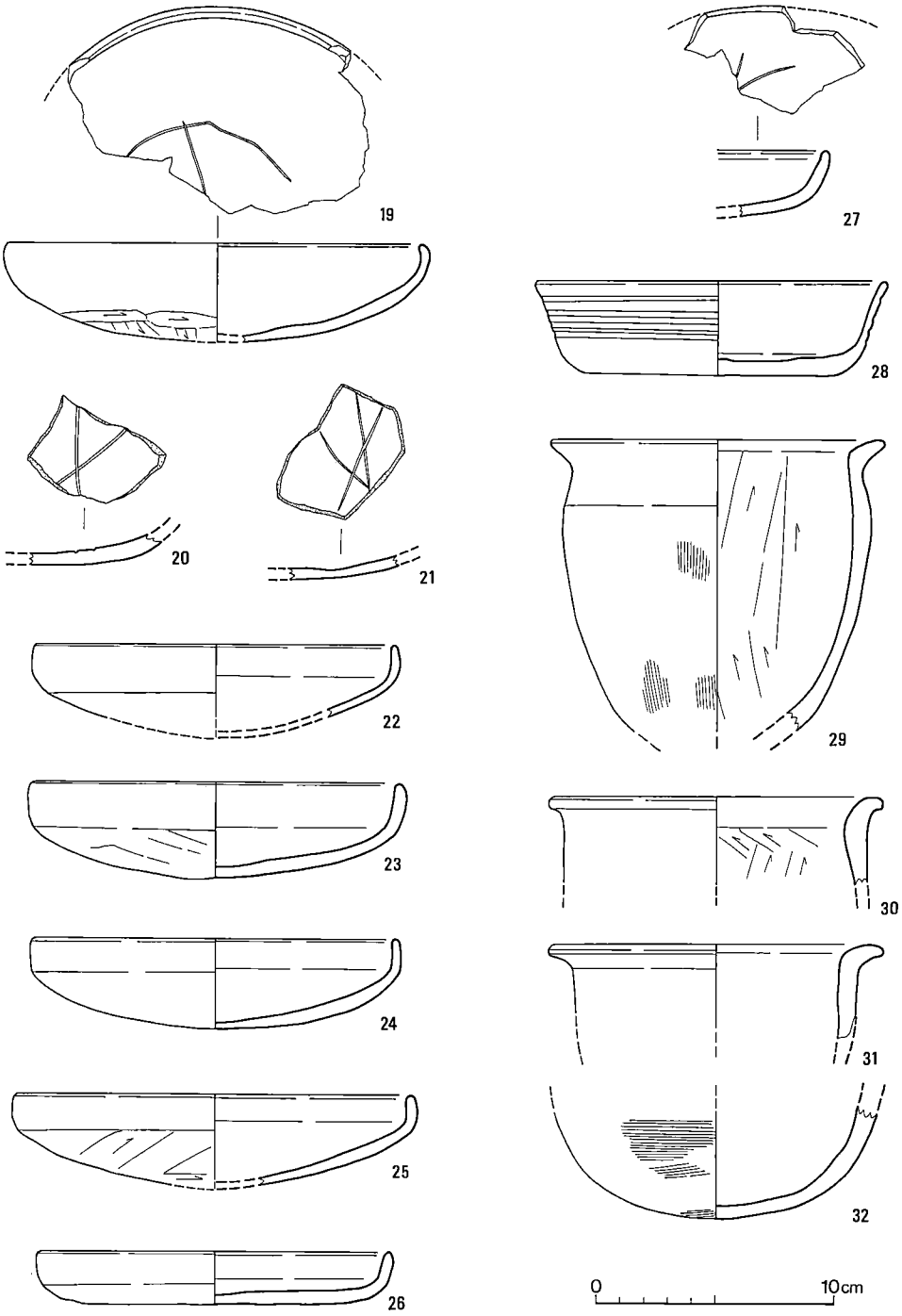
出土遺物（第246～250図）

須恵器（1～9）　1～5は杯蓋で，返りを有するものと鳥嘴状口縁をなすものがある。1は，返り端部径13.2cm，器高3.2cmを測る。天井外面には回転ヘラ削りを施す。胎土に細砂粒を多く含み，撮はまだしっかりしている。2は口径16cmで，天井外面に回転ヘラ削り痕を残し，器高が高い。3は口縁が短かく，口径14cmを測る。4の口縁部はシャープで，口径16cmとなる。5は口径15.4cmを測り，天井外面は横ナデを施している。6～8は杯身で，6は焼き歪み著しく，口径13.7cm，器高4.8cmを測る。底外面は回転ヘラ削りのままとなる。7は薄手で，鉢となるもので，口径16cmを測る。8は高台径9.8cmを測り，底外面は未調整である。9は長頸壺口縁と思われる。以上のうち，1・2・7は7世紀後葉段階，3～6・8は7世紀末～8世紀初頭段階のものである。

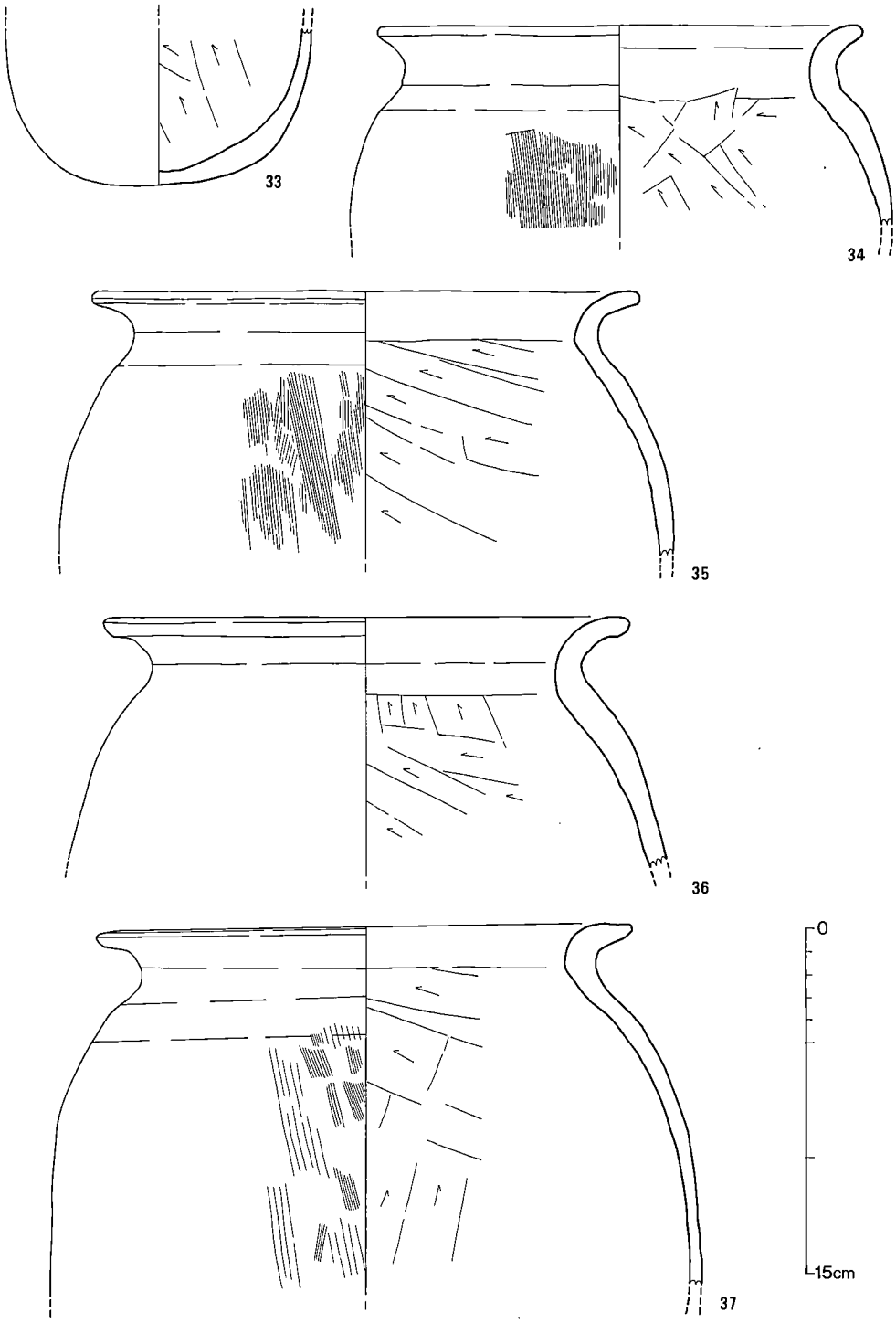
土師器（10～42）　10～28は杯で各種ある。10は体部中途で外面に稜をつくり丸底となるタイプで，7世紀中葉頃の特徴をよく残している。口径14.3cm，器高4.9cmを測り，全体に磨滅著しく調整不明である。11は体部中途で折れて丸底へと続くもので，口径12.4cm，器高4.5cmとなる。底外面は手持ちヘラ削りが施される。12は，口径14.2cm，器高4.6cmを測り，やや内湾気味に立ち上がる口縁となる。体部外面下半から底部は手持ちヘラ削りを施す。13は，口径14.1cm，器高4.6cmを測り，外面下半は手持ちヘラ削りと思われる。14は，口径14.6cm，器高3.8cmを測り，体部外面下半は手持ちヘラ削りが施される。15は，口径15.6cmを測り，体部外面は手持ちヘラ削りを施す。16は，口縁がやや外傾するもので，口径15cm，器高3.2cmとなる。体部上半の内外面は横ナデ，底部内面はナデツケ，外面は手持ちヘラ削りと思われる。17は，口径16.1cmを測り，底外面は手持ちヘラ削りを施す。18は口径14.3cmで，短かく内湾する口縁となる。底外面は手持ちヘラ削りを施す。19は，体部中途で屈折せずに，全体に丸く広がり，口縁部で小さく内湾する類である。口径17.8cm，器高4.1cmを測る。底内面には細いヘラ描沈線が施される。体部上半の内外面は横ナデ，底内面は丁寧なナデ，底外面は手持ちヘラ削りが施される。20・21は，19と同様の器種の内面にヘラ描沈線文を施したものである。これら沈線文を施すものはいずれも胎土は精選されている。22は，薄手で口径15.2cmを測る。内外面ともに磨滅している。23は，口径15.9cm，器高4.1cmを測り，底部外面は手持ちヘラ削りと思われる。24は，口径15.6cm，器高3.9cmで，口縁部が短かく，ほぼ直立に立ち上がるタイプである。内外面ともに磨滅著しい。25は，口径16.5cmで，底外面は手持ちヘラ削りを施す。26は，浅い皿状の器形で，口径14.6cm，器高2.3cmを測る。内外面ともに磨滅して調整は不明である。27は，口唇内側がわずかにへこむ特徴を示し，8世紀代にかかるものと思われる。底外面は手持ちのヘラ削りを施す。底内面には細いヘラ描沈線文が施されている。28は，口径14.8cm，器高4cmで，体部内外面横ナデ，底内面は丁寧なナデ，底外面の中央部分のみ丁寧なナデが施されてい



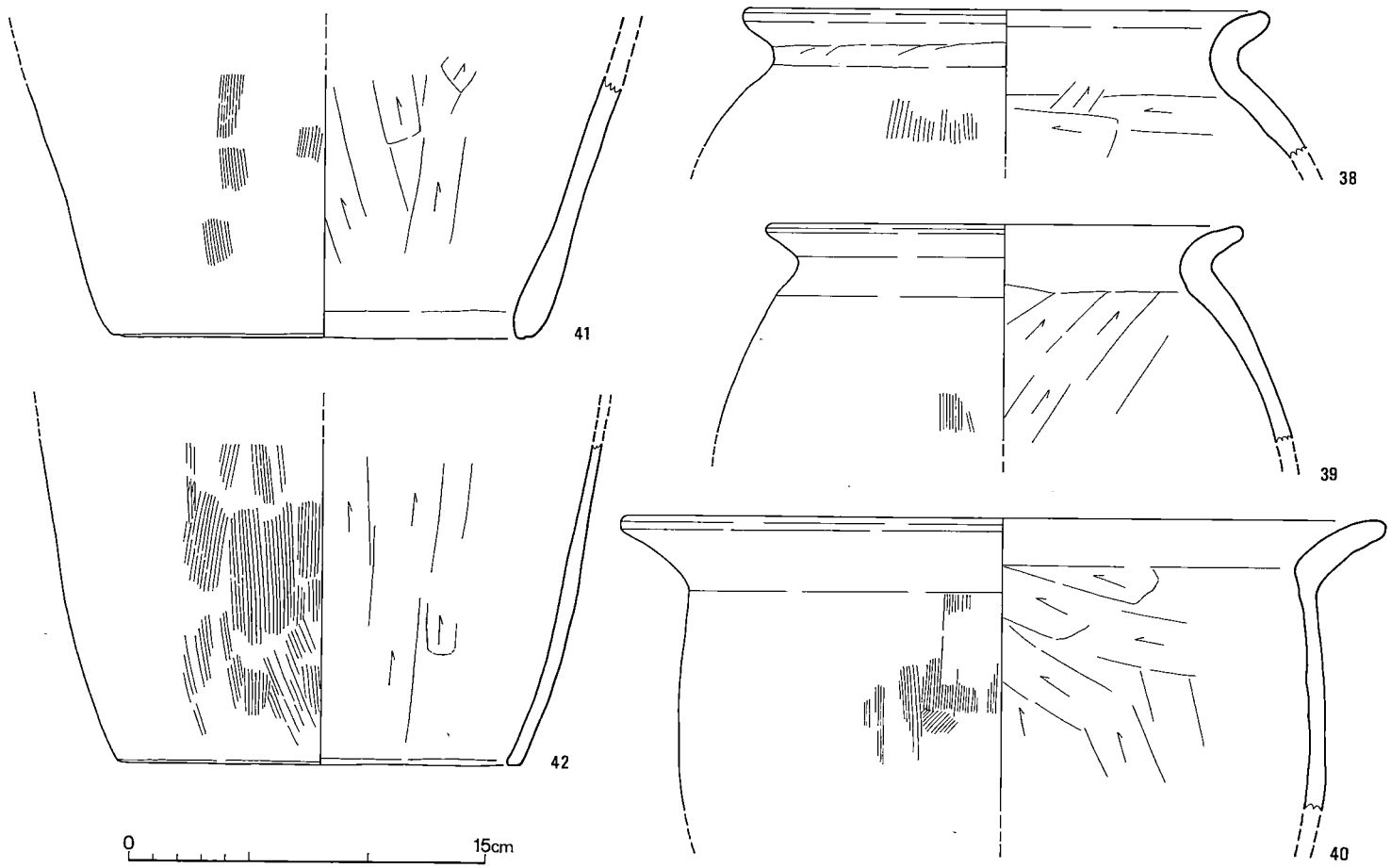
第246図　第36号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)



第247図　第36号土壙出土土器実測図（その２）(1/3)



第248図　第36号土壙出土土器実測図（その３）(1/3)



第249図　第36号土壙出土土器実測図（その４）(1/3)

る。須恵器模倣の器形で，８世紀まで下がるものと考えられる。

29～33は小甕で，29は復原口径14cmを測り，頸部で折れて外方へ短かく開く口縁となる。胴は張らず，胎土には細砂粒を多く含む。30は，口径14cmで，胴は張らないが頸部で肥厚して内面に稜をつくる。胴部外面は磨滅している。31は，頸部で折れて強く外方へ開く口縁となる。口径14cmで，内外面とも磨滅しており調整は不明である。32は，底部で完全に丸味をもつ。内面はナデ，外面はハケ目の上を部分的にナデている。33も丸底片で，底外面はナデ，胴中位は磨滅している。内面はヘラ削り上げが施されている。

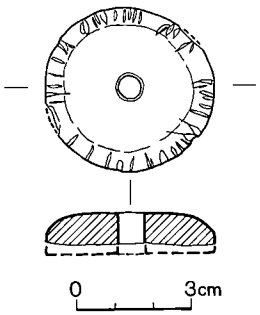
34～40は甕で，各種みられる。34は，口径21cmで，肩部で張り，丸く反転して開く口縁となる。口縁も以下のものと比べると短かめで，やや小ぶりの類となろう。35は，口径23.8cmを測り，胴が強く張り，頸部内面に稜をつくる。36は，口径22.8cmを測り，外面は磨滅している。口頸部は２段に折れるようにして開く類である。37は，肩が張り，頸部から丸く反転して開く口縁となる。胴部外面には粗いハケ目の後に細かいハケ目を施している。口径23.2cm，胴部最大径28cmを測る。38は，口径22cmを測り，頸部から２段に折れて開くような類であるが，口縁は短かめで端部は丸くおさめている。39は，38と同類の口縁で，口径20cmを測る。40は，これのみ胴があまり張らないタイプで，胴部の器壁に対して口頸部が厚く，直線的に大きく開く口縁となる。復原口径32cmを測る。

41・42は甑底部で，41は底径17.7cmを測る。胴部下半から底部へかけて，直線的にすぼまり，端部は厚くなる。42は全体に薄手で，底径17cmを測る。底下端は内側へすぼまり気味となる。端部内外面は横ナデを施す。

紡錘車（第250図）　白緑～灰色をなす雲母片岩製で，直径4.4cm，現存厚さ0.8cm，孔径0.7cmを測る。裏面は剝離している。上面縁辺は面取り状に斜面をつくり，そこから側面にかけて縦位の刻みが多く施されている。

以上の出土遺物は，小さな土壙にしては多量で，かなり一括して投棄されたものと考えられる。時期的には７世紀後葉のものが圧倒的に多く，ごく僅かに７世紀中葉のものがあり，また８世紀にかかるものも僅かにみられる。このことから，この第36号土壙は７世紀後葉期に掘削されて，大量の土器が一括投棄されて，その中に古いものが少し混ざっていたものと考えられる。新しいものはその後の完全に埋没するまでの間に混入したものであろう。

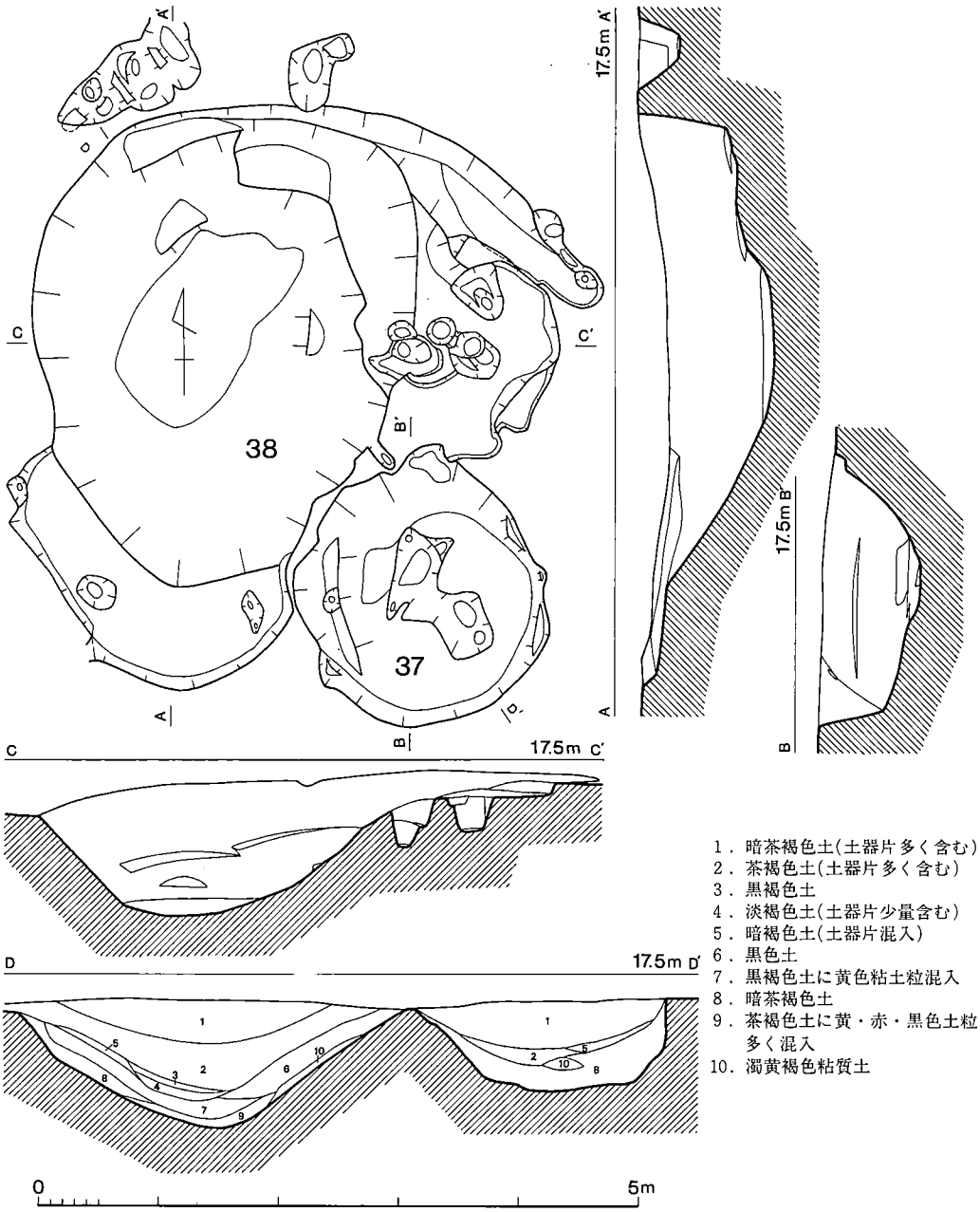
（中間）



第250図　第36号土壙出土紡錘車実測図（1/2）

第37号土壙（図版113，第251図）

第36号土壙の北側で検出したものである。平面形は円形を呈し，南北228cm・東西209cm・深さ55～70cmを測る。西側に長さ115cm・幅約10cmの段を有し，床面中央および南東寄りに深さ



第251図　第37・38号土壙実測図（1/60）

10cm前後のピット2個が検出された。土層観察では，8層（暗茶褐色土）が中程まで堆積した後，土器片を多く出土した1（暗茶褐色土）・2（茶褐色土）・5（暗褐色土）が堆積している。このことは本土壙は，その堆積途中において土器廃棄の場として使用されたことが窺える。しかし，その際改めて掘り直したものかどうか明確にし得ない。（森山）

出土遺物（第252～254図）

須恵器（1～9）　1～4は杯蓋で，内面に短かい返りを有するものと，鳥嘴状口縁となるものとがある。1は天井外面をヘラ削りし，返り端部径11.4cmを測る。2は，返り端部径12.4cmとなる。3は，低い撮を付けて，天井外面には回転ヘラ削りを施している。口径16.5cm，器高3.1cmを測る。4は，口径16.1cmとなる。

5～7は杯身で，5はやや低く直立する高台を付ける。底外面はナデており，高台径11.1cmを測る。6は，外方に強く踏ん張る高台を付ける類である。高台径9.1cmを測る。7は，黄灰色をなす生焼け品で，口径17.8cm，器高4.4cmを測る。体部外面下半から底外面は回転ヘラ削りを施している。わずかに内湾気味となる大型の器種である。

8は，壺類の底部で，胴部内外面は横ナデ，底部内面はナデ，外面は回転ヘラ削りを施している。薄手で不安定な丸底となる。9は高杯脚部で，脚端径9.6cmを測る。端部は鳥嘴状をなし，内面にはT字状のヘラ記号が施されている。脚の低いタイプとなる。

土師器（10～22）　10～14は杯で，各種みられる。10は，口縁部が短かく内湾する器形で，口径14.2cmとなる。内外面ともに磨滅している。11は，体部下半で屈折し，口縁は外方へ開くタイプである。口径17cmを測り，底部は手持ちヘラ削りを施す。12は，口径15cmで，浅い皿状の器形となる。全体に磨滅しており，調整不明である。13は，胎土精良の土師質焼成品で，全体に磨滅著しく調整不明であるが，高台の作りは須恵器的ではない。14は，口径14.3cm，器高2.8cmを測り，直線的に開く体部となる。

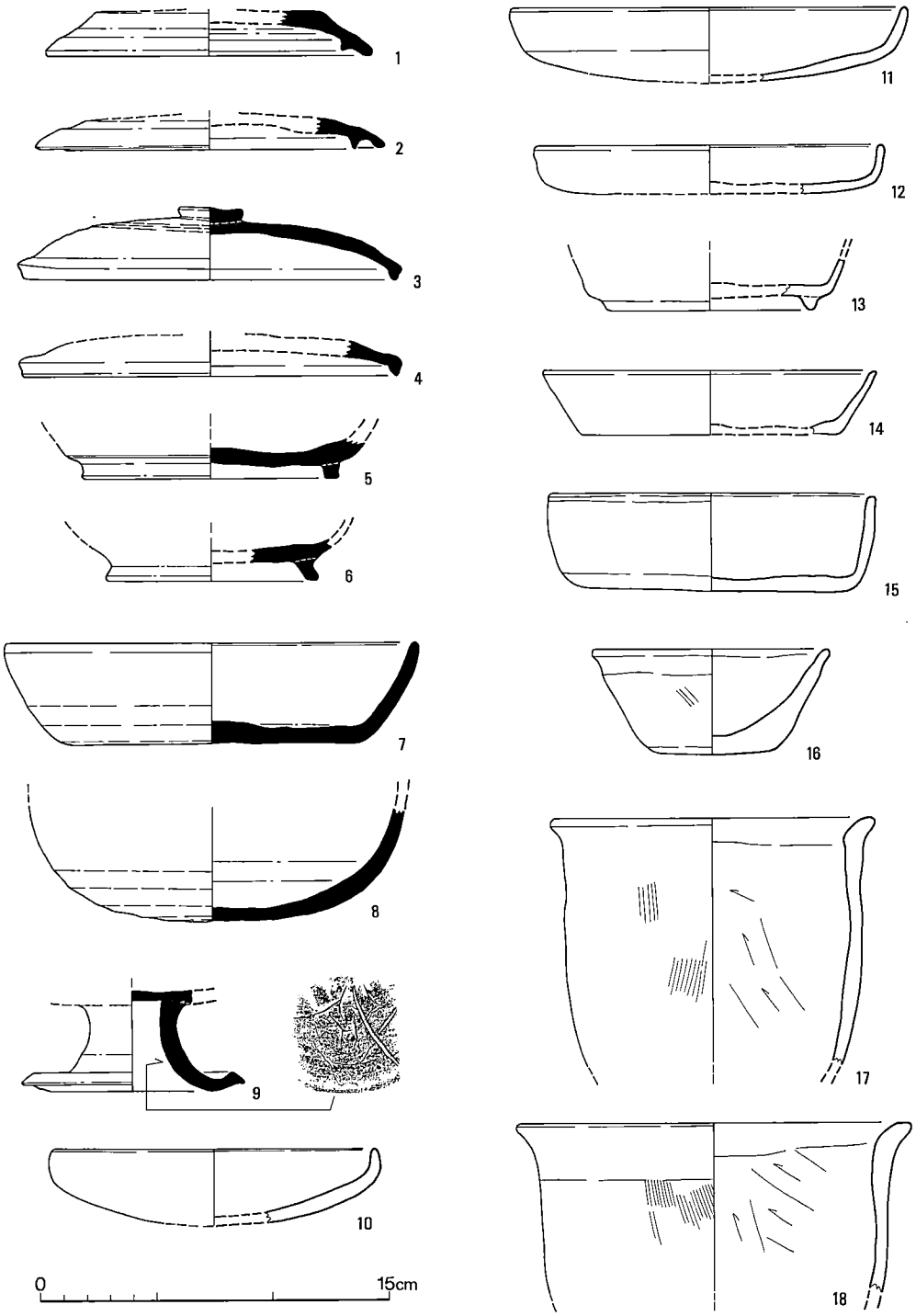
15は，天地逆となり，短頸壺の蓋となる可能性が強い。口径14.1cm，器高4.2cmを測り，外面は磨滅して調整不明である。16は，小さな鉢状の小型品で，口径10.3cm，器高4.5cmを測る。口縁内外面は横ナデし，内面は丁寧にナデている。胎土に細砂粒を多く含む。

17～20は小甕で，17は口径14cmを測る。胴は張らず，短かく外傾する口縁となる。18は，口径17cmとなり，口縁はゆるやかに外反する。19は，口径13.2cmで，外面は磨滅している。20は，不安定な丸底で，外面は磨滅している。

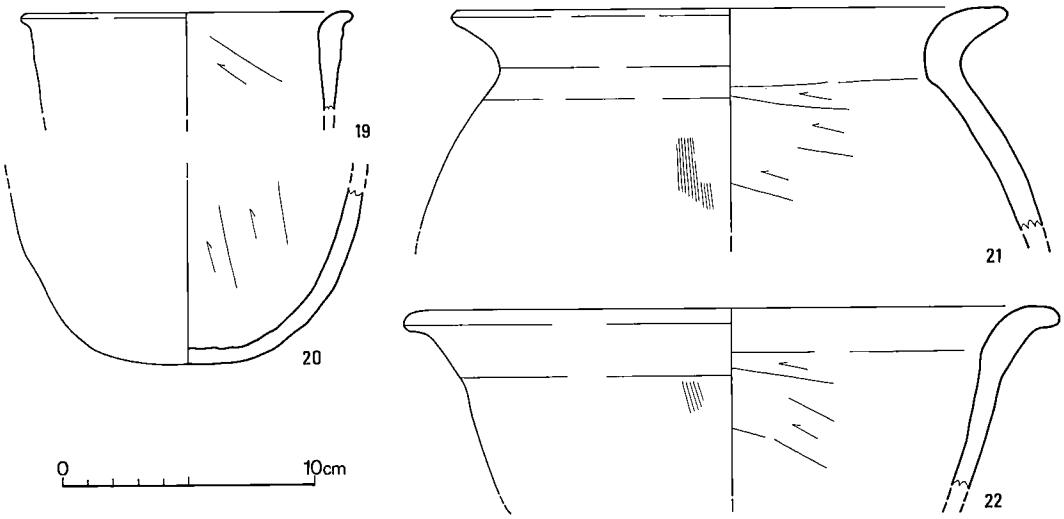
21は，口径22cmを測る甕で，胴が張り，頸部で肥厚し，内側に稜をつくる類となる。全体に厚手である。22は鉢となり，口径26cmを測る。

土錘（第254図）　現存長4.3cm，径2.1cm，孔径0.55cmの太い大ぶりなタイプである。胎土精良で肌色を呈し，全体に手捏ね的な粗製品である。

以上の出土遺物は，大別して2期に分かれる。即ち，7世紀後葉期と8世紀前葉期である。

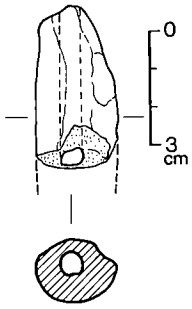


第252図　第37号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)



第253図　第37号土壙出土土器実測図（その２）(1/3)

土師器についてみても，ほぼ半々ずつの量である。よってこの第37号土壙は，７世紀後葉に掘削され，８世紀前葉期にもまた利用されたと考えられる。また，小さな土壙のわりには土器の量が多い方である。いずれにしろ，第36・38号土壙と隣接しており，このあたりがA住居群のごみ捨場として意識されていたことが判かる。　（中間）



第254図　第37号土壙出土土錘実測図(1/2)

第38号土壙（図版115，第251図）

第37号土壙北西側に接して検出された。調査時一つの遺構として扱ったが，大きく２つの遺構の重複と考えられる。

その一つは南側に位置する略楕円形の浅い落ち込みである。長径240cm・短径160cm・深さ５～11cmを測り，長軸を北西―南東方向に取っている。北側は深く切られている。

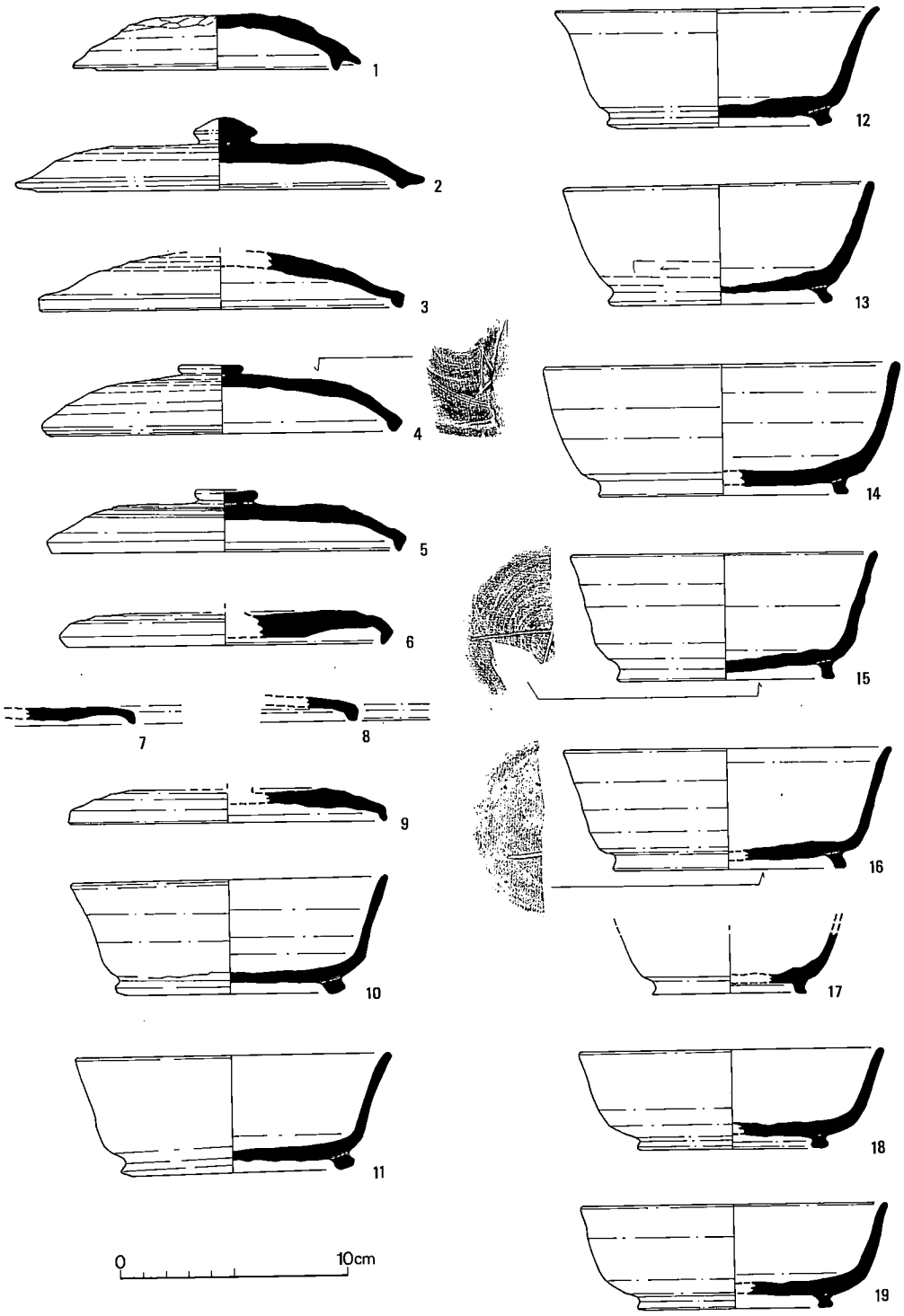
その二は本土壙の本体である。検出面での平面形は，長軸を南北方向に取る楕円形である。南北395cm・東西318cm・最深112cmを測る。しかし，床面での平面形は長軸を略北東―南西に取る長方形を呈している。長辺140～180cm・短辺70～100cmを測る。また，本土壙の北測から東側にかけて，検出面より50～70cm下位に段が検出できた。このことは，土層観察において堆積土のうち土器を多く含む１～５層とそうでない６～10層に大きく上下２層に分かれることと無関係では無いと考えられる。つまり，本土壙内堆積途中あるいは埋没後に土器廃棄のために新たに土壙が掘り込まれたものと考えられる。　（森山）

出土遺物（第255～262図）

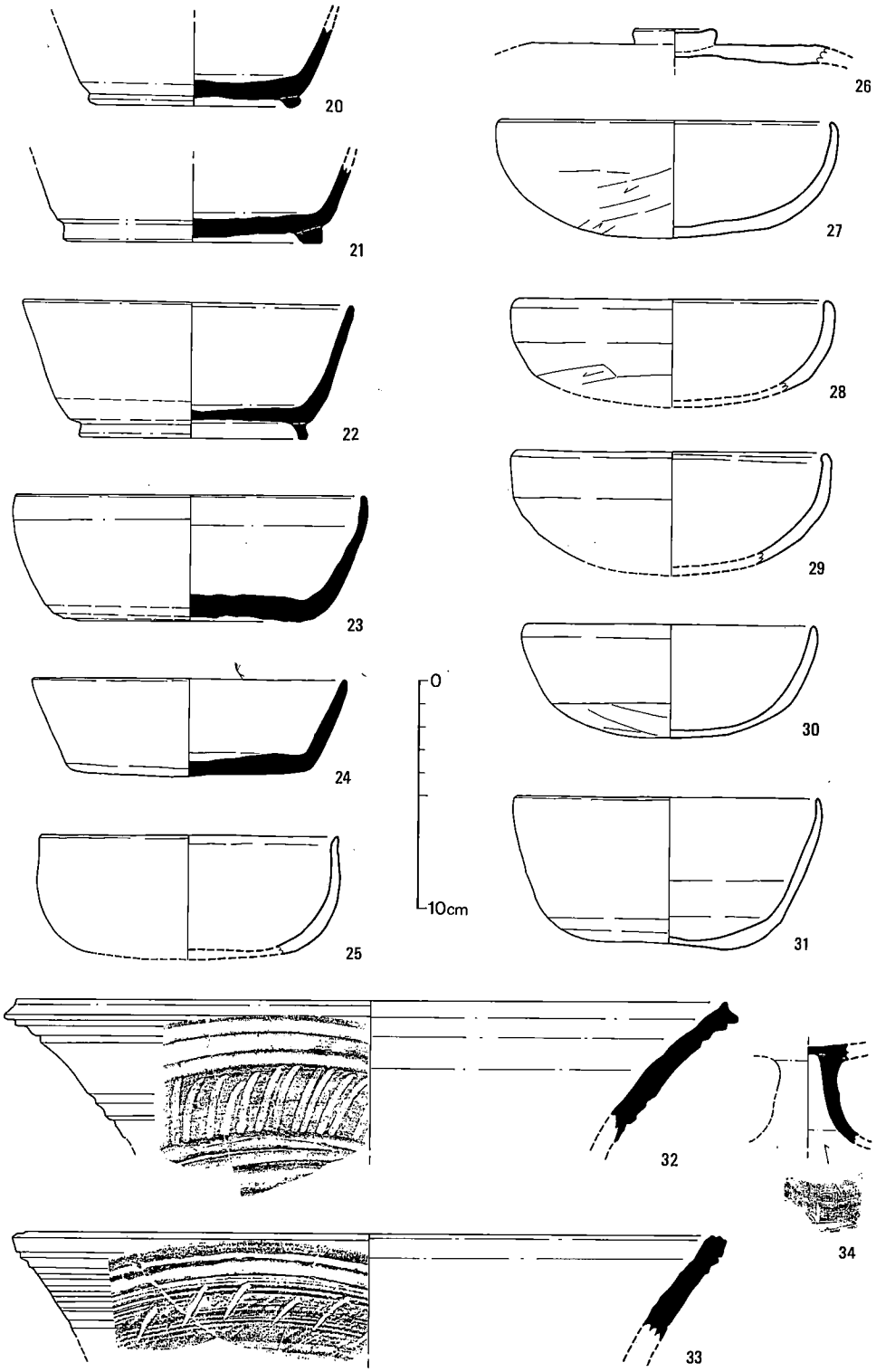
須恵器

杯　蓋（1～9）　1は口径10.4cm，器高2.3cmを測り，短かい返りを付ける。天井部外面は未調整で，その周縁斜位に手持ちのヘラ削りが施されている。7世紀の後葉に近い中頃の所産である。2は，口径16cm，器高3.2cmを測り，天井外面は回転ヘラ削りが施される。しっかりした擬宝珠形撮を付けている。3は口径16cmを測り，端部がやや小さめの鳥嘴状口縁をなす。天井外面はヘラ削りを施している。4は，口径15.8cm，器高3cmを測り，天井外面はナデており，その周縁部に僅かに回転ヘラ削りが残される。天井外面にはヘラ記号が施されている。5も扁平な撮を付けるもので，口径15.4cm，器高2.7cmを測る。天井外面斜位には回転ヘラ削り痕が残される。6は，端部が強く内傾するやや異質なタイプである。天井外面は横ナデが施され，口径14cmを測る。7は，薄手で短かく退化した形状の端部となる。8は，丸味を帯びつつある端部となる。9は，短かく外方へ開き気味の端部となる。口径14cmで，天井外面は回転ヘラ削りを施している。

杯　身（10～24）　10は口径14cm，器高5.1cm，高台径10.1cmを測る。短かいが内端で接地する高台を付ける。体部内外面ともに横ナデ，底外面はナデている。11は，口径13.7cm，器高5.2cm，高台径10.3cmを測る。10と同器形で，底外面は回転ヘラ削り，体部内外面は横ナデを施している。12は，口径14.1cm，器高5.2cm，高台径9.8cmを測る。器形は10・11とほぼ同類であり，体部内外面ともに横ナデ，底外面は回転ヘラ削りの上をナデている。13は，口径13.7cm，器高5.3cm，高台径9.8cmを測る。高台は外方へ踏ん張っており，体部は僅かに内湾気味に立ち上がる。体部外面下端と底外面は回転ヘラ削りが施される。14は，口径15.6cm，器高5.7cm，高台径10.9cmの大ぶりのものとなる。体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面下端まで横ナデが施されている。15は，口径13.4cm，器高5.6cmを測り，底外面にはヘラ記号が施されている。体部外面下端まで横ナデを施し，底外面は回転ヘラ削りを残す。16は，口径14.4cm，器高5.3cm，高台径10.2cmを測り，底外面にはヘラ記号が施される。体部外面下端まで横ナデを施し，底外面はナデている。17は，高台径6.7cmを測る小型品で，全体に灰かぶりがみられる。体部内外面ともに横ナデを施す。18は，口径13.4cm，器高4.4cm，高台径8.4cmを測る。全体に丸っこい器形に短かい高台を付ける。19もほぼ同類で，口径13.5cm，器高4.6cm，高台径8.6cmを測る。体部内外面ともに横ナデで，内面中心まで横ナデを施す。底外面はナデている。20は灰色を呈するやや生焼け品で，平たい底面の体部との境部に接して低い高台を付けている。　体部は直線的に立ち上がる。21は，高台径11.3cmを測り，太いが低い高台を付ける。体部内外面横ナデ，底外面はナデている。22は，平たい底面に細身の高台を付ける。口径14.4cm，器高5.9cm，高台径10cmを測る。体部外面下端部と底外面は回転ヘラ削りを施す。23は，鉢あるいは椀と称すべき他器種で，口径15.3cm，器高5.5cmを測る。体部上半が内湾するもので，底外面中央は未



第255図　第38号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)



第256図　第38号土壙出土土器実測図（その２）(1/3)

調整，その外方は回転ヘラ削りを施している。24は，口径13.8cm，器高4.2cm，底径10.7cmを測る。全体に生焼け気味で調整はわからない。

高　杯（34）細身の脚柱をもつ小型品である。脚柱部内外面ともに横ナデを施している。内面の裾近くには短線のヘラ記号がみられる。

甕（32・33）32は，口径31cmを測り，頸外面の口縁下に太い沈線を施し，その下にヘラ状工具による太い縦位沈線を並べている。内外面ともに横ナデ調整を施す。33は，口径30.5cmを測り口縁下の外面にカキ目を施したのちにヘラ短線を斜位に間隔をおいて施文している。

土師器

蓋（26）天井部に直径3.6cmの大きい撮を付ける大口径の蓋である。内外面ともに横ナデを施している。

椀（25・27～31・35～41）ここでは，杯と呼んでもいい形状だが，古墳時代末期のマリ形の系統の形状を強く残すものを主としてとり上げる。また，鉢形のものも一括してここで纒めておきたい。25は，口径13cmで，深い器形となり，内湾して立ち上がり，端部で小さく外反する器形となる。全体に磨滅著しい。27は，口径14.3cm，器高5.2cmを測り，口唇内端がわずかに突出する特徴を示す。体部外面下半は手持ちヘラ削り，内面は丁寧にナデている。28は，口径13.5cmで，底外面は手持ちのヘラ削りを施す。29は，口縁内端が突出しており，8世紀代の所産と考えられ，杯としてよい。口径13.5cmを測り，底外面は磨滅して調整不明である。30は，底外面を手持ちヘラ削りしており，口径12.8cm，器高4.9cmを測る。31は，須恵器の生焼けの可能性もある。体部外面下端から底外面は回転ヘラ削りを施し，口径13.4cm，器高6.5cmとなる。口縁部が内湾する特徴を示し，23・36などと同器種かと思われる。35は，口径17.5cm，器高は9.3cmとなり，完全にボール状の器形となっている。体部下半から底部は，外面を削り込んでおり，かなり器壁が薄くなっている。底部外面には黒斑がみられる。36は，口径18.4cm，器高5.3cmとなる内湾口縁のタイプである。内外面すべて横ナデ仕上げで，須恵器の生焼けの可能性が強い。37は，口径20cmで口縁端部は丸くおさめており，鉄鉢型須恵器を模倣したものと思われる。内外面とも横ナデを施す。38は，36と同器種となるかと思われるが定かではない。須恵器の生焼けの可能性も強い。底内面は丁寧にナデており，底外面はヘラ削りかと思われる。39は，口径16.8cm，器高6.2cmを測り，全面ほとんど磨滅している。40は，杯としてもよく，口径12.8cmを測る小径の類である。41は，鉢の底部で，底外面はナデ，内面は横ナデを施す。底径9.3cmを測る。

杯（42～55，61～65）42は，丸底から屈折して内湾する口縁となる。口径16.2cm，器高4.3cmを測る。底外面は手持ちヘラ削りが施されている。43は，口径16.2cm，器高2.9cmを測る。底外面は手持ちのヘラ削りを施している。44は，口径13.5cmとなり，底部外面は磨滅している。やや直立気味に立つ口縁となる。45は，少し開き加減となる口縁を有し，底部外面は手持ちヘ

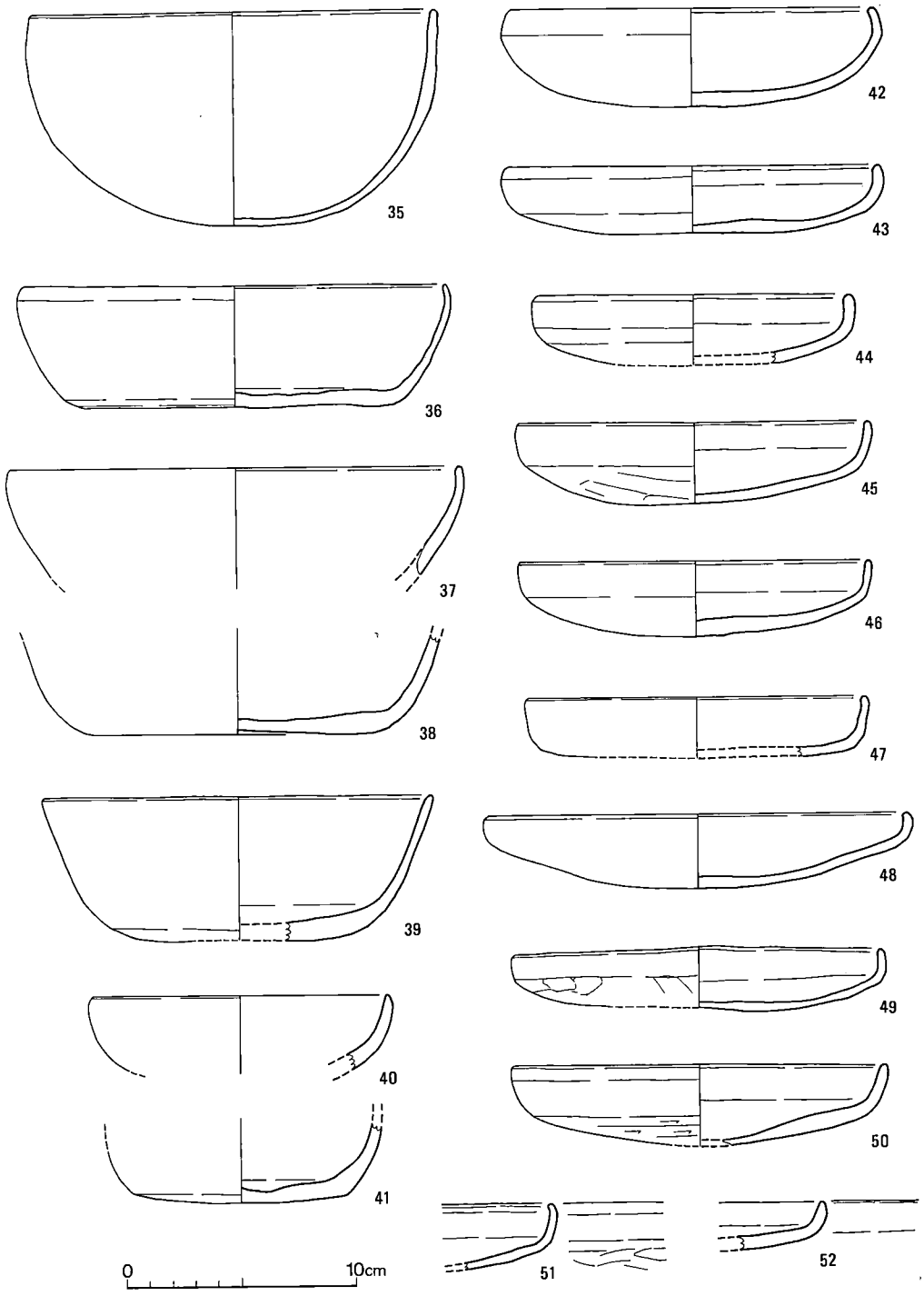
ラ削りを施す。口径15.3cm，器高3.6cmを測る。46は，口径15.4cm，器高3.3cmを測り，口縁内側が僅かにへこむ特徴を示す。底外面は磨滅している。47は，口縁内側がへこみ，平底気味となる浅い形状をなす。口径15cmとなる。48は，口径18.7cm，器高3.3cmを測り，不安定な丸底を呈する。底外面は手持ちヘラ削りが施されている。49は，口径16cm，器高2.8cmの浅い形状をなし，底外面は手持ちヘラ削りが施されている。50は，口縁がかなり外傾しており，口径16.4cmとなる。底部外面は手持ちヘラ削りが施されている。51は，口唇内端が小さく内側へ突出する類で，底外面は手持ちヘラ削りが施されている。52は短かく外傾する口縁となる。内外面ともに磨滅している。53は，口径12.9cmの小型類で，全体に磨滅気味で調整は不明である。54は，口径16.5cmを測り，不安定な丸底状となる。55は，口径16.6cmを測り，内外面ともに磨滅著しく調整は不明である。61は，口径12.2cm，器高2.9cmを測る小型品である。体部外面下端から底部外面は回転ヘラ削りを施す。62は，口径12.6cm，器高3.8cmで全体に部厚い。内外面ともに磨滅しており，調整は不明である。63は，口径15.4cm，器高4.1cmを測り，底部は回転ヘラ削りを施す。64は，須恵器模倣の器形で，口径16cm，器高3.9cmを測る。底外面は回転ヘラ削り，体部外面は下端まで横ナデを施す。65は須恵器の生焼けで，口径10.9cm，器高2.9cmを測る小型類である。底外面中央は未調整，その周縁は回転ヘラ削りを施す。

皿（56～60）殆んどが須恵器模倣或いは須恵器の生焼け品と思われ，その区別はつきにくい。56は，体部中途で折れて更に開くもので，口径17.8cm，器高2.5cmを測る。底外面は回転ヘラ削りを施している。57は，口径20cmほどとなり，底部外面は回転ヘラ削りを施している。58は，口縁の開きが強く，外方へのびるもので，全体に器表は磨滅している。口径19.6cm，器高1.9cmとなる。59は，薬壺等の蓋などに見受けられるもので，口径16.3cm，器高2.8cmを測る。底部外面中央は未調整で，その周縁部は回転ヘラ削りを施している。60は，口径14.9cm，器高2.1cmを測る。全面磨滅気味となる。

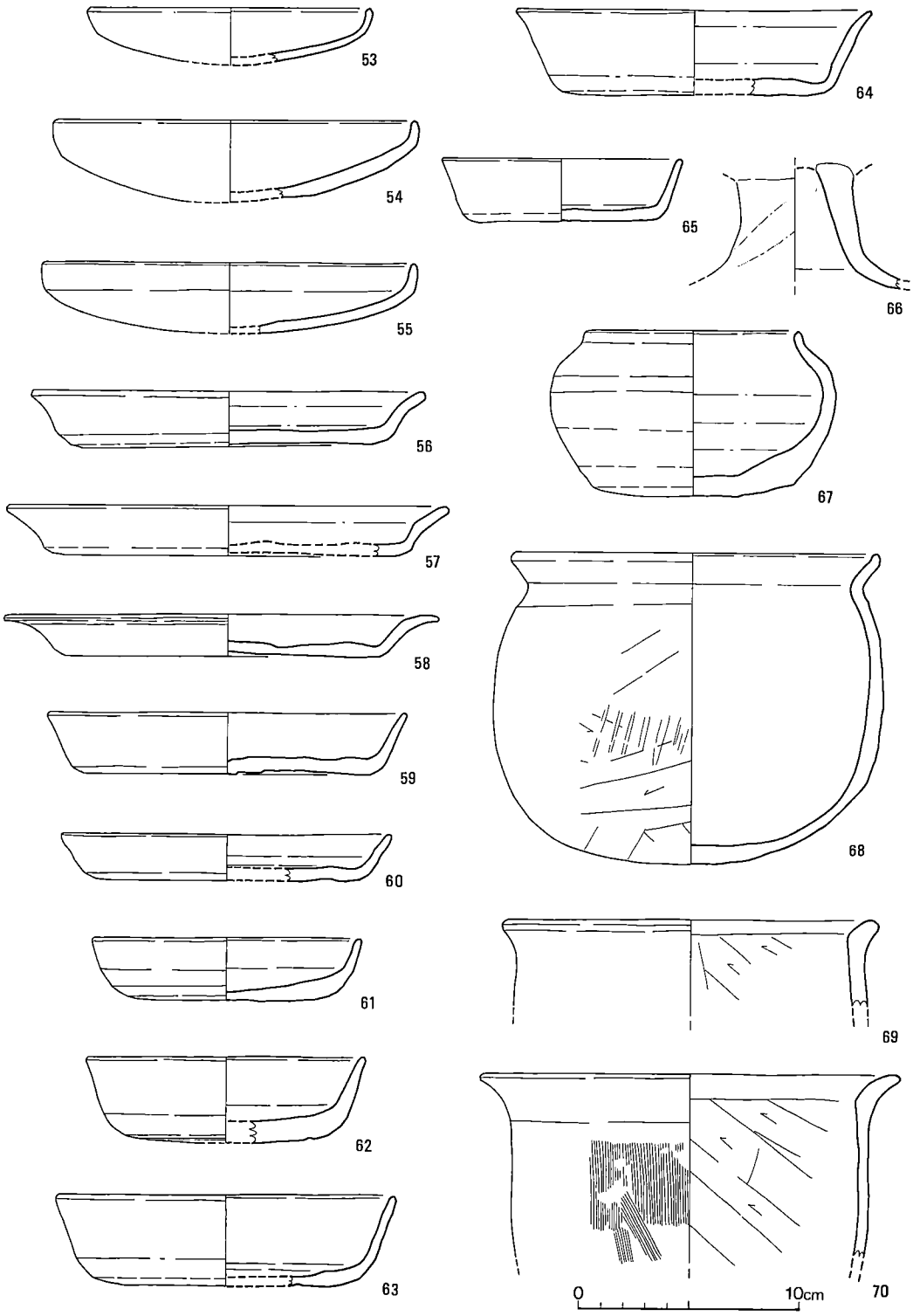
高　杯（66）脚部片で，脚柱内面は横方向のヘラ削り，外面はシボリ痕を残し，横ナデ調整が施されている。上端の接合面には凹線が数条みられる。

壺（67）須恵器短頸壺の生焼けとも思われるが，胎土に砂粒を多く含み，所謂赤焼き土器と考えられる。口径9.8cm，器高7.5cm，胴部最大径12.8cmを測る。胴部外面下半の中位には回転ヘラ削りが残り，他はナデている。胴部外面上半と内面殆んどは横ナデを施す。

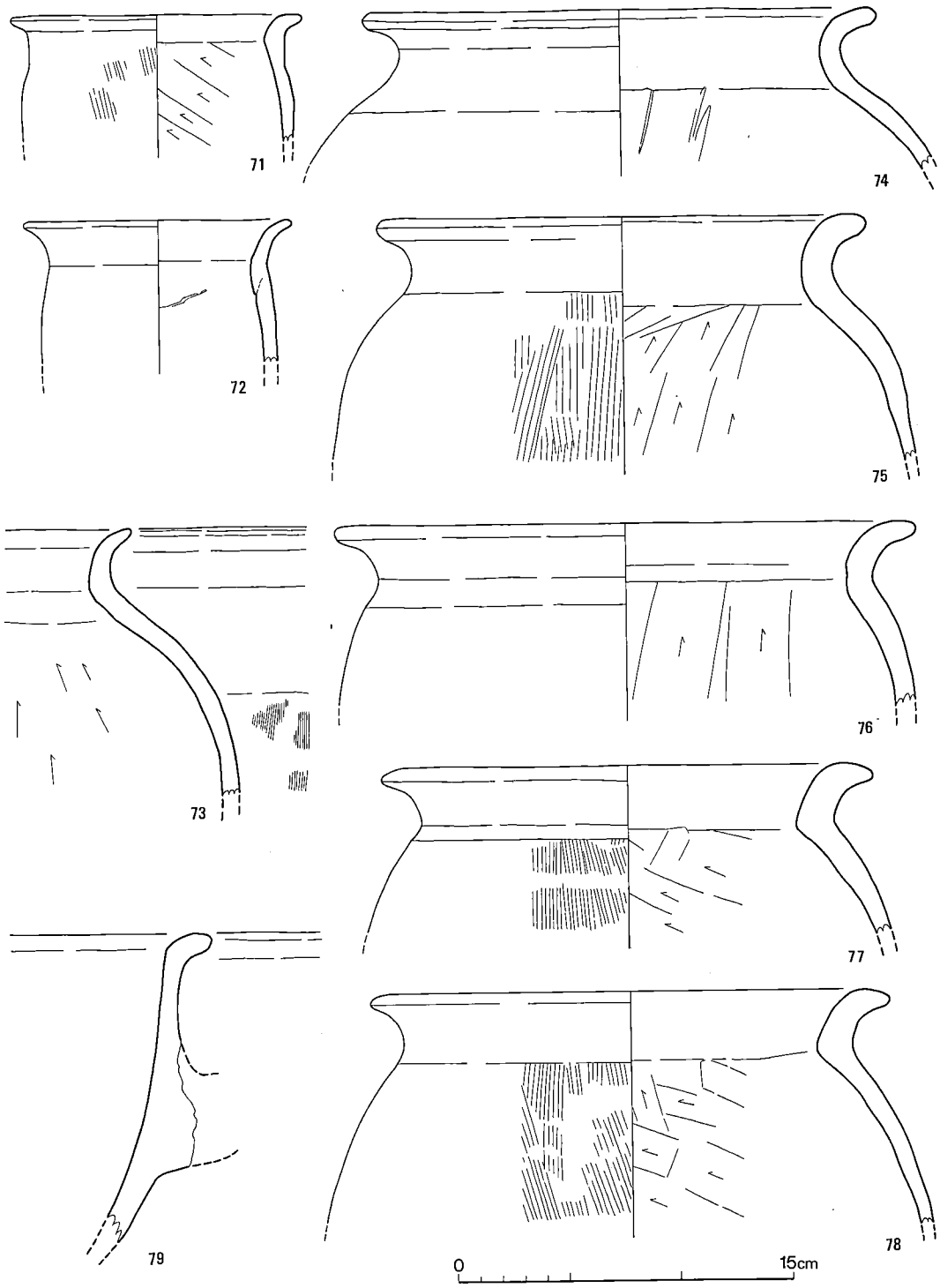
小　甕（68～72）68は，丸底の鉢と言った方が良いかもしれない器形をなす。口径16.7cm，器高14.9cmを測り，口唇内端が突出する特徴を示している。胴部外面中位以下は手持ちヘラ削り，胴部上半外面はヘラ削りの後に部分的にナデており，口縁内外面は横ナデ，胴部内面は丁寧にナデている。調整の面からも甕類とは全く異っている。69は，口径17cmで外面は磨滅している。70は，口径19cmで，張らない胴部から頸内面に稜をつくり外反する口縁となる。71は，わずかに胴が張り，口径13cmを測る。72は，口径12cmとかなり小ぶりの類で，口縁はゆるやかに長く



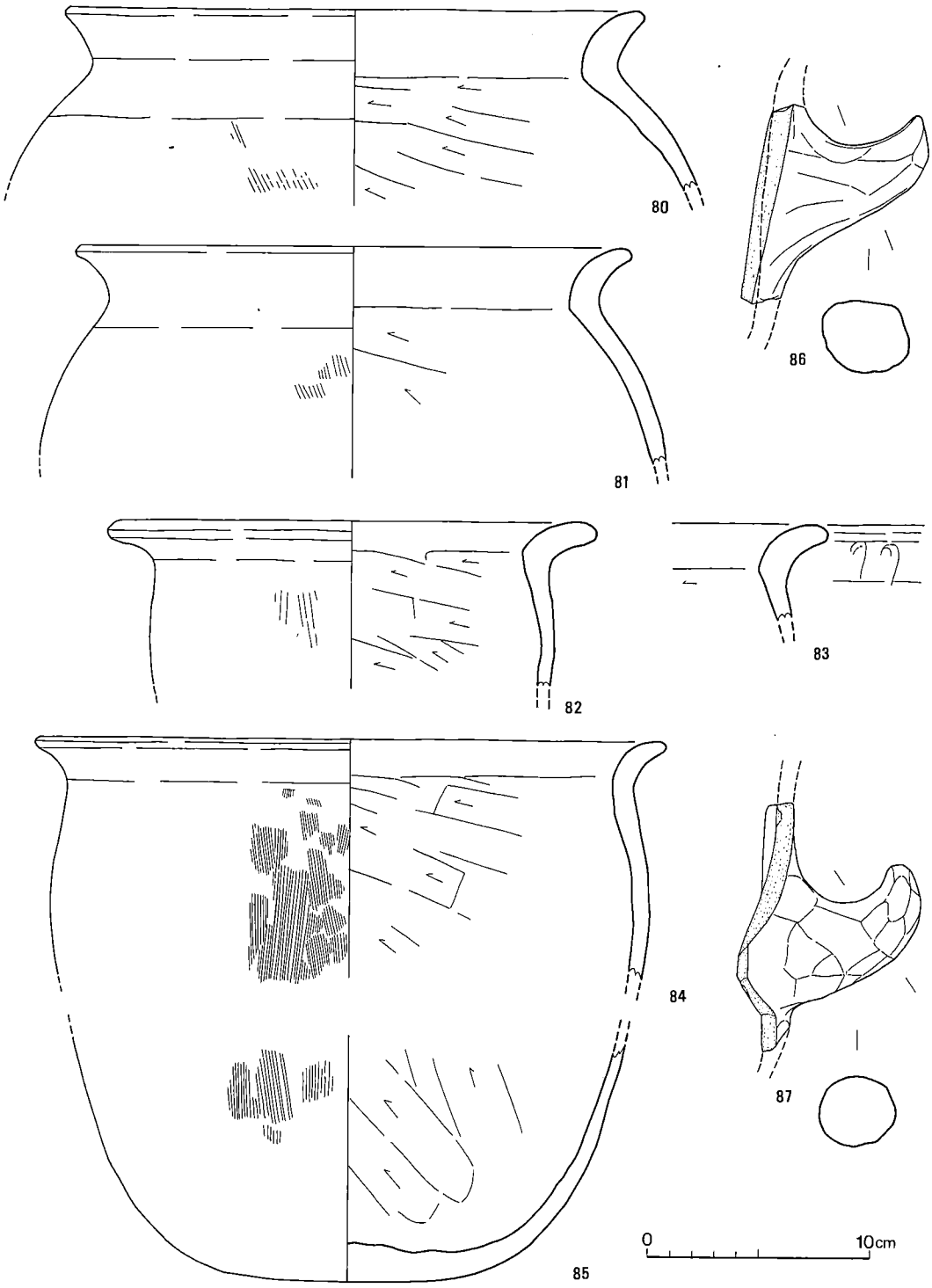
第257図　第38号土壙出土土器実測図（その３）(1/3)



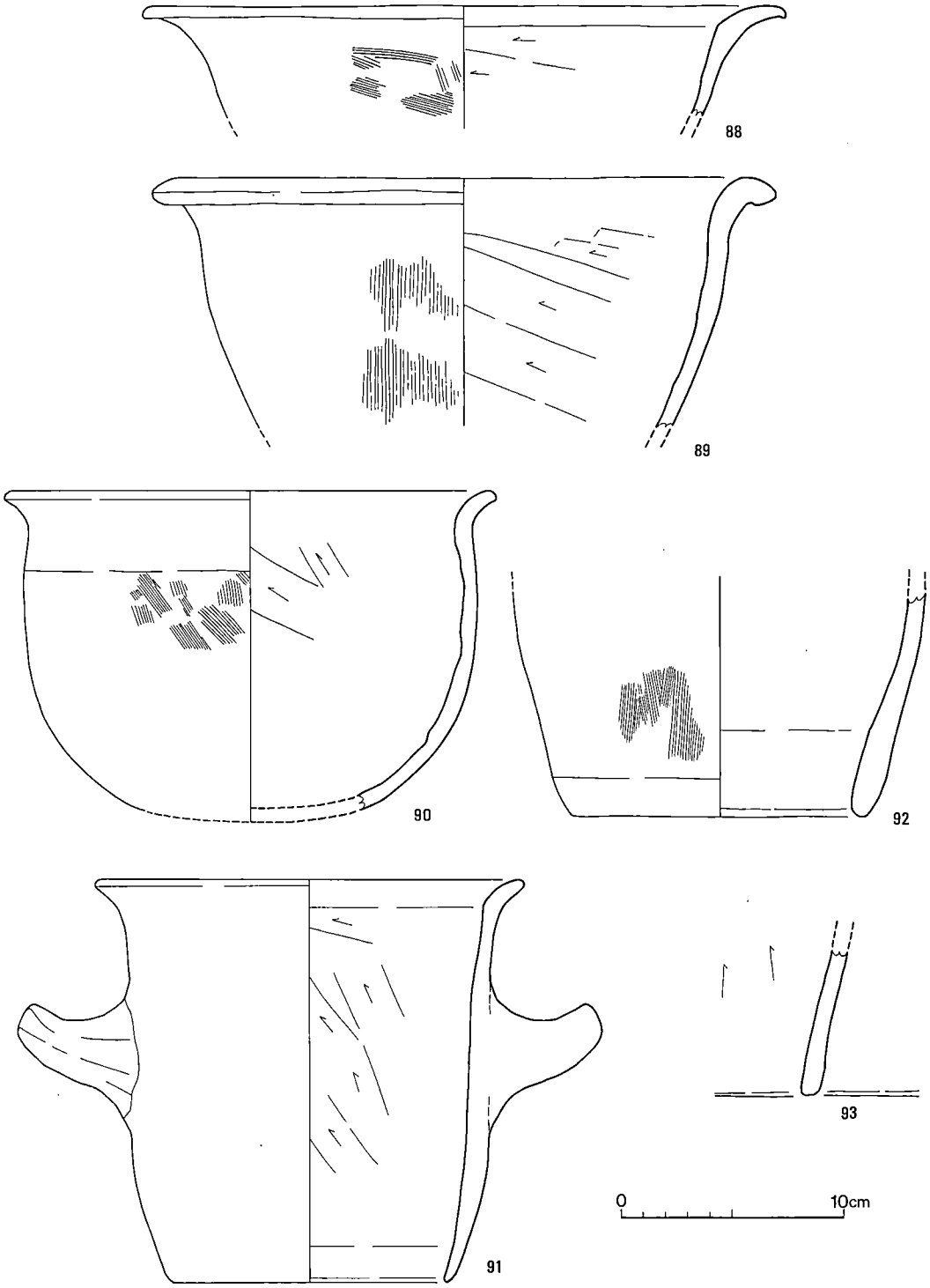
第258図　第38号土壙出土土器実測図（その４）(1/3)



第259図　第38号土壙出土土器実測図（その５）(1/3)



第260図　第38号土壙出土土器実測図（その６）(1/3)



第261図　第38号土壙出土土器実測図（その７）(1/3)

のびる。内外面ともに磨滅して調整は不明である。

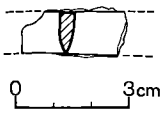
甕（73～78・80～87）　73は，球形胴に近く強く張る胴部をなす。胴部内面はヘラ削り上げを施している。74は，口径23cmで強く張る胴部から，口頸部で肥厚せずに丸く反転して開く。胴部外面は磨滅している。75は，口径22cmを測り，肩で張る胴部となる。76は，口径26cmを測り，胴部外面は磨滅しており調整は不明である。77は，口頸部が肥厚し，内面に鋭い稜をつくる。口径22cmを測る。78も口頸部の特徴は77と同じで，口径23.2cmを測る。80は口縁部が短かく太く開くもので，胴はかなり張る。口径26cmを測る。81は，口径25cmとなり，80と特徴が似ている。82は，胴がゆるやかにふくらむ程度で，口径22cmとなる。83も同類で，外面には指頭圧痕が残されている。84は，口径28.3cmを測り，胴はゆるやかにふくらみ，頸内面にも強い稜はつくらない。85は，やや安定する平底っぽい厚手の底部で，底外面は丁寧にナデている。86は把手部分で，長く大きめの類である。87はやや上方に曲がり気味で，長い類である。

鉢（88～90）　88は，口径28.9cmを測り，全体に薄手で，口縁が長く開く類となる。89は，口縁が太く丸く反転するもので，外面には煤が付着している。口径28cmとなる。90は，頸部も肥厚せず，丸味のある胴部となり，88・89と器種が異なるタイプである。口径22.2cmを測る。

甑（79・91～93）　79は，口縁が外方へ折れて短かく開くもので，内面はヘラ削りと思われる。91は，口径19.2cm，器高18.1cm，底径12.5cmを測る。小ぶりの類で，長めの把手を付けている。外面は磨滅している。92は，底径13.2cmを測り，内面は磨滅している。下端内外面は横ナデを施す。93も下端内外面は横ナデを施しており，外面は調整不明である。

鉄　器

刀　子（262図）　現存長2.8cm，幅1.2cm，厚さ0.4cmを測り，下辺が刃部をなす。刀子と考えられるが，厚さがやや厚すぎるのではないかと気にかかる。



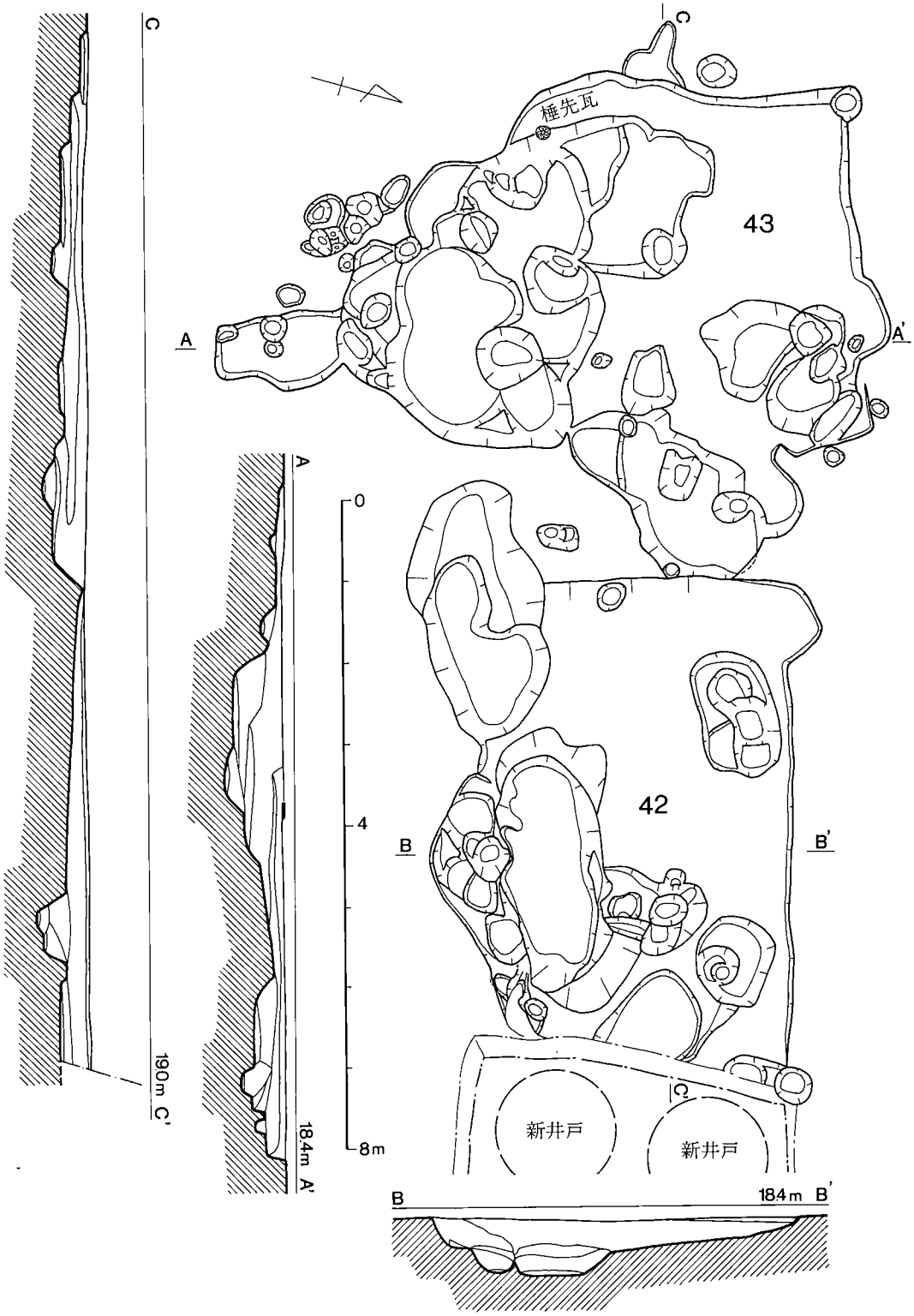
第262図　第38号土壙出土鉄器実測図（1/2）

以上の出土遺物は，時期幅がかなりある。最古段階が７世紀中葉で，これは量的には少ない。次に７世紀後葉で末に近いころまで多量にみられる。更に８世紀前葉期のものもかなり多い。また，８世紀中頃或いは後葉まで下がる可能性のあるものも少量見受けられる。よって，この第38号土壙は，７世紀後葉代に掘削され，引き続き利用され，８世紀前葉代におそらく掘り直されて再利用されたものと考えられる。

（中間）

第42号土壙（図版116，第263図）

Ｅ群の北東端に，住居群からやや離れて位置する。西隣の第43号土壙と接しており，東端側は畑灌の新井戸で破壊されている。長さ6.6ｍ以上，幅4.5ｍで，最深部は0.4ｍと全体に浅い。南辺側に２ヶ所の深掘り部分があり，他にも３ヶ所以上の小さめの掘り込みがみられ，少な



第263図　第42・43号土壙実測図（1/80）

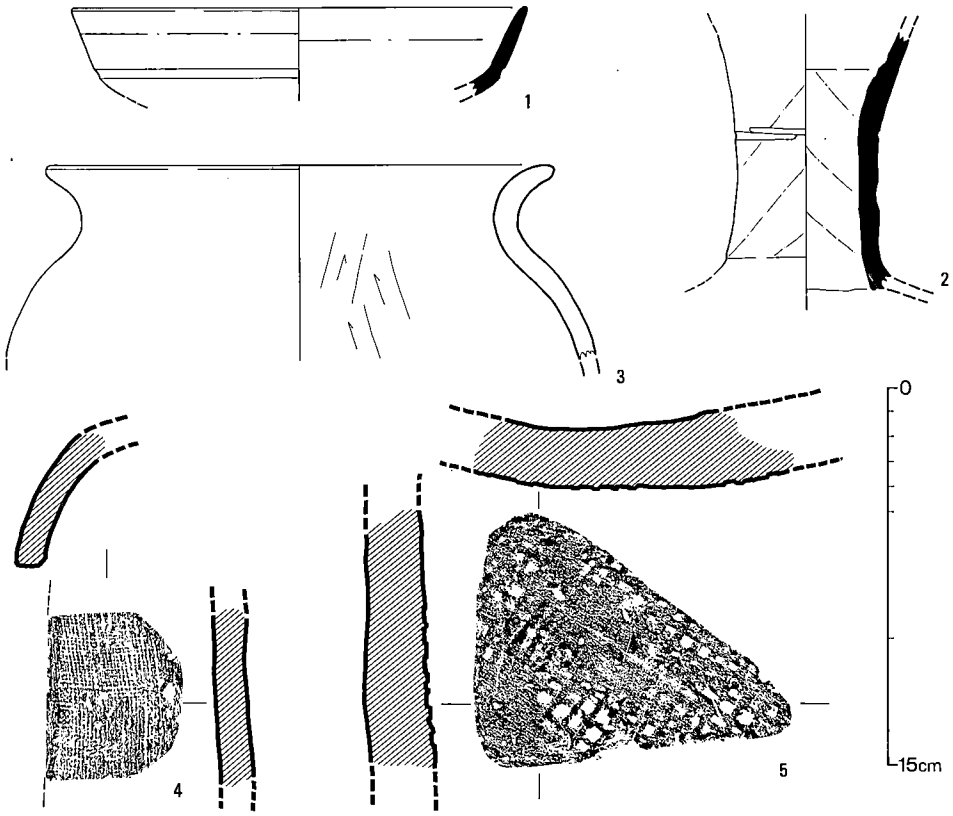
くとも３回以上の部分的掘り直しが行われたことがわかる。全体を覆う上半分の埋土は茶褐色土であるが，底面に掘り込まれた各部分は黒褐色土であった。出土遺物は大きな土壙のわりには，意外と少なめである。

出土遺物（第264・265図）

須恵器（１・２）　１は生焼けで淡茶色を呈する高杯杯部片である。復原口径17.9cmと大きく，体部外面下端に太い沈線が施されている。内外面ともに横ナデ調整で，胎土に細砂粒を多く含む。

２は長頸壺で，頸部中位に１条の沈線をめぐらす。内外に斜位のシボリ痕を残し，外面は灰かぶりをみせる。土壙底面に掘り込まれた黒褐色土中出土品である。

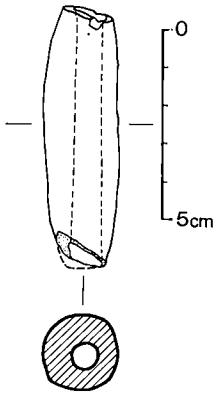
土師器（３）頸部で肥厚せず，強く張る胴部から丸く屈曲して外反する口縁につくる。外面は磨滅著しく調整不明である。上層の茶褐色土出土品である。復原口径20.0cmを測り，１・２とともに７世紀後葉代の所産と考えられる。



第264図　第42号土壙出土土器・瓦実測図（1/3）

瓦（4・5）　4は薄手の丸瓦片で，凸面は雑な不定方向の指ナデが施される。凹面は布目をよく残し，胎土精良で，淡黄褐色の生焼け品である。側面はヘラ切りで，凹面側端はヘラ削りで小さな面取りを行う。上層の茶褐色土出土品である。5は，3.0cmと厚い平瓦片で，淡茶褐色をした生焼け品である。凸面は正格子目叩きを斜位に施し，上端付近はナデ消している。凹面は布目の上を殆んど完全に縦位にナデ消している。土壙底面に掘り込まれた黒褐色土中出土品である。

土　錘（第265図）　上層の茶褐色土出土品で，長さ6.9cm，最大径2.0cm，孔径0.65～0.8cmを測るやや大型品である。全体に葉巻き形を呈し，胎土精良である。



第265図　第42号土壙出土土錘実測図（1/2）

以上の第42号土壙は，遺物が少なく具体的な掘り直しの各時期を想定し得ないが，出土遺物の上から，一応7世紀の中頃に近い後葉代に掘削されたものと考えておく。　（中間）

第43号土壙（図版116・117，第263図）

E群の北東端の，住居群からやや離れた位置に検出された。東隣の第42号土壙と接しており，本来は一連のごみ捨場として認識されていたものと思われる。埋土も第42号土壙と同様で，底面に掘り込まれた各深掘り部は黒褐色土で，それ以上は茶褐色土である。この埋土の状況からみると，当初各々の小規模な穴が掘られ，最後に全体的に浅く広く掘り直しが行われたことも考えられる。

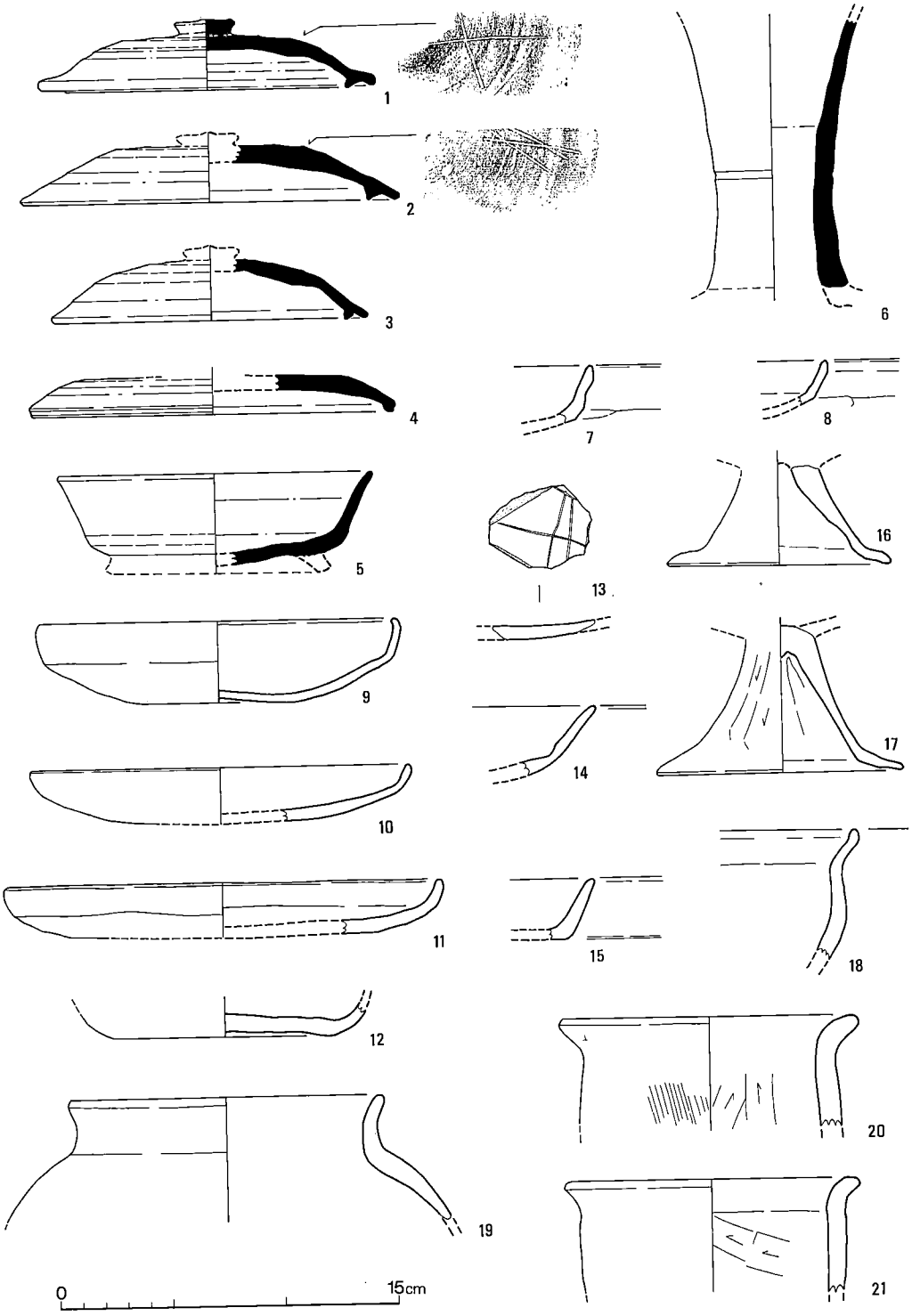
出土遺物はそれ程多量ではないが，砥石・鉄刀子など多種にわたる。ここで特筆すべきは，当土壙の西南端の最上層から円形棰先瓦が出土したことである。

出土遺物（第266～269図）

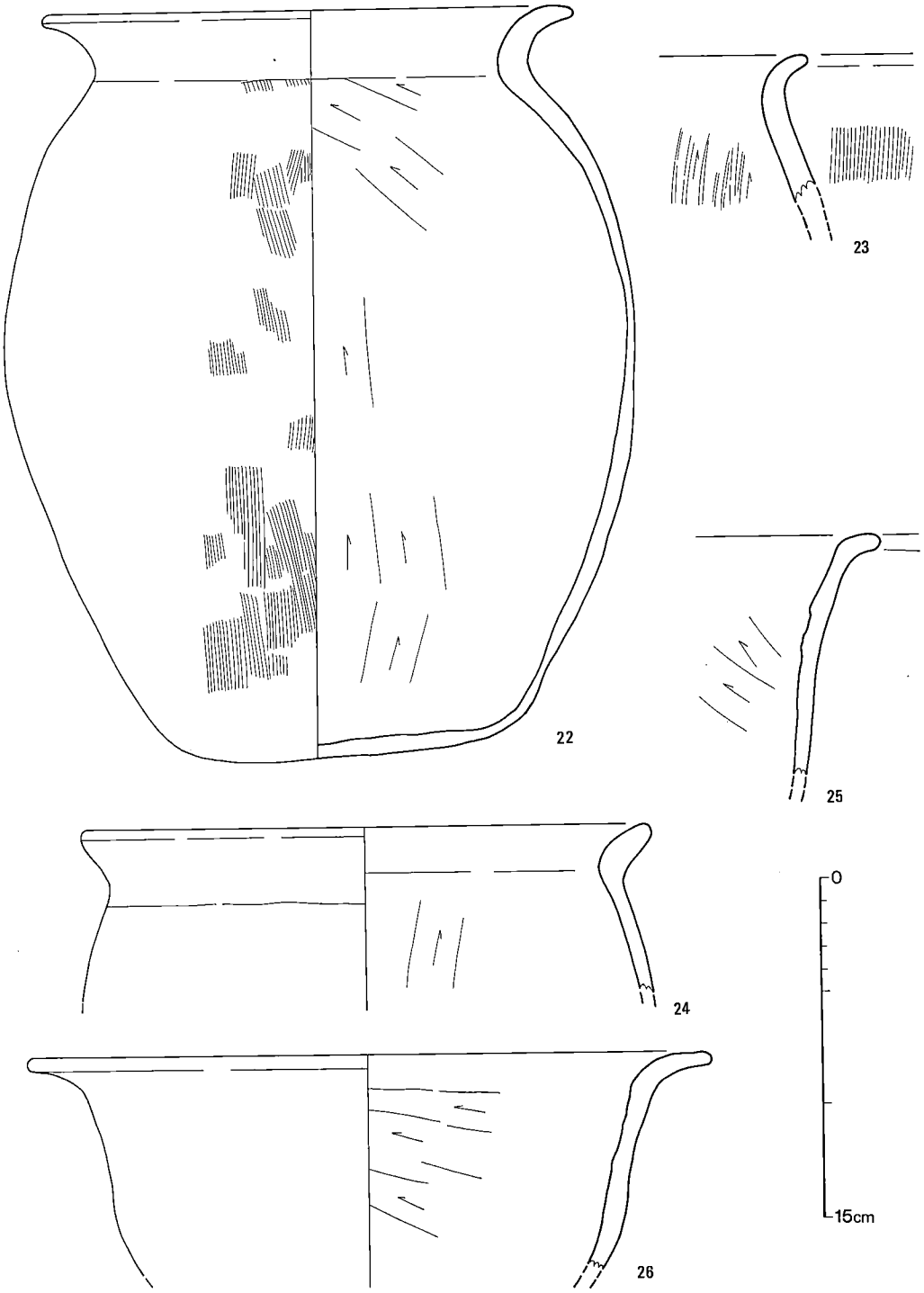
須恵器（1～6）　1～4は杯蓋であるが，4は端部がすでに丸味をおびた鳥嘴状口縁をなす類である。1は復原口径15.0cm，器高3.2cmで，やや低い擬宝珠形撮をつける。天井外面は回転ヘラ削りを施し，1本直線のヘラ記号がみられる。2は復原口径16.7cmを測り，天井外面は回転ヘラ削りが施される。生焼けで淡黄褐色を呈し，外面天井部には3本直線を組み合わせたヘラ記号が施されている。3も短かい返りを付ける類で，天井外面は回転ヘラ削りが施される。4は，復原口径16.0cmで，天井外面に回転ヘラ削りを残す。

5は高台付杯で，高台ははずれている。復原口径14.0cmを測り，外面下端に回転ヘラ削り痕を残す。外面全体に灰かぶりがみられ，高台接合面には沈線を施している。

6は長頸壺で，頸部中位に太い沈線を1条めぐらす。内外面ともに灰かぶりがみられる。

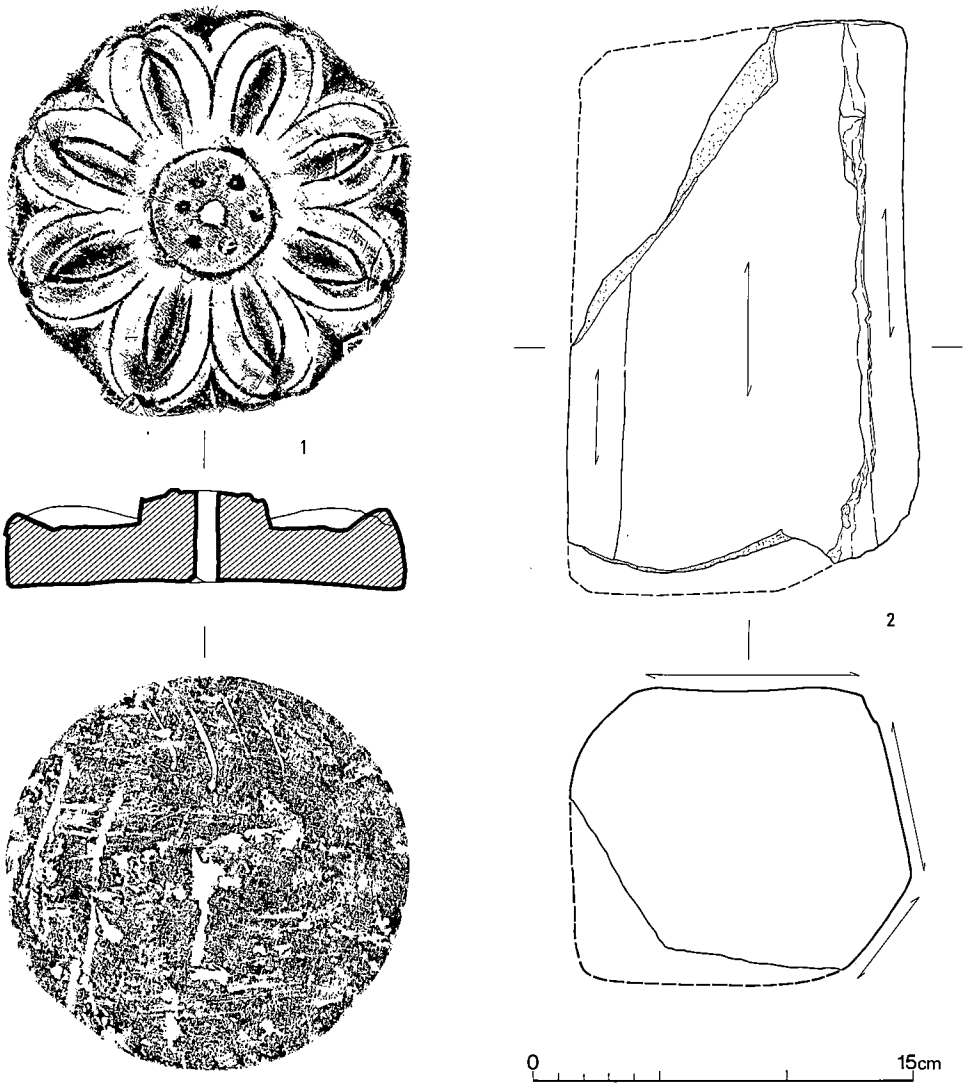


第266図　第43号土壙出土土器実測図（その１）(1/3)



第267図　第43号土壙出土土器実測図（その２）(1/3)

土師器（7～26）　7～15は杯で，7・8は体部中途で屈折しており，以下外面は手持ちのヘラ削りを施す。8世紀代の所産であろう。9は復原口径16.2cm，器高3.6cmを測る。口縁内端が小さく突出する特徴を示す。全体に磨滅著しく調整は明確でない。10・11は復原口径16.8cm，19.4cmであるが，いずれも磨滅して調整はわからない。12はわずかに上げ底状となり，内面は中心まで横ナデ，底外面は丁寧にナデ仕上げを行っている。13は，10のような器形となるもので，内面に細い工具で縦横に沈線を施している。どのような文様となるのか，またその意図も



第268図　第43号土壙出土瓦・砥石実測図（1/3）

想像できないが，第49号土壙出土品のように格子状文様となる可能性もある。14は高杯となる可能性もある。15は底部をヘラ削りして平底となっており，８世紀前半代のものと考えられる。

16・17は高杯脚部で，脚端径はそれぞれ10.0cm，11.0cmを測る。16は磨滅著しいが，17は脚柱部の内外面をヘラ削りしている。

18は頸部で外反し，口唇内端が丸く突出する特徴を示す。丸底状の鉢となるものかと思われる。胎土はわりと精選されている。

19は内外面ともに磨滅著しく，詳細を知り得ないが，胎土も精良であり，短頸壺の部類であろうと考えられる。復原口径14.0cmを測る。

20・21は小甕で，いずれも頸部で肥厚せず，胴部も張らない類である。復原口径は両方とも13.1cmで，21の胴部外面は磨滅している。

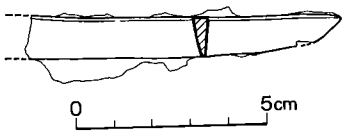
22～24は甕で，22は頸部内面に稜をつくり，胴部は中位よりやや上方で張り，薄手の平底状を呈する。口径23.4cm，胴部最大径27.6cm，器高32.7cmを測る。底内面はナデており，底外面はハケ目の上をナデている。外面底部から胴部にかけて黒斑部がみられる。７世紀後葉の所産と考えられる。23は頸部が肥厚せず，胴内面はヘラ削りが施される。24は，口縁全体が厚く，頸部内面に稜をつくるが，異様な断面形態を示す。復原口径25.0cmとなり，外面は磨滅気味で調整は観察不能である。

25・26は丸底状となる鉢で，26は復原口径30.1cmを測る。26の胴部外面は工具によるナデがみられ，煤が付着する。

棰先瓦（第268図１）　直径15.8cm，中房径（上端で）5.0cm，中央孔径0.8cm，最大厚さ3.7cmを測る大型類の円形棰先瓦である。重弁の８弁形式の山田寺系棰先瓦の優品である。井上廃寺近辺や薬師堂谷遺跡出土品と同類であるが，薬師堂谷遺跡出土品にみられる同笵を示す笵型のキズは見られない。花弁部分が中房の下にもぐっており，両者別々の笵型を使用し，中房部分を接合したものと考えられる。側面は円周方向への粗い削りが施される。裏面は一方向への粗雑なヘラ削りで，片側に４本の平行線のヘラ記号がみられる。胎土に細石英粒・細長石粒をかなり多く含み，焼成軟質で淡灰色を呈する。

砥　石（第268図２）　砂岩製の大型粗砥で，５面のすべてを使用している。現存長21.4cm，厚さ11.2×13.2cmで，据え置きタイプのものであろう。

鉄刀子（第269図）　現存長8.2cm，幅1.1cm，厚さ0.35cmで，僅かに外反りがみられる。

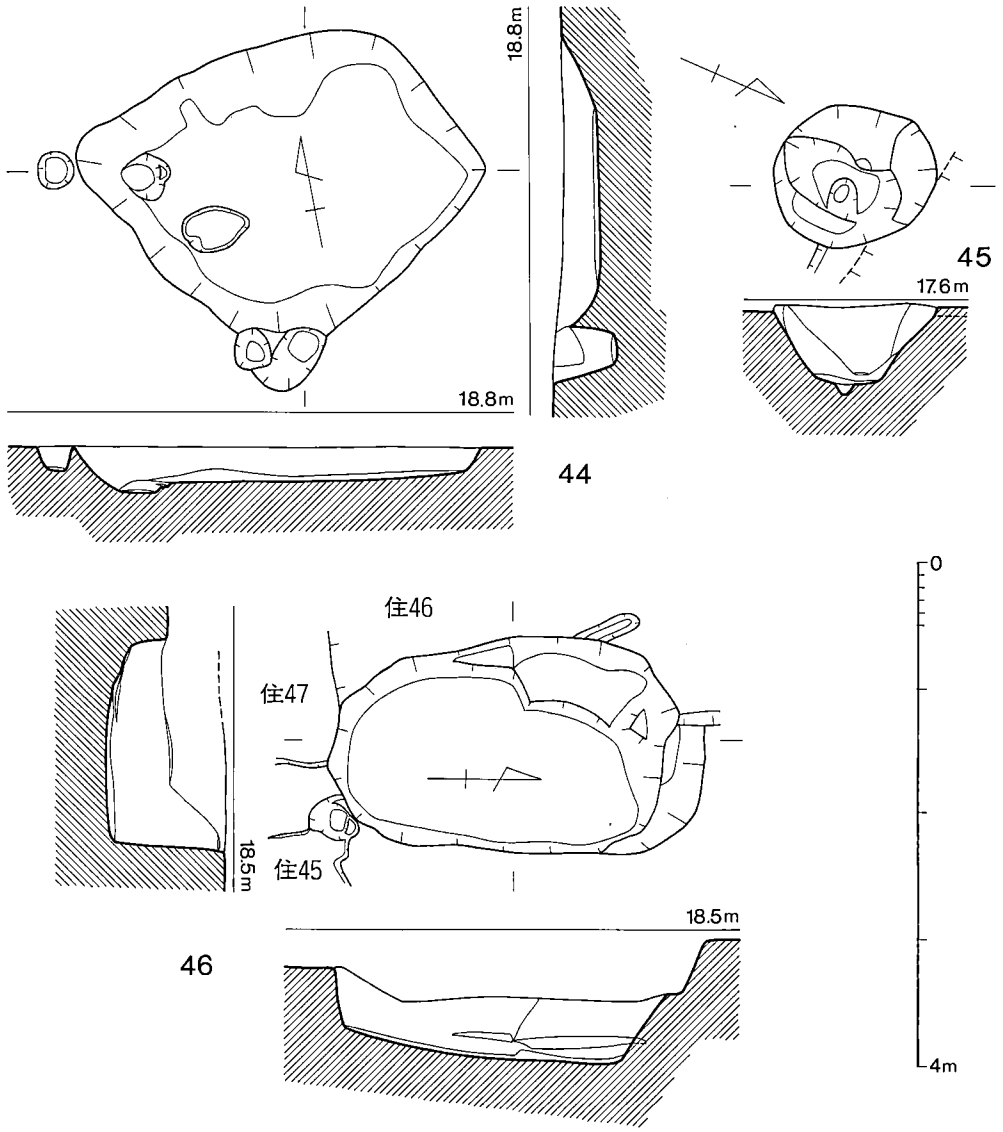


第269図　第43号土壙出土鉄器実測図 (1/2)

以上の出土遺物のうち，茶褐色土出土のものは１～８・10～15・19～21・23～25と鉄刀子，棰先瓦である。また土壙底面に掘り込まれた黒褐色土

出土のものは9・16～18・22・26と砥石である。この両土層によって明確な時期差は無いが，ただ黒褐色土出土のものは7世紀後半代より下がるものは無いようである。

このように第43号土壙出土品は7世紀中頃に近い後葉のものが最も多いが，4や7・8・15などのように8世紀前半代まで下がるものもみられ，幾度か掘り直して使用されたものと考えられる。



第270図　第44～46号土壙実測図（1/60）

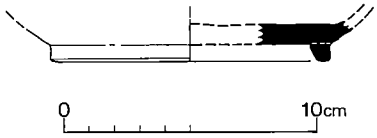
また，棰先瓦の年代が問題となるが，土壙の端部近くの最上層であり，厳密には以上で述べた年代の幅の中で考えねばなるまい。ただ，第１号土壙でも軒丸瓦が同様な出土状態を示しており，土壙内出土品からみて７世紀後半（末に近い頃）を下らない一括遺物群であり，その下限を示していると思われる。この第43号土壙出土棰先瓦は文様形式上第１号土壙出土の軒丸瓦より先行すると考えられることから，少なくとも当土壙で出土した７世紀の中頃に近い後葉代の一群より年代的に下降することはないと考えられる。ただ，出土状況は，瓦窯や寺院址などのような原位置を留めるものではなく，あくまでも他地点から移動を受けた遺物であることが明確であり，これこそ年代決定の最大の難点となるわけである。（中間）

第44号土壙（図版118，第270図）

Ｅ群の西北端に位置する不整台形状プランの土壙である。長さ3.25m，幅2.4mで深さ0.28mを測る。浅く，底面が平らな形状をなす。

出土遺物（第271図）

出土した遺物のうち実測にたえ得るものは，図示した１点のみである。高台径11.0cmを測る須恵器杯である。低く，踏ん張らない高台を体部と底部の境に接合している。焼成堅緻で，底外面中央はヘラ削り面を残す。他は横ナデで，内底面にはナデツケがみられる。



第271図　第44号土壙出土土器実測図（1/3）

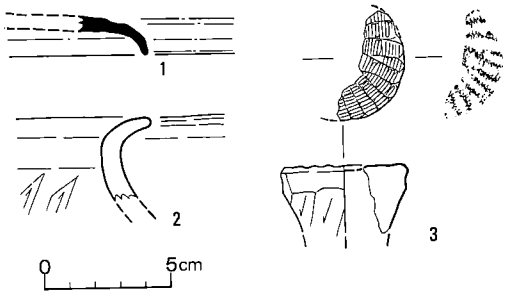
この土器は，８世紀の末の年代が考えられ，当土壙の掘削時期とされよう。今までみてきた土壙の中で，わりとすっきりしたプランで，底の平らなものがあった。（第15・23・44号土壙）それらはいずれも奈良～平安期のもので，時代の特徴を示した形態と考えられよう。（中間）

第45号土壙（図版118，第270図）

Ｄ群の中央で，第40号住居跡の南側，第46号土壙の北側に位置する。直径1.3×1.1m の小さな略円形土壙で，断面形態はすり鉢状をなし，0.6m とわりと深い。

出土遺物（第272図）

１は須恵器蓋で，身と蓋が逆転する直前の７世紀前半代のものである。残っている範囲の天井部は横ナデ，内面はナデツケがみられる。２は土師器甕口縁片で，



第272図　第45号土壙出土土器実測図（1/3）

胴が張り，頸部で肥厚せずに強く外反する口縁となる。外面は磨滅する。

3は，上面に放射状の蓆目様の圧痕が明瞭な土製品である。焼成は土師質であるが，器表は黒褐色を呈し，胎土に細砂粒をやや多く含む。側面上端部分はナデており，以下は縦方向のヘラ削りが施される。高杯の脚部片とも考えたが上端付近に剝離した形跡も見当らず，何に使用されたものか皆目見当がつかない。

以上のように出土遺物量も少なく，この第45号土壙の時期を決定するには躊躇せざるを得ないが，一応上限を7世紀前葉のものとしておく。（中間）

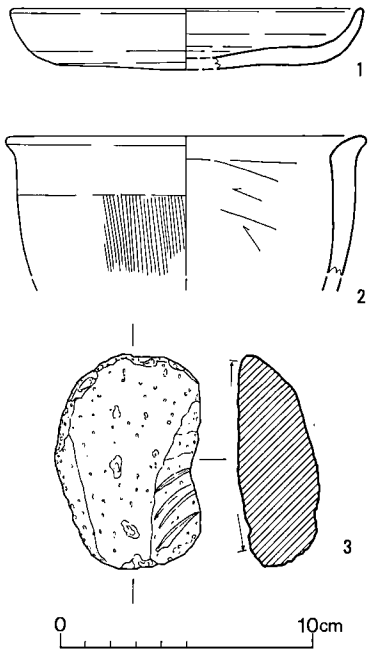
第46号土壙（図版58，第270図）

D群の中央南寄りに位置し，第46号住居跡に西半を切られ，第47号住居跡を南端で切る。3.0×1.75mのわりと整った楕円形プランを呈し，深さは0.98mと深い。

出土遺物（第273図）

1は土師器杯で，復原口径14.0cm，器高2.4cmを測る。体部外面と内面の中心まで横ナデが施されるが，底部外面は回転方向のヘラ切りがみられる。外面底部に黒斑部がある。2は土師器小甕で，復原口径14.2cmを測る。頸内面に稜をつくり短かく外反する口縁となる。胴部上端は，横ナデで縦ハケを消す。

3は，軽石製磨石で，径8.6×5.6cm，厚さ3.1cmを測る。当地～甘木・朝倉地方の河岸段丘の礫層に含まれている極めて軟質でもろい性質の軽石である。図示した表面のみが平らに磨られており，裏は自然面である。片側の側面には刃物で加工しようとした痕跡がみられる。



第273図　第46号土壙出土土器・軽石実測図（1/3）

以上の出土品からこの土壙の年代を求めるのは困難であるが，切り合い関係から推定はできる。当土壙を切る第46号住居跡からは7世紀の末に近い後葉の土器が多く，第47号住居跡は7世紀の中頃に近い後葉の時期が考えられる。よってこの第46号土壙は，7世紀後葉代の範囲の中におさまる或る時期のものとされよう。（中間）

第47号土壙（図版119，第274図）

F群の東南端に位置する巨大土壙である。全長13.24m，最大幅6.8m，最も深い所で1.6mを測る。東端で第53号住居跡を切る。土層図に見る如く，土壙全体を黒色土が覆っていたため，同一の土壙として掘り下げたが，実際には東半と西半に大きな土壙があり，更に各々に対する大小の掘り込みが行われている。よって最終的には大きな窪みとして埋没していったが，それ以前は何回となく掘り直しが行われたと考えられる。

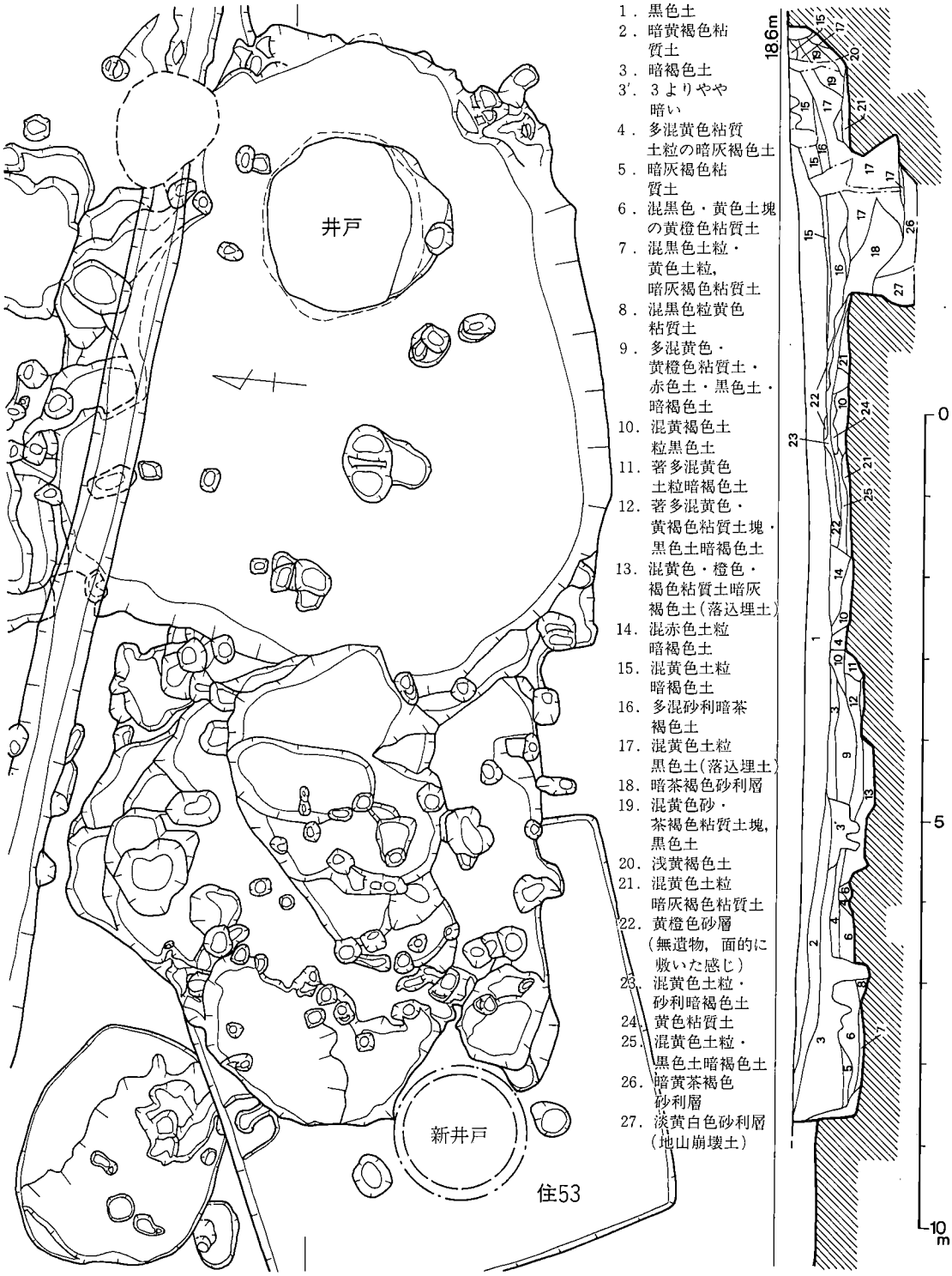
具体的にまず東半部からみてみよう。東半部は東西長7.1mの不整楕円形の大きな土壙が当初掘られたようである。その底面は平らで，壁面はほぼ直に近く，わりと整った形状をなしていたようである。それが次第に埋没してゆき，中央部で当初底面から25cmほど堆積した後に東端近くに直径2.1mの円形土壙が掘り込まれる。これは地表面から1.6mほどの深いもので，下半は砂利層の湧水面以下まで達している。この点から，井戸であったとの見方もできる。この円形土壙掘削と同時に，土層図での第22層（黄橙色砂層）が周囲に敷き固められている。これは西半では第2層（暗黄褐色粘質土層）が対応するもので，同様に強くたたき締められている。即ち，この井戸と思われる円形土壙が機能していた時期には，この大土壙は全体に大きな窪みとして踏み締められた生活面をなしていたことが理解できる。また，その後も土層図中に第14・10層の切り込みが見られる如く，いくらか掘り直して，再びごみ捨場の機能へと戻っていったものと考えられる。

ではこの井戸状円形土壙が掘削され，機能していた時期はいつか。出土遺物のうち19の須恵器杯が8世紀末，35の土師器杯が9世紀中頃の年代を示し，踏み締められた西半の第2層から出土している。また，土師器杯36・37と内黒土師器の39とが9世紀初頭～前葉の時期を示し，円形土壙埋没の最終段階に近い第16層から出土している。以上のことから，この井戸状円形土壙は，9世紀前葉頃には埋没しており，8世紀後半代の遺物が全体に殆んど無いことから8世紀末に掘削され，短かい期間の使用でその役目を終えたものと考えられる。これは，発掘時にも下半の砂利層がもろく崩壊し易かったことを経験しており，首肯できるところである。

次に西半の状況を見てみよう。西半部底面は総じて掘り込み部の多い，凹凸著しいもので，東半部底面と対称的である。東半の井戸状円形土壙掘削以前，即ち第2層が貼られる以前にも少くとも3期の部分的掘り直しが土層から観察される。また，平面観からも，西端部・西南端部・北端部・中央～東端部のそれぞれに深い掘り込みがみられ，何回となく掘り直しが行われた状況が判かる。

当初の大きな土壙が東西に存在したとすれば，土層からみて，東半の方がより古い掘削時期を示すと考えられる。この年代は，土壙全体から7世紀前半代の土器がかなりまとまって出土していることから，当初の東半部掘削の時期と考えて良いと思われる。

出土遺物は須恵器・土師器の各年代の土器多量の他に，移動式土製カマド片，瓦，砥石，鉄刀子など多種にわたっている。



第274図　第47号土壙実測図（1/80）

出土遺物（第275～285図）

須恵器

杯　蓋（1～10）　1は，蓋身逆転以前の7世紀初頭の所産で，残存部分はすべて横ナデを施す。復原口径12.0cmを測り，外面に短かい沈線がみられるが，ヘラ記号であるかどうか定かではない。

2～5・7は，蓋身逆転直後の7世紀前葉段階のもので，13の身の類とセットをなす。また返りが長く，端部から天井部へ至る間が丸味をもって屈曲し，やや深い感じを与える類である。返り端部径9.6～7.9cmで平均9.0cm弱である。器高2.6～2.2cmで，天井外面は4・7のように回転ヘラ削りを残すものもあるが，2・5のように既に雑なナデ調整が施されるものもある。2の天井外面には3本平行線のヘラ記号がみられる。

6・8は，返りも短かくなり，6の撮は磨滅している。7は天井外面も平坦で，未調整のままで端部から天井部へ直線的になる類である。いずれも7世紀中頃に近く，身の14とセットをなすものである。口径8.2cm，器高1.95～2.7cmを測り，いずれも外面の天井から下がる部位に回転ヘラ削りをわずかに残している。8の天井外面には，1本直線のヘラ記号がみられる。

9・10は，7世紀中頃に近い後葉代の所産で，短かい返りと撮を付ける。9は復原口径14.4cm，器高3.0cmを測る。いずれも天井外面には回転ヘラ削りを施している。

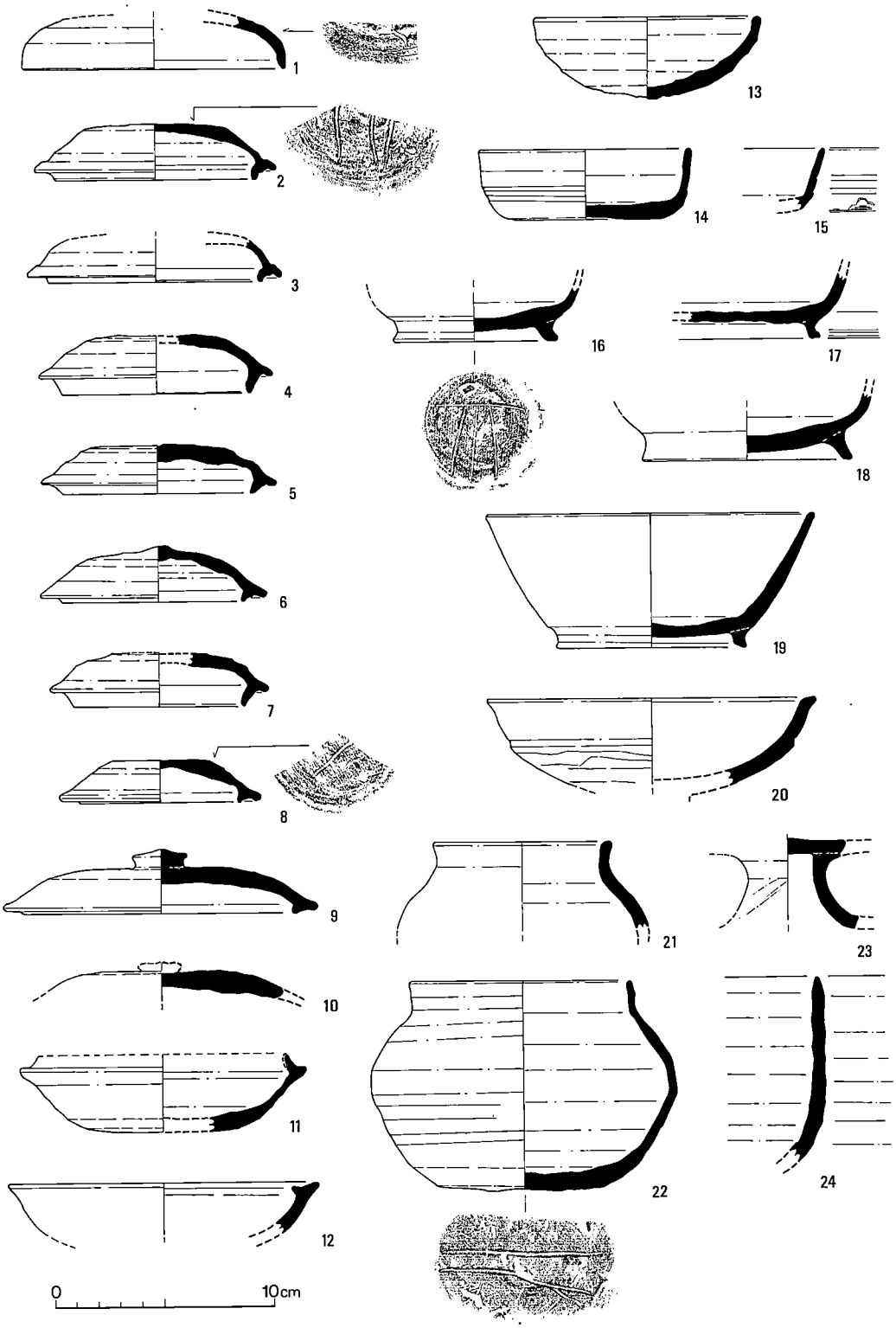
杯　身（11～19）　11・12は口径13.0～14.2cmと大きい，返りを有する6世紀末～7世紀初頭期のものである。12は生焼けで黄土色を呈する。11の底部外面には回転ヘラ削りが施される。

13は，蓋身の逆転直後のもので，7世紀前葉の所産である。口径10.4cm，器高3.7cmを測りすでに2～7のような返りの付く蓋よりも，明らかに法量が大きくなっている。底部外面のほとんどはナデているが，その周縁に僅かに回転ヘラ削りが施されている。

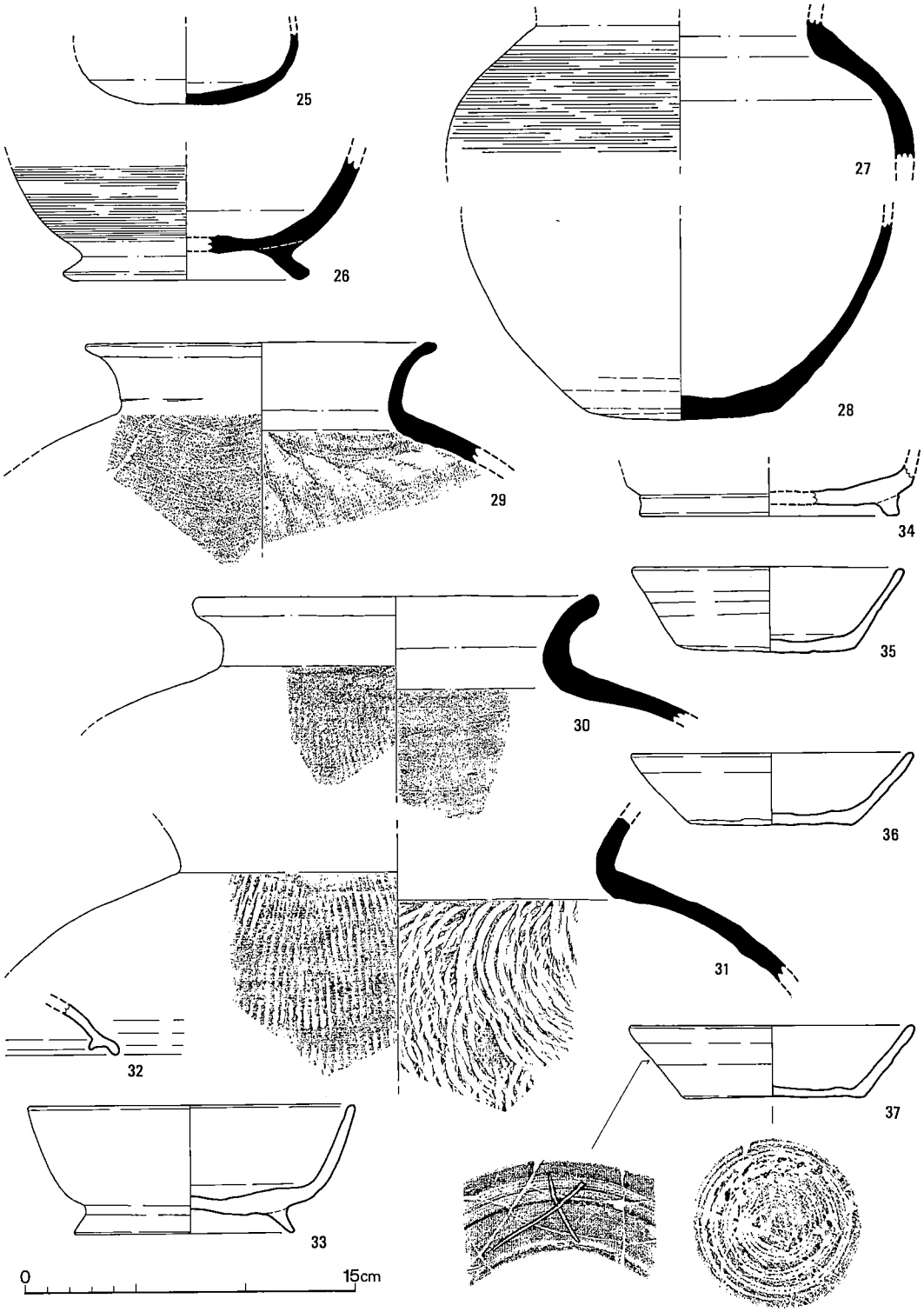
14・15は，底部が平たく，口縁が直に立ち上がる7世紀中葉のもので，各々第3層，第26層（井戸状円形土壙最下層）出土品である。14は，口径9.6cm，器高3.1cmを測り，体部下半に2条の沈線を巡らせ，以下に回転ヘラ削りを残す。底外面はナデている。15は外面に黒色自然釉が付着し，外面体部下端にはカキ目が施される。

16～18は，7世紀後葉代の長い高台を付ける類である。中でも16・18は7世紀の中頃により近い後葉代，17は末により近い頃の所産と考えられる。いずれも体部外面下端に回転ヘラ削り痕を残さず，横ナデ仕上げを施している。16の底外面には，1本直線とそれに直角に3本直線を組み合わせたヘラ記号がみられる。

19は，第2層出土品で，直線的に開く体部に，短かく外端で接地する高台を，体部との境に近い位置に接合する。8世紀末の所産で，口径14.9cm，器高6.1cm，高台径8.7cmを測る。胎土精良で，底部外面中央には回転ヘラ削り痕を残し，内底面はナデツケ，他はすべて横ナデで仕上げている。



第275図　第47号土壙出土土器実測図(その1)(1/3)



第276図　第47号土壙出土土器実測図(その２)(1/3)

高　杯（20・23）　20は復原口径15.0cmで，体部外面中途で段状をみせる類である。体部下半は手持ちヘラ削りを施し，内面には灰かぶりがみられる。23はやや低い脚部片で，内外面横ナデ調整を施す。杯部底面の接合部には同心円状の凹線を施す。

鉢（24）　深い椀状の形態をなし，生焼けで白黄灰色を呈する。内外面とも横ナデ調整で，凹凸が著しいのが特徴的である。

短頸壺（21・22・25）　21はわずかに外傾気味の直口壺で，復原口径8.2cmを測る。外面と口縁内面に灰かぶりがみられる。22は，口径10.2cm，器高9.5cm，胴部最大径13.9cmを測る。口縁はわずかに内傾し，胴部外面下端に回転ヘラ削りを施す。底外面はナデており，他は内外面強い横ナデで凹凸が目立つ。外面底部に２本平行線のヘラ記号がみられる。25は，薄手・小ぶりのタイプで，外面には自然釉が付着する。

壺（26～28・38）　26は外方へ長く強く踏ん張る高台を付け，外面にカキ目を施す類である。７世紀後葉代のもので，高台径11.1cmを測る。27は，胴部最大径21.2cmの広口の短頸壺となる。胴部外面はカキ目，内面は横ナデを施す。28は，やや凸レンズ状に丸底となる器形で，胴部下端から底外面にかけて回転ヘラ削りが施され，他の内外面は横ナデ調整である。38は，平底で，上半で胴が張り，やや長胴となる形状をなす。復原底径11.1cm，胴部最大径23.2cmを測り，底部外面はナデ，胴部外面下端は回転ヘラ削り，他は内外面とも横ナデ調整で仕上げている。胎土に細砂粒を少量含み，焼成堅緻で灰褐色を呈する。

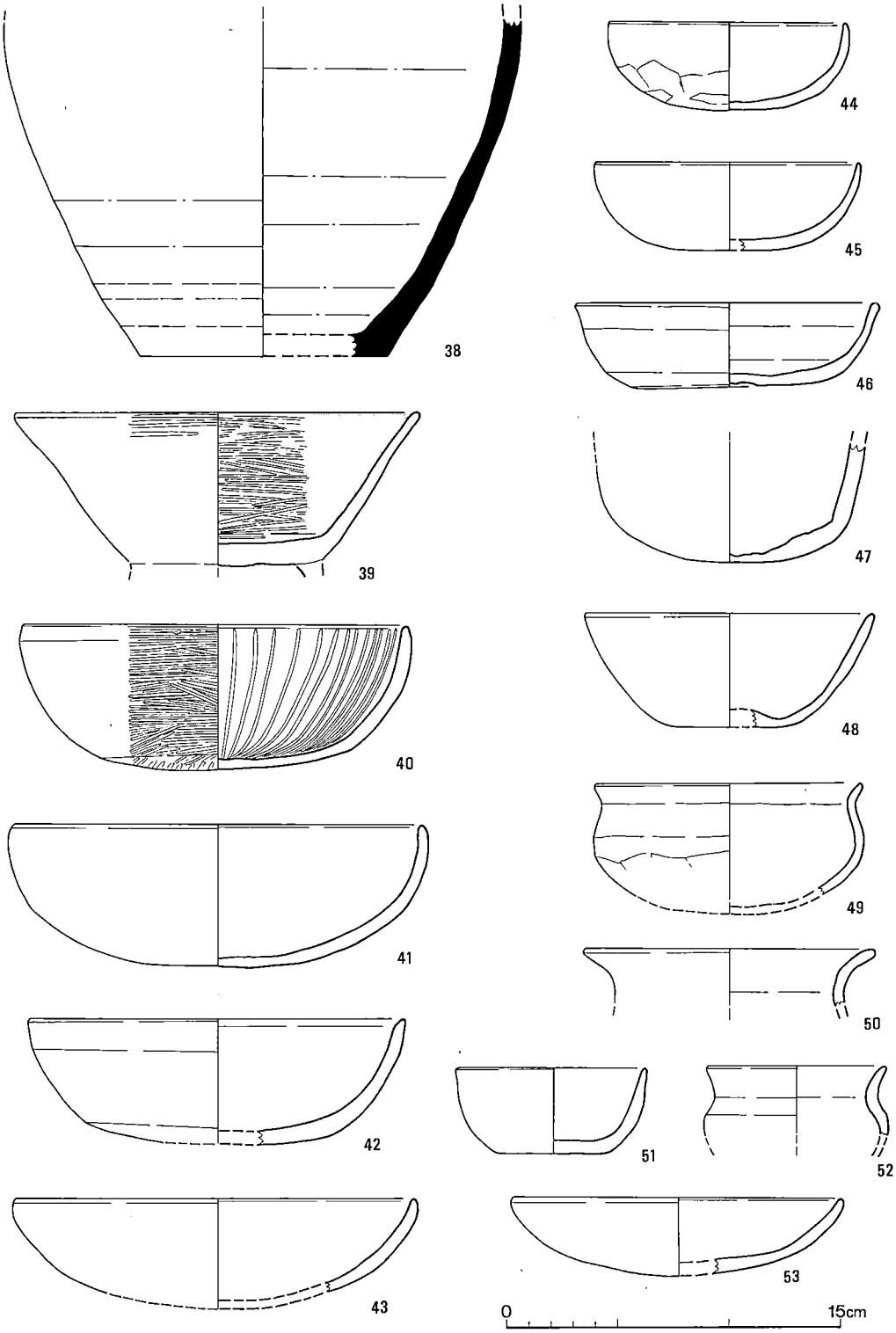
甕（29～31）　29は口径16.0cmで，口縁を丸くおさめる小ぶりの壺状形態をなす。胴部外面には工具による横方向への擦過痕がみられ，内面には強い指頭押さえナデ痕が残る。30は復原口径18.5cmで，胴部外面は縦位の平行条線状叩き目がみられる。他の内外面は横ナデ調整を施している。31は，やや大型の部類で，胴部外面は縦方向の平行条線状叩き目，内面は青海波あて具痕が密にみられる。

土師器

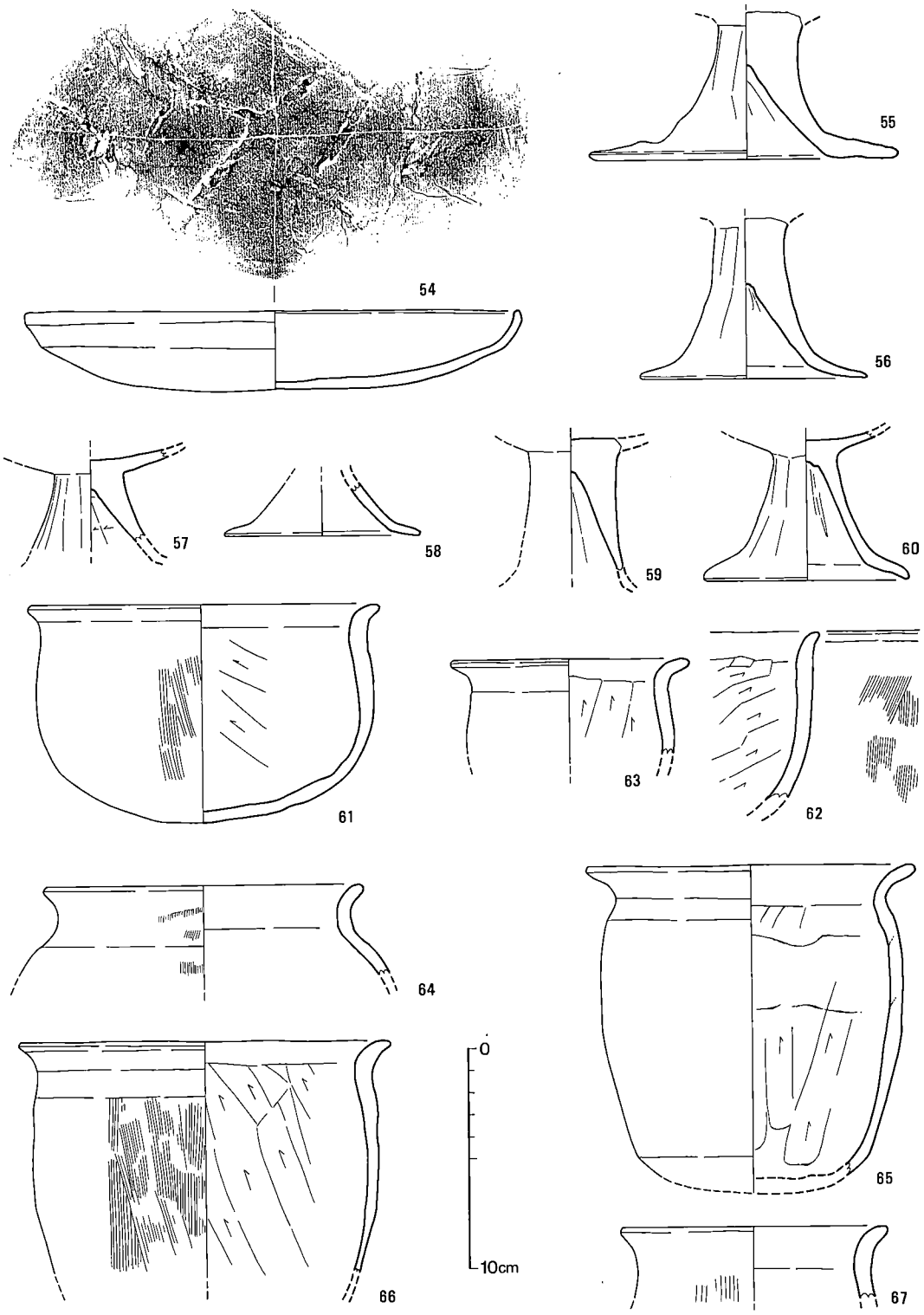
杯（32～37・39～48・53・54）　ここでは時期も各年代にわたり，器形の変化も多様となるため，須恵器を模したもの，丸い椀形のもの，皿に近い形状のもの等もすべてまとめて説明を加えることとする。

32～34は，須恵器模倣のタイプである。32は短かい返りを付ける杯蓋であるが，全体に丸味を持って成形されている。33は，復原口径14.8cm，高台径9.9cm，器高5.8cmを測り，７世紀後葉の所産である。高台は長く外方へ踏ん張っているが，端部の形状が須恵器とは異なる。34は，復原底径11.8cmで，低い高台を付ける。須恵器の生焼けの可能性もある。

35～37は，底部ヘラ切り離しの杯で，いずれも直線的に体部が開く。35は，口径12.3cm，器高3.9cm，底径8.0cmで，法量から９世紀中葉のものかと考えられる。第２層出土のものである。36・37は，口径13.0cm，器高3.3cm，底径7.2～8.3cmを測る。体部内外面横ナデ，底部内面は



第277図　第47号土壙出土土器実測図(その3)(1/3)



第278図　第47号土壙出土土器実測図(その４)(1/3)

ナデツケる。底部外面にはいずれも板目圧痕が付く。 37の体部外面には3本線を交叉させるヘラ記号がみられる。この2点とこの後の39は，第16層（円形井戸状遺構の最終埋没土）出土品である。36・37は9世紀前葉の年代が与えられる。

39は内面黒色土器で，体部が直線的に開き，高台を体・底部の境目近くに接合する類である。口径18.3cmで，内面と口縁部外端まで黒色で，他は明橙褐色を呈する。内面から外面体部上端までは横方向の密なヘラ磨きがみられ，他外面は横ナデを施す。

40～45は，全体に丸く内湾気味に立ち上がる，所謂椀の形状をなすものである。40は底部と体部の境に稜をつくり，内湾気味に開く器形となる。口径17.3cm，器高6.5cmと大型で，胎土精良である。外面には化粧土がかけられ，内面は横ナデの後に放射状暗文，外面は横方向へのヘラ磨きが施される。41は，復原口径18.3cm，器高6.4cmを測る大型品である。全面磨滅のため調整は判からない。42は40と同様に体部と底部の境に稜をつくり，全体に黒塗りして磨いている。口径17.0cm，器高5.7cmを測る。43はやや浅めであるが，口径18.2cmに復原できる大型品である。全面磨滅して調整不明である。以上の40～43は，第3層或いは第23層出土品で，7世紀初～前葉期の特徴を示している。44は，口径10.8cm，器高3.9cmの小型の類で，外面下半は手持ちヘラ削りが特徴的である。体部外面上半から内面上半まで横ナデ，以下内面はナデツケが施される。45は内外面磨滅して調整不明である。口径12.0cm，器高4.0cmを測る。

46は，7世紀後葉代の須恵器を模したものと考えられるが，全体に磨滅著しく，調整の観察が困難であることから，須恵器の生焼けの可能性もある。口径13.6cm，器高3.7cmを測り，体部下端から底部は回転ヘラ削りのようでもある。外底面中央には指押さえ痕が残り，土師器的である。

47は，器種を何とも称し難い形状を呈している。内外面ともに磨滅しているので詳細は判からないが，丸底で深い鉢となるものかとも考えられる。

48は，底径の小さい杯で，第16層出土品である。復原口径13.0cm，器高5.1cmを測る。磨滅して調整はわからないが，平安前期の所産であろう。

53は浅い皿状の形態をなす。復原口径15.0cm，器高3.4cmを測り，調整不明である。54は，口径22.7cm，器高3.6cmを測る大口径の類である。内底面に大きく十字のヘラ記号が施されるが，その意味は不明である。底外面は手持ちヘラ削りかと思われるが磨滅著しく，定かではない。

高　杯（55～60）　55は脚端径14.1cmと，長く裾拡がりになるもので，脚柱上半は充実する。脚柱部内外面はヘラ削りのままである。56は55ほど裾が拡がらないが，他は同工である。端部径10.4cmを測り，外面裾部に黒斑がみられる。57は7世紀初頭前後の小ぶりのタイプである。脚柱内面は横方向のヘラ削りで中を抉っており，外面は縦位のヘラ削りが施されている。58は薄手で小型の脚部で，端部径9.0cmとなる。全面磨滅しており調整不明である。59は長めの脚柱となるもので，外面はヘラ削りしておらず，内側にはシボリ痕がみられる。弥生～古墳前期の

混入品かとも考えられる。60は，裾端部が内湾気味になる特徴を示す。脚柱外面は縦方向ヘラ削りかと思われ，7世紀前葉前後のものかと考えられる。

鉢（49～52・61～63）　ここでは小口径で，口縁が短かく外反する丸底状のもの，小さな杯状のもの，形状は小甕であるが法量が極めて小さいものなどをまとめて，説明を加えたい。

49は，薄手で口縁部が短かく外反し，胴部が上半で張る器形をなす。復原口径11.9cmを測り，胴部下半はヘラ削りを施している。50は，復原口径13.0cmを測り，薄手でやや長く外反する口縁をなす。51は，口径8.5cm，器高3.9cmと小さく，平底をなす。外底部に黒斑が付く。調整不明である。52は，短かく外傾する口縁で，口径8.0cmの小型品である。全面磨滅して調整はわからない。

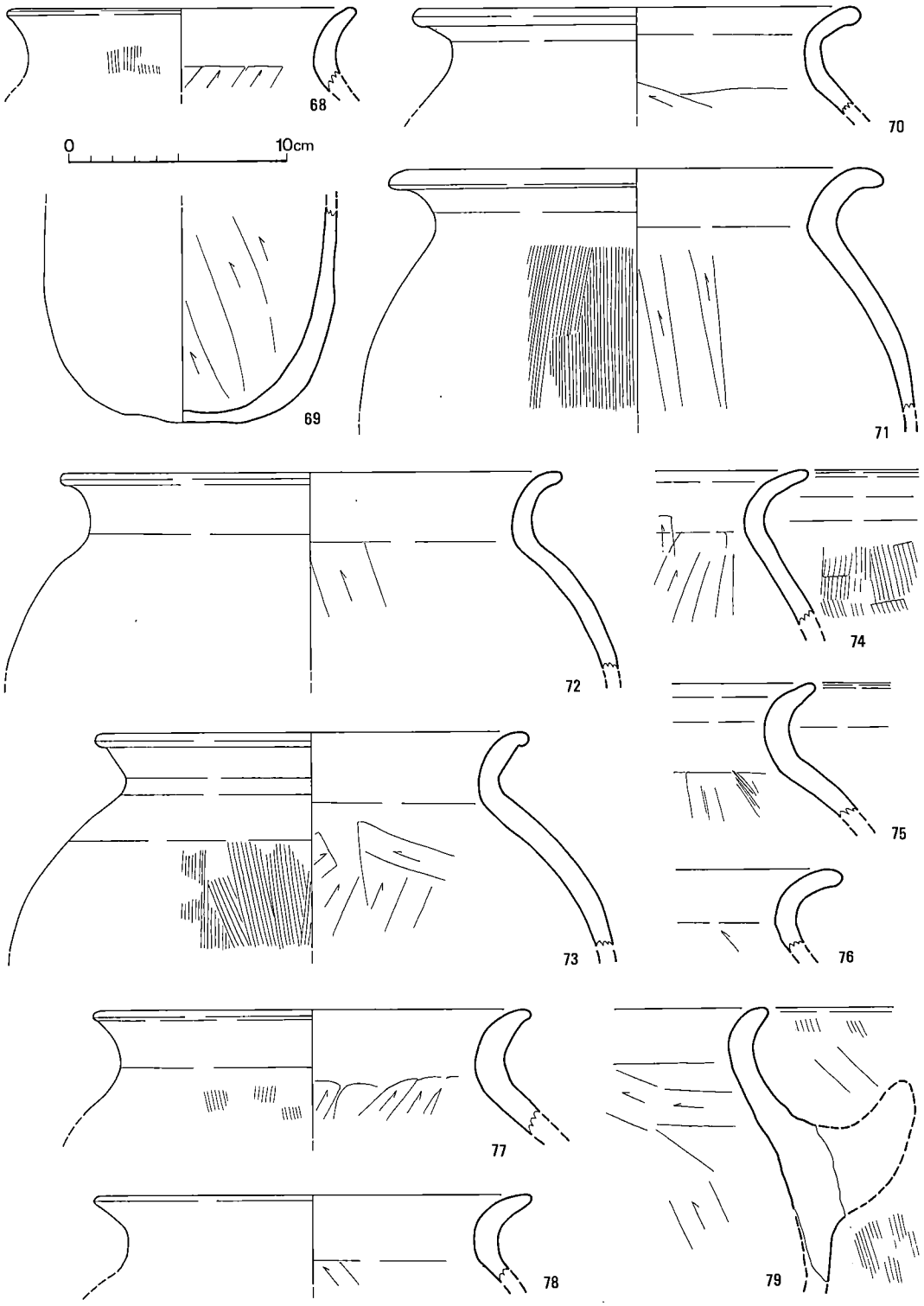
61は，口径16.0cm，器高10.0cmを測り，短かく外反する口縁に不安定な丸底を有する。口縁内外面横ナデ，胴部外面は縦ハケ，底部外面はナデている。63は，小甕の中でも特に小さいので，ここに分類したものである。第26層出土品である。口径10.8cmで，内面はヘラ削り上げ，外面は磨滅して調整は不明である。

小　甕（64～69）　64は薄手で，張る胴部から頸内面に稜をつくり，外反する口縁となる。外面には縦ハケが残る。65は，頸部でくびれて，肥厚しないまま長めに外反する口縁となる。復原口径15.0cm，胴部最大径13.7cmを測る。胴下端で屈折して底部へとつながる。外面の調整は不明である。66は，胴部上半でゆるやかにふくらむ類で，復原口径16.9cmを測る。67は，胎土精良で，外面には縦ハケが残る。復原口径12.1cmの小ぶりな類である。68も胎土精良で，復原口径16.0cmを測る。69は，胴部下半で器壁が厚くなり，胴部最大径13cm前後となる。外面の調整は磨滅著しく観察できない。

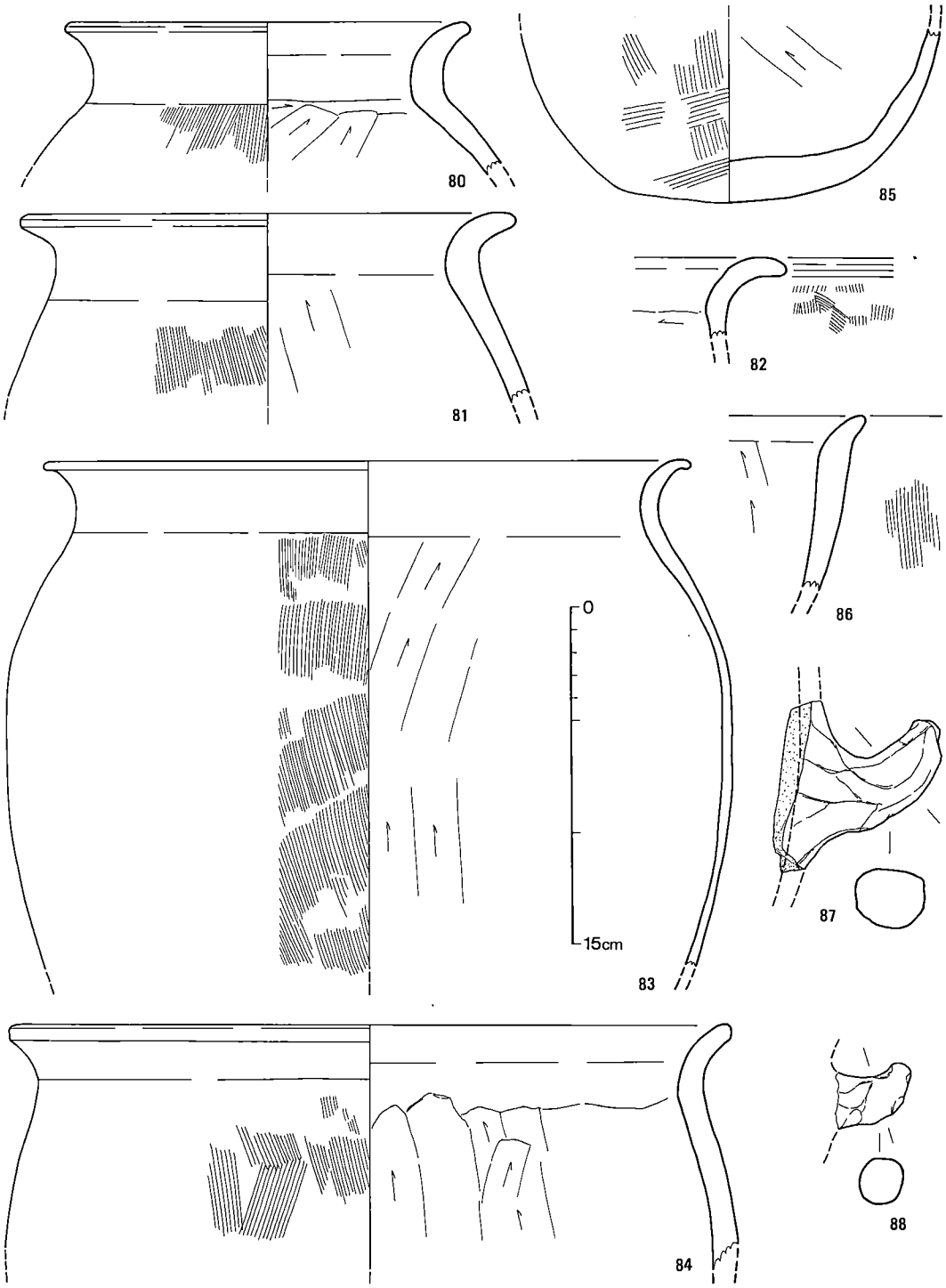
甕（70～101）　70は頸部から口縁へ2回屈折して開く類で，復原口径21.0cmを測る。胴が上半で強く張るタイプで，口縁端部は丸くふくらむ。71は，復原口径22.6cmを測り，外面には煤が付着する。72は，丸く外反する口縁につくり，胴部は上半で強く張る。復原口径22.9cmを測る。73は，復原口径19.8cmとなり，口縁外端が丸く突出する特徴を示す。74は，2段に屈折して開くタイプである。75も同タイプで，口縁内側から外面にかけて橙色の化粧土をかけている。76は頸部で肥厚せず，丸っこく外反する口縁となる。

77～81は，胴が強く張るが，口頸部で肥厚し，内面に稜をつくるタイプである。77は，復原口径20.0cmを測り，頸部で厚く，口縁へと薄くなる類である。78は，内外面磨滅しており，復原口径20.0cmを測る。79は，把手が付いたもので，口縁は短かく外反する。内外面ともに煤が付着している。80は，復原口径18.0cmを測る。81は，胴部外面に煤が付着している。

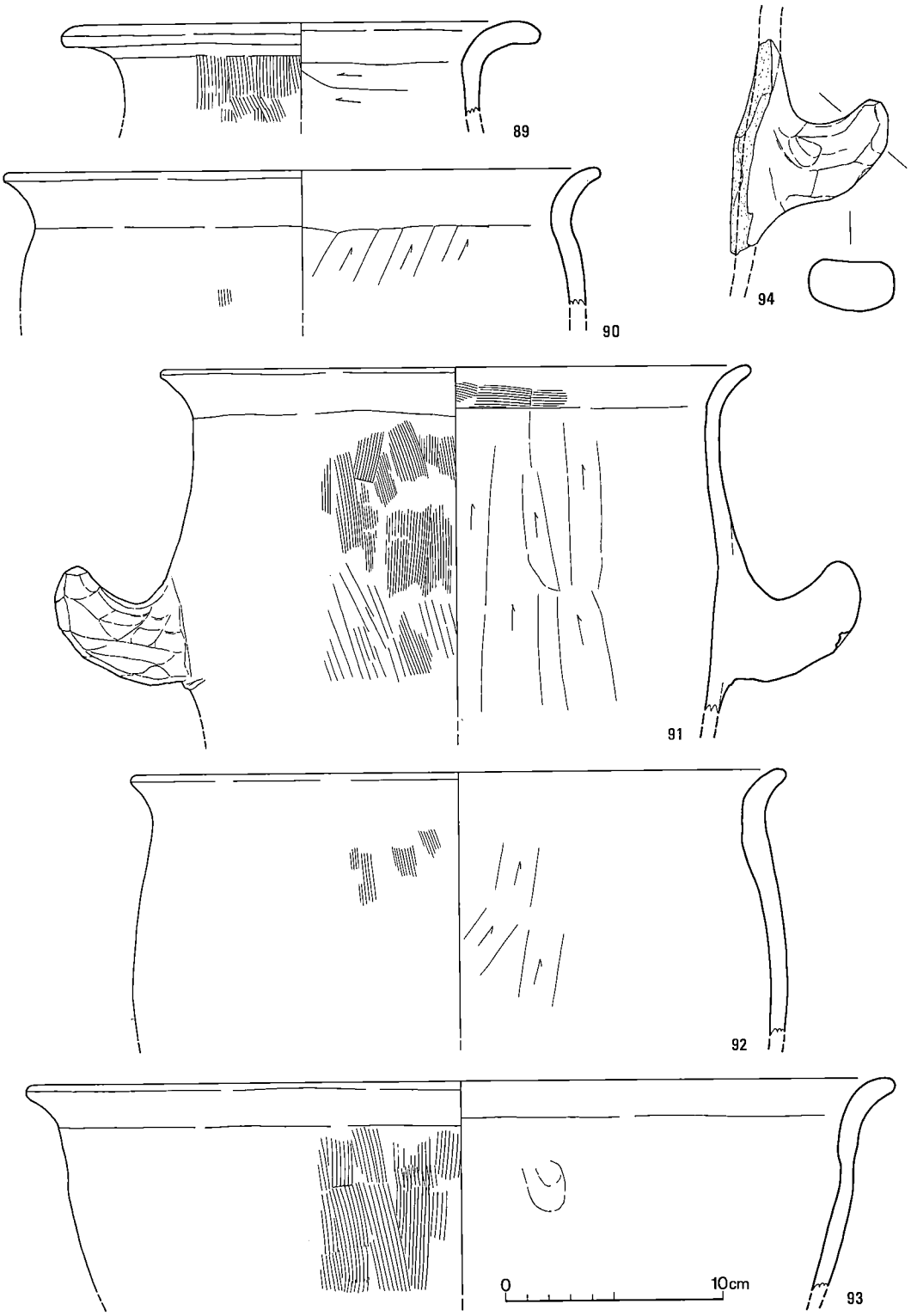
82～84・89～91は，頸部内面に稜はつくるが口頸部が肥厚せず，胴部の張りもそれ程強くなく，ゆるやかなものである。82は，長く丸く開く口縁で，胴内面は横方向のヘラ削りがみられる。83は，胴上位で張るが，全体に器壁が薄く，頸部内面の稜も不明瞭である。復原口径28.6cm，



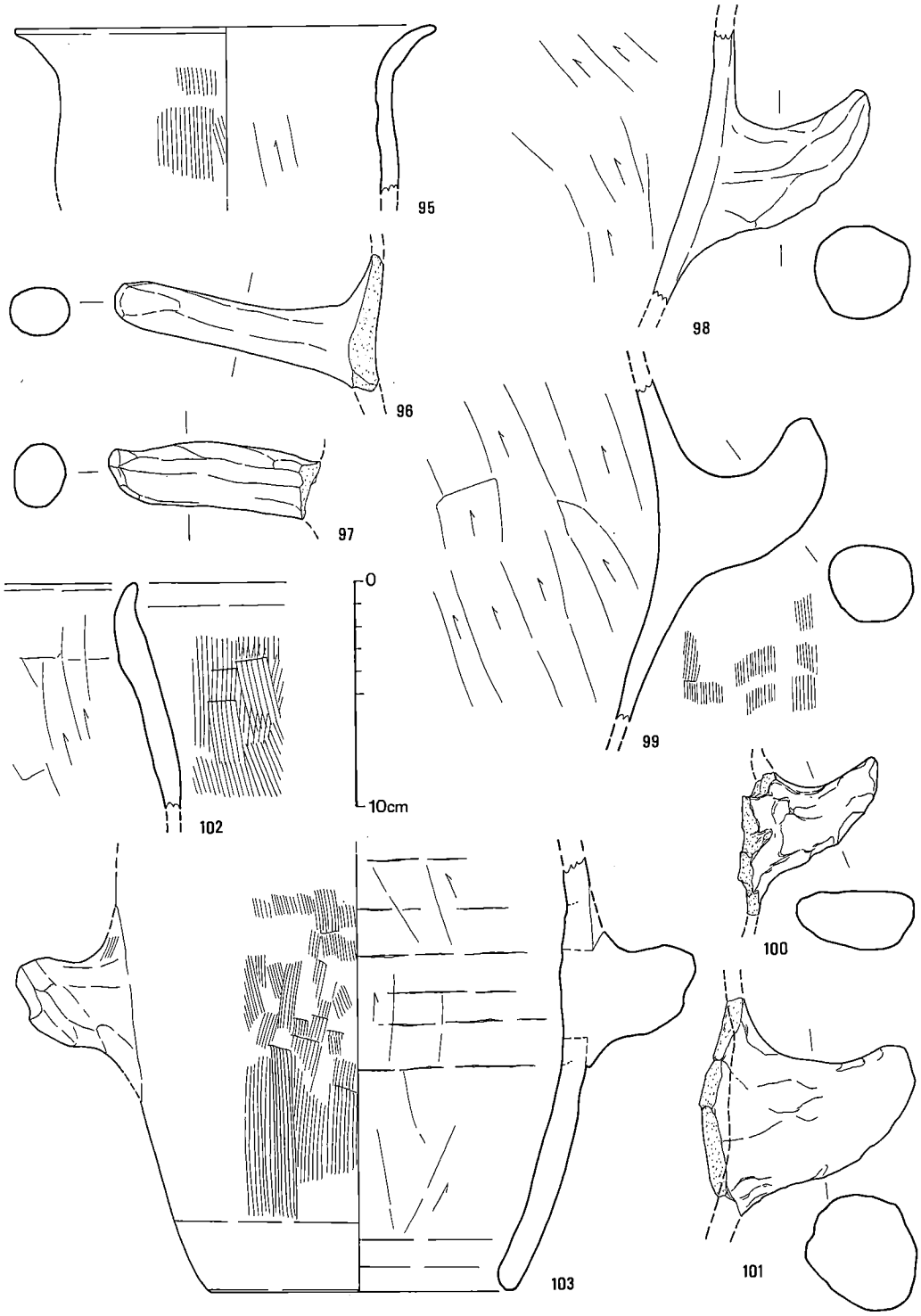
第279図　第47号土壙出土土器実測図(その5)(1/3)



第280図　第47号土壙出土土器実測図（その６）(1/3)



第281図　第47号土壙出土土器実測図（その７）(1/3)



第282図　第47号土壙出土土器実測図（その８）(1/3)

胴部最大径32.0cmを測る。外面の縦ハケは細かく丁寧である。84は，頸部内面に削りの稜をつくり，ゆるやかに外傾気味に開く口縁をなす。復原口径31.9cmを測り，胴の張りは弱い。89は，胴部内面に横方向のヘラ削りを施し，長くのびて開く口縁となる。復原口径22.0cmを測る。90は，ゆるやかに張る程度の胴部で，口縁もそれ程強くは外反しない。口径27.4cmに復原される。91は，復原口径27.1cmを測り，全く肥厚しない口頸部となる。この形状からみて，甑となる可能性が強い。把手の下端面に1個の刺突孔がみられる。胴部外面には黒斑部があり，口縁内面には横ハケが施されている。

92・93・95は，ゆるやかに開く口縁で，あまり張らない胴部となる類で，頸内面の稜が明瞭でないタイプである。92は，復原口径30.1cmで，胴外面には細かい縦ハケが施される。93は，復原口径40cmの大型品で，胴部内面は丁寧にナデており，指頭圧痕もみられる。外面には黒斑がある。95は，復原口径18.6cmとやや小ぶりで，胴部内面はヘラ削りと思われる。薄手で長く開く口縁となる。

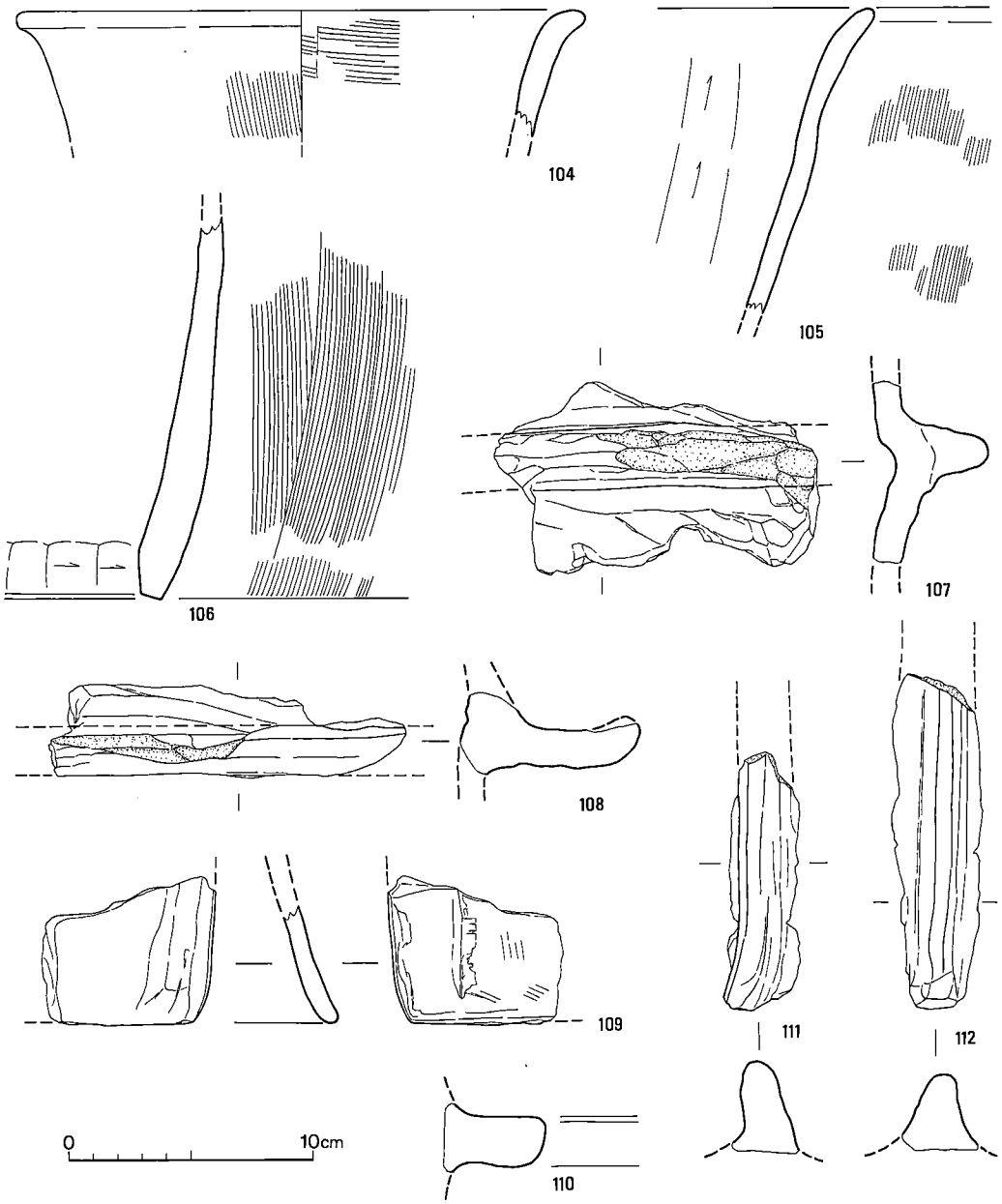
85は，底部の部厚い安定感のあるもので，底外面はハケ目の上を部分的にナデている。底部内面はナデている。

87・88・94・96～101は把手部分で，各種ある。87は断面が円形に近く，88は小型で断面円形をなす。94は普通の大きさであるが，断面は扁平で特徴的である。96は，長さ11.0cm，中心付近で2.6×2.1cmのやや楕円形の断面を呈する異種品である。全体に磨滅しているが，わりと丁寧にナデているものと思われ，把手の変種と考えた。97も，現存長9.3cmの長い棒状を呈し，断面は楕円形となる。これも把手の変種と考えておく。98・99は大型品で，断面は円形に近い。いずれも器壁との接合方法は確認していない。100はやや小ぶり品であるが，断面が扁平で特徴的である。101は太く大きなもので，全体に磨滅著しい。

甑（103～106）　明らかに甑であるもののみをここでとり上げるが，甕としたもののうち，口縁が薄くゆるやかに外反するタイプのものも甑となる可能性が強い。103は，底径13.6cmを測るやや小ぶりのもので，器壁が厚く，短かい把手を挿入するタイプである。底部下端内外面は横ナデ調整を施す。外面胴部に黒斑部がみられる。104は，極く短かく外傾程度に開く口縁となり，口縁内側には横ハケ調整を施す。復原口径23.0cmを測る。105は，図上では少し外傾しすぎているが，ごく気持ちだけ開く口縁となる。106は，下端面と内面最下端部分がヘラ削りされ，シャープな角をつくる。内面下半はナデており，上半は磨滅している。下端付近は黒色になっている。

無頸壺（86・102）　胴中位から下ぶくらみに張り，丸底となる形態で，8世紀以降の所産と考えられる。86は図中では傾きがおかしいが，ぐっと内傾するものであり，102と同様の器形となろう。102は，短かく折れてほぼ直口する口縁となる。

土製カマド（107～112）　107は，天地が定かではないが，貼り付け廂部分と考えられる。内面

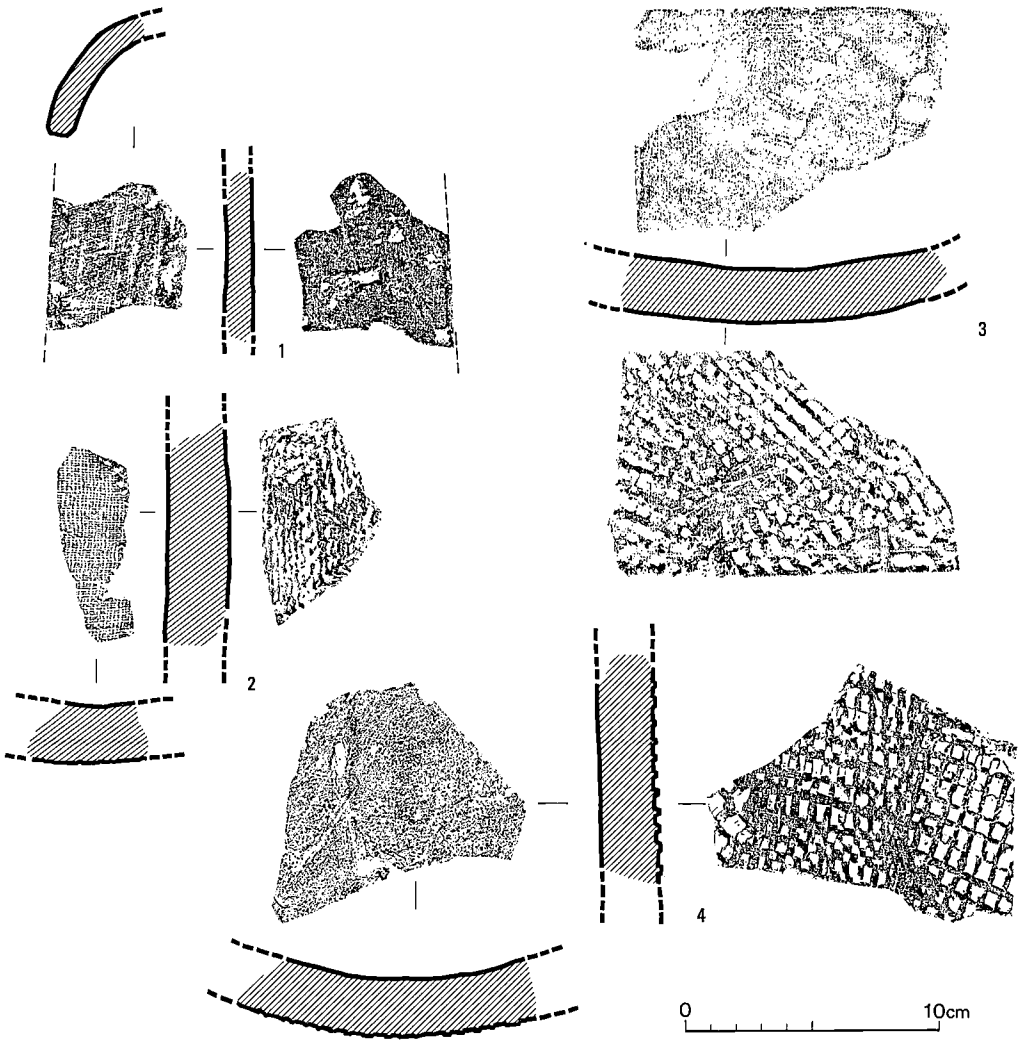


第283図　第47号土壙出土土器実測図（その９）(1/3)

は接合時の押さえで大きくへこむ。焚き口両側の部分になるのかもしれない。108も貼り付け廂部分で，上方への反りがみられる。下面には煤がこびりつき，焚き口部の上部にくるもので

あろう。109はカマド本体の焚き口部右角下端片である。全面煤が付着している。110も貼り付け廂の一部と考えられるが，短かく，器表はナデて丁寧なつくりに見え，確証を欠く。111と112は，貼り付け廂の下端部分である。112の接合面には，本体の器表に付けられていたハケ目の圧痕がみられる。

瓦（第284図）　1は薄手の丸瓦片で，凸面は縦方向のナデが施され，凹面は布目の上を縦方向に指ナデし，縞状に布目を消している。側面とその両角はヘラ削りで小さな面取りを施す。白褐色の生焼け品である。2は厚手の平瓦片で，本遺跡出土例では珍しく凸面には縄目の叩き

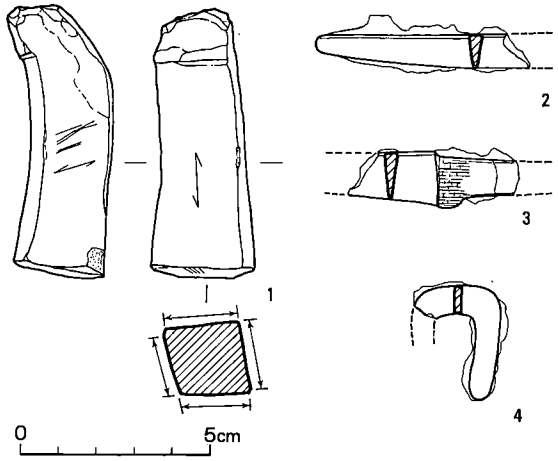


第284図　第47号土壙出土瓦実測図（1/3）

を施している。凹面は布目が明瞭である。3は平瓦片で，凸面は正格子の叩きを斜位に施し，凹面は工具による擦過痕がみられる。4は，平瓦片で，凸面は正格子の叩き，凹面は布目の上を半分以上ナデ消している。

砥　石（第285図1）　小型の持ち歩き用仕上げ砥石である。シルト岩製で，長さ7.0cm，最大幅2.8cmで，やや湾曲した方柱状を呈し，頭端付近に，明瞭な段を削り出しており，ここに紐をかけて，携帯用としたものであろう。下端面も使用しており，都合5面が使用面である。

鉄　器（第285図2～4）　2・3は刀子で，2は現存長5.5cm，幅0.9cm，厚さ0.3cmである。3は関際から茎部分に柄の木質が付着している。関部幅1.4cm，厚さ0.3cmを測る。4は，厚さ0.15cmほどの薄い鉄板状のもので，右下先端部は錆ぶくらみがひどく，これ以上延びるものかどうか判断しかねる。鉤状となる可能性も考えられるが，用途は定かではない。



第285図　第47号土壙出土砥石・鉄器実測図（1/2）

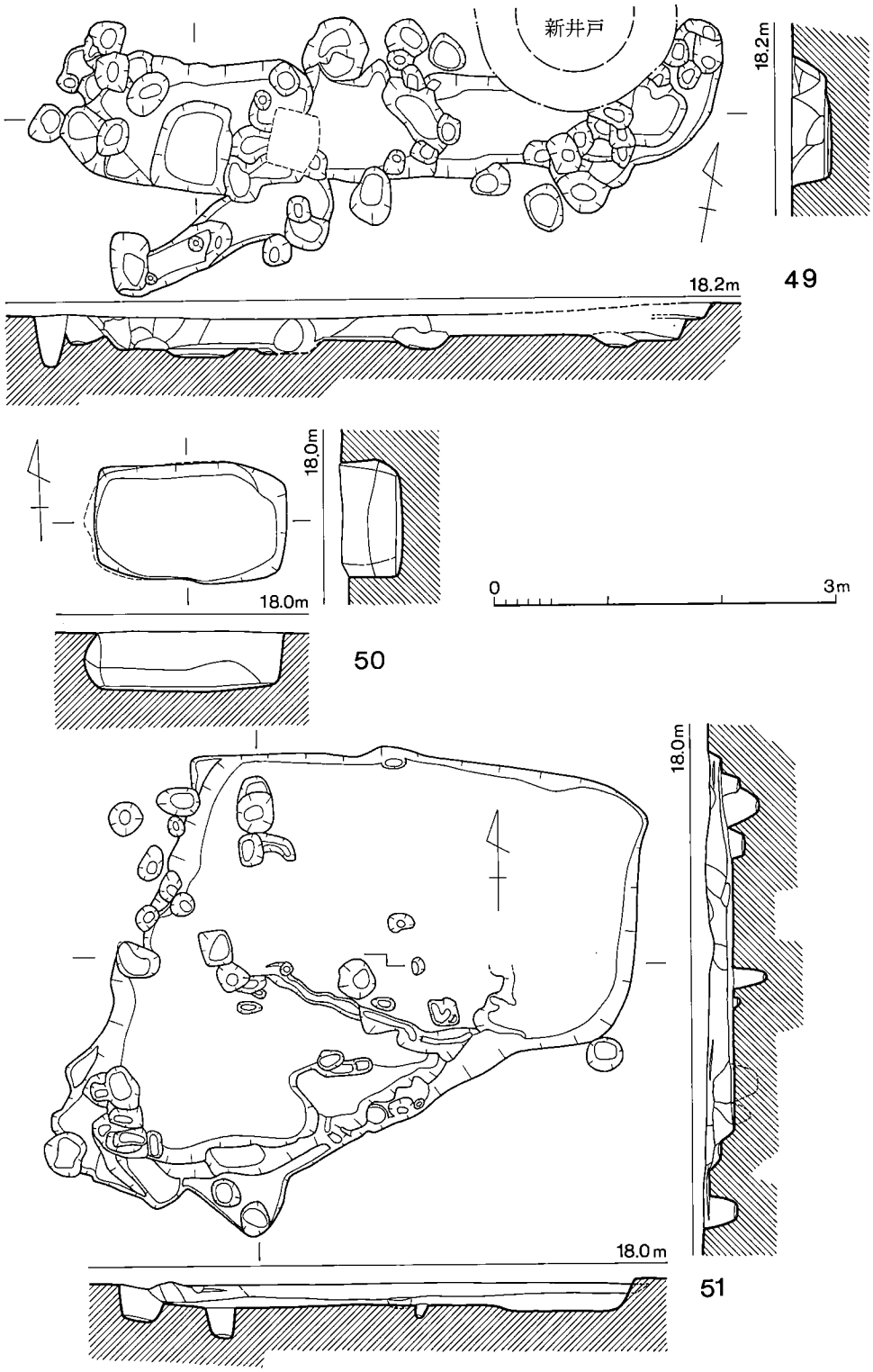
以上の第47号土壙の多量の出土品は，7世紀初～9世紀代まで多器種・全期間にわたっている。その中でも，7世紀前葉のものと，7世紀後葉のもの，8世紀末～9世紀前葉期のものが目立っている。量的には前二者が多い。

このようなことから，第47号土壙は，7世紀前葉代に東半の大土壙が掘られ，8世紀末前後に東端の円形井戸状土壙が掘削されたことが確認されたと考える。7世紀後葉～末頃の多くの遺物の出土は，周辺のこの時期の多くの住居群の存在から見て，その間に度々の掘り直しを経て投棄されたものと考えられる。（中間）

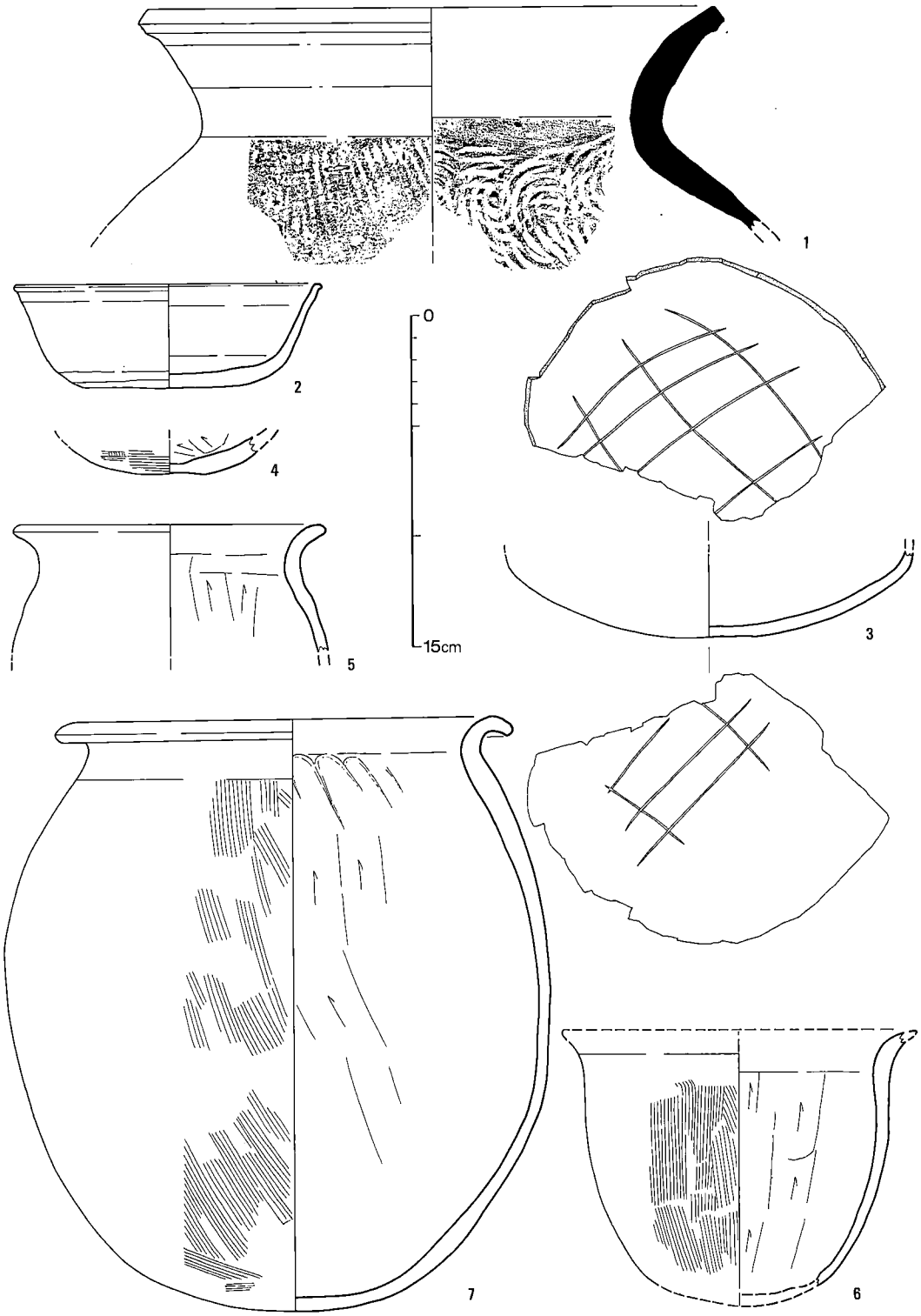
第49号土壙（第286図）

F群の西方にやや離れて位置する。ひょろ長いプランを呈する。長さ5.8m，最大幅1.1m，深さ0.28mを測る。北東端で畑灌の井戸に切られる。底面は極めて凹凸著しい。周辺の柱穴密集地帯の中に位置しており，当土壙と切りあうものも多数ある為でもある。

出土遺物（第287図）



第286図　49～51号土壙実測図（1/60）.



第287図　第49号土壙出土土器実測図（1/3）

1は須恵器甕で，復原口径26.5cmを測る。胴部外面は条蓆状叩目を施し，内面には青海波がみられる。胎土に細砂粒を多く含む。

2は土師器杯で，口縁外端が少し突出する特徴を示す。復原口径14.0cm，器高4.7cmを測り，底部外面は回転方向のヘラ削りの後に磨きをかけており，体部外面も横ナデ後に横方向の磨きをかける。体部内面は横ナデである。8世紀中頃前後の優品である。3は，7世紀後葉代の大口径の土師器杯で，内外面に沈線文様を施したものである。口径18.5cm弱となるもので，不安定な丸底をなす。内外面とも磨滅著しく，調整はわからない。内外面に鋭利な工具で直線を交叉させており，何のために，どのような意味で施文されたものか見当がつかない。

4～6は土師器小甕で，4は丸底状の小型品である。5は，頸部で肥厚せず，稜もつくらない。外面は磨滅しており，復原口径14.1cmを測る。6は，頸部でやや肥厚するが，胴部は張らず，ゆるやかに底部へとすぼまる。

7は土師器甕で，口径20.7cm，器高26.8cm，胴部最大径24.7cmを測る。頸内面に稜をなすが，あまり肥厚せず，丸く強く屈曲外反して，外端が下垂気味の口縁となる。胴部外面には黒斑がみられる。胴中位に最大径を持ち，底部は薄く，丸底となる。

以上の出土遺物は，3や7が7世紀後葉代の所産であり，2のような8世紀段階のものも混ざるが，この第49号土壙は7世紀後葉期に掘削されたものと考えておく。（中間）

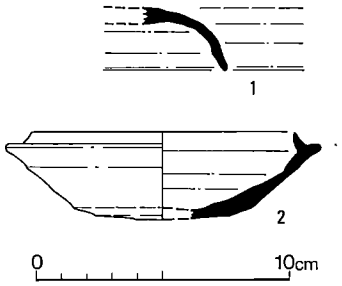
第50号土壙（図版121，第286図）

C群の北東端，近世高松家墓地の北外方に位置する。長さ1.68m，幅1.0m，深さ0.55mのわりと整った形態の土壙である。

ただし，出土遺物も全く無く，形状からみても他の土壙と異なり，時期決定・その性格の推定はなし得ない。（中間）

第51号土壙（図版121，第286図）

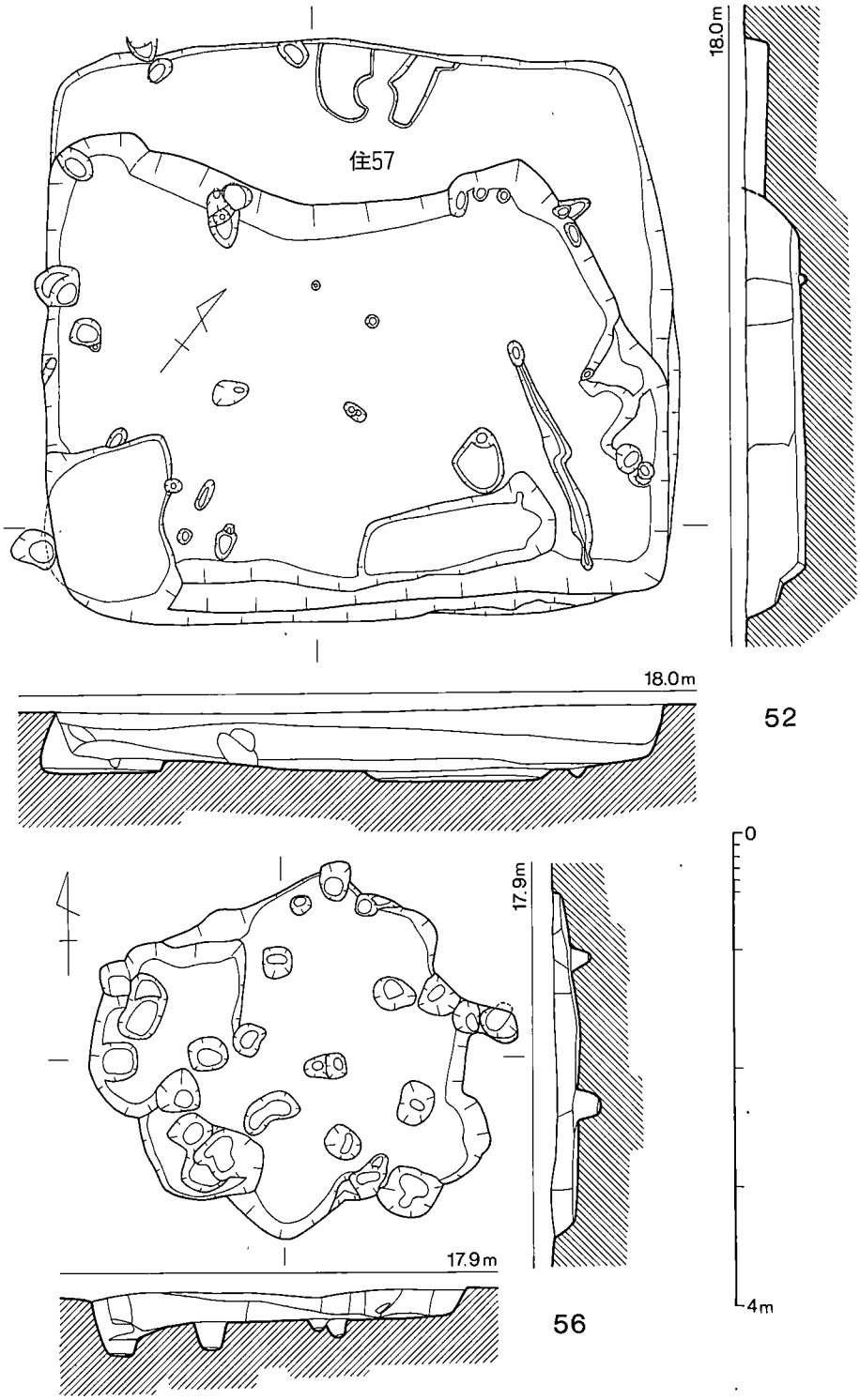
C群の南のC'群とした住居群の最東端に位置する。長径6.0m，短径3.6mのわりと大きめの土壙であるが最大深さ0.3mと浅い。北半部は東西に長い長方形状のプランをなし，南西端側の不整形掘り込みとが一緒になったものと思われる。



第288図　第51号土壙出土土器実測図 (1/3)

出土遺物（第288図）

1は須恵器杯蓋で，やや薄手である。天井外面は回転ヘラ削りが施される。淡黄褐色を呈する生焼け品である。2は，受け部端部径10.3cm，器高3.5cmを測る。



第289図　第52・56号土壙実測図（1/60）

外面は灰かぶりで，底部外面は回転ヘラ削りと思われる。底部外面に２本平行沈線のヘラ記号がみられる。

以上の出土遺物は，７世紀初葉の年代を示す。他に出土品が無いので検討の余地も無い。この時期を一応第51号土壙掘削時期としておく。（中間）

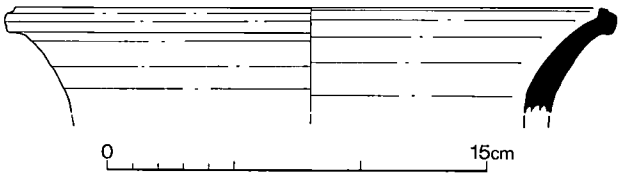
第52号土壙（図版122，第289図）

C'群の南端に位置し，第57号住居跡のプランの中に重復する。即ち，第57号住居跡が廃棄され，その埋没していった過程の中で，この窪みを利用して再び深く掘り直された土壙である。それもおそらく１回だけではなく，南端のオーバーハング気味に掘り込まれた深掘り部や，東南辺の長円形深掘り部分などの存在から，少くとも２度以上掘り直しが行われたものと考えられる。

この土壙を検出した後の出土遺物は少いが，住居跡覆土として一緒に取り上げたものもある。

出土遺物（第290図）

須恵器甕口縁で，口唇部が上方へ突出する特徴を示す。内外面とも横ナデで，復原口径24.2cmを測る。胎土に細砂粒をやや含み，暗灰色を呈する。



第290図　第52号土壙出土土器実測図（1/3）

図示したものの他に，第57号住居跡出土遺物としたもの（第142図）の中に当土壙のものと思われる土器もある。即ち１は，当土壙出土遺物と同一個体で，本来，住居に伴うものであろう。７・８は可能性がある。しかし，小片であるため時期決定は難しい。

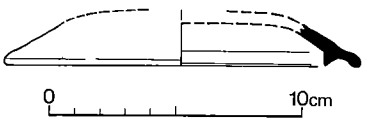
以上のことから，第52号土壙は，７世紀前葉期を上限とする第57号住居跡よりも新しい時期に掘削されたという言い方しかできない。（中間）

第56号土壙（図版122，第289図）

C'群の西北端に位置する。長さ3.2m，幅3.1mの不整形土壙で，深さは0.3mと浅く，底面は凹凸著しく，小さなピットが多数みられる。

出土遺物（第291図）

須恵器杯蓋１点のみである。復原端部径14.0cmを測り，小さい断面三角形の返りを付けている。残存部は内外面横ナデである。



第291図　第56号土壙出土土器実測図(1/3)

この遺物は７世紀後葉の所産であり，当土壙の掘

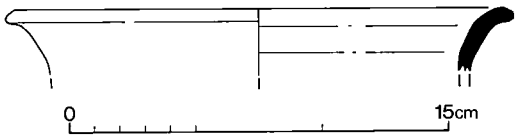
削時期を示すものかと考えられる。 (中間)

第57号土壙 (図版70, 第244図)

第30・31号土壙・第58号住居跡に切られて検出されたものである。略南北に長軸を取る不整の長方形を呈する。検出面での長径215cm・短径150cm・最深63cmを測る。東側から南側にかけて検出面下40～55cmに段を有している。 (森山)

出土遺物 (第292図)

須恵器広口壺の口縁片1点が出土した。復原口径20cmを測り，頸部からゆるやかに開き，端部は丸くおさめている。内外面とも横ナデ調整を施し，胎土に細砂粒を多く含む。焼成堅緻にて，淡紫灰色を呈する。



第292図 第57号土壙出土土器実測図 (1/3)

この土器1点のみから，当土壙の時期を決定するのは困難である。切り合い関係は既述した通りであるが，第30・31号土壙は出土遺物が無くて年代を決められない。第58号住居跡は7世紀初～前葉の時期と推定されており，この第57号土壙の掘削時期は，それを下限とする年代とされよう。 (中間)

第4表 薬師堂東遺跡土壙一覧表

No.	平面形	長径 短径 深さ(m)	出土遺物	備考	切り合い関係 (古→新)	住居群	時期
1	不整長方形	4.72 3.98 0.6	須恵杯，高杯，甕 土師杯，高杯，甕 軒丸瓦，丸瓦	極めて土器多量	建物21→土壙1	B	7C後半
2	長方形	0.8(+α) 0.9 0.21	なし			B?	
3	長方形	1.2 1.0 0.76	須恵杯片	(落し穴か?)		東端	(下限 8C後葉)
4	長方形	1.4 1.0 0.55	なし	(落し穴か?)		東端	
5	長方形	1.4 1.1 0.45	なし	(落し穴か?)		東端	
6	長方形	1.28 0.93 0.3	なし	(落し穴か?)		東端	

No.	平面形	長径 短径 深さ(m)	出土遺物	備考	切り合い関係 (古→新)	住居群	時期
7	楕円形	0.8 0.7 0.5	須恵杯 土師甕片			G	7C後葉
8	楕円形	1.6 1.2 0.65	須恵甕片	底中央に1柱穴		G	8C以降
9				土壙墓1に変更			
10	略長方形	2.85 2.1(2.6) 0.45	須恵杯，皿 土師甕片	(特小型竪穴住居か？)	溝18→土壙10	G	8C後葉
11	不整楕円形	5.1 4.1 0.56	土師椀，鉢，甕片	7～8回掘り直し		Eの東	～8C中頃前後
12	不整長方形	2.4 1.8 0.48	須恵杯，高杯 土師杯，皿，甕 瓦		土壙12→溝7	E	8C前半
13	不整長方形	4.4 1.2 0.22	須恵蓋，高杯，甕 土師皿，椀，鉢，甕			E	～8C前葉 ～中頃
14	不整長方形	1.58 0.73 0.42	鉄鏃			E	
15	楕円形	2.77 2.3 0.4	須恵杯 土師質緑釉，揑鉢		住13→住12→土壙15	E	平安後半
16	略長方形	1.18 0.81 0.28	なし			E	
17	不整長方形	2.23 1.6 0.97	須恵杯，鉢，長頸壺 土師刻字杯など	小さい土壙のわりに遺物多量		E	7C後葉～ 8C前葉
18	不整長方形	2.2 1.12 0.36	土師器杯，高杯，甕 小甕，甑		土壙18→溝5	E	7C中頃に近い 後葉
19	不整長方形	2.2 1.1 0.4	須恵杯蓋 土師杯，甕，甑			E	7C後葉
20	不整円形	2.5 2.0 0.6	須恵杯，壺，高杯，鉢 土師杯，甕，高杯 鉄器，紡錘車	極めて土器多量	土壙22→土壙20	E	7C中頃に近い 後葉～末
21	不整楕円形	3.6 2.5 0.5	須恵杯，高杯 土師杯，高杯，甕 鉄片	掘り直し1回	土壙22→土壙21	E	7C中頃に近い 後葉
22	不整形	1.7(+α) 2.0 0.2	なし		土壙22→土壙21 土壙22→土壙20	E	下限　7C中頃 に近い後葉
23	楕円形	3.5(+α) 2.2(+α) 0.25	土師杯，甕	東半は削除	住21→土壙23→溝5	E	奈良末・平安初 以降

No.	平面形	長径 短径 深さ(m)	出土遺物	備考	切り合い関係 (古→新)	住居群	時期
24	不整楕円形	4.5 3.3 0.65	須恵杯，鉢 土師甕，甑，カマド 瓦，鉄鎌		建10→土壙24→住21	E	7C後葉～ 8C末
25	不整長方形	2.4 1.8 0.7	瓦片		土壙26→土壙25	C	
26	不整形	4.6 4.2 0.7	須恵杯	3つの土壙の切り合い	住25→土壙26→土壙25	C	(7C中葉)
27				土壙墓　2に変更			
28				土壙墓　3に変更			
29				土壙墓　4に変更			
30	楕円形	1.7 1.5 0.2	なし		土壙57→土壙30→建5	C′	
31	長円形	2.4 2.0 0.2	なし		住58→住31→土壙31	C′	
32	不整方形	2.3 2.3 0.6	なし		住27→土壙32	C	
33	方形	0.95 0.7 0.2	なし			C	
34				土壙墓　5に変更			
35				土壙墓　6に変更			
36	円形か	2.4 1.5 1.1	須恵杯， 土師杯，甕，甑 紡錘車	遺物多し		A	7C後葉
37	円形	2.3 2.1 0.7	須恵杯，壺，高杯 土師杯，甕 土錘	遺物わりと多し		A	7C後葉・ 8C前葉
38	不整楕円形	5.1 4.0 1.1	須恵杯，高杯 土師杯，甕，甑 刀子	遺物多し		A	7C後葉・ 8C前葉
39				欠番			
40				土壙墓　7に変更			

No.	平面形	長径 短径 深さ(m)	出土遺物	備考	切り合い関係 (古→新)	住居群	時期
41				土壙墓8に変更			
42	不整形	6.6(+α) 4.5 0.4	須恵長頸壺 土師高杯，甕 瓦，土錘			E	7C後葉
43	不整形	6.4 6.2 0.4	須恵杯，長頸壺 土師器 刀子，砥石，棰先瓦			E	7C中頃に近い後葉～8C前
44	不整台形	3.25 2.4 0.28	須恵杯			E	8C末
45	略円形	1.3 1.1 0.6	須恵杯 土師甕，不明土製品			D	上限7C前葉
46	楕円形	3.0 1.75 0.98	土師皿，小甕 軽石製品		住47→土壙46→住46	D	7C後葉
47	巨大不整形	13.24 6.8 1.6	須恵器多量 土師器多量 刀子，瓦，砥石	遺物多量，実際は3基以上が切り合う	住53→土壙47	F	7C前葉～後葉～8C末
48				井戸2に変更			
49	長楕円形	5.8 1.1 0.28	須恵甕 土師杯，小甕，甕			F	7C後葉
50	長方形	1.68 1.0 0.55	なし			C	
51	不整形	6.0 3.6 0.3	須恵杯			C′	7C初葉
52	不整長方形	5.23 4.1 0.48	須恵甕	住居埋没後掘り直し	住57→土壙52	C′	
53				土壙墓 9に変更	土壙墓9→溝53		
54				土壙墓 10に変更			
55				土壙墓 11に変更			
56	不整形	3.2 3.1 0.3	須恵杯			C′	7C後葉
57	不整長方形	2.2 1.5 0.6	須恵壺		土壙57↗土壙30 ↘住58→住31→土31	C′	下限 7C初～前葉

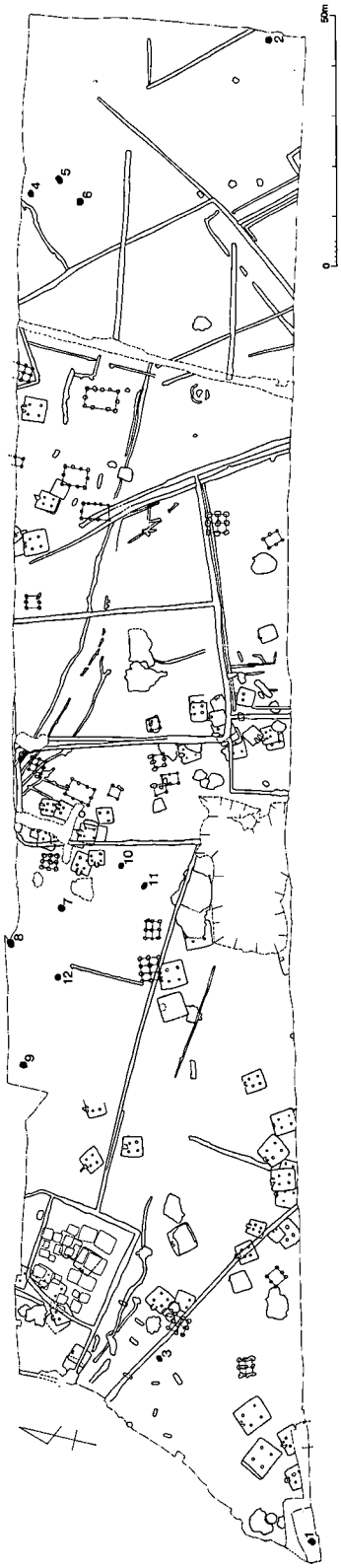
D　落し穴状遺構

本遺跡からは，やや寸詰まりの略長方形プランで底面中央に１孔を穿つ，所謂落し穴（陥し穴）と称される遺構が計12基検出された。この中には，中央に孔を持たないもの１基も群構成や形態上からこの種遺構に含めたが，その意味から見直すと，この呼称を付けず単に土壙としてとり上げた第３～６号土壙もこの種遺構となる可能性が強い。

また，出土遺物が皆無で，時期を決定できないのは難点であるが，「遺物が無い」ということが，この種遺構の性格を物語る大きな要因ともなってくるのであろう。

遺跡最東端から最西端まで分布するが，それらは大旨３群に大別される。即ち西の谷（薬師堂谷遺跡）に面した近辺，中央部の北側へ緩やかに下がる微低地，東端の南北に大きく拡がる微低地の３箇所である。

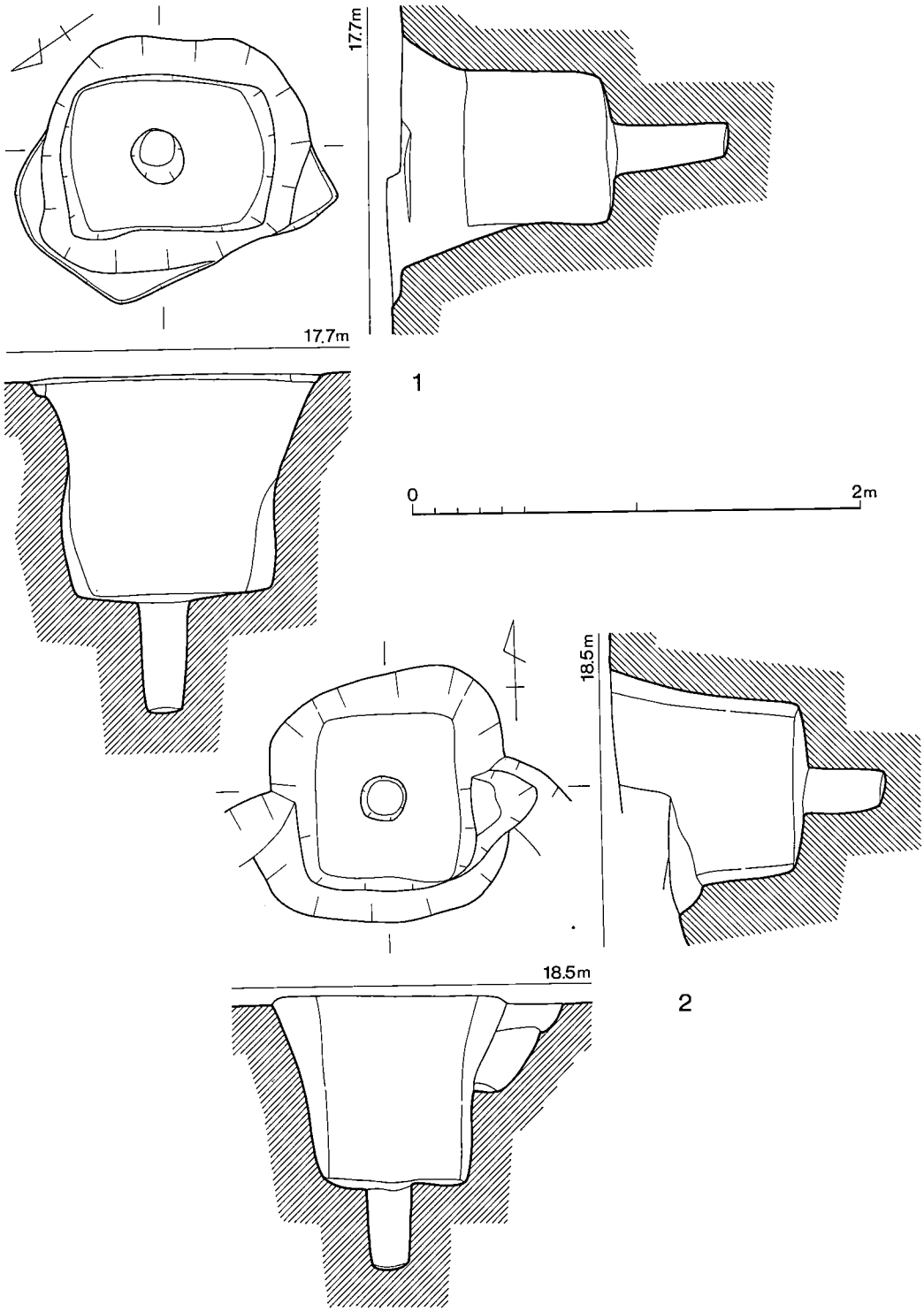
各々の群内における有機的な各個別遺構の役割や，その形態的特徴の詳細な検討は，巻末の論考の中で検討することとして，以下，各個別遺構について説明してゆきたい。



第293図　落し穴状遺構配置図（1/1,500）

第１号落し穴状遺構（図版123，第294図）

調査区南西隅に位置する。平面形態は上縁に主軸が異なる浅い土壙が認められるが，しかし，本体は，上端で不整方形，下端で長方形を呈する。規模は上端の長軸で121cm，短軸で103cm。下端の長軸は86cm，短軸は65cm。深さ100cmを測る。底面は平坦で中央北寄りに径25cm，深さ50cmの円形小穴を有する。壁面は壙中位部はやや緩やかに傾斜し，それ以下は直に立つか，もしくは若干外方へえぐり込む。長軸方位はN33°Eである。



第294図　第１・２号落し穴状遺構実測図（1/30）

第２号落し穴状遺構（図版123，第294図）

調査区南東隅に位置する。遺構の南半は近年の攪乱穴により約30cmの深さまで攪乱を受けている。平面形態は上端では不整方形，下端では隅円長方形を呈する。規模は上端で東西長105cm，南北残存長は97cm。下端の長軸は73cm，短軸は64cm。深さ86cmを測る。底面は若干中央に窪み，その中央に径20cm，深さ37cmの円形の小穴を有する。壁面はやや内湾して立つ。長軸方位はＮ０°30′Ｅである。

第３号落し穴状遺構（図版124，第295図）

第29号土壙の東５ｍで第39号溝の南に位置する。平面形態は上・下端とも不整長方形を呈する。規模は上端の長軸106cm，短軸は82cm。下端の長軸は85cm，短軸は54cm。深さ85cmを測る。底面はほぼ水平で中央やや西寄りに35×22cm，深さ28cmの長円形の小穴を有する。壁面の上位はやや緩く傾斜しており以下は直に立つ。長軸方位は，Ｎ54°Ｅである。

第４号落し穴状遺構（図版124，第295図）

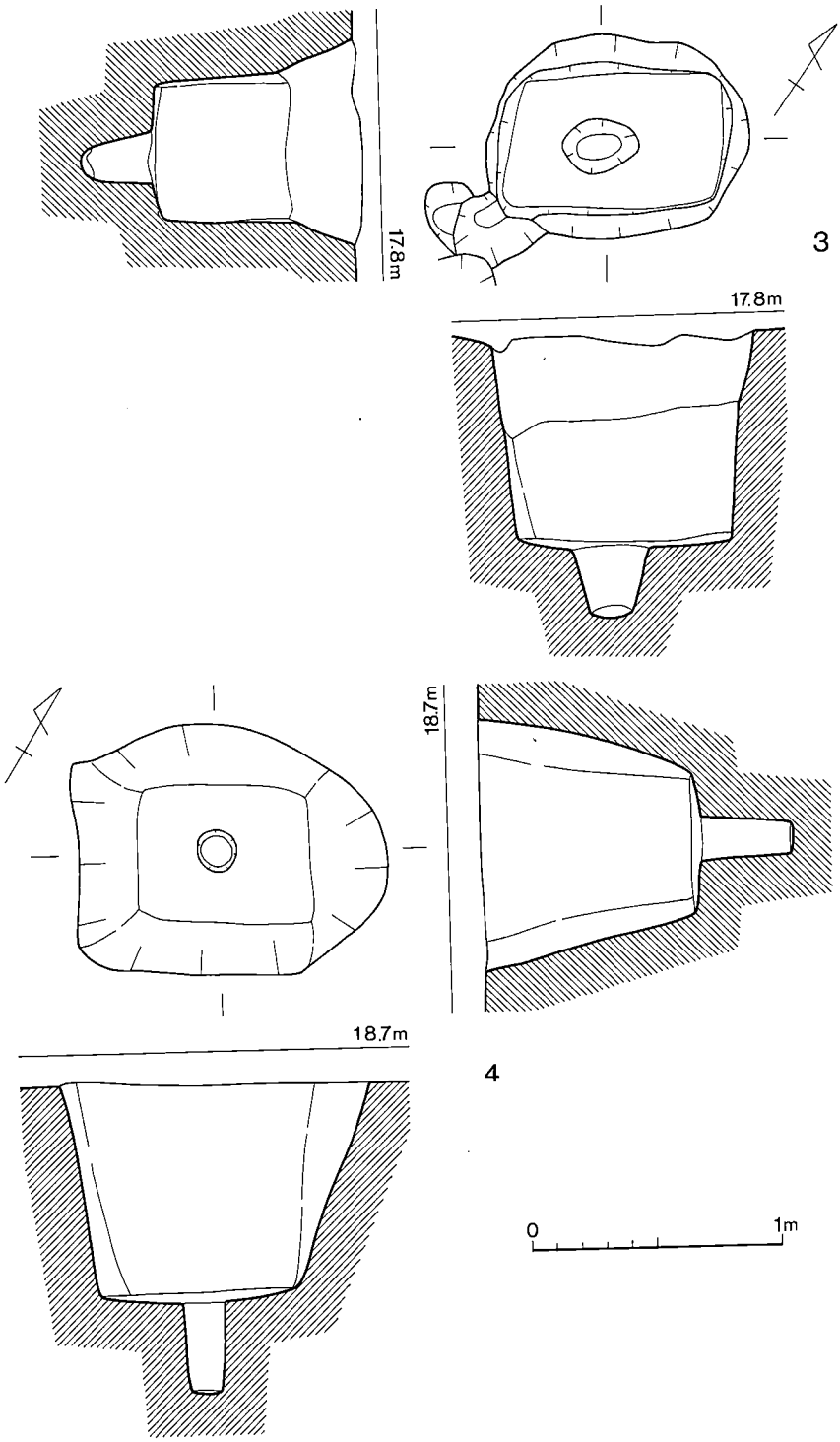
第42号溝の東で第５・６号落し穴状遺構のすぐ北に位置する。平面形態は上端では不整長方形で，下端では隅円長方形を呈する。規模は上端の長軸124cm，短軸は101cm。下端の長軸は69cm，短軸は55cm。深さ89cmを測る。底面は水平で中央に径16cm，深さ37cmの円形の小穴を有する。壁面はやや緩く立ち上がる。長軸方位はＮ55°45′Ｅである。

第５号落し穴状遺構（図版125，第296図）

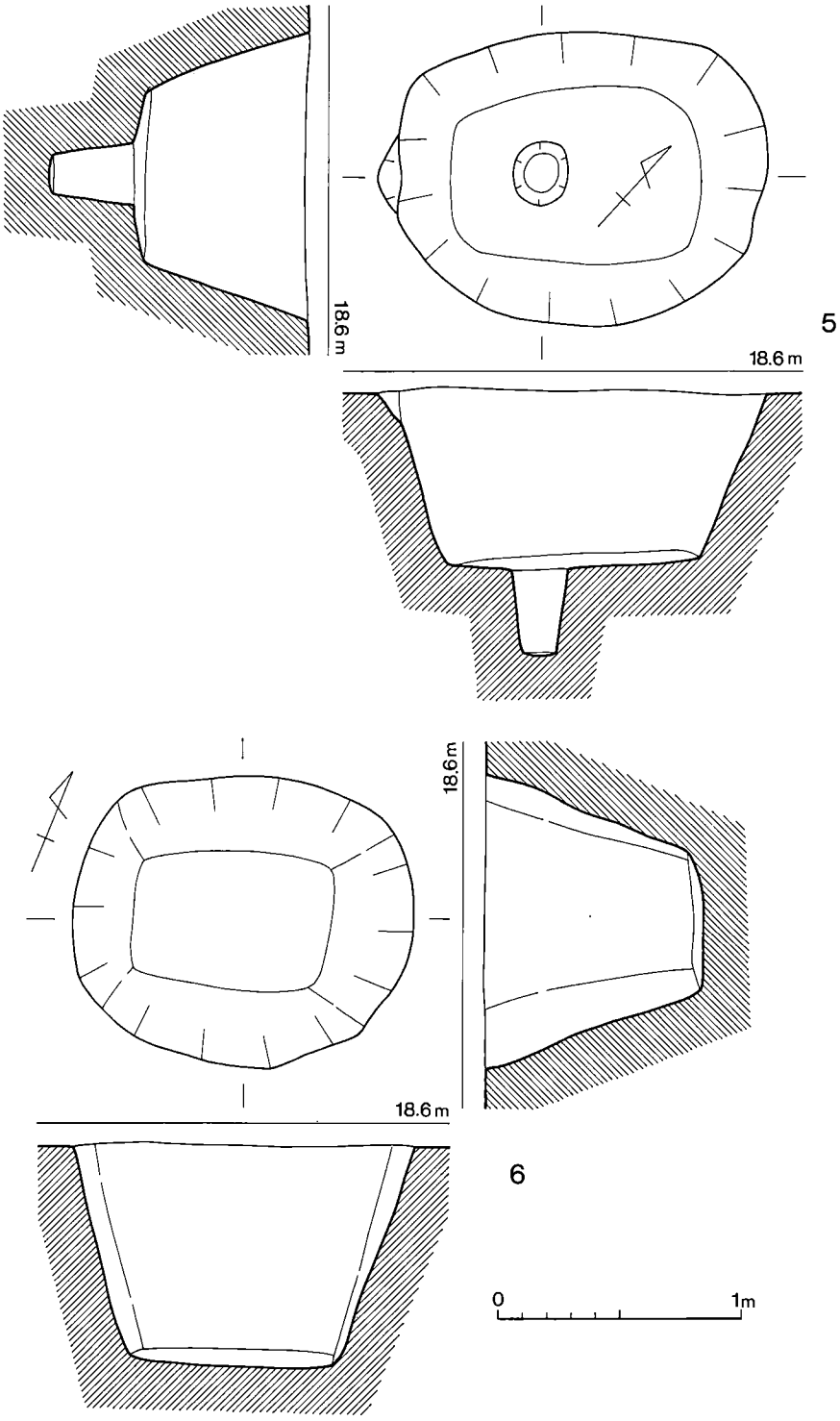
第４号落し穴状遺構の南東７ｍほどに位置する。５号は，４号とほぼ等しく長軸方位をＮ42°30′Ｅにおき，これら相互の関係を想起させるように平行に並ぶ。平面形態は上・下端ともに不整長方形を呈する。規模は上端の長軸が161cm（南西方向の上端のふくらみは上縁の崩落と察せられ，復原値は155cmである），短軸は120cm。下端の長軸は103cm，短軸は72cm。深さ73cmを測る。底面は水平で中央の南西寄りに径25cm，深さ36cmの小穴を有する。壁面は緩く立ち上がる。南西の崩落は獲物がかかった際のものとも考えられる。

第６号落し穴状遺構（図版125，第296図）

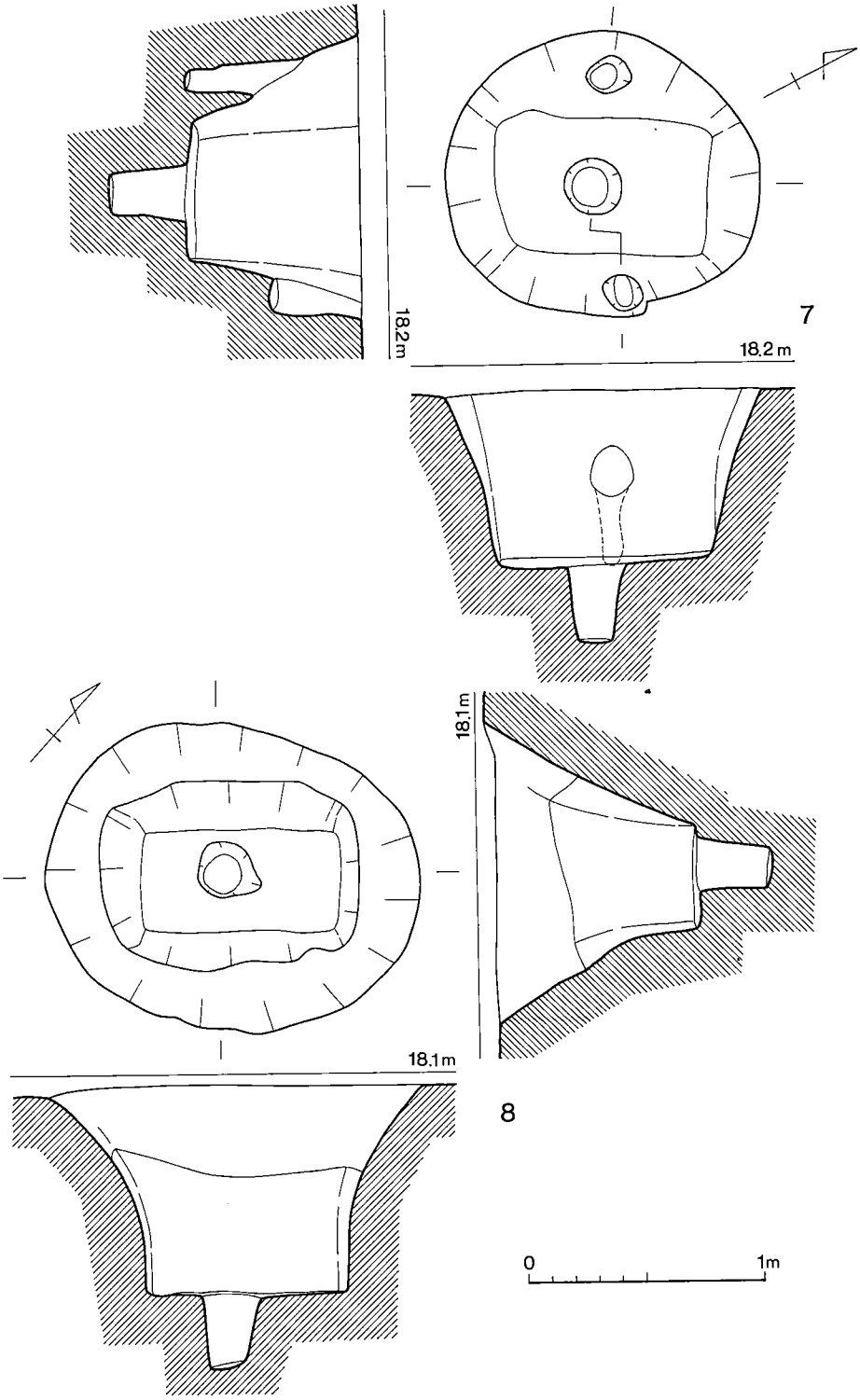
第10号溝の東で第22号溝の北に位置し，第４・５号落し穴状遺構と一群を成している。平面形態は上端では長円形，下端では隅円長方形を呈する。規模は上端の長軸が141cm，短軸は121cm。下端の長軸は82cm，短軸は57cm。深さ90cmを測る。底面に小穴は存しないが，壙穴埋土が４・５号と酷似し，また形態的にも同様である。壁面は緩く立ち上がる。長軸方位はＮ68°15′Ｅである。



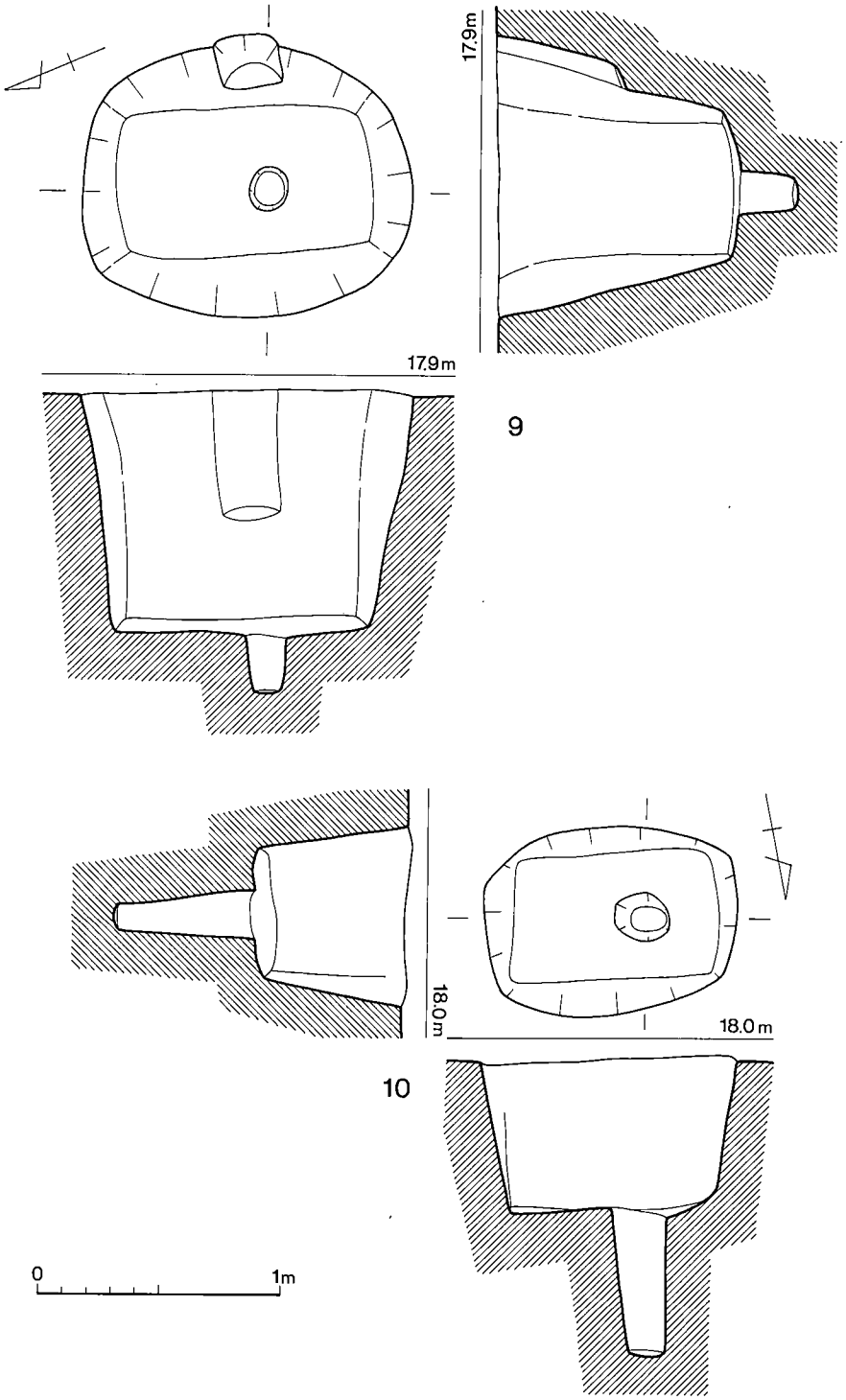
第295図　第３・４号落し穴状遺構実測図（1/30）



第296図　第５・６号落し穴状遺構実測図（1/30）



第297図　第７・８号落し穴状遺構実測図（1/30）



第298図　第９・10号落し穴状遺構実測図（1/30）

第７号落し穴状遺構（図版126，第297図）

第50号住居跡，第16号掘立柱建物跡の西９ｍほどに位置する。平面形態は上端で歪円形，下端では隅円長方形を呈する。規模は上端の長軸133cm，短軸は120cm。下端の長軸は90cm，短軸57cm。深さ74cmを測る。底面はほぼ平坦で中央やや南西寄りに径25cm，深さ33cmの円形の小穴を有する。また，他にその西脇の壁傾斜面に２穴の円形の小穴を有し，北西壁の小穴は径20×16cm，深さは最大で50cmを測る。南東壁の小穴は壙の上縁を掘り拡げて穿ったもので，断面はステップ状を呈し，径約20cm，深さ40cmを測る。しかしこれらの穴が７号に直接伴うものであるか否かはさだかではない。壁面は緩い傾斜を呈する。長軸方位はＮ27°30′Ｅである。

第８号落し穴状遺構（図版126，第297図）

第50号溝の北で，第18号掘立柱建物跡の北27ｍに位置する。平面形態は上端では長円形，下端では隅円長方形を呈し，中位より隅円方形を呈し，四隅はシャープな角をなす。規模は上端の長軸160cm，短軸は133cm。下端の長軸は85cm，短軸は43cm。深さ90cmを測る。底面は水平で中央やや南西寄りに径24cm，深さ32cmの小穴を有する。壁面は下位は直に立ち上がり，上位にかけて内反する。長軸方位Ｎ48°Ｅである。

第９号落し穴状遺構（図版127，第298図）

第54号住居跡の北15ｍほどに位置する。平面形態は上・下端ともに隅円長方形を呈する。規模は上端の長軸137cm，短軸は113cm。下端の長軸は106ｃｍ，短軸は61cm。深さ100cmを測る。底面はほぼ水平で中央南寄りに径18×15cm，深さ24cmの小穴を有する。壁面は若干外へ傾斜をもち立ち上がる。長軸方位はＮ23°Ｅである。

第10号落し穴状遺構（図版127，第298図）

第49号住居跡の南４ｍに位置する。平面形態は上・下端ともに隅円長方形を呈する。規模は上端の長軸は104cm，短軸は79cm。下端の長軸は85cm，短軸は53cm，深さ65cmを測る。底面は若干の凹凸をもち，中央やや西寄りに径23×20cm，深さ61cmの小穴を有する。壁面は外傾して立ち上がる。長軸方位はＮ79°30′Ｗである。

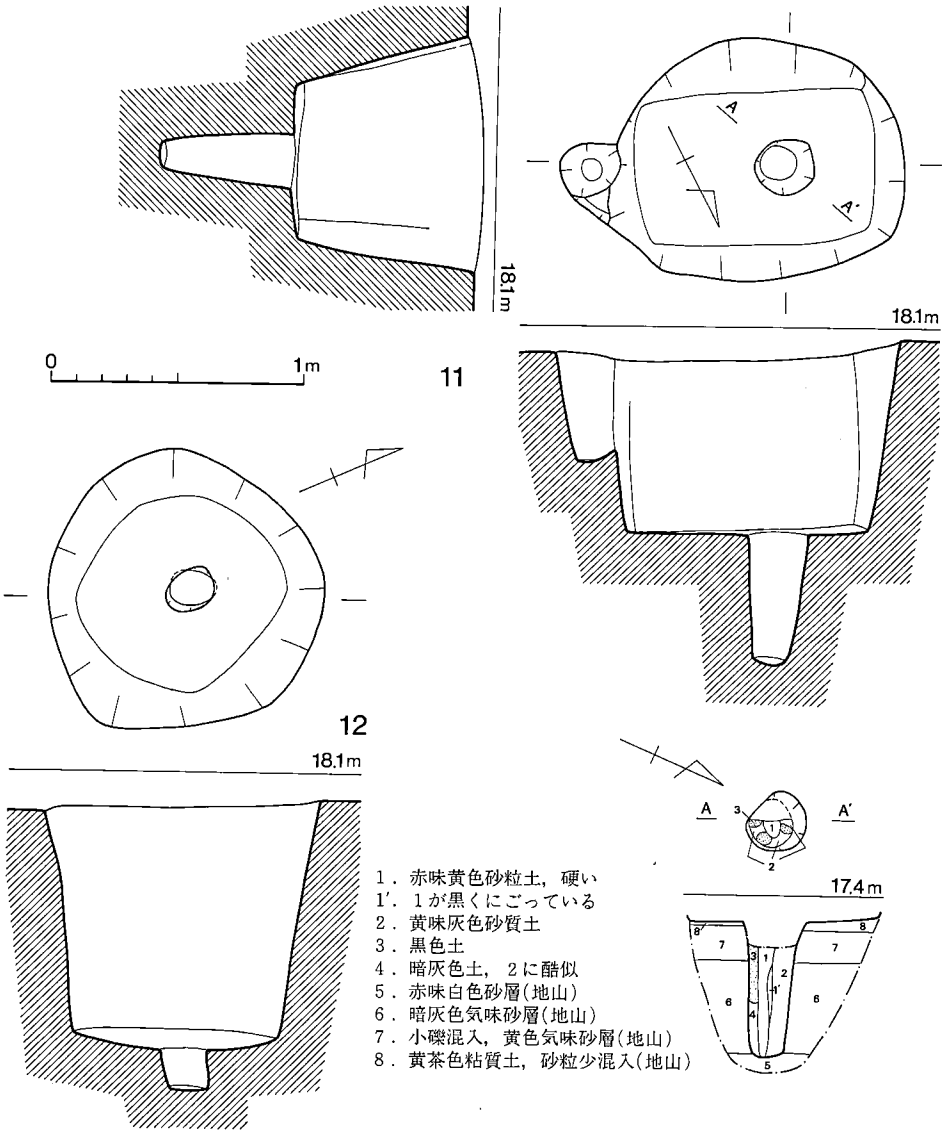
第11号落し穴状遺構（図版128，第299図）

第48号溝の西で，第17号掘立柱建物跡の東７ｍに位置する。平面形態は上端では楕円形，下端では隅円長方形を呈する。規模は上端の長軸は推定120cm，短軸95cm。下端の長軸は95cm，短軸は61cm。深さ73cmを測る。底面は平坦で中央の北西寄りに径25cm，深さ53cmの小穴を有する。

この小穴の平面プラン検出の際，小穴中央に周辺地山と酷似した土（土層１）があり，その周囲に黒色で径５～３cmの極めて小形の穴を４個検出した。これらは，棒状痕と思われ，それらは擬螺旋状に埋置されていた。壁面は，外傾して立ち上がる。長軸方位はN63°Wである。

第12号落し穴状遺構（図版128，第299図）

第８号落し穴状遺構の南10mに位置する。平面形態は上端では歪円形で，下端では丸味をも



第299図　第11・12号落し穴状遺構実測図（1/30）

つ方形を呈する。規模は上端で径110cm。下端は長軸78cm，短軸71cm。深さ95cmを測る。底面は中央に若干窪み，壙底中央に径20～15cm，深さ15cmの長円形の小穴を有する。下端での長軸方位はN35°45′Wである。（以上平嶋）

第5表　薬師堂東遺跡落し穴状遺構一覧表　（単位　cm）

No	群構成	平面形態	規模			ピット			長軸方位	備考
			長軸	短軸	深さ	形態	径	深さ		
1	西群	上端 不整方形 下端 長方形	121 86	103 65	100	円形	25	50	N33°E	
2	東群	上端 不整方形 下端 隅円長方形	105 73	97＋α 64	86	円形	20	37	N0°30′E	
3	西群	上端 下端 不整長方形	106 85	82 54	85	長円形	35×22	28	N54°E	
4	東群	上端 不整長方形 下端 隅円長方形	124 69	101 55	89	円形	16	37	N55°45′E	
5	東群	上端 下端 不整長方形	161(155) 103	120 72	73	円形	25	36	N42°30′E	
6	東群	上端 長円形 下端 隅円長方形	141 82	121 57	90	—	—	—	N68°15′E	底面に小穴を有さない
7	中央群	上端 歪円形 下端 隅円長方形	133 90	120 57	74	円形	25	33	N27°30′E	
8	中央群	上端 長円形 下端 隅円長方形	160 85	133 43	90	円形	24	32	N48°E	
9	中央群	上端 隅円長方形 下端	137 106	113 61	100	長円形	18×15	24	N23°E	
10	中央群	上端 隅円長方形 下端	104 85	79 53	65	長円形	23×20	61	N79°30′E	
11	中央群	上端 長円形 下端 隅円長方形	120 95	95 61	73	円形	25	53	N63°W	底面小穴に棒状痕検出
12	中央群	上端 歪円形 下端 方形	110 78	— 71	95	長円形	20×15	15	N35°45′W	

E　土　壙　墓

土壙墓は11基を検出し，その配置から2箇所のまとまりが認められた。一群は調査区東側北半に3基（第1・7・8号）が主軸方向を略東西にとってまとまっている。他の一群は調査区西端で8基（第2～6・9～11号）を検出し，うち第3・9～11号の4基は主軸方向を略南北にとってまとまっている。

第1号土壙墓（図版129，第301図）

第8号掘立柱建物の南側に，主軸をN87°Eにとって位置する。長さ284cm，幅63cm，現存の

深さ43cmの長方形を呈する。両小口とも床面より15cm程高い段を設けており，床面西側半分は10～15cm深く掘り込まれている。

出土遺物は無く，時期不明である。

第２号土壙墓（図版129，第301図）

調査区西端中央に，主軸をN87°Wにとって位置する。長さ155cm，幅55cm，現存の深さ19cmの隅丸長方形を呈する。東側小口から北側側壁にかけては厚さ１～1.5cmに赤変硬化し，埋土中からは炭化物が出土しており，土壙内に熱を受けたことは明瞭である。あるいは火葬墓とも考えられる。

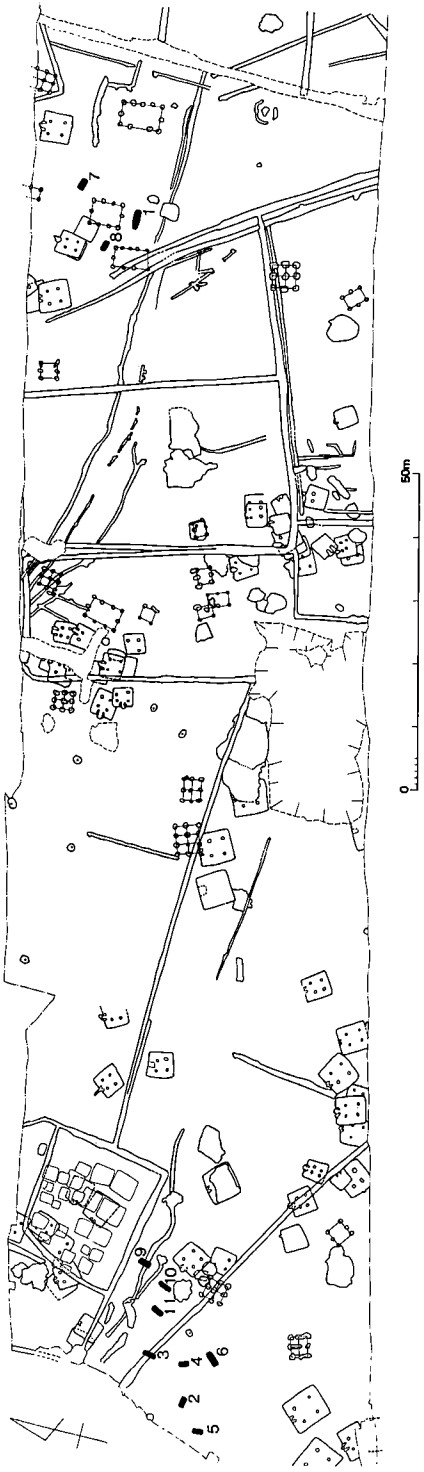
出土遺物（第302図）

図示できるものは須恵器壺か平瓶と思われる口辺部片１点のみである。復原口径8.1cm。頸部より外反し上半でやや膨みをもって立ち上がり，口縁部は丸く収める。口縁下に２条の沈線をめぐらす。調整は内面ヨコナデが施されているが，外面は磨滅して不明である。焼成良好で，色調淡白灰色を呈する。

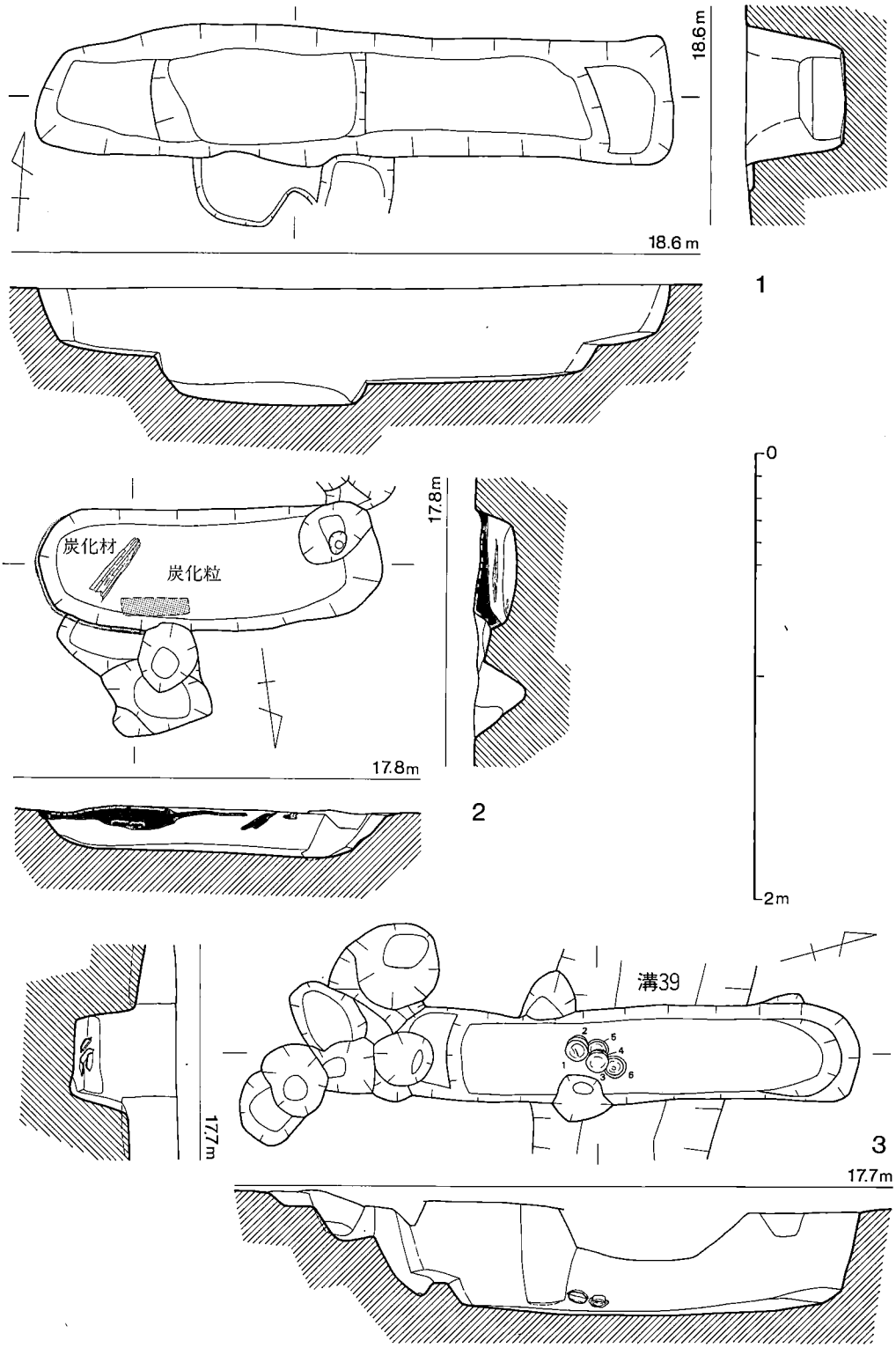
出土遺物は６世紀末から７世紀前半のものと考えるが，本土壙墓はそれより下る時期の所産と考える。

第３号土壙墓（図版130，第301図）

第２号土壙墓の東北側に，主軸をN15°Eにとって位置する。長さ208cm，幅43cm，現存の深さ47cmの隅丸長方形を呈する。中央は第39号溝によって横断する形で上半を切られている。中央やや南寄りに，須恵器杯蓋３・杯身３計６個が重なった状態で副葬



第300図　土壙墓配置図（1/1,200）



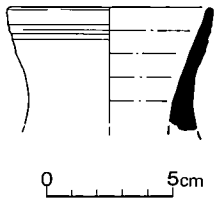
第301図　第1～3号土壙墓実測図（1/30）

されていた。

出土遺物（第303図）

須恵器（1～6）

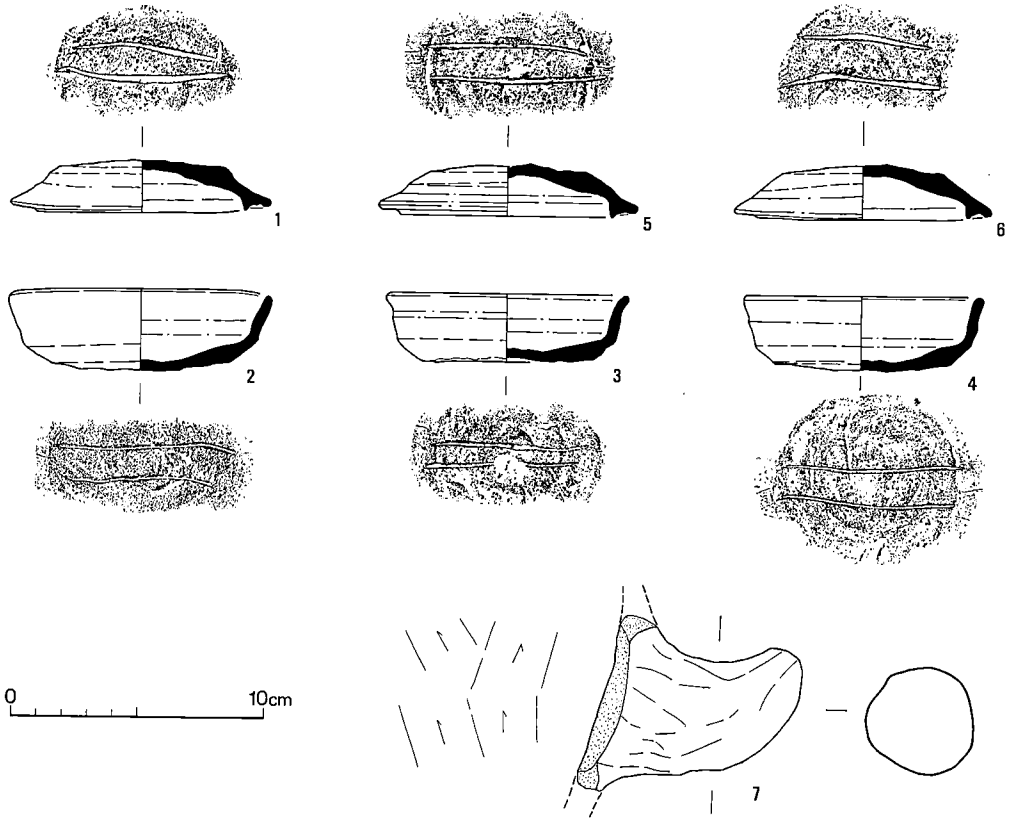
杯蓋1と杯身2だけがセットとして出土したが，他のものもすべて同じヘラ記号が施されており，3組のセットと考えられる。



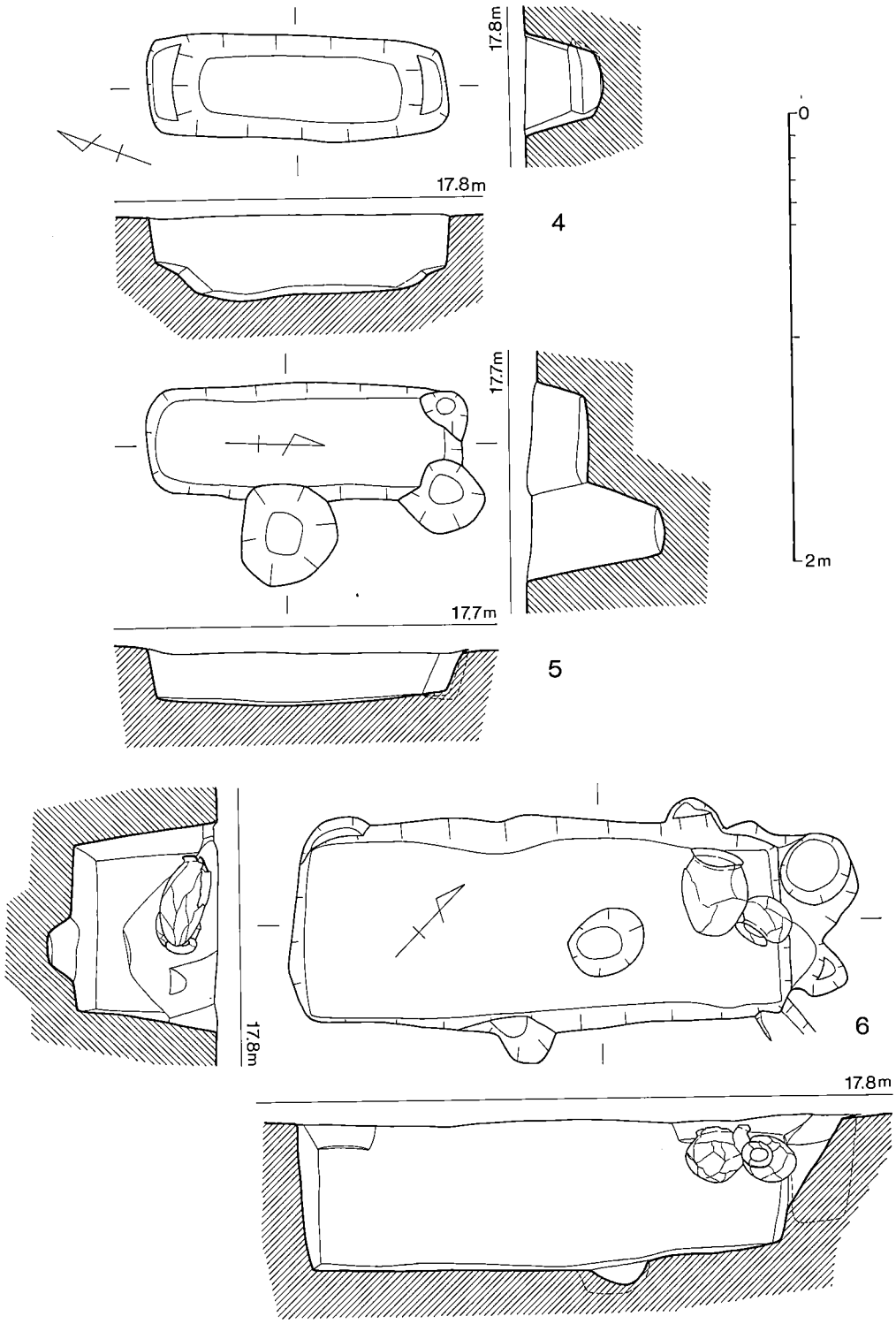
第302図　第2号土壙墓出土土器実測図（1/3）

杯　蓋（1・5・6）　3点とも，口縁部より僅かに外に出る返りを有する形態である。調整は天井部外面を回転ヘラケズリの後ナデ仕上げ，口辺部内外面をヨコナデ，天井部内面をナデ仕上げしている。すべて天井部外面に2本平行線のヘラ記号が施されている。焼成良好で，色調灰色～黒褐色を呈する。1は口径10.3cm，返り径8.3cm，器高2.1cmを測る。5は口径10.2cm，返り径8.3cm，器高2.1cmを測る。6は口径10.2cm，返り径8.3cm，器高2.2cmを測る。

杯　身（2～4）　3点とも基本的には扁平気味の底部から膨みをもって外傾し，口縁下で更



第303図　第3号土壙墓副葬土器実測図（1/3）



第304図　第４～６号土壙墓実測図（1/30）

に少し外反する形態を呈する。調整は底部外面を回転ヘラケズリの後ナデ仕上げ，口辺部内外面をヨコナデ，底部面をナデ仕上げている。すべて底部外面に２本平行線のヘラ記号が施されている。焼成良好で，色調灰色～暗紫灰色を呈する。２は口径10.4cm，底径7.1cm，器高3.3cmを測る。３は口径9.6cm，底径6.9cm，器高2.8cmを測り，底部は僅かに上げ底状に窪んでいる。４は口径9.5cm，底径7.0cm，器高3.0cmを測る。

土師器（７）

甕の把手部分である。胴部内面は縦方向のヘラケズリ，把手はナデが施されている。焼成は良好で，色調は内面黄褐色，外面橙黄色を呈する。

副葬品である須恵器は杯の蓋と身が逆転し，蓋内面の返りがまだ口縁部より外に出ている特徴から，７世紀中葉のものと考えられる。よって本土壙墓の時期は７世紀中葉に求められる。

第４号土壙墓（図版131，第304図）

第３号土壙墓の南側に，主軸をＮ21°Ｗにとって位置する。長さ134cm，幅46cm，現存の深さ38cmの隅丸長方形を呈する。両小口とも床面より10～15cm程高い段を設けている。

出土遺物は無く，時期不明である。

第５号土壙墓（図版131，第304図）

第２号土壙墓の南西側に，主軸をＮ２°Ｗにとって位置する。長さ141cm，幅52cm，現存の深さ23cmの隅丸長方形を呈する。

出土遺物は無く，時期不明である。

第６号土壙墓（図版132，第304図）

第４号土壙墓の南東側に，主軸をＮ45°Ｅにとって位置する。長さ218cm，幅93cm，深さ66cmの長方形を呈し，規模・掘方からみて他の土壙墓とは趣が異なる。床面中央やや東寄りに径34×24cm，深さ12cmのピットが検出された。東側小口壁際に床面より25～30cm程度浮いた高さで土師器甕１・須恵器甕１計２個の甕が横倒しの状態で出土した。これは土壙内副葬ではなく，土壙上に置かれたものが落ち込んだものと考えられる。

出土遺物（第305図）

須恵器（１）　小形の甕で，口径16.5cm，胴部最大径25.0cm，器高22.4cmを測る。緩く外反する頸部に端部が上下方に突出する口縁部がつく。短かい胴部は中位以上に最大径があり，肩が張っている。口縁部から頸部にかけての内外面はヨコナデが施されている。胴部外面は平行線文タタキの後中位以上をナデ仕上げ，内面も青海波文タタキの後上位をナデ仕上げている。胎土に細砂をやや含む。焼成良好で，色調淡白黄色を呈する。

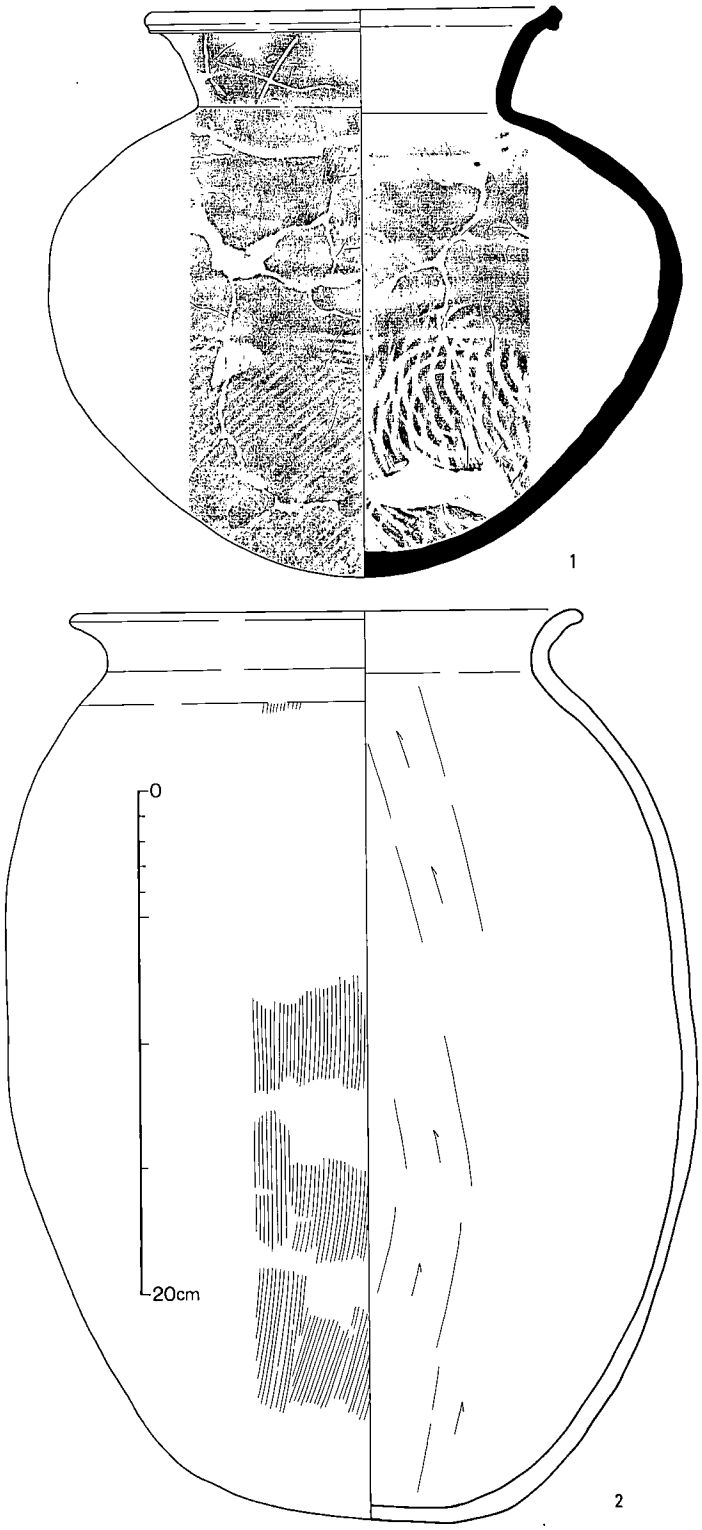
土師器（2）　長胴形の甕で，口径20.3cm，胴部最大径27.2cm，器高36.1cmを測る。やや張る長胴の最大径は中位から上位にかけてある。口頸部は緩やかに外湾するが，頸部内面の稜は明瞭ではない。底部は扁平気味の丸底を呈する。調整は，胴部外面は縦方向のハケ目，内面は縦方向のヘラケズリが施されており，口頸部はヨコナデ仕上げされている。

以上の土器のうち，1は6世紀後半におかれるものと思われるが，2は7世紀前半とされるものである。よって本土壙墓の時期は，7世紀前半と考えたい。

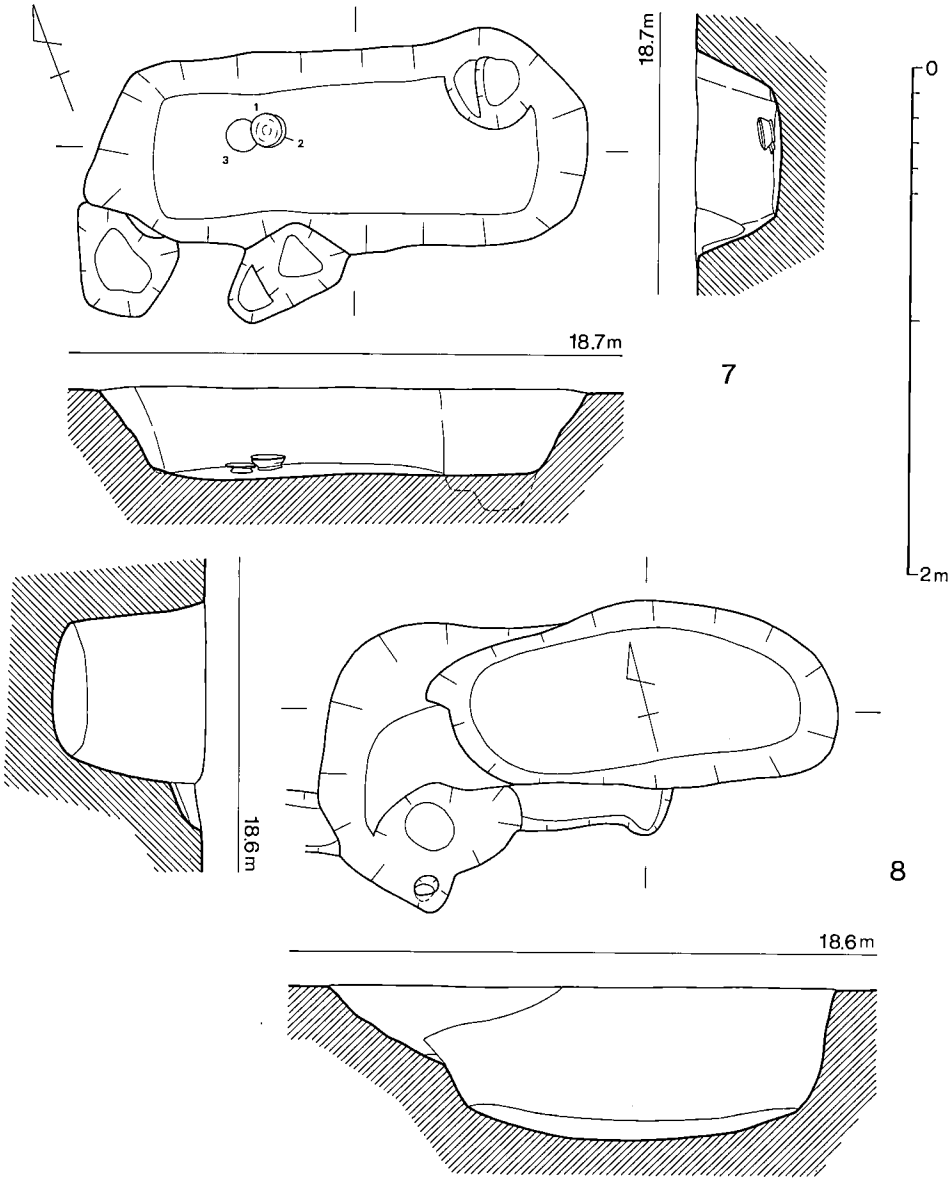
第7号土壙墓

（図版133，第306図）

調査区東側，第8号掘立柱建物の北東側に，主軸をN70°Wにとって位置する。長さ193cm，幅81cm現存の深さ36cmの隅丸長方形を呈する。中央やや西側小口寄りの床面上に土師器の杯1・高台付椀



第305図　第6号土壙墓副葬土器実測図（1/3）



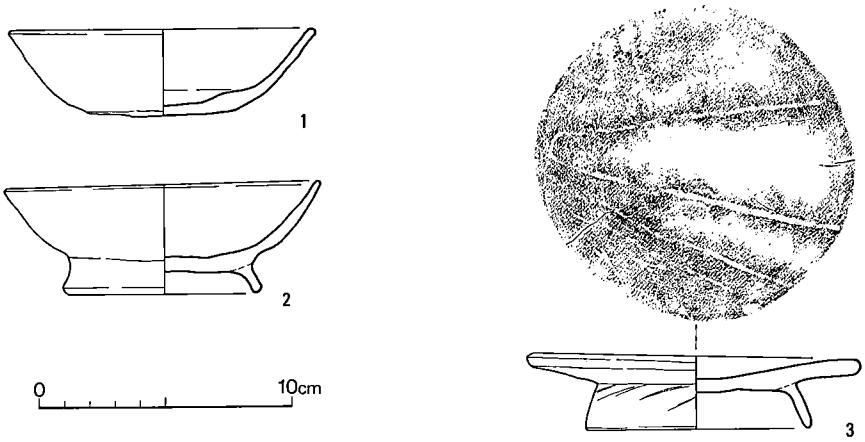
第306図　第７・８号土壙墓実測図（1/30）

１・高台付皿１計３個が副葬されていた。うち杯と高台付椀は重ねて置かれていた。

出土遺物（第307図）

土師器（１～３）

杯（１）　底部ヘラ切りの杯身で，口径12.2cm，底径6.0cm，器高3.5cmを測る。調整は底部内



第307図　第７号土壙墓副葬土器実測図（1/3）

面をナデ，口辺部及び体部の内外面をヨコナデしている。底部外面に板状圧痕を残している。焼成良好で，色調薄橙色を呈する。

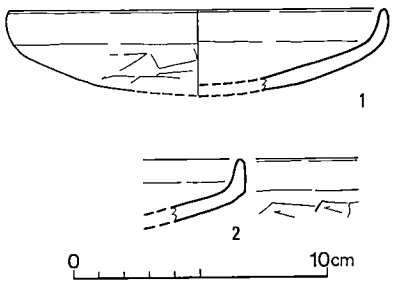
高台付椀（２）　やや高めの高台から内湾気味に外傾する形態を呈する。口径12.5cm，高台径7.9cm，器高4.3cm，高台高1.2cmを測る。調整は底部内面をナデ，口辺部・体部及び高台の内外面をヨコナデ，底部外面をナデ仕上げしている。

高台付皿（３）　深みなくほとんど平坦に近い皿部に高い高台をつけたものである。口径13.2cm，高台径9.0cm，器高2.75～3.05cm，高台高1.8cmを測る。調整は高台内外面をヨコナデ，底部外面をナデ仕上げしているが，他は磨滅して不明である。高台部外面にしぼり痕がみられる。焼成良好で，色調薄橙色を呈する。

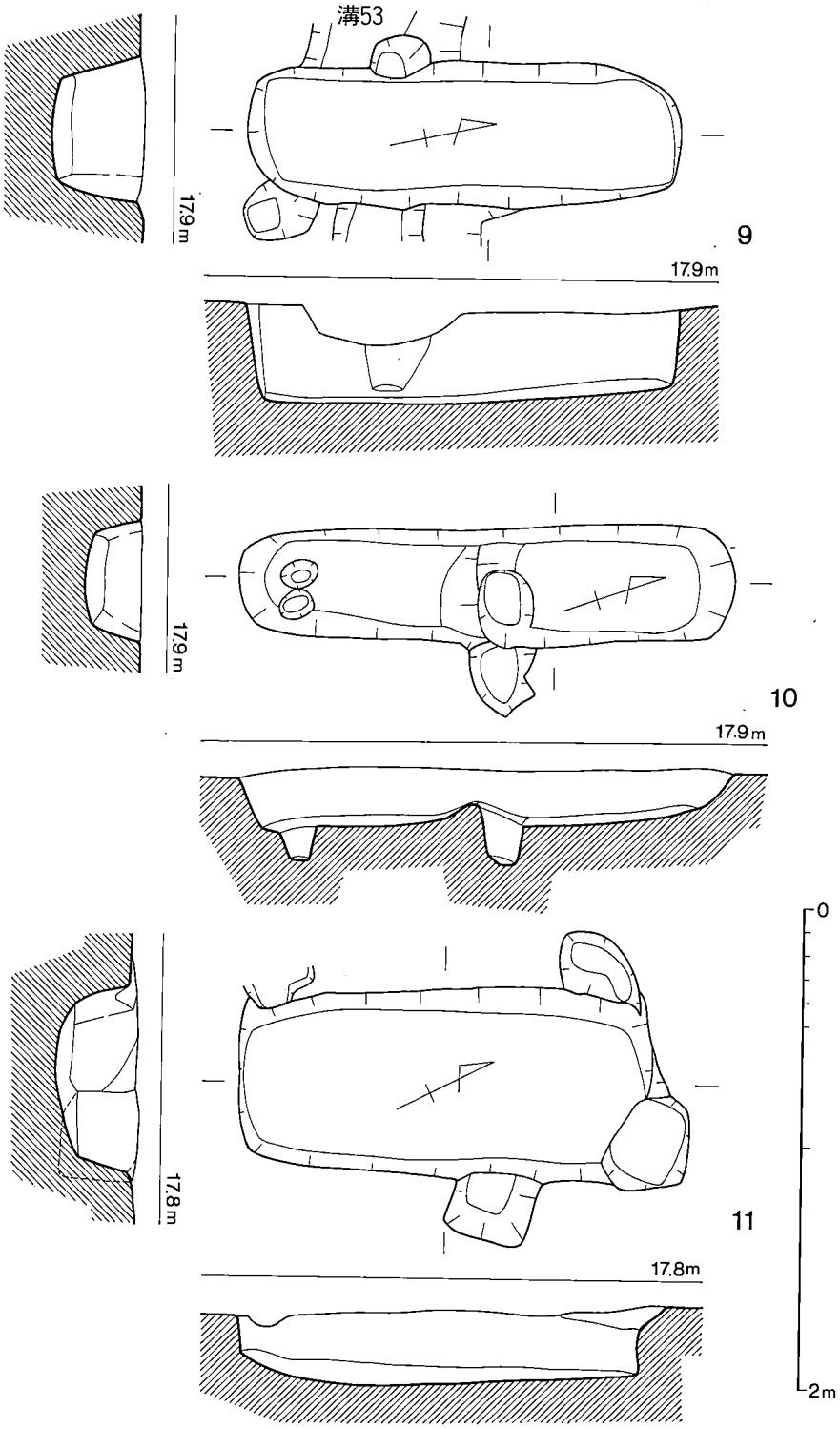
以上の出土遺物は，１・２が９世紀中頃に比定できるが，３は10世紀前半まで下がるかもしれないが断定できない。よって本土壙墓の所属時期はその上限を10世紀前半とすべきであるが，可能性としては９世紀中頃の時期を考えたい。

第８号土壙墓（図版134，第306図）

第８号掘立柱建物の西側に，主軸をN75°Wにとって位置する。長さ163cm，幅74cm，現存の深さ60cmの不整楕円形を呈する。西側は深さ20cm程の落込みと重複するが，その新旧関係は把握し得なかった。埋土中から多くの土器が出土したが，特に副葬された状態のものは検出できなかった。



第308図　第８号土壙墓出土土器実測図（1/3）



第309図　第9～11号土壙墓実測図（1/30）

出土遺物（第308図）

土師器（1・2）　いづれも杯の破片で，浅い底部から内湾気味に立ち上がる口辺部に続く形態を呈する。調整は口辺部内外面をヨコナデ，底部内面をナデ，底部外面をヘラケズリしている。いずれも焼成良好で，色調橙褐色を呈する。1は復原口径15.0cm，残存高3.3cmを測るが，2は小片のため復原不可能である。

以上の出土遺物は8世紀前半に比定でき，本土壙墓の時期もその上限を8世紀前半として考えたい。

第9号土壙墓（図版134，第309図）

調査区西端近く，近世墓地群の南側に，主軸をN12°Eにとって位置する。長さ179cm，幅60cm現存の深さ40cmの隅丸長方形を呈する。中央から南は第53号溝によって横断する形で上半を切られている。

出土遺物（第310図）

須恵器

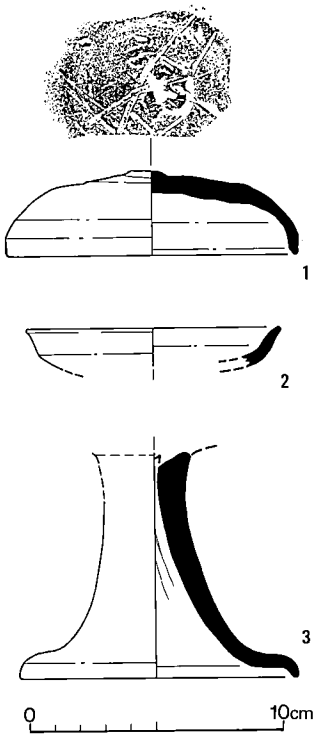
杯　蓋（1）　明瞭な稜なく天井部から内湾気味に口縁部に続く形態を呈する。口径11.6cm，器高3.3cmを測る。調整は口辺内外面をヨコナデ，天井部外面をヘラケズリ，天井部内面をナデ仕上げしている。焼成良好で，色調暗灰色を呈する。天井部外面にヘラ記号が施されている。

皿（2）　小片からの復原である。底部からいったん弱く段をもって，口辺部は外反する形態を呈する。復原口径10.1cm，残存高1.6cmを測る。焼成良好で，色調暗灰色を呈する。

土師器

高　杯（3）　3は高杯の脚部である。中空の脚筒部から大きく開き，段を有する裾部へ延びる。脚端部は嘴状を呈する。底径11.0cm，残存高9.0cmを測る。脚筒部内面にしぼり痕がみられる。焼成良好で，色調淡黄褐色を呈する。

以上の遺物のうち，1は6世紀末に比定されるが，3は7世紀末から8世紀初頭と考えられ，本土壙墓の時期もその上限を8世紀初頭と考えたい。



第310図　第9号土壙墓出土土器実測図（1/3）

第10号土壙墓（図版135，第309図）

第９号土壙墓の南西側に，主軸をN19°Eにとって位置する。長さ205cm，幅50cm，現存の深さ25cmの隅丸長方形を呈する。中央は床面より10cm前後高い稜があり，あるいはこれを境に長さ１ｍ程の南北別々の２つの遺構の重複とも考えられるが，検出面での把握はし得なかった。

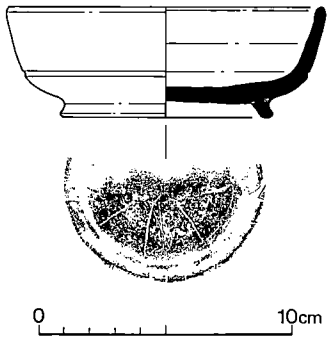
出土遺物はなく時期不明である。

第11号土壙墓（図版135，第309図）

第10号土壙墓の西側に，主軸をN27°Eにとって位置する。長さ171cm，幅77cm，現存の深さ31cmの隅丸長方形を呈する。

出土遺物（第311図）

須恵器高台付杯である。やや張った体部から直線状に口縁部にのびる形態のものである。平底の底部には体部より内側に入った部位に，やや外に踏ん張った高台が付されている。口径12.6cm，底径8.5cm，器高4.4cmを測る。底部外面にヘラ記号が施されている。焼成良好で，色調淡灰色を呈する。



第311図　第11号土壙墓出土土器実測図 (1/3)

出土遺物の時期は８世紀前半に比定されるものであり，本土壙墓の時期もこれに大差ないものと考えられる。

（以上森山）

第６表　薬師堂東遺跡土壙墓一覧表

（単位　cm）

No.	群	平面形態	規模 長さ	規模 幅	規模 深さ	主軸方位	副葬品	時期	備考	調査呼称
1	東	長方形	284	63	43	N87°E			両小口側一段高い	土壙 9
2	西	隅丸長方形	155 (130)	55 (42)	19	N87°W	(須恵器口辺片１)	７世紀以降	東側小口内面は熱を受けて赤変　炭化物出土　火葬墓か	土壙27
3	西	隅丸長方形	208 (162)	43 (32)	47	N15°E	須恵器蓋杯セット３ (土師器 把手１)	７世紀中葉	南側小口一段高い 溝39に切られる	土壙28
4	西	隅丸長方形	134 (91)	46 (28)	38	N21°W			両小口側一段高い	土壙29
5	西	隅丸長方形	141 (130)	52 (38)	23	N 2°W				土壙34
6	西	長方形	218 (210)	93 (75)	66	N45°E	土師器甕１ 須恵器壺１	７世紀前半	中央やや東寄りにピット在	土壙35
7	東	隅丸長方形	193 (152)	81 (51)	36	N70°W	土師器杯　１ 〃　高台付椀１ 〃　高台付皿１	９世紀中葉		土壙40
8	東	不整楕円形	163 (130)	74 (52)	60	N75°W	(土師器２片)	８世紀前半以降		土壙41
9	西	隅丸長方形	179 (168)	60 (42)	40	N12°E	(須恵器杯蓋１) (〃　杯身１) (土師器高杯脚片１)	８世紀初頭	溝53に切られる	土壙53
10	西	隅丸長方形	205 (179)	50 (36)	25	N19°E				土壙54
11	西	隅丸長方形	171 (165)	77 (62)	31	N27°E		８世紀前半		土壙55

※ 規模の( )は，床面での数値。

F　溝

薬師堂東遺跡では，通し番号を付けただけで53本の溝が検出された。それらのうちの大半は，現代まで使用されていた用水路や，近代の耕地整理以前の水路である。また，数は少ないが，古代～中世の小規模な水路や側溝もみられる。(第312図参照)

以下に時期別に整理してみる。数字は溝番号を示す。

古代――4・18・19・31・36～38・41・43・44・47・52・53

中世――39

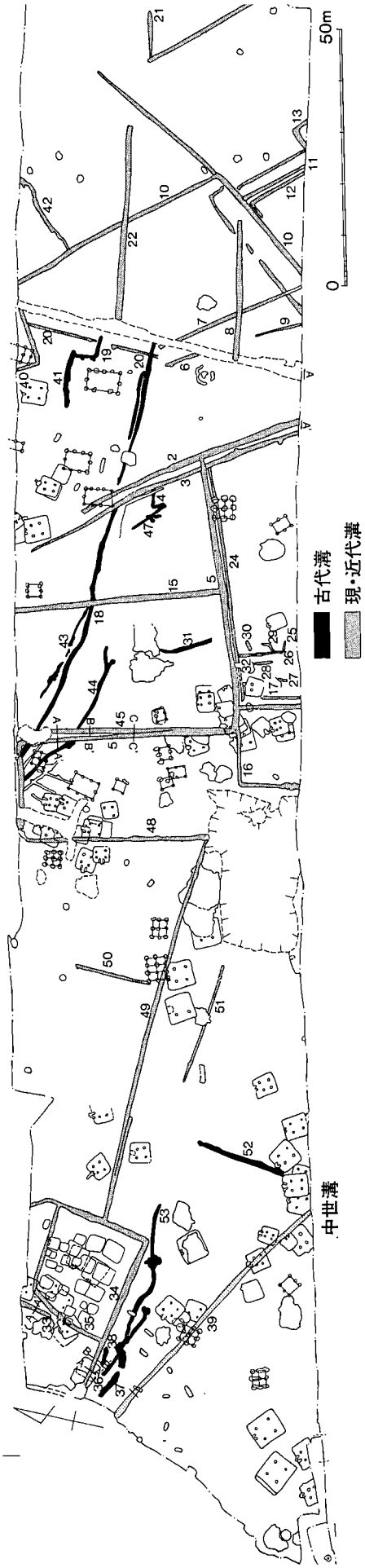
圃場整備以前――2・3・5～7・9～13・15～17・24～30・32～35・40・42・45・48・49・51
(～近世)

圃場整備以後――8・20～22・50

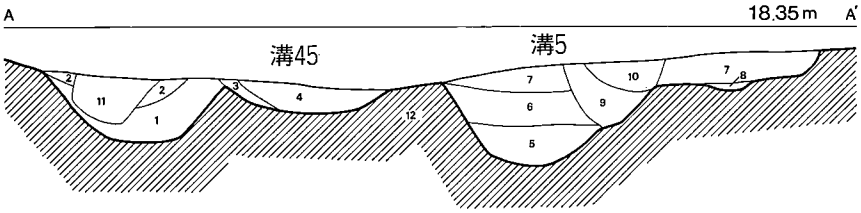
これらの溝は，埋土状況や，出土遺物からも勿論時代の判断はできるが，その走る方位によっても明らかに区別することができる。

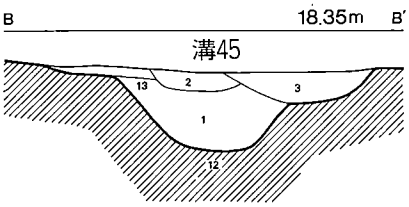
まず，圃場整備以後の近年のものからみてみよう。遺跡の東のはずれ近くに，南北に走る導水管埋設による攪乱溝がみられる。これは江川ダムの水を引いているもので真北をとる。そして，これに従って南北方向の畦畔は真北方向となっている。

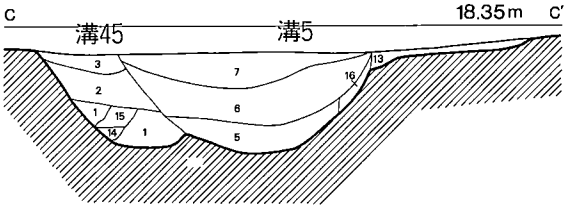
次に，圃場整備以前の近世から連続したと考えられる溝は，西半・中央・東半でその方向が変化する。即ち，西半の高松家墓地周辺では真北方向より約9度東に振れ，



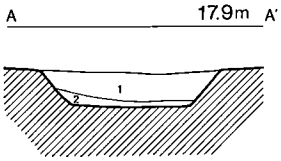
第312図　溝配置図 (1/1,200)





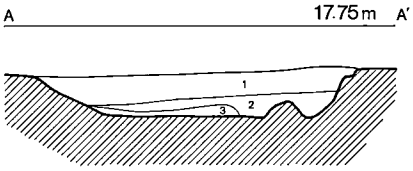


1．赤味暗灰色土，やや粘質，斑状に黒褐色黄色粘質土を混入
2．黒褐色土やや粘質
3．灰色土，わずかに粘質気味
4．赤味の強い暗灰褐色土，わずかに粘質気味
5．青味暗灰色粘質土
6．緑味暗灰色土，砂粒多く含みわずかに粘質
7．赤味暗灰色土，やや粘質，斑状に黄色灰白色粘質土を混入
8．斑状黒褐色および黄色粘質土
9．青味暗灰色土，砂粒を多量に含み極わずかに粘質気味
10．赤味暗灰色土，砂粒多含みわずかに粘質気味
11．赤味灰色土
12．黄色粘質土(地山)
13．黄味暗灰色土，わずかに粘質
14．緑味灰色粘質土
15．黒色土，斑状に黄色粘質土混入
16．斑状黄色，暗灰色粘質土



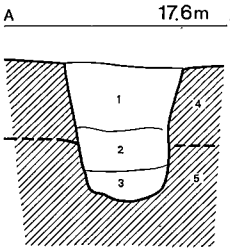
溝33

1．暗褐色土
2．混黄色粘質土粒，暗褐色土



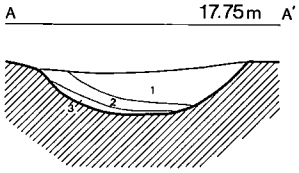
溝37

1．黒褐色土
2．混黄褐色粘質土粒暗褐色土
3．混黒色土粒黄褐色粘質土



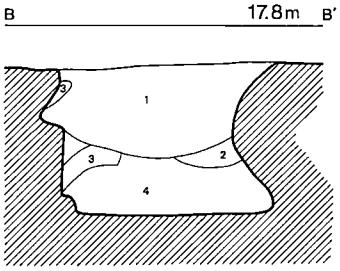
溝34-1

1．浅灰褐色土少混黄色粘質土粒
2．著多混黄色粘質土粒黒褐色土
3．黒褐色土
4．浅黄褐色土(遺構埋土)
5．明黄褐色粘質土(地山)



溝39

1．暗褐色土
2．混黄褐色粘質土粒，暗褐色土
3．多混黄色粘質土粒，暗褐色土



溝34-2

1．少混黄色粘質土粒浅灰褐色土
2．混黄色粘質土粒浅灰褐色土
3．黄色粘質土塊
4．著多混黄色粘質土黒褐色土

0　1m

第313図　溝土層実測図（1/30）

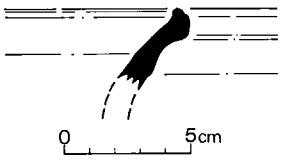
中央付近では約16度西に振れている。中央部と東半の境は，第２・３号溝に挟まれて走る農道で，これ以東は西に39度振れている。

中世の溝は第39号溝１本だけであるが，真北より約60度西に振れてほぼ直線的に走る。古代の溝としたものは，細く，浅く，農業用水路としてではなく，道路の側溝や排水路としての性格を考えさせる。細かく見ると蛇行しているが，全体としてはほぼ東西に走っており，その計画性が窺われる。

溝の個別の形状・規模については，特に近世以降のものはこれ以上記さないが，各々出土遺物があるので，以下その項の中で，問題点のみを指摘しておきたい。

第１号溝出土遺物（第314図）

須恵器甕口縁片で，口唇上方に突出する特徴を示す。内外面とも横ナデ調整を施している。胎土に細砂を僅かに含み，焼成堅緻で黒灰色を呈する。７世紀中葉以前の所産であろう。

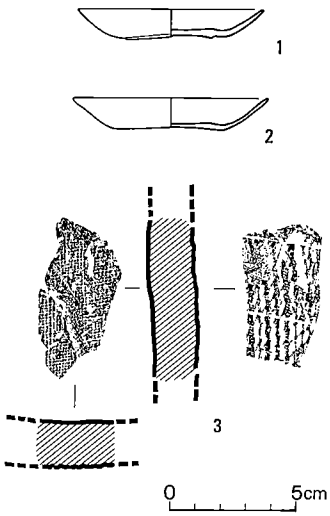


第314図　第１号溝出土土器実測図（1/3）

第３号溝出土遺物（第315図）

この溝は明らかに近～現代溝で，第２号溝と対になってその間に農道を形成している。出土遺物のうち，現代のものを除いて図示した。

１・２は，厚さ１～３mmの極めて薄手の所謂かわらけである。口径7.3～7.6cm，器高1.1～1.2cm，底径３.4～4.1cmを測る。胎土精良で淡白褐色を呈し，底部は静止糸切りである。近代の所産であろう。３は平瓦片で，凸面は縄目叩き，凹面は布目をよく残す。



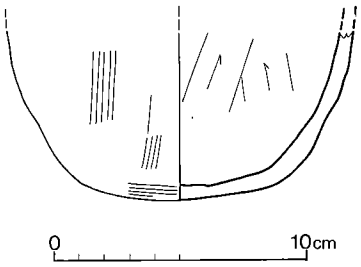
第315図　第３号溝出土土器実測図（1/3）

第４号溝出土遺物（第316図）

第４号溝はG住居群の南側に，東西に走る短かい溝である。第３号溝より古く，第47号溝と連結している。

出土土器は，丸底の土師器小甕底部である。外面にはハケ目を施し，内面はヘラ削り上げがみられる。

この遺物や，埋土状況などから第４号溝は奈良時代以前の遺構と考えられる。



第316図　第４号溝出土土器実測図（1/3）

第５号溝出土遺物（第317～320図）

この溝は，第２・３号溝から水を引くように連結され，東西から直角に曲がって北方へ延びている。明らかに近・現代溝である。北端部では第45号溝を切っており，同じ溝が掘り直されたものと考えられる。

この溝はＥ住居群の真中を走っているため，多量の古い時期の遺物の混入がみられた。

須恵器（１～８）　１・２は杯蓋で，鳥嘴状口縁をなす。２は復原口径11.8cmで，全体にシャープであり，７世紀末の所産で，１は天井外面をナデており，８世紀代に下るものであろう。

３は，高台付杯で，復原底径10.2cmを測る。短かくやや外方へ踏んばる高台を付け，８世紀初葉頃のものであろう。４は壺底部で，短かいが外方へ踏ん張る高台を付ける。高台径11.3cmを測り，内外面横ナデを施す。

５は甕で，胴部外面は条蓆状叩目，内面には青海波がみられる。６・７は高杯で，６は杯部に盤状の大口径のものを乗せるタイプである。７は太めの脚柱部で，内外面横ナデ調整を施す。いずれも８世紀代の所産であろう。８は短頸壺で，復原口径９.2cmを測る。薄手で，内外面とも横ナデ調整を施す。

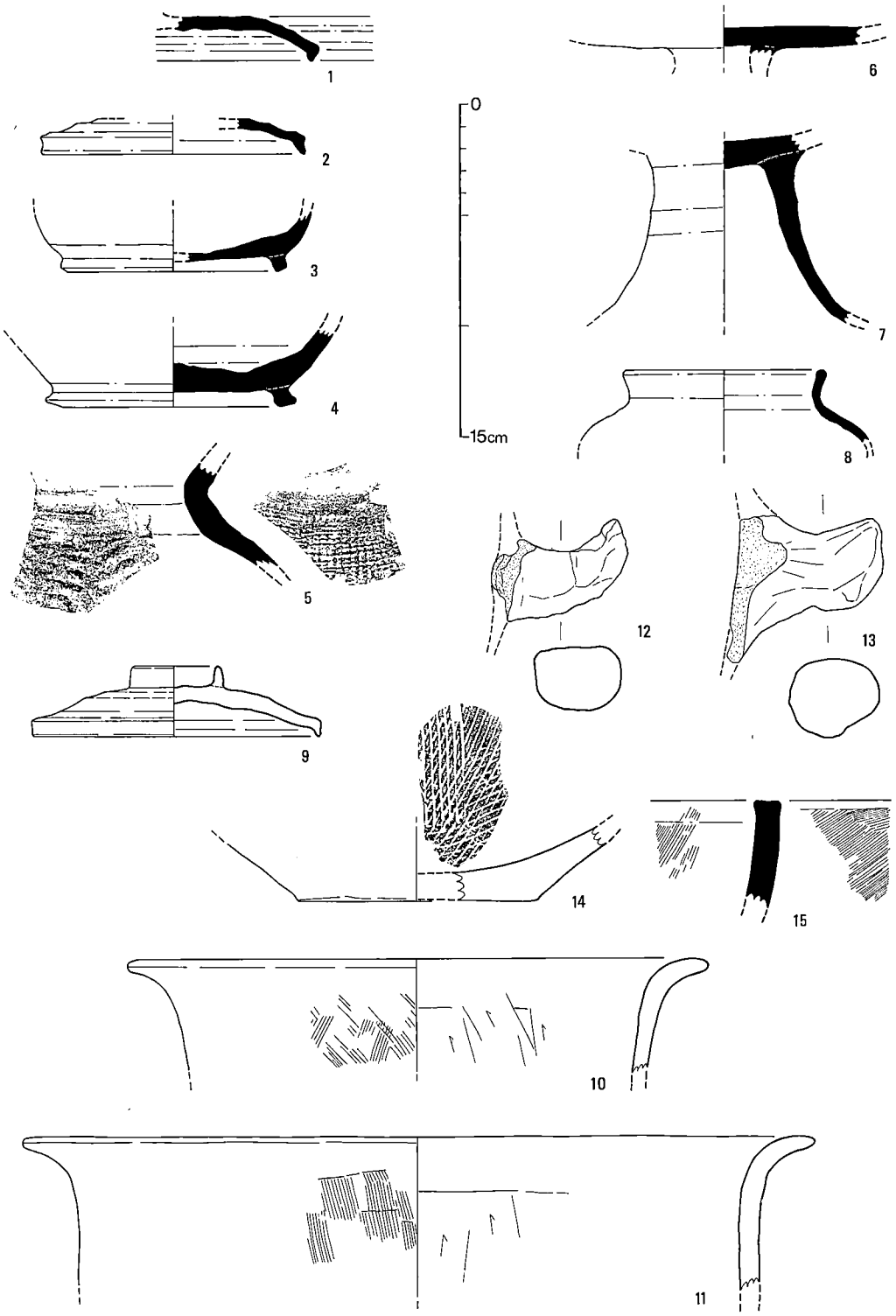
土師器（９～13）　９は蓋で，天井中央に大きい輪状撮を付ける。復原口径13.1cm，器高３.２cmを測り，天井外面には回転方向のヘラ削りがみられる。鳥嘴状口縁となり，８世紀前葉代の所産となろう。

10・11は甕で，いずれも頸部が厚くならず，内面に稜をつくらず，ゆるやかに外反して開く口縁につくる。復原口径は26.2～35.7cmを測り，８世紀代の所産となろう。

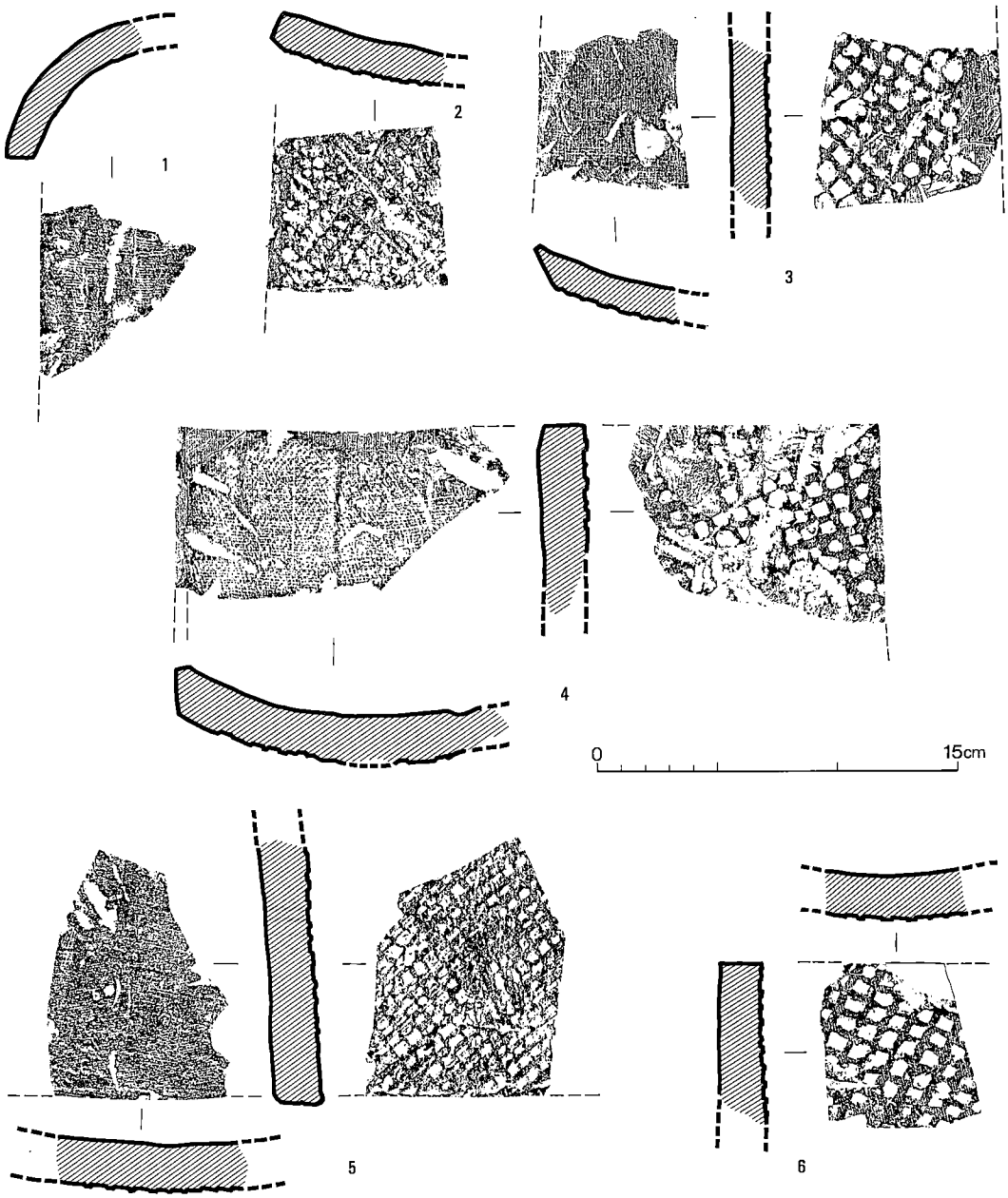
12・13は甕の把手部分で，12はやや小ぶりで断面が扁平気味となり，13は普通の大きさで丸っこいタイプである。

14は摺鉢で，内面茶褐色，外面は赤褐色変した近世陶器である。15は，須恵質焼成の捏鉢口縁で，内外面に細かい斜位のハケ目を施す。

瓦（第318・319図）　１は丸瓦で，凸面は板状工具による縦位擦過痕がみられ，凹面は布目の上を部分的に縦位ヘラ削りして，布目を消している。生焼けで淡灰色を呈する。２は薄手の平瓦片で，凸面は小さい正格子叩目を斜位に施す。凹面は縦方向ヘラ削りで布目を殆んど消す。凸面側端と側面はヘラ削りが施される。３も薄手の平瓦片で，凸面は正格子叩目，凹面は横方向へのナデで，布目を殆んど消している。側面はヘラ削りで，鋭角な斜縁となる。４は，胎土は密であるが焼成やや軟質である。凸面にはやや大き目の正格子叩目を施し，凹面は布目が明瞭である。側縁凹面側の角はヘラ削りで面取りされている。５は凹面の布目の上に部分的に縦ナデを施している。下側面中央には細沈線がみられ，その面は横ナデ調整で仕上げている。６は凸面に大きめの正格子叩目を施し，凹面は横方向へのナデで布目を殆んど消している。焼成やや軟質である。７は凹面の布目の上をナデで殆んど消している。側面と，凹面側縁際はヘラ



第317図　第５号溝出土土器実測図 (1/3)



第318図　第５号溝出土瓦実測図（その1)(1/3)

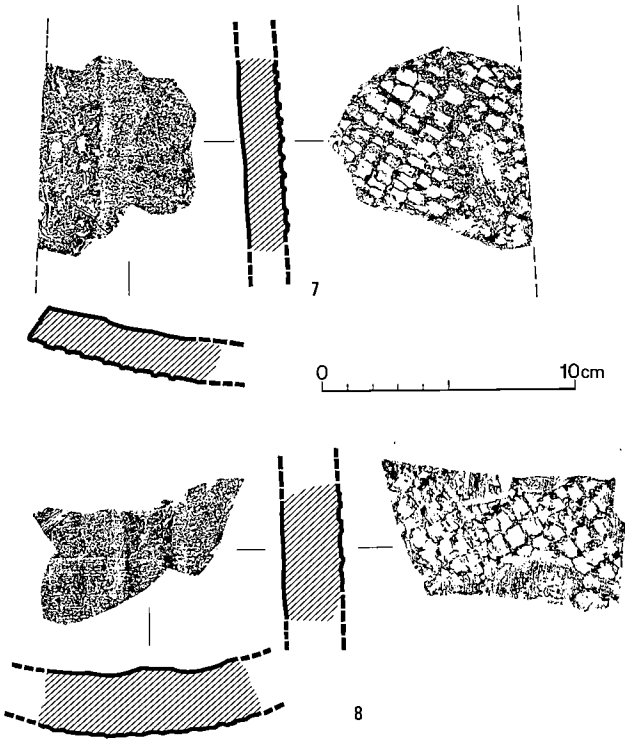
削りが施され，側面中央には細沈線がみられる。８は厚手の平瓦片で，凸面には正格子叩きを斜位に施し，凹面には幅１.６cmの模骨圧痕が２本みられる。

砥　石（第320図１）

小型のシルト岩製仕上げ砥である。現存長5.8cm，幅2.5cm，厚さ0.9～1.2cmを測る。頭部端が削り残してあり，その部分に紐をかけて，携帯用としたものであろう。全側面が使用されている。

不明石製品（第320図２）

黒色粘板岩を，極めて丁寧に表裏とも研磨したもので，側縁部は薄くなっている。方形の板状をなし，側面は擦り切った痕跡が明瞭である。厚さ4mmほどである。

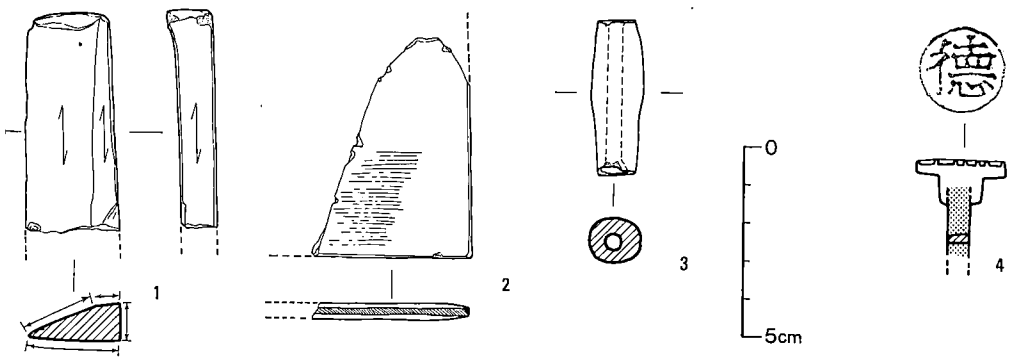


第319図　第５号溝出土瓦実測図（その2)(1/3)

土　錘（第320図３）

葉巻き形の小型品である。長さ4.1cm，最大径1.4cm，孔径0.4cmを測る。胎土精良で，表面は茶色のスリップをかけてヘラ磨きされている。

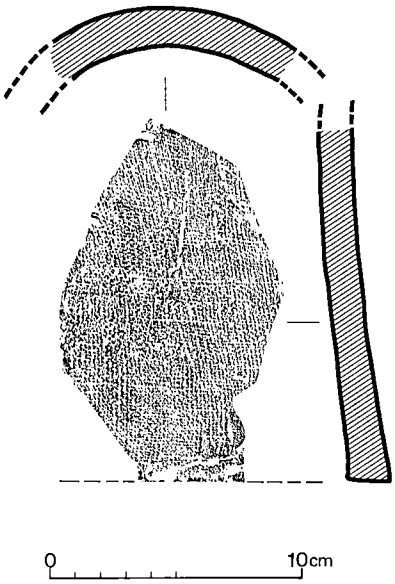
焼き印（第320図４）　牛馬の所有者を示す印として付けたものである。柄の部分は鉄製で，印の部分は銅製である。『徳』の字が彫られており，近・現代のものである。図示した印面は拓影ではなく，印影である。



第320図　第５号溝出土石器・土錘等実測図（1/2)

第７号溝出土遺物（第321図）

この溝は東半部の，圃場整備以前の近・現代の溝である。丸瓦片が出土した。凸面は横方向の丁寧なナデが施され，凹面は布目が明瞭である。下端面はヘラ切りによる。焼成須恵質で青灰色を呈する。



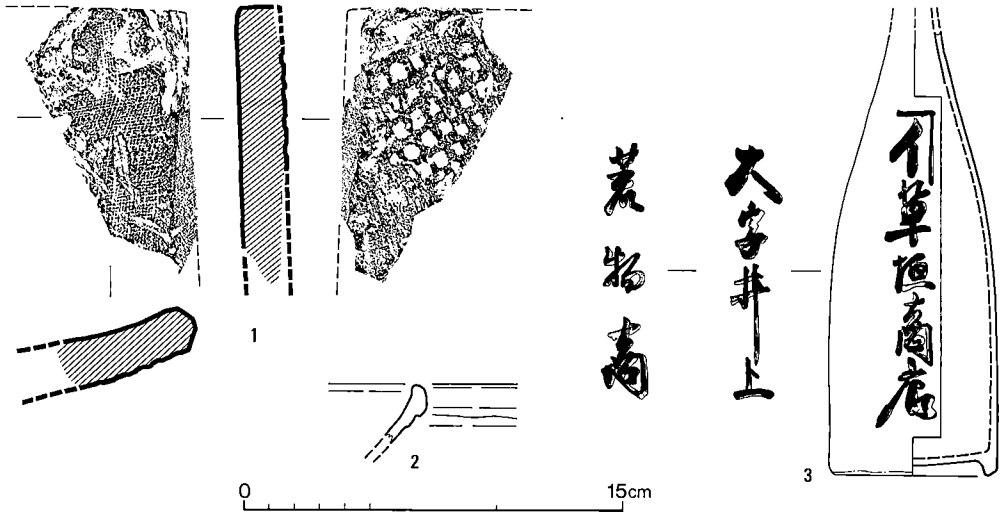
第321図　第７号溝出土瓦実測図（1/3）

第10号溝出土遺物（第322図）

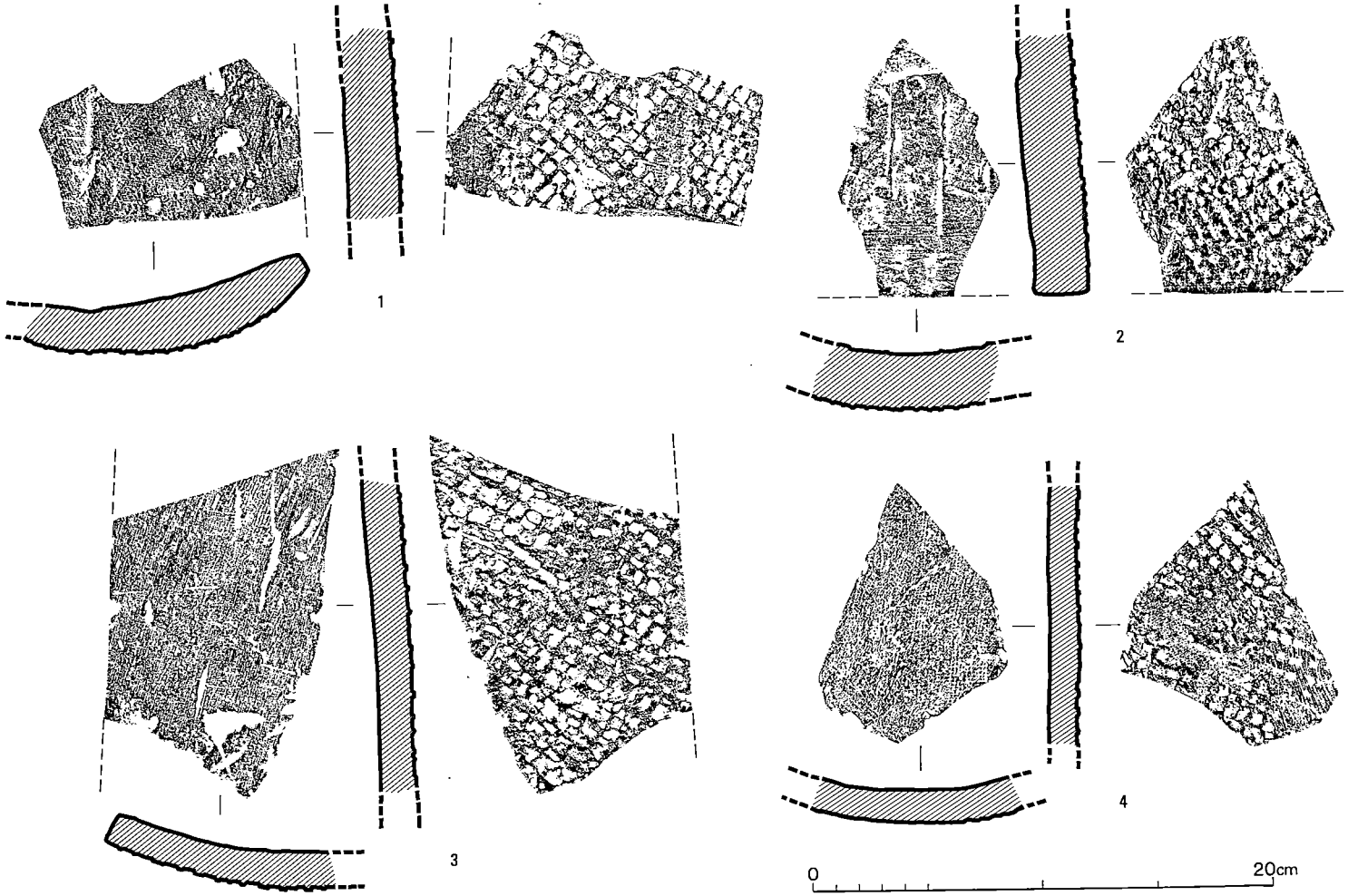
この溝は遺跡東端近くにある，圃場整備以前の用水路である。

１は平瓦片で，凸面は正格子叩目を斜位に施し，凹面は布目が明瞭である。側縁は両角ともにヘラ切りによる面取りが施されている。焼成やや軟質である。２は白磁椀口縁片で，やや小さめの玉縁状をなす。

３は，近代の徳利で，「大字井上」にある「荒物商」の「イ」の屋号を持つ「草垣商店」が盆暮の贈答品として配布したものであろう。磁器で，白色釉の地に紺色の字を書いたもので，畳付部のみが削って露胎となっている。



第322図　第10号溝出土瓦・磁器実測図（1/3）



第323図　第14号溝出土瓦実測図（1/3）

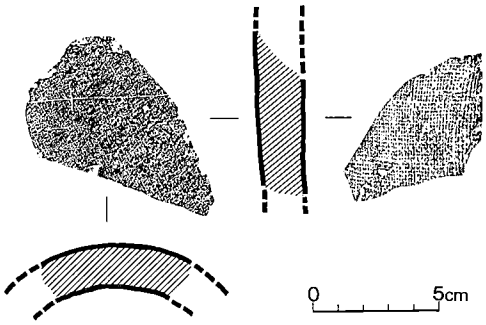
第14号溝出土遺物（第323図）

1は厚手の平瓦片で，凸面は正格子叩目を斜位に施す。凹面は布目の上を縦方向の工具によるヘラ削りで布目を消す。側面と両面側縁際はヘラ削りが施される。胎土に細石英粒をかなり含む。2も厚手の平瓦片で，凹面には幅2.1～1.9cmの模骨圧痕が接した状況がみられる。下端面から凹凸両面側へ3.5～4.5cmの範囲は横ナデ調整で仕上げられている。3は薄手の平瓦片で，凸面は正格子叩目を斜位に施し，凹面は布目の上をヘラ状工具による縦方向の擦過を施し，布目を殆んど消す。側面と凹面側際はヘラ削りが施される。4は薄手の平瓦片で，凸面は正格子目叩きを斜位に施す。凹面は右半分は布目を残すが，左半分は縦方向のナデ仕上げで布目を消す。

第15号溝出土遺物（第324図）

この溝は圃場整備以前の用水路である。

丸瓦片が出土した。凸面は横方向へのナデ仕上げで，凹面は布目が明瞭である。胎土は精選されており，焼成やや堅緻で，淡灰色を呈する。

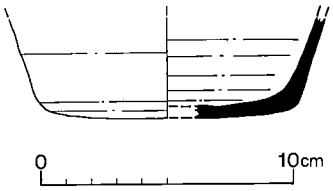


第324図　第15号溝出土瓦実測図（1/3）

第16号溝出土遺物（第325図）

この溝は遺跡の中央部南端に位置し，コの字形に廻っている。第5号溝に切られるが，いずれにしても近世以降の溝と考えられる。

須恵器杯1点が出土した。体部はそれ程外傾せずに立ち上がり，底部は丸味をもつ。体部外面と内面中心までは横ナデ，底外面は丁寧にナデている。7世紀末前後の所産であろう。



第325図　第16号溝出土土器実測図（1/3）

第17号溝出土遺物（第326図）

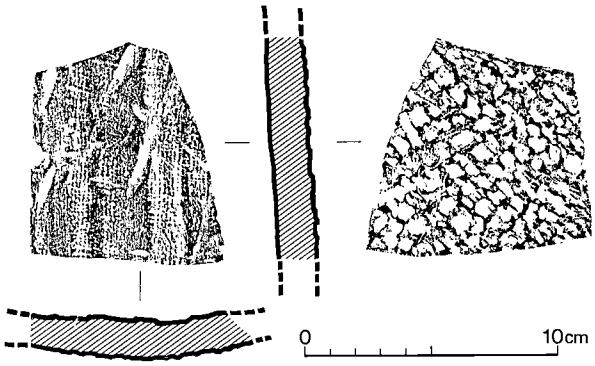
この溝は第5号溝から派生して南流すると思われる，圃場整備以前の小用水路である。

平瓦1点が出土した。凸面は粗い正格子目叩きを斜位に施し，凹面は布目の上に指縦ナデを施し，高い部分の布目を消している。つまり布目の残った部分は幅1.4cm前後の模骨圧痕である。胎土に粗砂少量を含み，焼成は生焼けで淡茶色を呈する。

第18号溝出土遺物

（第327・328図）

この溝は遺跡の東寄りの中央部に位置し，やや蛇行気味ではあるがほぼ東西に走る溝である。この溝と南側に沿った凹凸部分と更にその南側に沿った小さい溝を合わせて，道路状遺構を構成するものと考える。この遺構の詳細についての説明・検討は別に項目を立てたので，そちらを参照されたい。



第326図　第17号溝出土瓦実測図（1/3）

この第18号溝からは以下述べるように7世紀中頃～8世紀前葉代までの遺物が出土しており，道路状遺構の年代が示唆される。即ち，少くともこの溝は8世紀前葉代までは使用されたと考えられ，この溝を切る第10号土壙が8世紀後葉代であることとも矛盾しない。

須恵器（1～7）　1は低い高台を付けた杯底部で，高台径9.8cmを測る。体部外面下端は横ナデが施される。2は高台径8.0cmで，体部はあまり外傾せずに立ち上がる。いずれも8世紀前半代のものである。

3～7は，長頸壺で，3は胴部上半で強く折れて稜をなすものである。4は胴上半で強く張り，未だ角ばることはないが，移行形態を示すもの，7は胴部全体が丸味を持ち，古い様相を示すものである。7の胴部外面下半から底部にかけては回転ヘラ削りが施される。他面は横ナデ調整である。7は7世紀中頃以前，4・5はほぼ同工で，3は7世紀後葉以降の所産である。

土師器（8～14）　8は須恵器の生焼けの可能性がある。復原口径13.8cmを測り体部下端の屈折部以下の外面は回転方向のヘラ削りが施されている。9は，体部外面下半は手持ちヘラ削りで，復原口径14.0cmを測る。10は須恵器模倣品で，復原口径18.0cm，底径15.0cm，器高2.5cmを測る。底部外面は回転方向のヘラ削りがみられる。9・10は8世紀前葉の所産である。

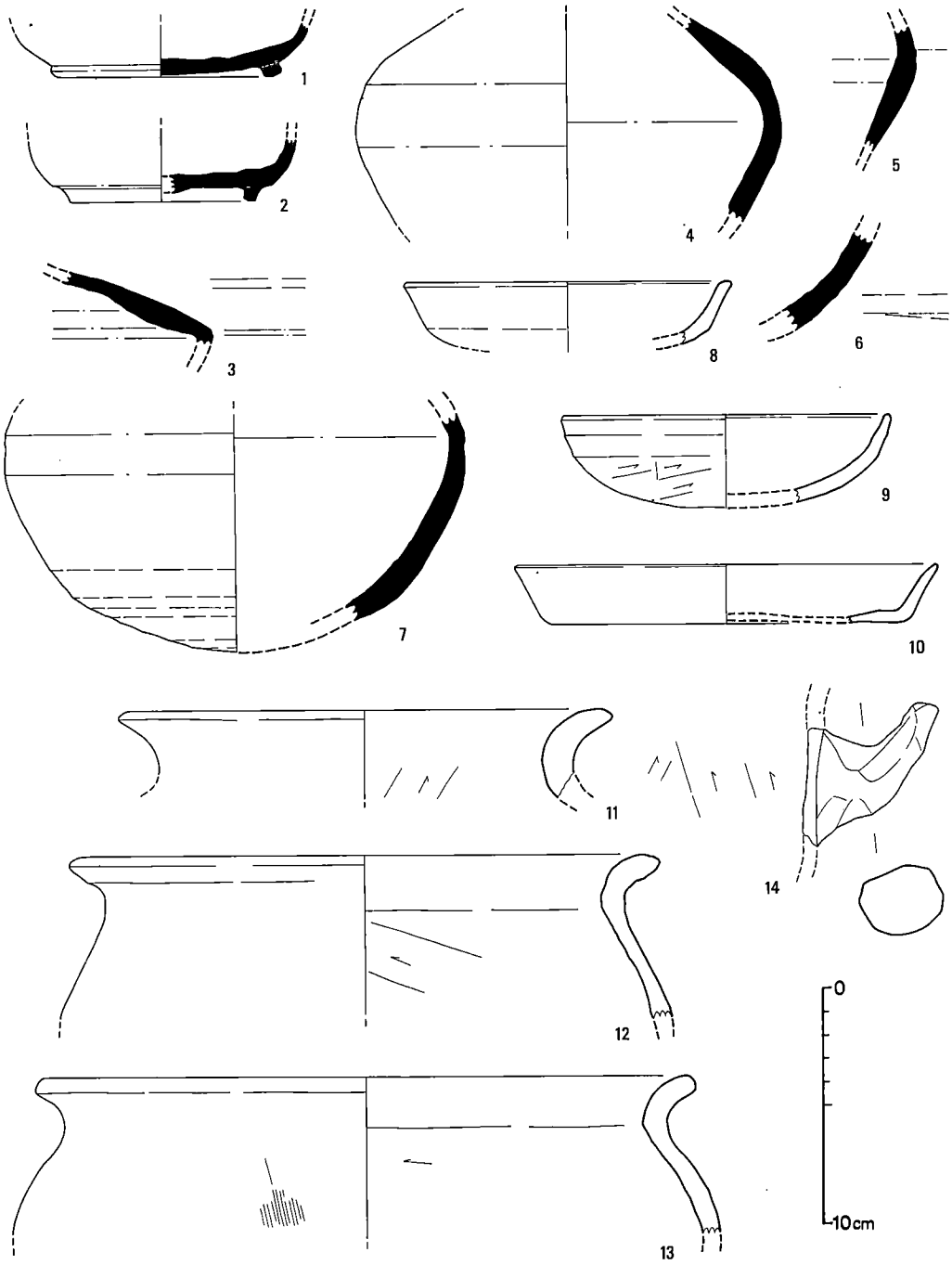
11～13は甕で，いずれも胴が強く張るタイプである。11は復原口径21.0cm，12の外面は磨滅しており，復原口径25.0cmを測る。13は口縁部に黒斑がみられ，復原口径28.2cmとなる。

14は甕の把手部分で，先端は細くやや扁平となる。

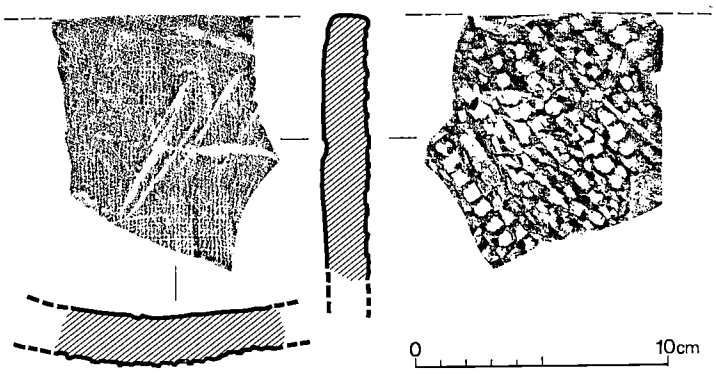
瓦（第328図）　平瓦片で，凸面は正格子叩目を斜位に施す。凹面は布目が明瞭で，横方向に布縫目圧痕がみられる。胎土に粗・細粒石英をかなり含み，生焼けで淡茶褐色を呈する。

第28号溝出土遺物（第329図）

この溝は第26～28・32号溝と平行に走る圃場整備以前のもので，浅く小さい規模である。



第327図　第18号溝出土土器実測図（1/3）



第328図　第18号溝出土瓦実測図（1/3）

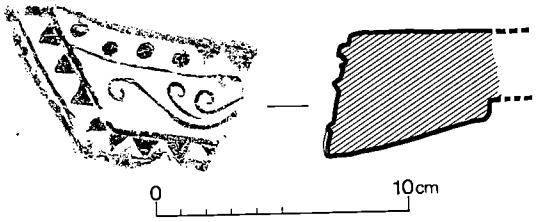
須恵器杯１点が出土している。やや外傾して開く体部につくり，体部内外面横ナデ，底部内面はナデツケ，外面は体部下端以下回転ヘラ削りである。胎土に細砂を若干含み，淡灰色を呈する。８世紀後半代の所産と考えられる。

第329図　第28号溝出土土器実測図（1/3）

第33号溝出土遺物（第330図）

この溝は，遺跡西北端の，高松家墓地西外側に南北に走る浅い溝である。

軒平瓦１点が出土している。左行する扁行唐草文の上外区に珠文帯を，左の脇区から下外区に外向きの凸鋸歯文帯を配する。顎は長さ6.5cmの段顎となる。凹面部はヘラ削りがみられる。所謂老司Ⅰ式に属する。

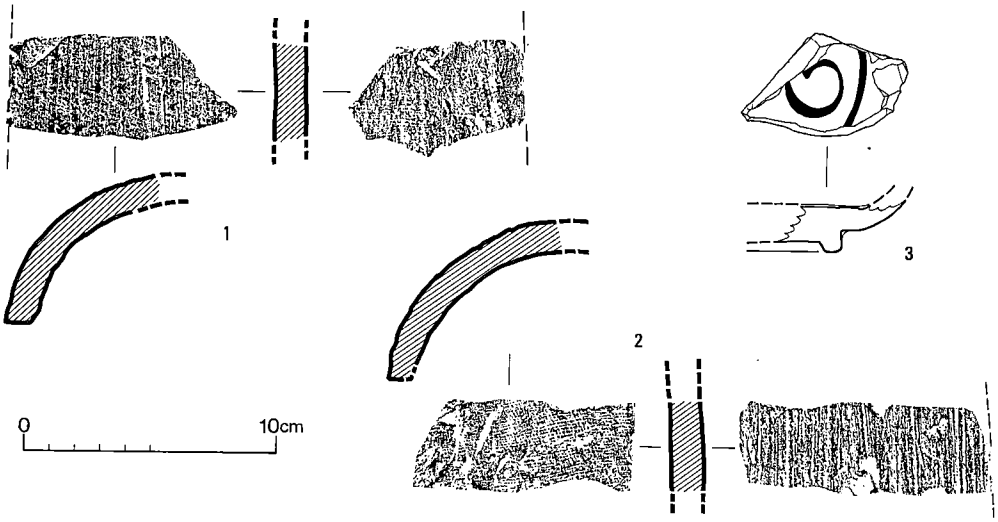


第330図　第33号溝出土瓦実測図（1/3）

おそらく井上廃寺に使用されたものと考えられ，西隣の薬師堂谷遺跡や，廃寺周辺で表採されている忍冬唐草文系の軒平瓦のみでなく，老司系瓦も使用されたことは注目される。

第34号溝出土遺物（第331図）

この溝は遺跡北西端の高松家墓地をとり巻くように掘られた第35号溝の西南隅から西方へ延びるものである。恐らく第35号溝と連結した近世以降の溝と考えられる。



第331図　第34号溝出土瓦・青磁実測図（1/3）

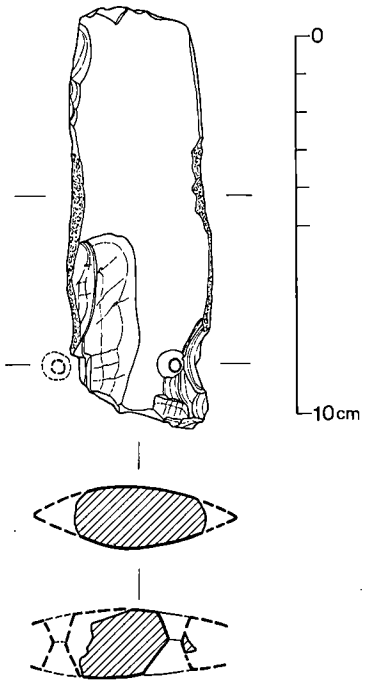
1・2は丸瓦片である。いずれも凸面は板状工具による縦位の擦過が施され，凹面は布目の上に縦方向の縞状指ナデが行われている。側面はヘラ切りで，1の凹面側縁際はヘラ削りで面取り状を呈する。胎土に細石英粒をかなり含む。2は焼成やや軟質で淡褐～暗灰褐色をなす。

3は青磁椀で，龍泉窯系青磁椀Ⅰ類で平安末～鎌倉期のものであろう。松葉色の釉で，底部厚く，低い削り出し高台につくる。

第37号溝出土遺物（第332図）

この溝は遺跡西北端近くに位置し，第36～38号溝が平行して各々短く掘削されているうちの1本である。溝の形状が不整的で，浅く，古代のものかと想定される。

弥生時代の石戈が出土している。頁岩質石材を使用し，鋒先側と基部を欠損する。鎬はみられず，全体の旧状の復原は困難である。両側面に細かい敲打痕が残っており，この部分だけ刃



第332図　第37号溝出土石戈実測図（1/2）

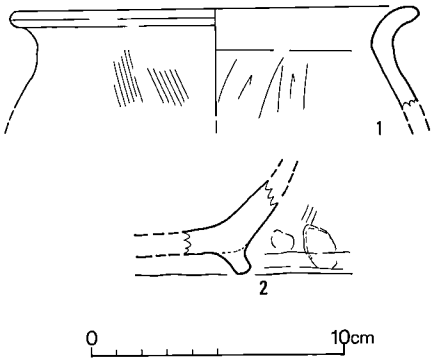
を潰して再利用しようとしたものかと思われる。

本遺跡からは明らかな弥生時代遺構は全く検出されておらず，遺物も土器片数点のみである。谷を挟んで西の井上薬師堂遺跡で弥生時代住居が検出されており，これら周辺の遺跡から偶々持ち込まれたものであろう。

第38号溝出土遺物（第333図）

この溝は前述の第37号溝の北側に位置している。整わない形状や浅い埋土状況から古代の掘削によるものかと考えられる。

1は土師器小甕で，復原口径16.1cmを測り，胴部は強く張る。2は，土師質焼成で，外面にはハケ目や指頭圧痕が残る。厚手の器壁であり，壺底部かと思われる。胎土精良である。



第333図　第38号溝出土土器実測図（1/3）

第39号溝出土遺物（第334図）

この溝は，唯一中世（14世紀）の明らかな溝で，ほぼ直線的に西北西へ走る。第2～4・64・65・31号の各住居跡を切り，また，第5号掘立柱建物や7世紀中葉の第3号土壙墓をも切っている。この時期の明確な遺構が他に無いので，この第39号溝自体の性格もつかみ難い。

1～3は，底部糸切りの土師器杯で，口径12.0～11.7cm，器高3.2～3.0cm，底径5.4～5.7cmを測る。体部内外面横ナデで，底内面にはナデツケがみられる。内面の横ナデは強く，凹凸が多く特徴的である。胎土に細砂粒を若干含むが大旨精良である。

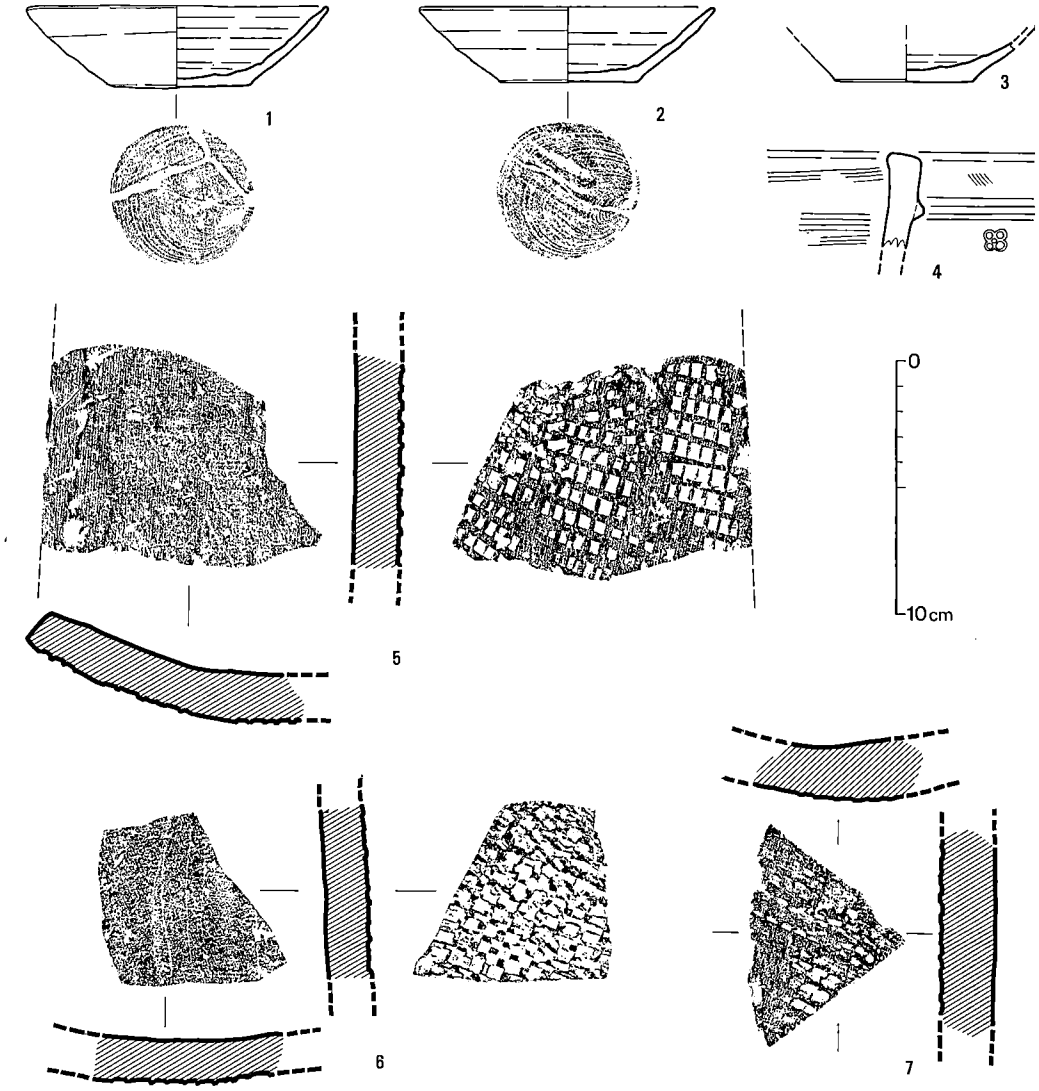
4は瓦質焼成の火舎口縁で，外面凸帯下部に花文が押圧されている。内面は横ハケで，胎土精良である。

5は平瓦片で，凸面は正格子目叩き，凹面は布目の上を斜めにナデ上げており，かなり布目が消える。側面はナデ仕上げで，両面側際にヘラ削りが施されている。6は須恵質焼成の平瓦片で，凸面は正格子目叩き，凹面は布目の上を部分的に縦ナデで消している。凹面中央に意味不明の縦方向3本細沈線がみられる。7は厚手の平瓦片で，凹面は縦方向のナデで布目を完全に消している。淡白褐色を呈する生焼けである。

以上の出土遺物のうち1～3が14世紀代の所産と考えられることから，この第39号溝は14世紀代に掘削されたものとされよう。

第41号溝出土遺物（第335図）

この溝は遺跡の東側のG住居群中にあり，東西に12mほど延びるものである。その底面は凹



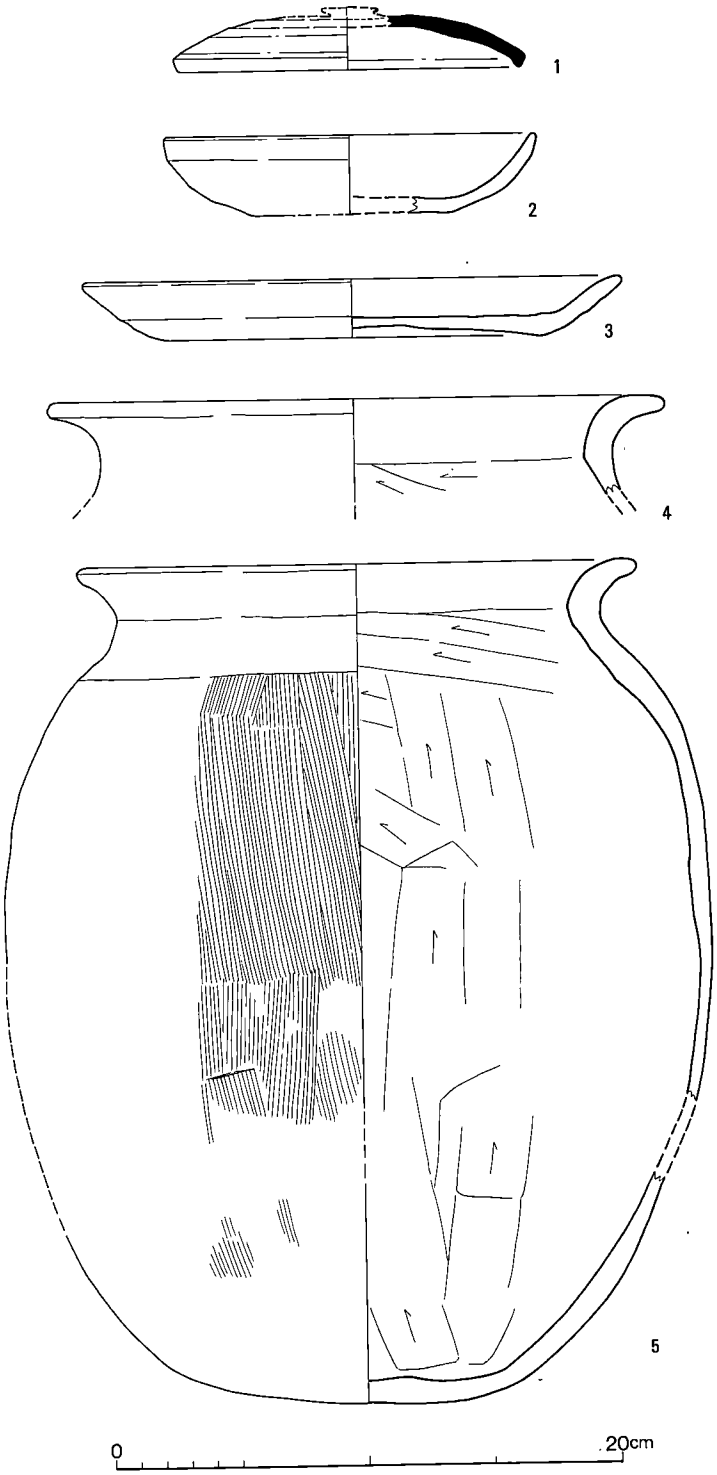
第334図　第39号溝出土土器・瓦実測図（1/3）

凸著しく，土壙状とさえ感じられるものである。第19号溝と東端で連結する。この第41・19号溝で囲まれる区画内に第２号掘立柱建物が占地しており，両者の有機的な関係が窺われる。また，この建物の南側には，第18号溝の北に接するように東西に小溝が走っており，第18号溝以南の道路状遺構と第41・19号溝で区画される範囲が第２号掘立柱建物の専有敷地（屋敷内）と考えられる。

1は須恵器杯蓋で，短かく退化した口縁につくる。復原口径13.4cmを測る。2は土師器杯で，復原口径14.6cmを測る。内外面磨滅しており調整はわからない。外面底部に黒斑部がみられる。3は大きく開く口縁となる大口径の土師器皿である。体部内外面横ナデ，底部内面はナデツケ，底外面中央部は未調整のままでその周縁部は回転方向のヘラ削りが施されている。復原口径21.3cm，器高2.3cmを測る。

4・5は土師器甕で，いずれも強く張る胴部となる。4は口径24.4cm，5は口径22.0cm，器高33.2cm，胴部最大径27.9cmを測る。5の底面はやや平底的な感じとなる。

以上の出土遺物は，5が7世紀後葉代で，1～3は8世紀後葉代と考えられる。このことから第41号溝は8世紀後葉までは存続していたものと考える。

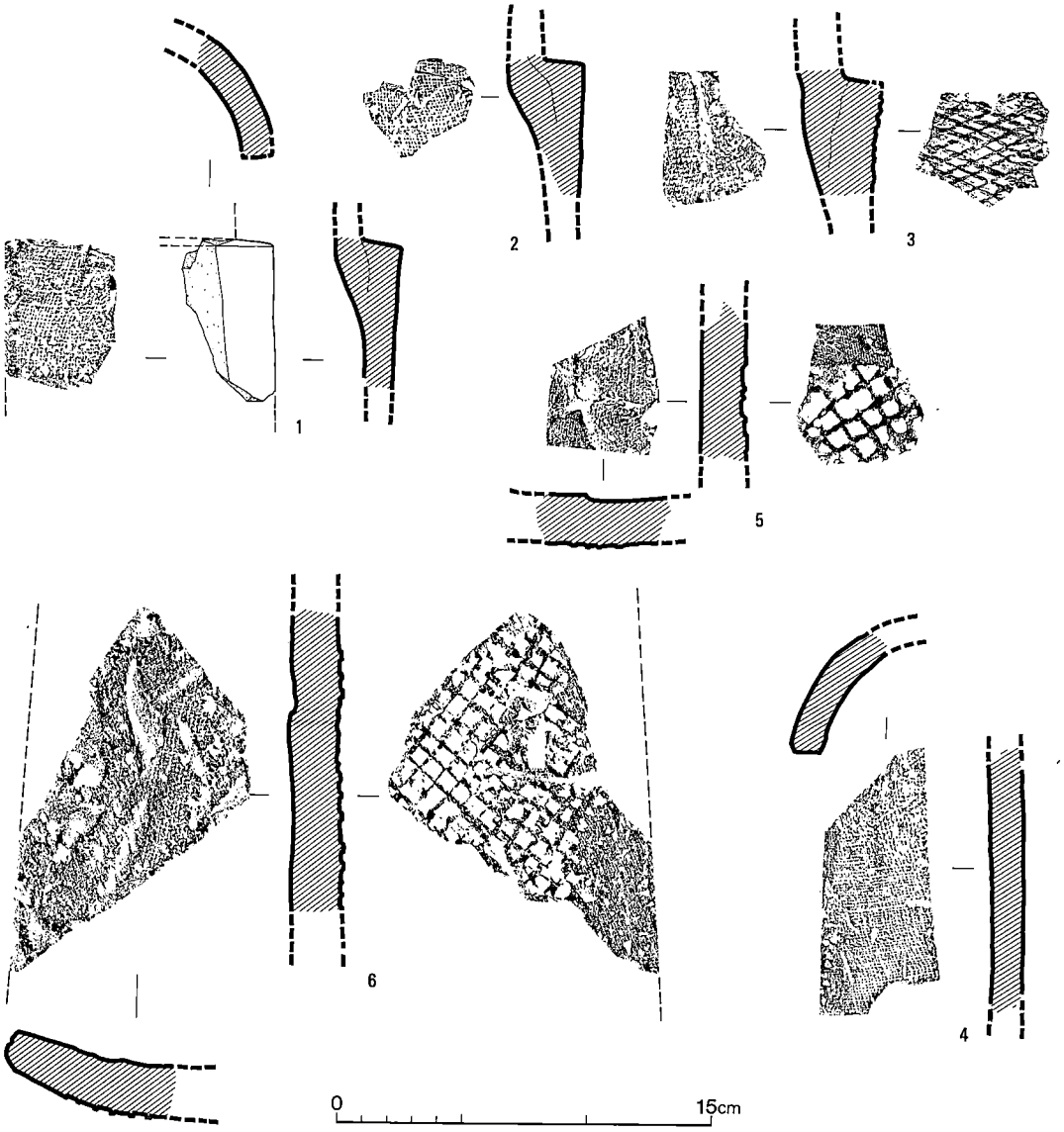


第335図　第41号溝出土土器実測図（1/3）

第42号溝出土遺物（第336図）

この溝は遺跡の東端近くにあり，圃場整備以前の近～現代溝である。古代瓦片が若干混入していた。

1は玉縁となる丸瓦片で，凸面は横方向のナデ，凹面は布目を残す。側面はヘラ切りによる。



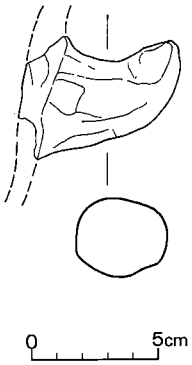
第336図　第42号溝出土瓦実測図（1/3）

2は1と同類の玉縁丸瓦で，凸面は横ナデ，凹面は布目を残す。いずれも胎土精良である。3は玉縁の丸瓦であるが，凸面に細かい斜格子目叩きを施している。4は丸瓦片で，凸面は横位ナデ，凹面は布目をよく残す。側面とその両角はヘラ削りを施す。5は平瓦片で，大きい正格子叩目を施す。凹面には幅2.5cmの模骨圧痕がみられる。6は平瓦片で，凸面に正格子叩きを斜位に施し，凹面は布目の上を縦方向に粗いヘラ削り上げを行う。側面中央には沈線がみられる。両面の側縁に幅2～3cmほどのヘラ削りが施される。生焼けで淡褐色を呈する。

第43号溝出土遺物（第337図）

この溝は第18号溝の北側に沿うようにして延びる。幅の狭い，底面の凹凸著しい小規模溝である。ただ，道路状遺構北側であるため第18号溝と強く関連するものと考えられる。例えば，道路拡張のため新たに掘り直された可能性もある（逆に縮小の可能性もある）し，両溝はそうかけ離れた時期のものではなかろう。

土師器の甕もしくは甑の把手部分が出土した。全面に強い指押さえ痕がみられる。器壁に挿入して接合するタイプである。

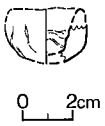


第337図　第43号溝出土土器実測図（1/3）

第45号溝出土遺物（第338図）

この溝は北側で第5号溝と並列するが，中央付近では第5号溝に切られている。いずれにしても，圃場整備以前の溝であり，近～現代の掘削と考える。

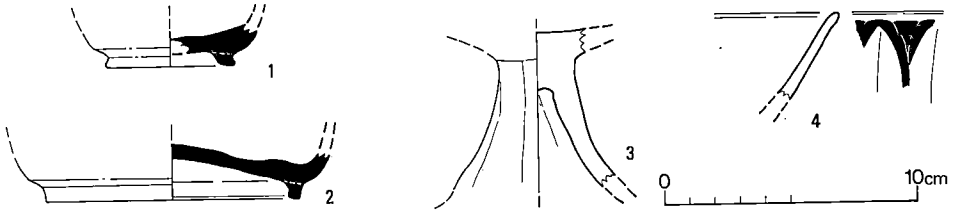
小型の手捏ね土製品が1個出土している。径3.2cmほどの小さなもので椀形のミニチュアと考えられる。全体に指圧痕が多くみられ，胎土に粗砂粒を若干含み，焼成良好で，淡茶褐色を呈する。



第338図
第45号溝出土
土器実測図（1/3）

第48号溝出土遺物（第339図）

この溝は遺跡の中央に南北に走るもので，北端で東向きに曲がって，第5号溝と連結している。北寄りで第43・44・46～48号住居跡を切っている。圃場整備以前の近～現代溝である。



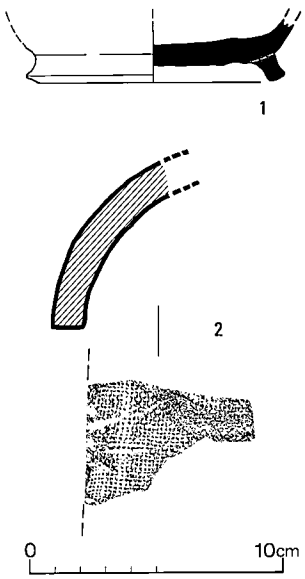
第339図　第48号溝出土土器実測図（1/3）

1は極めて小ぶりの須恵器杯で，高台径5.0cmを測る。外端で接地する低い高台を付ける。2は焼き歪みがみられる復原高台径10.0cmの須恵器杯である。直立する低い高台を付ける。3は土師器高杯で，内外面磨滅するが，脚柱外面は縦方向ヘラ削りのようである。4は龍泉窯系青磁椀で，体部外面には鎬蓮弁が彫られる。

第50号溝出土遺物（第340図）

この溝はF住居群の北側に位置する。深い暗渠状を呈し，圃場整備後に掘削されたものである。

1は須恵器杯で，復原高台径10.2cmを測る。高台は外方へ踏ん張った形状を示し，体部外面は下端まで横ナデ調整を施す。2は，丸瓦片で，凸面は横ナデで仕上げている。側面はヘラ切りで，凹面は布目が明瞭に残る。生焼けで灰白色を呈する。

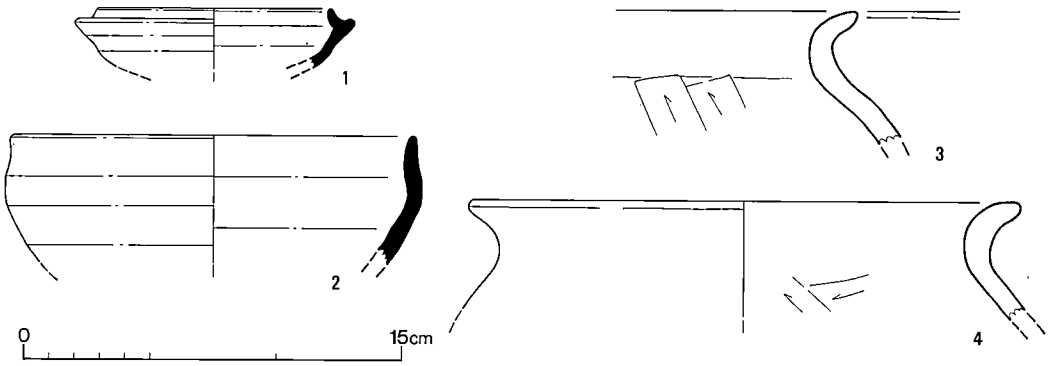


第340図　第50号溝出土土器・瓦実測図（1/3）

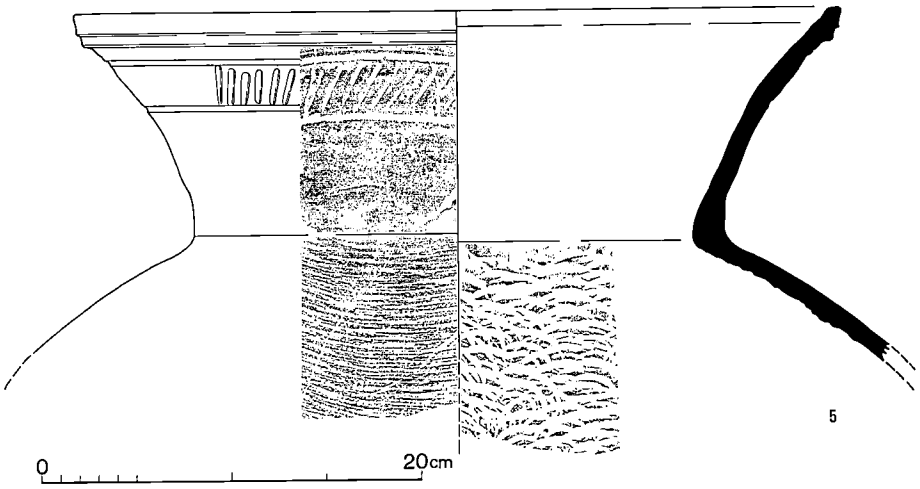
第52号溝出土遺物（第341・342図）

この溝は，B住居群の北端から北へ18mほど延びるもので，浅く不整的形状をなす。真北からわずかに東へふって延びており，南端では第7号住居跡に切られる。珍しく南北方向に走る古代溝である。

1は須恵器杯身で，受け部端径9.3cmを測り，蓋と身が逆転してもよい時期のものである。残存部では横ナデ調整がみられる。2は須恵器鉢で，口径16.0cmを測る。体部上半で張り，



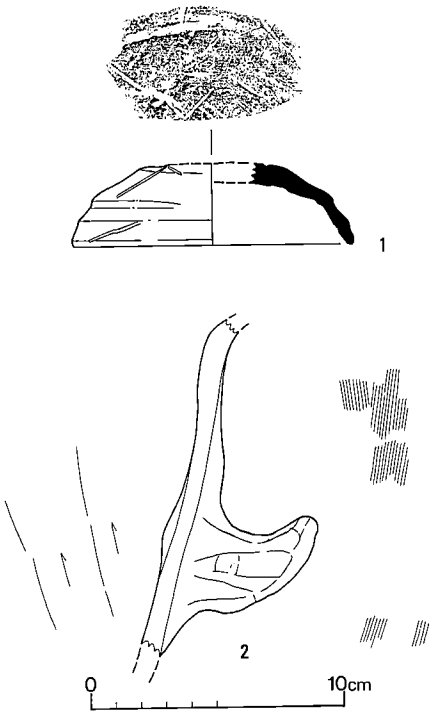
第341図　第52号溝出土土器実測図（その1）(1/3)



第342図　第52号溝出土土器実測図（その2）(1/4)

底部へとすぼまる器形をなす。3は土師器甕口縁で，胴部が強く上半で張る形態をなす。4も甕口縁で復原口径21.8cmとなる。5は，須恵器大甕で，復原口径40.3cmを測る。口縁下に2本の沈線に挟まれた板木口圧痕による文様帯がつくられる。胴部外面は横位の条蓆状平行叩き，内面は青海波が施されている。

以上の出土遺物は，1が7世紀前葉頃で，5も胴部外面の叩きに問題があるが，7世紀後葉以降には下らないものと考えられる。よってこの溝は7世紀前葉を上限とする時期の掘削と考えられる。



第343図　第53号溝出土土器実測図（1/3）

第53号溝出土遺物（第343図）

この溝は遺跡西端のC住居群とC′住居群を区切るようにして蛇行しながら東西に走る溝である。途中で第9号土壙墓を切っている。この土壙墓は7世紀初頭代に近いころと考えられる。

1は口径11.0cmを測る須恵器杯蓋である。体部中途に段をつくり，やや古い様相を残す。天井外面はヘラによる粗い擦過がみられる。2は土師器甑片である。胴部は張らず，やや小さめ

の把手を付ける。

これらの土器のうち，1は7世紀前葉段階のもので，この第53号溝の上限を示すものと考えられる。既述した如く，C住居群とC'住居群を区切る溝と考えると，重要な位置付けをせねばならぬ遺構である。（中間）

G 井　　戸

本遺跡は低段丘上に占地しているため，小さな入り組んだ谷が近く，生活用水自体にはそれ程不自由はしなかったものと考えられる。西隣の谷（薬師堂谷遺跡）はしかし，8世紀後半段階では開析され湿田化していたと考えられており，常時流水のある状態ではなかった。よって，飲料水等については，この谷のいずれかに湧水地点が存在していたにしろ，本遺跡の集落全体をまかなえる程ではなかったろう。

調査範囲内では3ヶ所の井戸と考えられる遺構が検出されている。即ち，東端近くの第1号井戸と，中央やや西寄りの第52号住居跡に切られる第2号井戸，それに巨大土壙である第47号土壙内の東寄りに掘られた円形井戸状土壙である。これらはいずれも1.5m前後の深さで，他遺跡例等と比べるとかなり浅い。しかしこれは，今回の発掘によって経験した如く，この深さで既に砂利層近くの湧水面に達する訳で，充分その機能を果していたと考えられるのである。

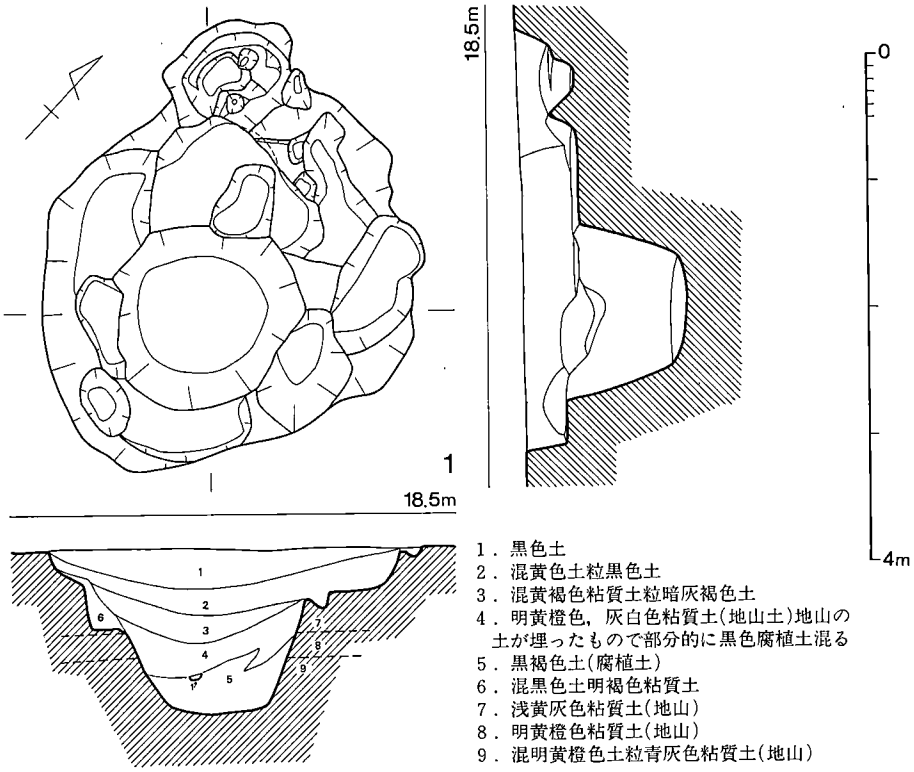
遺跡全体で3基だけとは少ない気もする。しかもそれぞれの年代が後に詳述する如く，7世紀中葉，7世紀後半～末，8世紀末と全く異った時期のものである。とすれば集落全体で1基しか無かったということになり，やはり西半の住民は谷の湧水を利用したことが充分想像される。

以下，各個別について記述する。ただ，第47号土壙内の円形井戸状土壙については，その項で既に詳述してある（本文269頁）のでここでは重複を避けたい。その年代が，8世紀末ごろに掘削され，9世紀前葉には埋没していたという検討結果だけを記しておく。

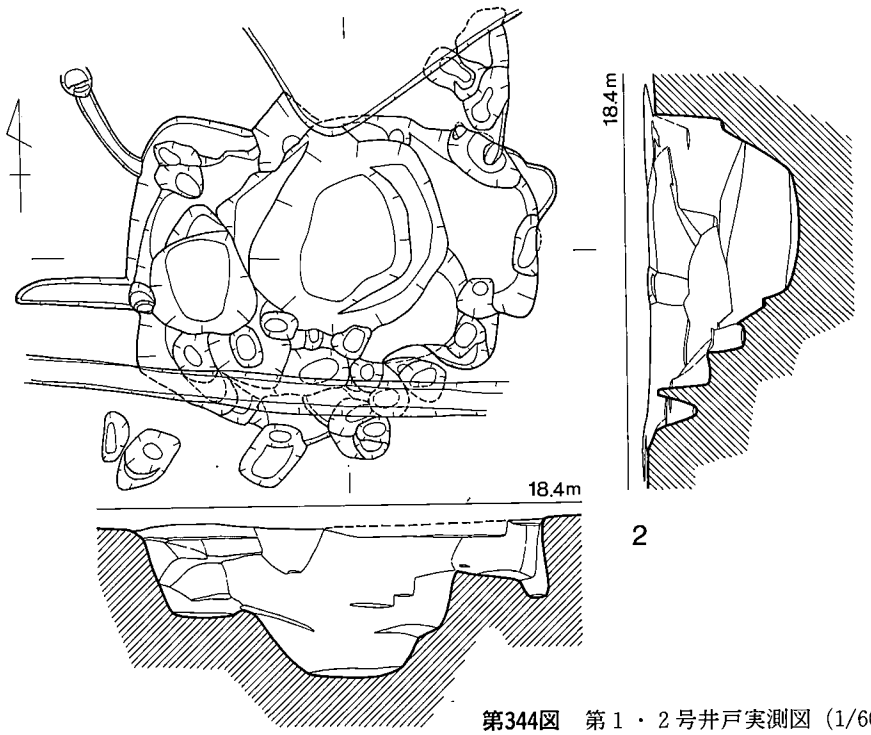
第1号井戸（図版143，第344図）

遺跡の東端近くは，広く南北方向に微低地となっており，その周辺には遺構が殆んど見られない。その微低地沿いの西側のまだ高い部分に第1号井戸が掘削されている。G住居群の南東にあたるが，全体としても集落のはずれという位置である。

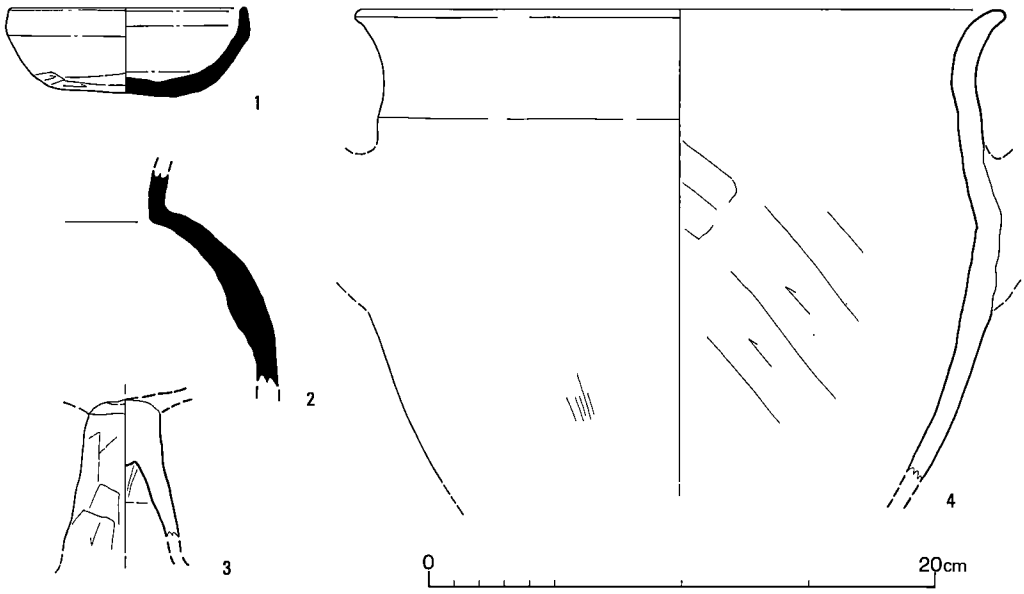
遺構は，中央に底径で1.05×0.9m，深さ1.3mの円形壙を掘り，その周縁を最大径3.7m，深さ0.5～0.3mに掘り込み，全体として2段掘り状としている。この段状の平坦面はほぼ全周に



1．黒色土
2．混黄色土粒黒色土
3．混黄褐色粘質土粒暗灰褐色土
4．明黄橙色，灰白色粘質土(地山土)地山の土が埋ったもので部分的に黒色腐植土混る
5．黒褐色土(腐植土)
6．混黒色土明褐色粘質土
7．浅黄灰色粘質土(地山)
8．明黄橙色粘質土(地山)
9．混明黄橙色土粒青灰色粘質土(地山)



第344図　第1・2号井戸実測図 (1/60)



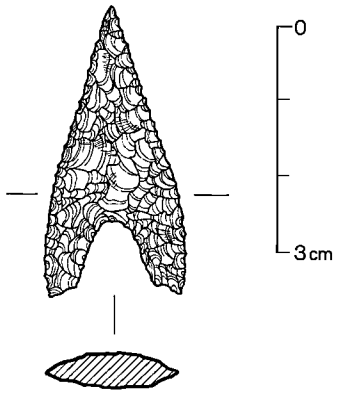
第345図　第１号井戸出土土器実測図（1/3）

みられ，特に北西側では広く，更にその外端には柱穴がみられ何らかの施設が構築されていたものと考えられる。土層図で示した，地山の第９層は粘質っぽい土であるが，その上面で既に湧水がみられ，ポンプを使い乍らどうにか完掘した程であった。

出土遺物（第345図）

１は埋土最下層から出土（土層図中第５層に図示）したもので，須恵器杯身の完形品である。口径9.5cm，器高3.4cmを呈し，底外面は手持ちヘラ削りを施す。２は須恵器提瓶の破片で，内面は横ナデ，外面の頸部は横ナデ，胴部上端付近はカキ目，以下は縦方向の回転ヘラ削りを施している。

３は土師器高杯脚部片で，上半内部が充実した細身のタイプである。内外面ヘラ削りかと思われるが全体に磨滅しているので定かではない。胎土精良である。４は土師器甕で，把手が剝げている。復原口径25.6cmで，口縁はゆるやかに外反し，頸部は肥厚しない。長胴化しておらず，



第346図　第１号井戸出土石鏃実測図（1/1）

古相を示している。胴部外面に黒斑がみられる。

第346図は黒曜石製打製石鏃で，漆黒色の良質の石材を使用している。表面は風化が進んでおり，この形態からも縄文早～前期のものと推定できる。全長3.8cm，幅1.8cm，厚さ0.5cmで，縁辺は二次的に更に微細なリタッチを施している。重さ2.1gとなる。極めて丁寧なつくりの優品である。

以上の出土遺物は，1・2が7世紀中葉代で，3・4は更に古相を示しており，少くとも7世紀初頭までは上りそうである。ただ3・4は磨滅がひどく，石鏃とともに混入品と考えた方がよさそうである。よってこの第1号井戸は7世紀中葉の掘削と考えられる。

第2号井戸（図版144，第344図）

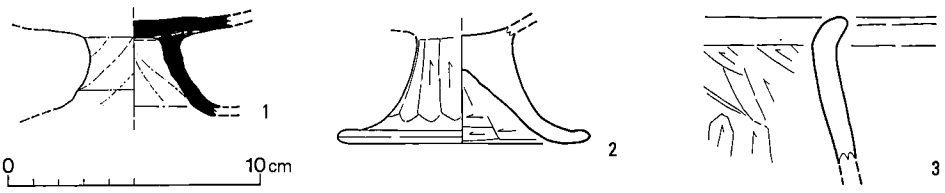
F住居群の西端，つまり遺跡の中央やや西寄りに位置する。第52号住居跡に北端を切られており，更に南端を新しい溝が東西に切る。

中央に，底径で1.0×0.7m，深さ1.25mの円形の深掘りがあり，全体としては4.0×3.2mの不整形の掘り込みである。第1号井戸と同様に2段掘りの形状をなしているが，周辺部は小さなピットが多数掘り込まれている。西側の平坦面がやや広く出入口となったと思われる。

出土遺物（第347図）

1は須恵器高杯で，低い脚部となる。内外面にシボリ痕が残り，脚部は横ナデを施している。全面に灰かぶりがみられる。杯部がやや深いタイプとなろう。2は土師器高杯脚部で脚端径9.9cmを測る。脚柱部外面は縦方向のヘラ削り，内面は横方向のヘラ削りを施す。3は土師器小甕片で，短かく屈折して外傾気味に開く口縁となる。外面は磨滅して調整はわからない。

以上の出土遺物のうち，2は7世紀前半代の古い様相を示すが，1の高杯は7世紀後葉～末の年代と考えられる。よってこの第2号井戸の掘削時期は，周囲の住居群の状況とも併考して7世紀後葉～末頃と考えられる。（中間）



第347図　第2号井戸出土土器実測図（1/3）

H　道路状遺構（図版138，第348図）

本遺跡の中央から東へ，東西に走る第18号溝は，やや蛇行しながらではあるが，約90m延びる。東端は，遺構の無い微低地の手前で消滅している。

この溝の南側2.0～3.4mには，平行する，浅くて細い溝が切れぎれに続く。この２本の溝に挟まれた部分は凹凸が著しく，特に西半側では，両溝と直角方向に長円形の窪みが連続している。これらの状況から，この２本の溝の間は道路であろうと判断するに至った。

中央の長円形窪みは，主に第15号溝から第45号溝までの，約26mの間が特に顕著である。それ以東は，浅い段状落ち込みなどの凹凸がかなりみられる状態となる。

長円形窪みは，長いもので1.6m，平均で1.2m前後で，幅は40cm前後，深さは10～５cm程度である。この窪みは，当初攪乱孔かとも考えたが，埋土は多くの土器細片を含んで固く締まっており，古代の遺構であるという確信を得るに至ったわけである。

これは，民俗例で「木馬道（きうまみち）」，即ち，木材を引き出すために道にころを敷きつめた作業道，がみられる事から推定される。つまり，集落を東西に貫く道路に，何か重量物を運搬する必要があるために，丸太材を埋め込んで強化整備したものであろうと考えられる。

また，特殊な重量物の運搬を想定しなくとも，このあたりの表土は火山灰を含んだ黒色土で，その下の黄色粘質土にしても，一雨降ったならば，とても車などを引ける状態ではなく，そのためにも，このような地業は極めて有効なものであったと思われる。

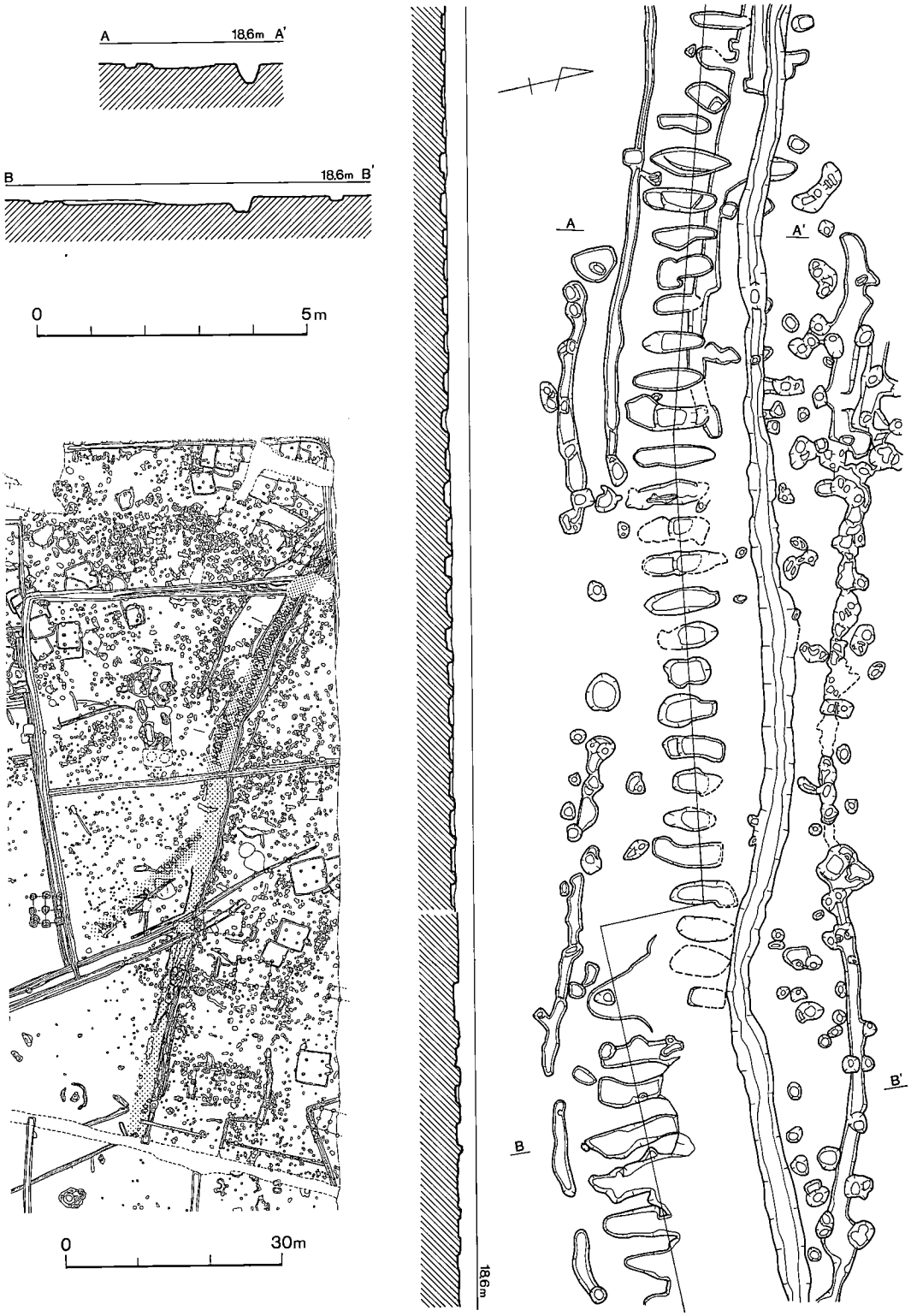
という訳で，この凹凸の遺構は，丸太を敷きつめた道路であったと推定した。そして，北側に沿う第18号溝を側溝と考えると，その続く限りは，その南側２ｍ程は道路であったものと推測される。

また，この道路状遺構の第３号溝と第15号溝の中間ぐらいの所から，東南方向へむかって，やはり長円形の窪みが連続している部分が検出されている。これは，第47号溝の西側に沿うようにして連続しており，主道から分かれた枝道と考えられる。第47号溝の延長線上には更に小さい溝が延びており，これを東側の側溝と考えれば，第18号溝に沿う主道から分かれて，20mほどは延びていたことになる。これは何のための枝道であったのか，速断を許さないが，この遺跡最大の，しっかりした倉であった第１号掘立柱建物へ通じる運搬道であったと想像しておきたい。

同種遺構の他遺跡例や，それらの検討は，後論にて若干試みてみたい。

出土遺物（第365図　P.1178）

長円形の窪みの中からは，多量の土器細片が出土したが，図示できるものは極めて少ない。P.1178は，第348図でＡ－Ａ’で断面を切った西隣の長円形窪みである。



第348図　道路状遺構実測図（1/120，1/900）

須恵器杯身で，長く外方へ踏ん張る高台を付ける。体部から底部にかけて丸くなり，横ナデを施して回転ヘラ削り痕を残さない。高台径8.6cmを測る。

この土器は，7世紀の中頃に近い後葉代のものである。既に，第18号溝出土土器については記述したが，7世紀中葉から8世紀前葉までの各時期のものが含まれている。また，この道路状遺構は，東寄りの部分で，8世紀後葉の第10号土壙に切られており，年代的に矛盾は無い。

よって，この道路状遺構は，8世紀後葉を下限としながらも，7世紀後半代から，第18号溝出土土器の示す8世紀前葉期まで使用されたものと考えられる。また，その間には第18号溝の北側に沿う第43号溝などの存在等に見られる如く，側溝の掘り直しや道路幅員の拡張等を含めた，幾度かの大がかりな整備事業が行われたことが判かる。（中間）

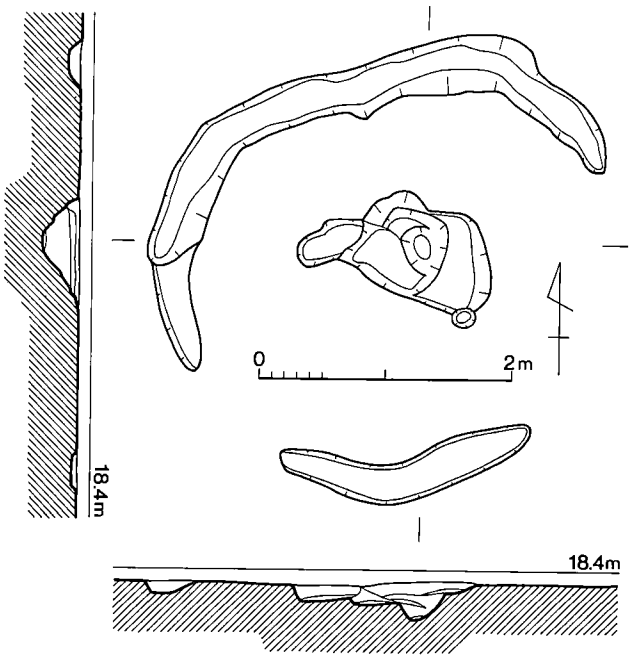
I　円形周溝遺構

第1号円形周溝墓（図版144，第349図）

本遺跡では，円形に周溝を巡らす小規模な遺構はこの1基のみである。遺跡東端近くの，G住居群の南東側に位置する。これから東側は微低地となり遺構の無い部分であり，集落全体からして一番はずれに占地するとも言える。

周溝は外端径で3.8×3.4mのやや楕円気味に巡るものであり，全体に削平されて2ヶ所で途切れている。溝の幅は平均0.35m，深さは0.1mと浅い。

中央の墓壙と考えられる土壙は，全体に不整形で，長さ1.5m，幅0.7mで底面は中心の小孔にむかって深くなる。通常の墓壙と考え



第349図　円形周溝実測図（1/60）

られる形態を示していない。

中央土壙内および周溝内から土師器甕胴部小片がいくらか出土したが，時期を確定できるようなものは皆無である。

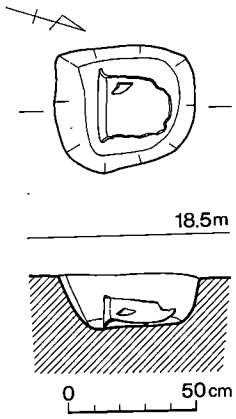
本遺跡周辺の北筑後地域では，例えば干潟遺跡などで中央に土壙墓などの主体を持つ歴史時代の円形周溝墓がいくらか発見されつつあり，平安時代にこの種墓制が行われていたと考えられている。本遺跡のこの遺構が墓であるという積極的な確証は無いにしても，このような状況判断から，ここでは墓と考えておく。これは，この遺構の西側6mの位置に，これも墓の一種と考える埋甕が占地することからも推測できる。（中間）

J 埋　　甕

第1号埋甕（図版145，第350図）

本遺跡の東端近く，G住居群の南方に位置する。東方6mには円形周溝遺構が存在するが，このあたりは殆んど遺構の存在しない，集落全体から見てはずれた場所である。

径55×50cm，深さ21cmの穴を掘り，その中に土師器甕を横位に埋納したものである。甕の直下から墨書のある須恵器杯蓋片が出土したが，他に副葬品，骨等はみられなかった。穴の大きさや甕の法量等からみて，乳児等の墓と考えられる。



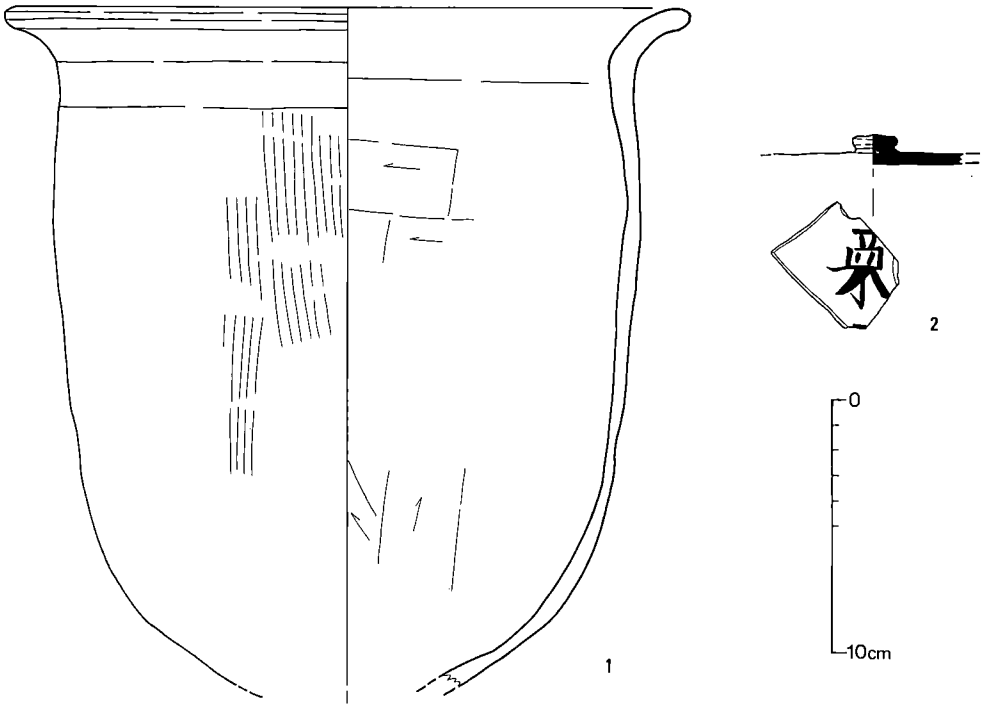
第350図　埋甕出土状態実測図（1/30）

出土遺物（第351図）

1は土師器甕で，棺として使用されたものと考えられる。口径27.0cm，器高は27cm前後と推定される。やや長胴で全く張らずに下方へすぼまる。底部近くでいくらか屈曲をみせる。頸部の肥厚は弱く，内面の稜も不明瞭である。胴部内面上半は横方向のヘラ削りがみられる。全体に新しい様相が強い。

2は，須恵器杯蓋で，直径1.7cmの小さな撮を付ける。内面はナデツケ，外面は横ナデ調整が施されている。胎土はかなり精良で，焼成堅緻で灰色を呈する。内面に墨書がみられる。「衆」あるいは「栗」などと読めそうであるが，孰れも判然としない。更に下にはもう1字書かれているようである。

以上の出土遺物からみて，棺・須恵器片ともに8世紀末の年代が考えられる。墨書須恵器片は，単なる混入品ではなく，意識して破砕されて埋納されたものとも考えられる。これを墓と



第351図　第１号埋甕実測図（1/3）

考えると，東隣の円形周溝（墓）と一緒に小さな墓地としてこのあたりが意識されていたことが推測されよう。東・西の土壙墓群ともまた違った性格の村はずれの小墓地として位置付けられる。

（中間）

K　馬歯埋納遺構（図版145，第352図）

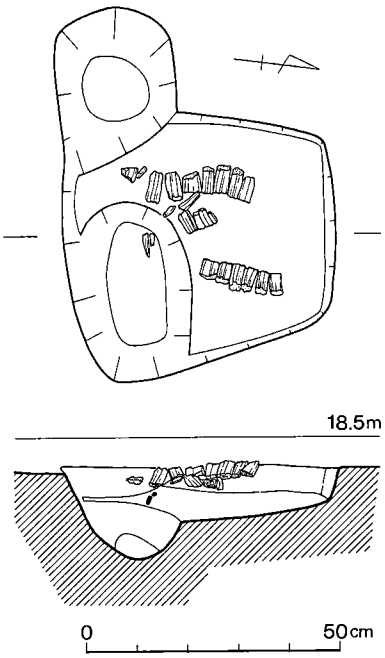
本遺跡中央の南寄り，第21号土壙の西隣に馬の歯が出土した。南北53cm，東西55cm，深さ７～18cmの穴の中に，歯のみがきちんと並んだ状態で検出された。歯の咬合面はすべて図の中心側を向いており，頭骨等はみられなかった。

出土状態からみて，頭部だけを穴に埋め，他の歯以外の骨は腐蝕して残っていないものと考えられる。また上半部が削平されて，歯も全部は残っていない。

祭祀的な行為の一つとして埋納されたものか，或いは単に棄てられたものなのか，判断しかねる。ただ埋土の状況からみて，少くとも近世以降のものでないことは確かであり，やはり集

落遺構と関連する7世紀～平安初期の範囲の或る時期のものと考えられる。

歯自体は現在鑑定依頼中であり，本報告には間に合わなかったので，結果がわかり次第，機会を得て公表したいと考えている。　（中間）



第352図　馬歯埋納遺構実測図（1/15）

L　風倒木痕

本遺跡では，地層が横転して略円形状をなす，所謂風倒木痕状土壙を3箇所以上検出した。当初，遺物を包含するかもしれないと考え，期待して3基分だけは掘ってみたが，それ程成果がみられなかったので，以後のものは調査していない。　遺跡の東端近くと，中央部の第22・23号住居跡に切られるもの，更にG住居群南方の第47号溝に切られるもの等がある。第47号溝に切られるものは，ここでは図示しないが，第1号風倒木痕とほぼ同規模で，出土遺物は皆無である。以下，土層図をとってみた2基分について説明を加える。

第1号風倒木痕（図版146，第353図）

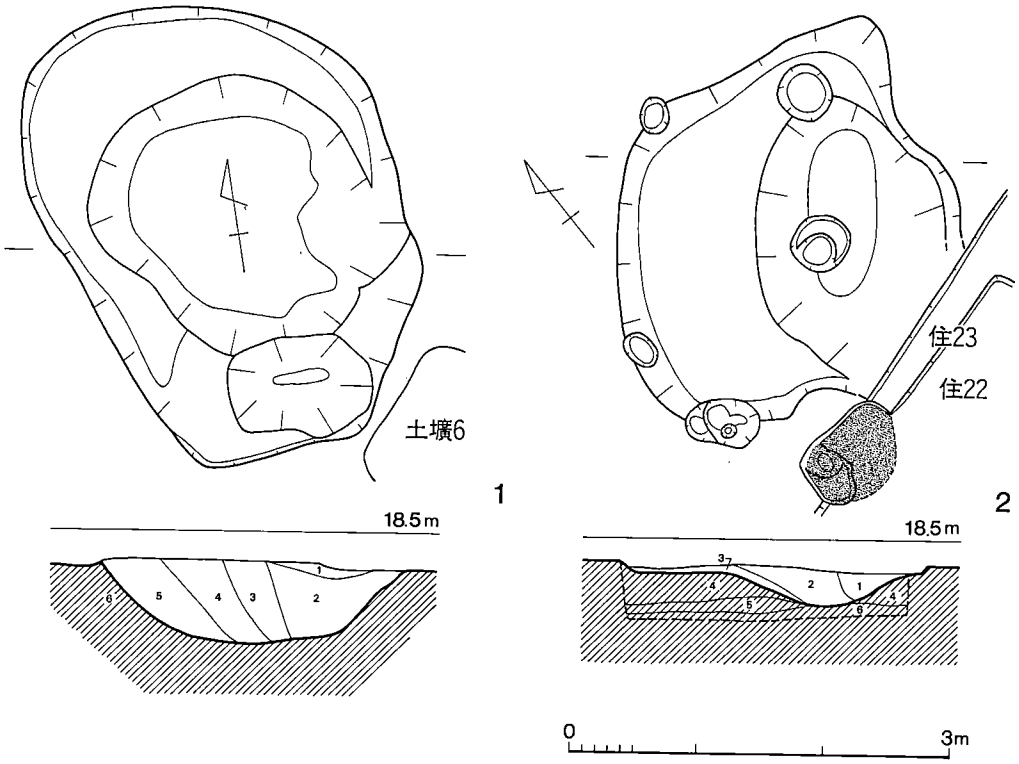
遺跡の東端近くの，微低地東側に位置し，第6号土壙の北西に接している。径3.6×2.8m，深さ0.65mの規模で，東端から2～5の順で土層が横転している状況が明らかである。

第2層から縄文早～前期のものかと思われる土器細片が僅かに出土したが，時期は明確ではない。

第2号風倒木痕（図版146，第353図）

遺跡中央で，第23号住居跡に南端を切られている。径3.5×2.8m，深さ0.33mの浅いものである。東南側から1～3の順で土層が横転している。出土遺物は無く，住居跡との切り合いからみて，少くとも7世紀以前のものとなる。

第1・2号とも東側に旧上層分が在り，強い西～西南の風によって大木が倒壊したものであろうか。更に想像を逞しくして，仮りに台風によるものとすれば，九州西方を北上した台風の



1．黒色土，掘立柱などピットの埋土と同じ
2．暗茶褐色粘質土，一部4層の小ブロック含む
3．浅黄灰色粘質土
4．混黄橙色土粒浅黄色土
5．混暗茶褐色土粒(2層)浅黄色土
6．混黄橙色土粒，黄白色粘質土(地山)

1．黒色土
2．明黄褐色粘質土(4と同じ)
3．淡暗茶褐色粘質土
4．明黄褐色粘質土(地山)
5．混黒色，黄褐色粘質土(地山)
6．黄橙色粘質土(地山)

第353図　第1・2号風倒木痕実測図 (1/60)

吹き返しの際の結果とも考えられよう。　(中間)

M　その他の遺構と遺物

柱穴群(遺構全体図参照)

本遺跡では，これまでに記述してきた各種の遺構の他に，大小の柱穴状のピットや，不定形の土壙状をなすが，土壙として取り上げる程でもないと判断した大小の掘り込み，自然の技による木の根痕などが極めて多く検出された。それらのうち何割かは遺物を持ち，その取り上げたピットの数は1909に達する。

形状から，柱穴となると思われるピットも多いが，掘立柱建物として，現地で認定しそこなったものも，かなりあると推測される。特にB住居群の北からF住居群までの範囲は，夥しい数のピットが検出され，建物の確認が極めて困難であった。また，柵列状の並びも，何箇所か見受けられるが，現場で確認しておらず，強いて取り上げない。

以上のような状況であるが，ここでは出土遺物のみを図示して，以下に説明を加えてゆくことにする。なお，P.以下の番号は，その遺物が出土したピットの番号を表す。更に「P.○—2」は，同じピットから出土した遺物のうちの2個目であることを示す。

出土遺物（第354～372図）

P.94　土師器甕口縁片で，頸部内面に稜をつくり，胴部が強く張る類となる。

P.99　須恵器杯の生焼け品で，淡灰色を呈する。口径8.8cm，器高3.1cmを測る。7世紀前葉のものであろう。底外面はナデている。

P.134　須恵器長頸壺で，外面には黒色自然釉が付着する。小ぶりのもので口径7.4cmを測る。

P.135　土師器鉢の口縁片で，厚手である。内面に稜をつくり，ヘラ削りを施す。

P.147　土師器甕で，口径17.6cmを測る。外面は磨滅。胴の張る無頸壺状の器形となる。

P.156-1　土師器小甕で，口径12.9cm，胴部最大径12.8cmを測る。胴中位で幾らか張っている。

P.156-2　土師器小甕底部で，安定した平底状となる。外面はハケ目を部分的に消す。

P.156-3　全体に開き気味の土師器甕で，口径19.8cmを測る。内面に稜をつくらない。

P.157　淡黄土色をした土師質焼成の鉢であるが，全面磨滅して調整不明。口径17.5cm。

P.161-1　土師質焼成の小型壺となろう。外方に踏ん張る高台を，体部との境に付ける。8世紀末～9世紀初頭のものか。

P.161-2　染付椀で，底外面は蛇の目状に削り出している。釉はやや青みがかっており，内面の梅花文は，濃紺～青味灰色を呈する。近代の所産であろう。

P.163-1　生焼けの須恵器杯蓋片で，直径2.1cmの小さな撮を付ける。8世紀後半代のものか。

P.163-2　淡褐色を呈する須恵器杯の生焼けで低い高台を付ける。

P.163-3　橙黄色を呈する須恵器杯の生焼け品で，復原高台径12.1cmを測る。低い高台を付けており，P.163-2とともに8世紀後半代のものものとなろう。

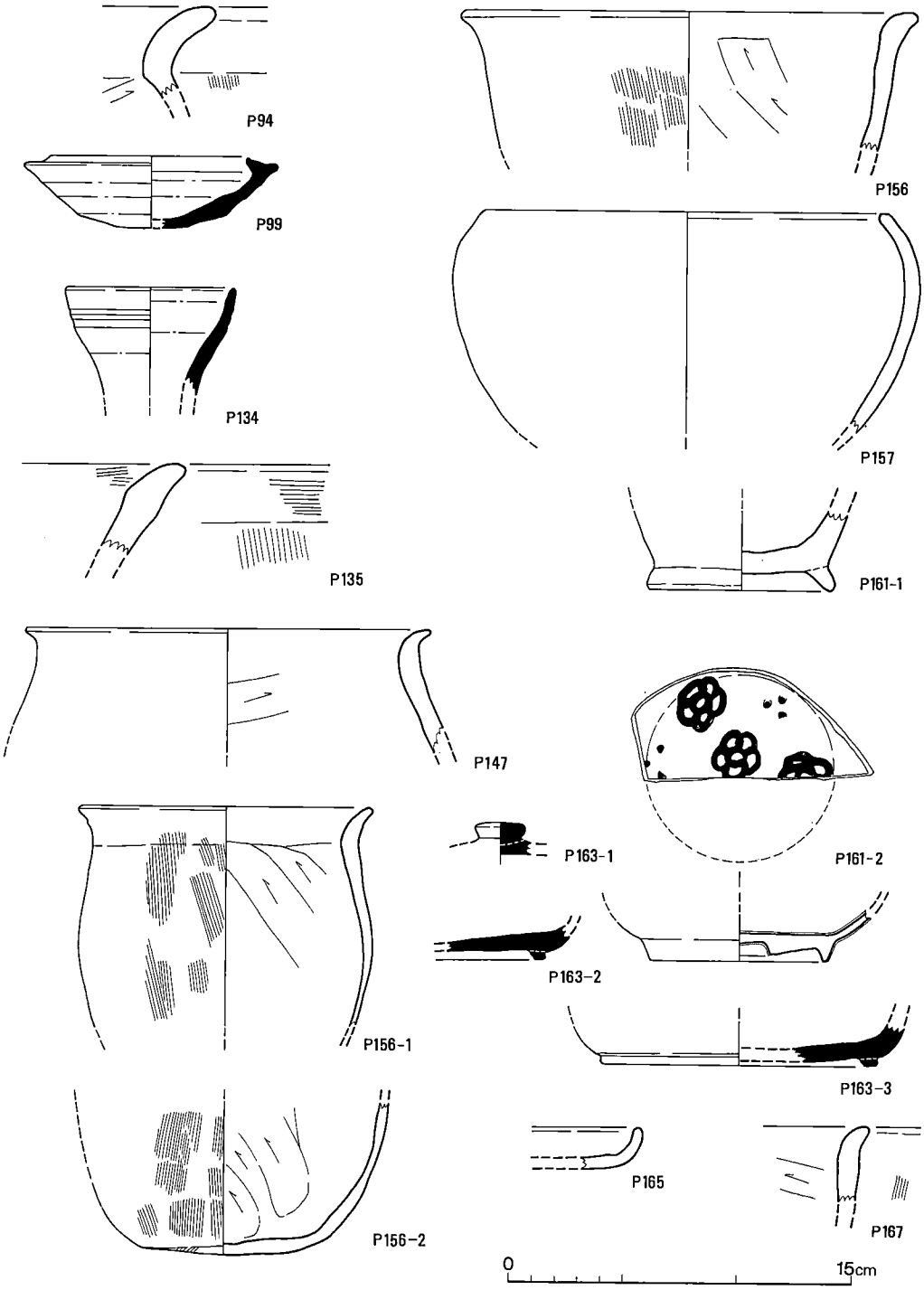
P.165　土師器皿口縁部で，器高1.8cmと浅い。底外面は手持ちヘラ削りが施されている。

P.167　土師器小甕片で，小さく外反する口縁となる。

P.170　土師器甕の把手で，やや大ぶりのタイプである。器壁内面はヘラ削りを施す。

P.174-1　須恵器杯蓋で幾らか丸味を帯びた鳥嘴状口縁をなす。天井外面は回転ヘラ削りを施している。

P.174-2　土師器の小ぶりの杯で，口径13.1cmを測る。底外面は手持ちヘラ削りを施す。



第354図　柱穴群出土土器実測図（その1）(1/3)

P.176　黄土色を呈し，須恵器の生焼けと考えられる。胎土精良で，口径13cmとなろう。

P.179　土師器甕で口径29.6cmを測る。胴部外面はナデており，頸内側に強い稜をつくる。

P.180　須恵器高杯脚部片で，内外面に横ナデを施す。裾端部径14.1cmを測る。

P.188　土師器甕で，内面に稜をつくる。口径33cmを測り，内面には煤が付着している。

P.201　土師器鉢口縁で，長く開く類となる。内面はヘラ削りを施している。

P.209　須恵器杯口縁で，小さく退化した鳥嘴状口縁となる。小径タイプとなろう。天井外面はナデている。

P.220　須恵器杯で，口径14cm，器高3.2cmを測る。全体に灰かぶりをする。8世紀後葉となろう。

P.223　須恵器杯口縁で，体部外面下端には回転ヘラ削りが施される。胎土精良である。

P.233　土師器甕片で，強く屈曲して開く口縁となる。頸～口縁内面に煤が付着する。

P.235　土師器甕口縁で，頸部で屈折して長く外反して開く形状をなす。口径26.3cmで，全体に磨滅著しく，調整は不明である。

P.236　須恵器杯片で，復原高台径9.4cmを測る。低い高台を体部との境近くに付けており，8世紀末頃の所産であろう。底部外面は未調整である。

P.242　淡灰色のシルト岩製仕上げ砥石である。3面執れもよく使用されており，側面には金属利器による鋭いキズがみられる。現存長8.2cm，幅5.3cmを測る。

P.257-1　須恵器杯で，口径15.2cm，器高3.8cmを測る。体部外面下端から底部周縁は回転ヘラ削り，底外面中央付近はナデている。内面には煤が付着している。

P.257-2　やや生焼けの須恵器杯で，口径15.9cm，器高3.5cmを測る。全面磨滅著しい。

P.265　須恵器杯蓋で，短かい返りを有する。口縁内面には，灰かぶりがみられる。

P.267-1　土師器甕口縁片で，屈曲して長く延びる口縁につくる。内外面ともに磨滅著しい。

P.267-2　土師器甕口縁片で，短かめに丸く屈曲して外反する。胴の張る小ぶり類である。

P.295　土師器甕で，内面に鋭い稜をつくる。口唇部には煤がこびりつく。外面は磨滅する。

P.299　復原口径19.4cmとなる土師器甕で，口縁内面には化粧土がかけられている。

P.300　土師器甑底部で，外面は縦ハケ，内面はヘラ削り調整が施されている。

P.328　須恵器杯蓋で，復原口径15cmを測る。短かい返りを付け，内外面とも横ナデを施す。

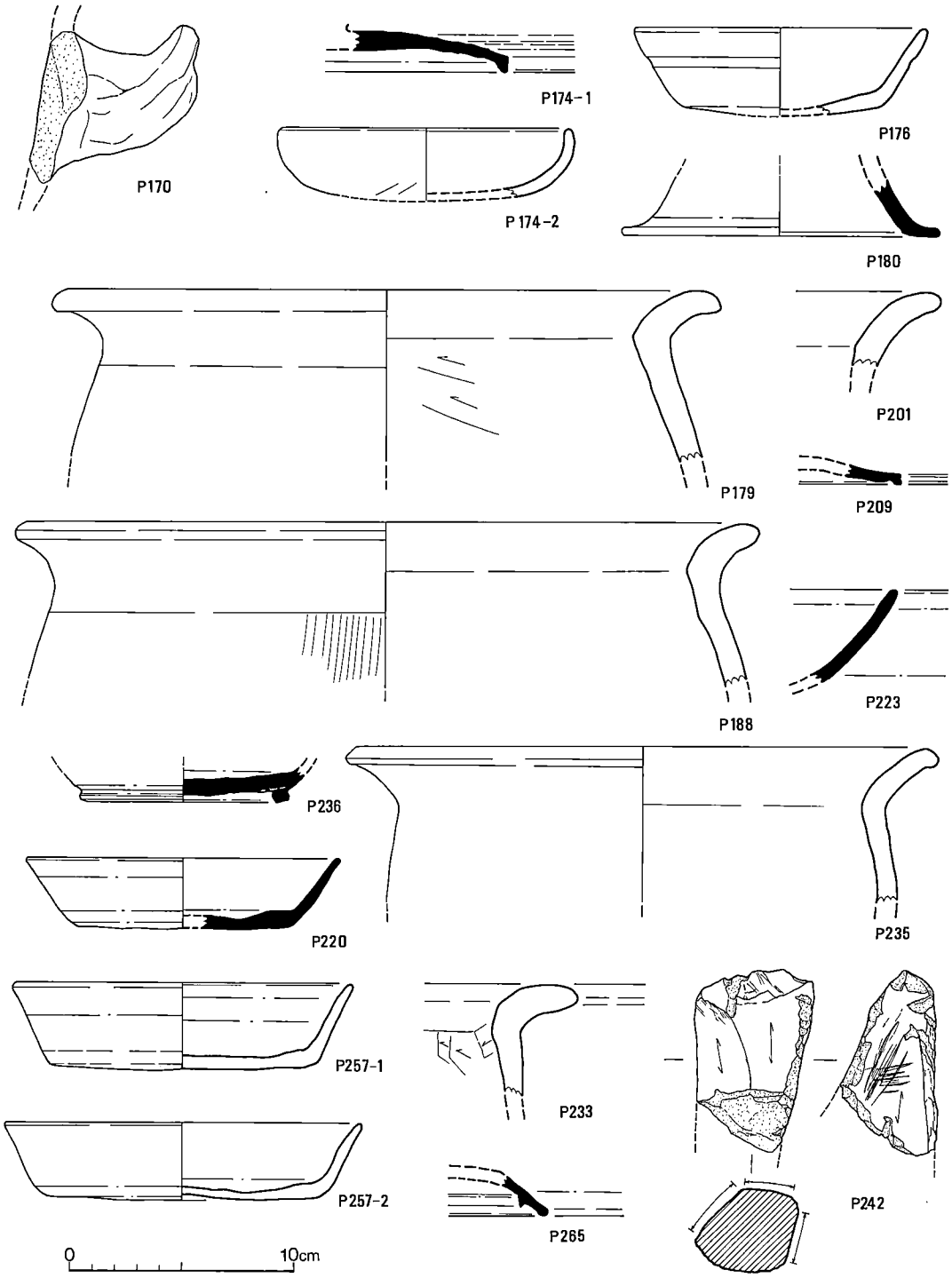
P.343　口径14cmの土師器小甕で，胴が強く張る。胴部外面には細かいハケ目調整を施す。

P.351　須恵器杯蓋で，やや退化した鳥嘴状口縁をなす。天井外面は回転ヘラ削りが施されている。口径16.2cm，器高2.5cmを測る。

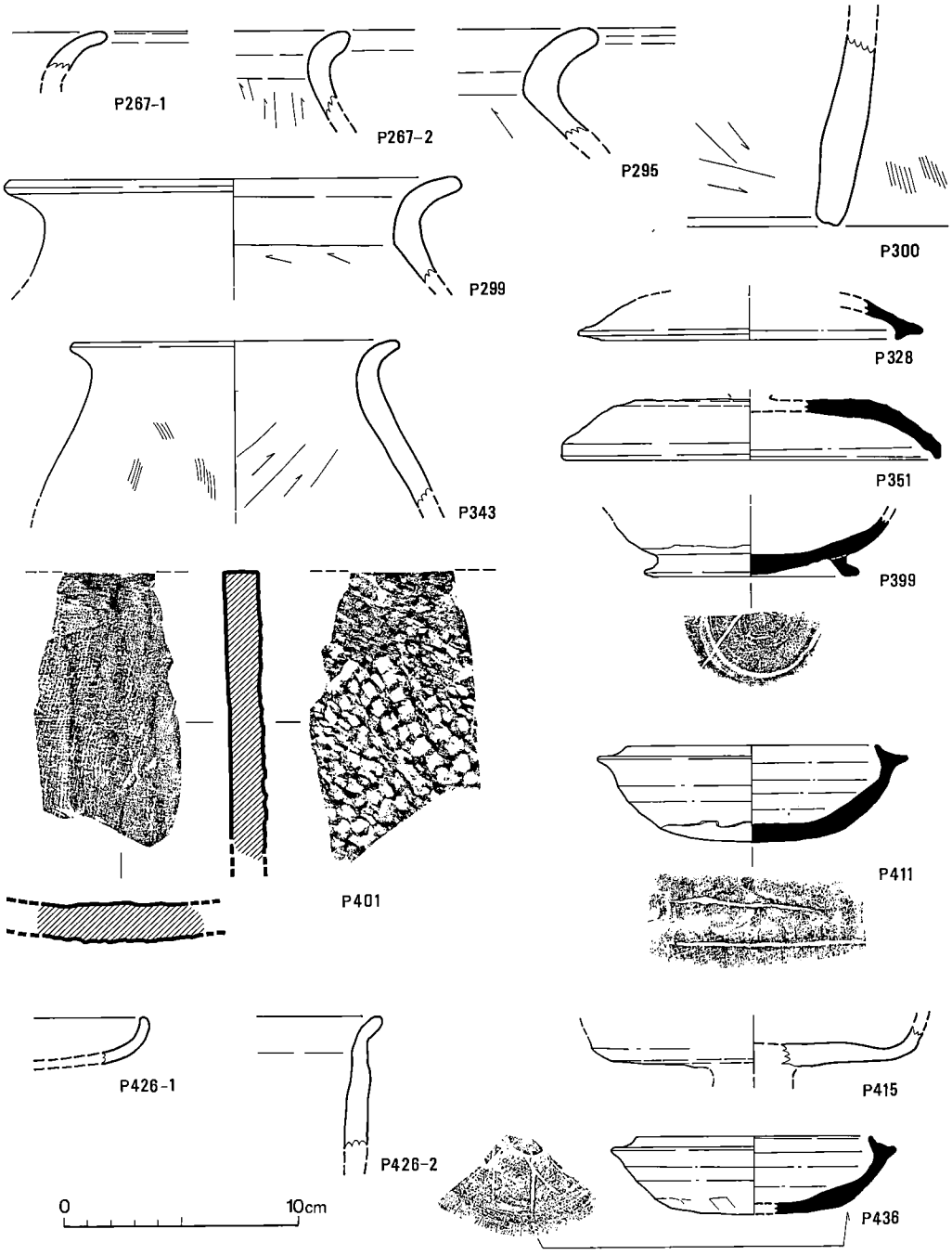
P.399　須恵器杯身で，外方へ強く踏んばる高台を付ける。底外面にヘラ記号を施す。

P.401　薄手の平瓦で，凸面は正格子叩きを斜位に，凹面は布目の上に指縦ナデを部分的に施している。生焼けで，淡茶色を呈する。上端凹面側は横ナデを施す。

P.410　厚手の土製紡錘車で，側面は縦位のヘラ削りで，直径4.6cm，厚さ2.0cmを測る。



第355図　柱穴群出土土器実測図（その２）(1/3)



第356図　柱穴群出土土器実測図（その３）(1/3)

P.411　端部径10.7cm，器高4.1cmの須恵器杯身で，底外面はナデており，ヘラ記号がある。

P.415　須恵器高杯片で，底外面は回転ヘラ削りの上を部分的にナデている。

P.426-1　土師器杯口縁片で，丸く内湾気味に立ち上がる器形となる。外面は磨滅している。

P.426-2　土師器小甕口縁片で，胴内面はナデ，口縁内面から外面は横ナデ調整を施す。

P.436　立ち上がり端部径10cm，器高3.2cmの須恵器杯身である。底外面は雑なヘラ削りで，2平行線のヘラ記号が施されている。胎土に細砂粒を多く含む。

P.444　土師器甕の把手部分で，やや太めのタイプである。

P.438-1　須恵器の生焼けで白褐色をなす。底外面は磨滅する。口径10.7cm，器高3.2cm。

P.438-2　薄手の平瓦で，凸面は正格子叩き，凹面は布目の上を部分的に縦ナデする。

P.438-3　薄手の平瓦で，淡茶色をなす生焼けである。凸面は正格子叩きを斜位に施し，凹面は布目の上を縦方向にヘラ削りして，布目を殆んど消している。

P.447　須恵器杯身で，内外面とも横ナデ調整で，焼成堅緻，胎土に細砂粒を少量含む。

P.456　滑石製の角棒状用途不明品である。長さ3.6cm，厚さ0.7cmで，丁寧に成形している。3つの角に抉りを入れており，紐で縛ったものであろうか。

P.460-1　須恵器杯蓋片で，天井外面は回転ヘラ削りを施す。やや大きめの撮を付けている。

P.460-2　須恵器杯身で，外方へ踏んばる高台を付ける。外面には灰かぶりがみられる。

P.465　須恵器杯で，口径14.2cm，器高3.7cmを測る。低い高台が付く。8世紀後葉となろう。

P.467　土師器甕の把手部分で，断面は丸っこい。胴部内面はヘラ削りを施している。

P.469-1　須恵器杯蓋の撮部分で，上面には灰かぶりがみられる。胎土精良で焼成堅緻。

P.469-2　須恵器杯身で，体部外面下端から底外面には回転ヘラ削りを施す。7世紀中葉。

P.473　須恵器杯蓋で，短かい返りを付ける。天井外面にヘラ記号様の沈線がみられる。

P.474　須恵器杯身で，土師器を模した形状をなす。底外面は手持ちヘラ削りを施す。

P.475　土師器甕で，胴が中位で張る。粘土紐接合痕が明瞭である。

P.479　土師器甕口縁片で，頸内面に稜をつくり，以下はヘラ削りで，全面二次火熱を受ける。

P.486　土師器小甕片で，内外面磨滅する。胴は張らず，短かく外傾する口縁となる。

P.489　土師器小甕片で，外面は磨滅する。口縁内外に二次火熱を受けている。

P.490　須恵器杯身で，高い高台を付ける。内面に灰かぶりして，全面横ナデと思われる。

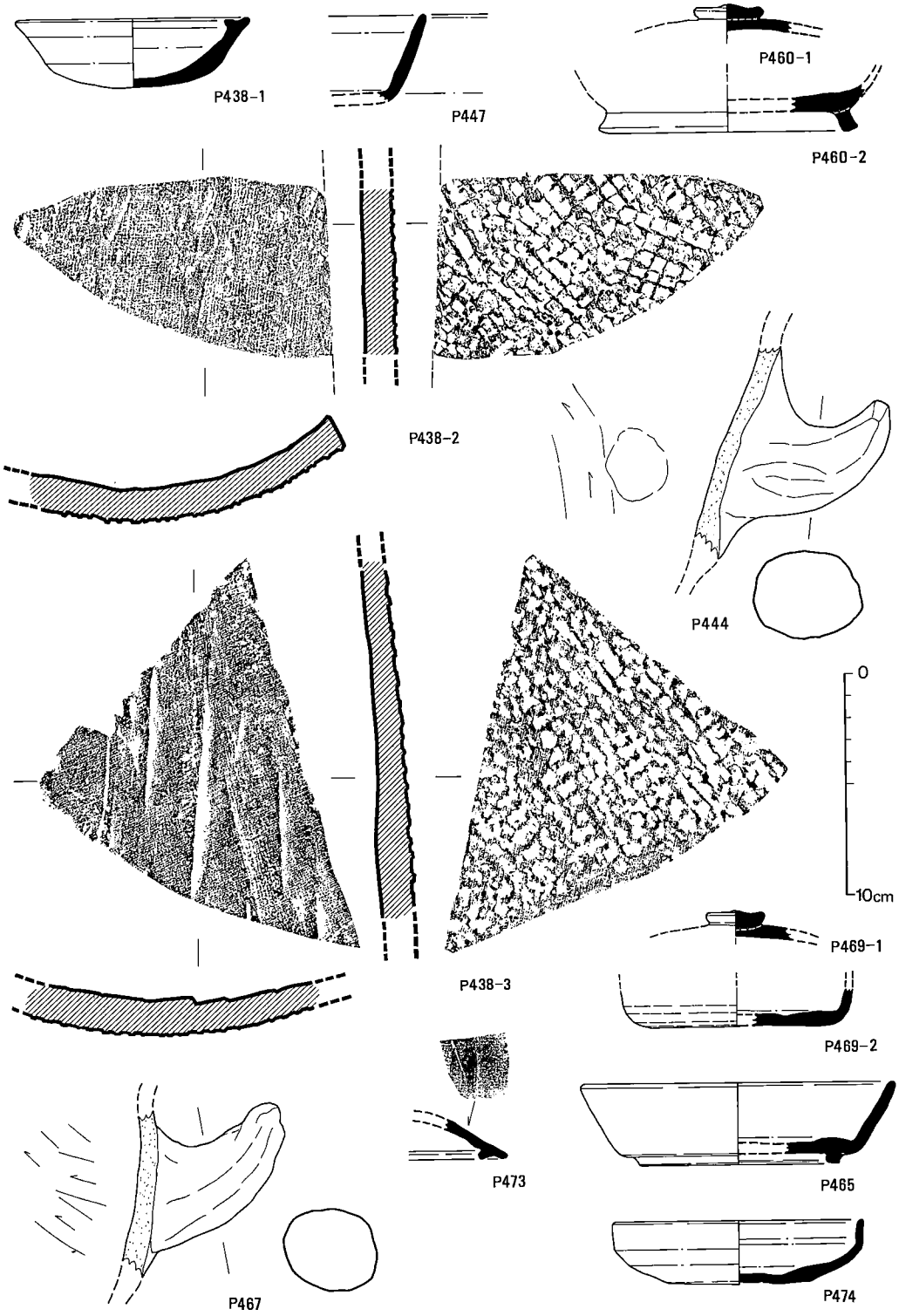
P.493-1　須恵器蓋で，天井外面は回転ヘラ削りが施され，外面斜位に細い短沈線を巡らせる。口径18cmで，シャープさを欠く鳥嘴状口縁をなす。外面には灰かぶりがみられる。

P.493-2　1と同径・同工の須恵器蓋であるが，外面斜位の短沈線が刻目状でやや太い類となる。

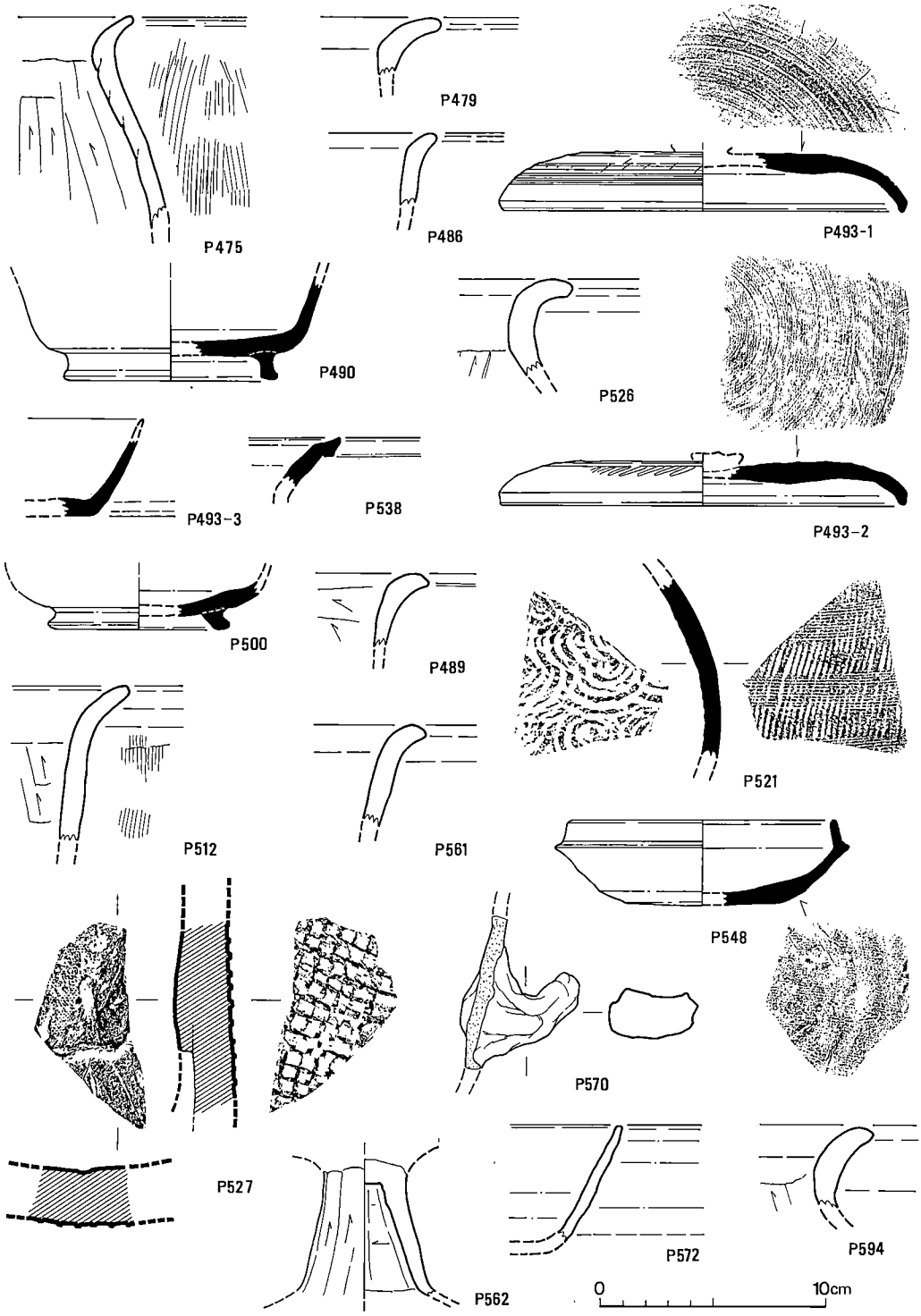
P.493-3　須恵器杯で，体部外面下端から底部は回転ヘラ削りを施す。体部が開く類である。

P.500　須恵器杯で，外方へ強く踏ん張る高台を付ける。外面は灰かぶりで，黒色となる。

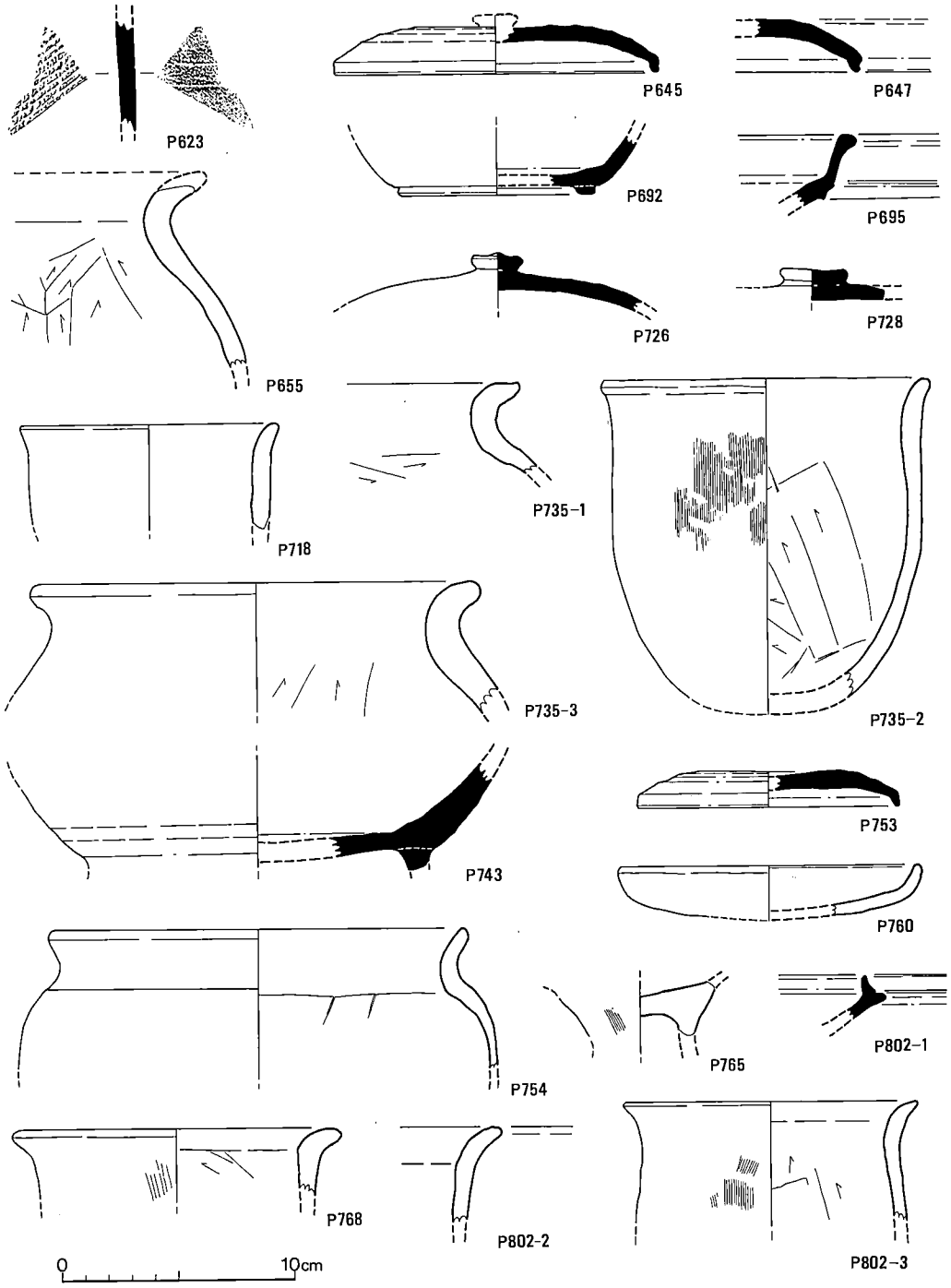
P.512　土師器甕で，頸部で肥厚せず，ゆるやかに外傾する口縁となる。



第357図　柱穴群出土土器実測図（その４）(1/3)



第358図　柱穴群出土土器実測図（その５）(1/3)



第359図　柱穴群出土土器実測図（その６）(1/3)

P.521　須恵器壺胴部片で，内面には青海波，外面は縦位の平行条線状叩目の上にカキ目調整。

P.526　土師器甕口縁片で，上端面に煤が付着する。胴内面はヘラ削りを施している。

P.527　厚手の平瓦片で，軒平瓦となる可能性がある。凸面は正格子叩き，凹面は布目の上を縦位ヘラ削りする。粘土の剝げた面は，縦ナデ調整で，沈線が２本みられる。

P.538　須恵器甕口縁で，シャープな形状をなす。外面には灰かぶりがみられる。

P.548　須恵器杯身で，立ち上がり部径11.9cm，器高3.8cmを測る。底外面はナデている。

P.561　土師器小甕片で，内外面とも磨滅著しい。胴は張らず，短かく開く口縁となる。

P.562　土師器高杯脚部片で，外面は縦方向の，内面は横方向のヘラ削りが施されている。

P.570　土師器の把手で，小型で断面が扁平な類である。器壁に挿入するタイプである。

P.572　須恵器の大口径の杯身で，茶褐色を呈する生焼け品で，体部下端はヘラ削りとなるか。

P.594　土師器甕片で，胴が強く張るタイプとなろう。二次火熱を受けて内面は赤変する。

P.623　暗茶色釉の陶器片で，内面は細かい蓆目状叩きがみられ，外面には沈線が巡る。

P.645　須恵器杯蓋で，口径13.9cmを測る。天井外面は回転ヘラ削りで，小さい撮が付こう。

P.647　須恵器杯蓋で，天井外面は回転ヘラ削りを施す。内外面とも灰かぶりがみられる。

P.655　土師器甕で，胴が強く張る。外面は磨滅している。橙褐色の化粧土がかかる。

P.692　須恵器杯身で，低い高台を付ける。体部外面はナデ調整。高台径8.4cmを測る。

P.693　土師器小甕口縁片で，胴部は張らない。小さく外傾気味に開く口縁となる。

P.695　須恵器の壺口縁で，中途で段がついて立ち上がる。外面には灰かぶりがみられる。

P.718　土師器の小型鉢で，口径11.1cmを測る。内外面ともに磨滅著しく調整不明である。

P.726　須恵器杯蓋で，天井外面までナデている。焼成堅緻で，淡灰色を呈する。

P.728　須恵器杯蓋の撮部分で，扁平な形状をなす。胎土に細砂粒を幾らか含む。

P.735-1　土師器小甕で，口径14.0cmを測り，胴部は張らない。胴外面下半はナデている。

P.735-2　土師器甕口縁で，胴部外面は磨滅している。胴が上半で強く張るタイプである。

P.735-3　土師器甕口縁で，口径19.3cmとなる。外面は磨滅し，頸内面には稜をつくらない。

P.743　須恵器壺底部で高い高台を付ける。生焼け品で，胴部下端は回転ヘラ削りを施す。

P.753　須恵器杯蓋で，口径11.2cm，器高1.6cmで，撮は付かない。天井外面は回転ヘラ削り。

P.754　土師器鉢状品で，胴内面に板端圧痕を残してナデる。外面は磨滅する。口径18cm。

P.760　土師器で，小径の皿状形態をなす。口径13.0cm，外面は磨滅している。

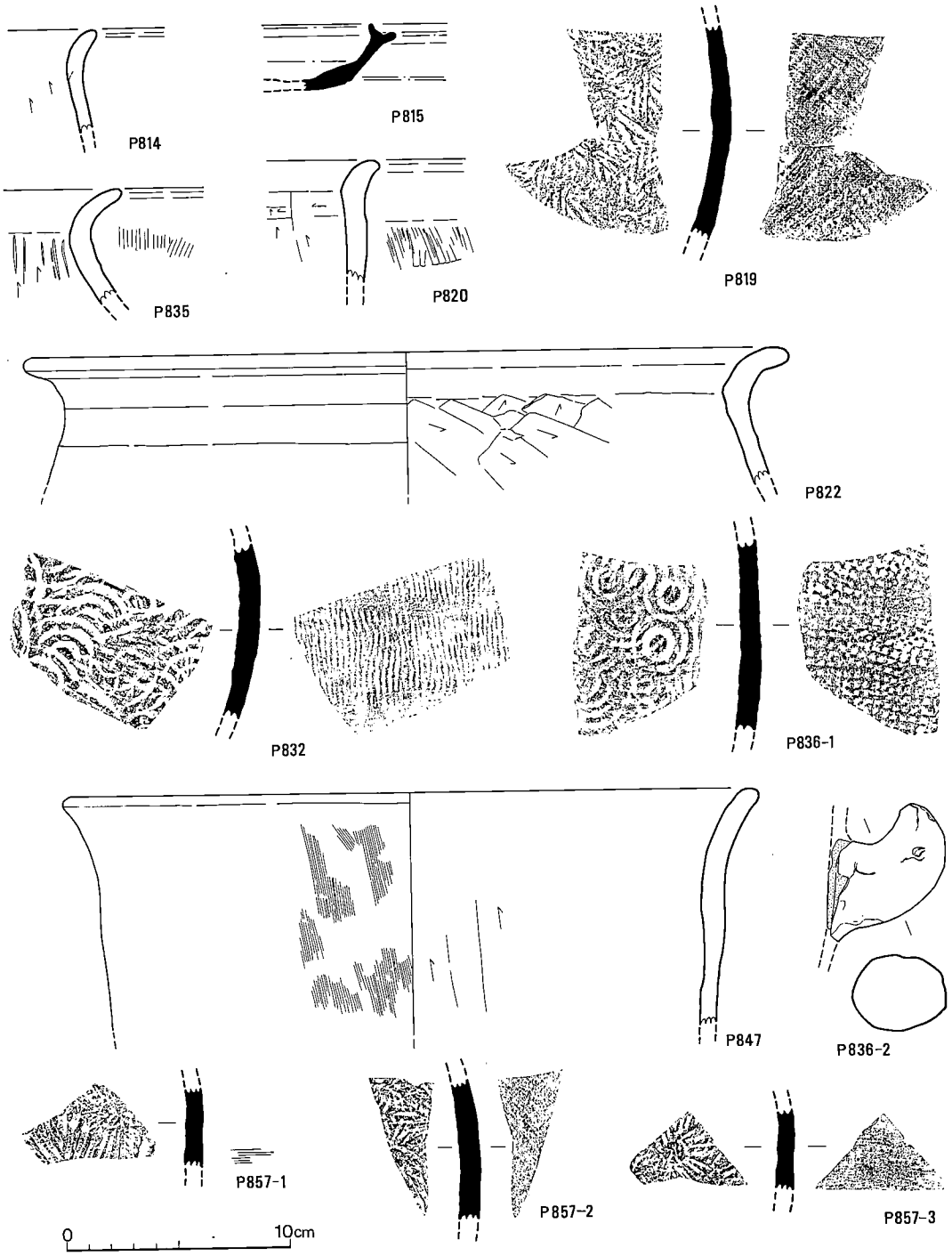
P.765　ラッパ状に開く上部と脚を接合したもので，上面にもハケが残る。土師質焼成である。

P.768　土師器小甕で，口径14.1cmを測る。短かく折れて外反する口縁となる。

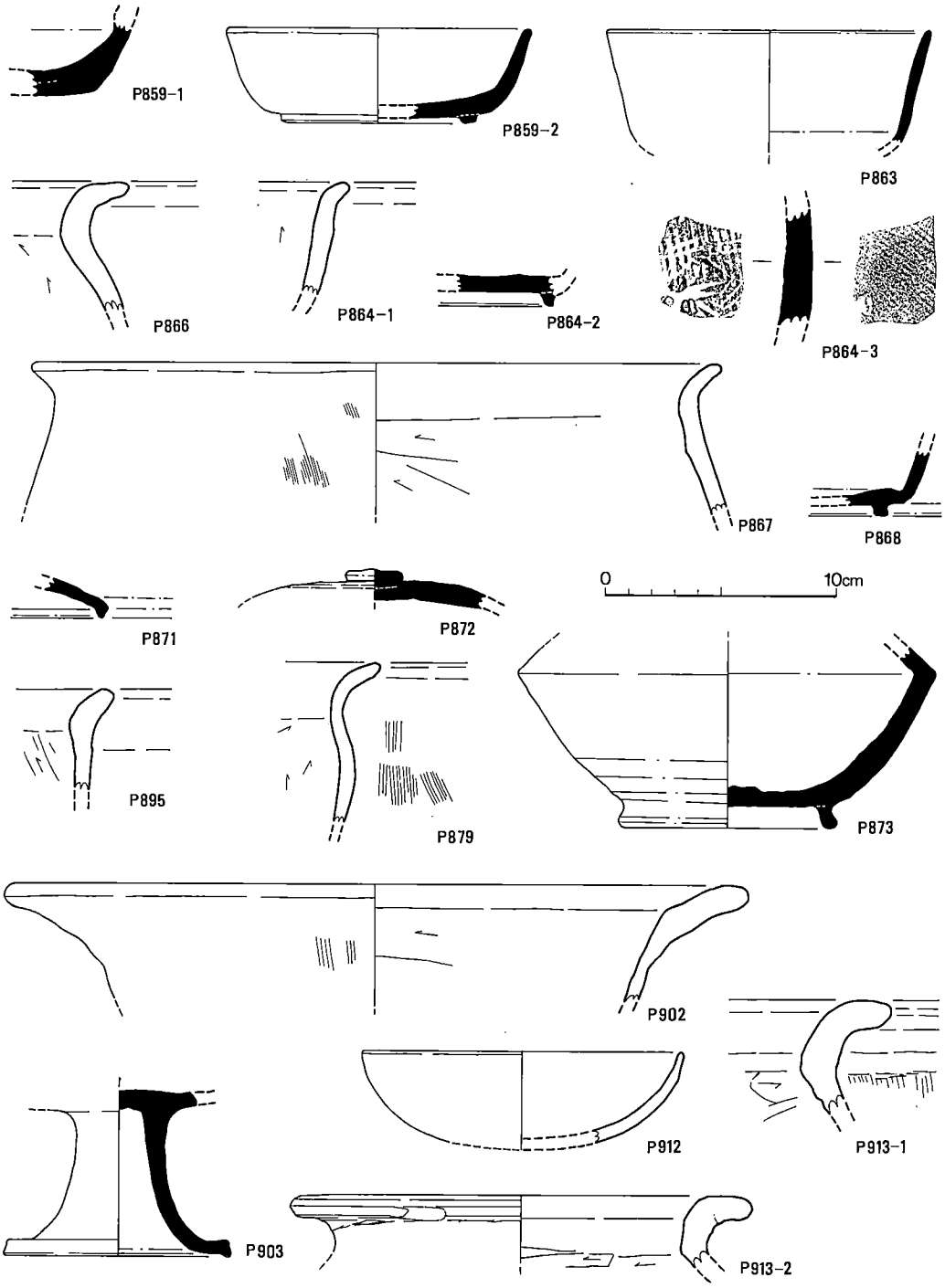
P.797　気泡を多く含む黒曜石製打製石鏃である。長さ2.5cm，幅1.8cm，厚さ0.4cmを測る。

P.802-1　須恵器杯身片で，蓋受け部に細沈線を施す。細砂粒を若干含み，緑灰色を呈する。

P.802-2　土師器小甕片で，外面は磨滅する。胴は張らず，ゆるやかに外反する口縁となる。



第360図　柱穴群出土土器実測図（その７）(1/3)



第361図　柱穴群出土土器実測図（その８）(1/3)

P.802-3　口径12.5cmの土師器小甕で，口縁はゆるやかに外反する。口縁内面には煤が付く。

P.814　土師器小甕片で，胴部外面は磨滅する。口縁内面には煤がこびり付いている。

P.815　須恵器杯身で，底外面はナデている。胎土に細砂粒を若干含み，焼成堅緻である。

P.818　サヌカイト製の横長剝片利用掻器である。左右両端辺が裏面から細剝離調整される。

P.819　須恵器壺片で，外面は長方形気味の条線状叩き，内面は放射状文のあて具痕を残す。

P.820　土師器小甕口縁片で，胴は張らず，短かく外反する口縁となる。

P.822　土師器甕で，復原口径は34cmとなり，外面の調整は磨滅しており不明である。

P.832　須恵器甕胴部片で，内面は青海波，外面は平行条線状叩きの上に横ナデを施す。

P.835　土師器甕片で，胴が張り，丸く屈曲して開く口縁となる。口縁内面に煤が付く。

P.836-1　須恵器甕胴部片で，外面は細格子叩きの上に横ナデ，内面は青海波を施す。

P.863-2　土師器甕の把手である。丸っこく短かめのタイプである。

P.847　土師器甑上半部である。外傾するだけの口縁となり，復原口径30.9cmを測る。

P.857-1・2・3　P.819出土品とも同一個体の須恵器壺胴部片で，一部にカキ目もみられる。

P.859-1　須恵器杯で低い高台を付ける。口径13.2cm，器高4.1cmを測る。

P.859-2　須恵器の壺類底部片で，外面はヘラ削りの後にナデ仕上げを行う。

P.863　口径14cmの須恵器生焼け品で，内外面ともに横ナデ調整を施している。

P.864-1　土師器小甕片で，胴部外面は磨滅する。胴は張らず，短かく外反する口縁となる。

P.864-2　須恵器杯の生焼け品で，白褐色を呈する。平らな底面に直立する高台を付ける。

P.864-3　須恵器甕胴部片で，外面は平行条線状叩き，内面は平行線と放射状文が重なったあて具痕が見られる。焼成堅緻で，外面は黒色をなす。

P.866　土師器甕片で，２段に屈折して開く。胴外面は磨滅し，上端～外面に化粧土をかける。

P.867　土師器甕で，口径29.8cmを測る。頸部で肥厚せず，胴中位で張る類となる。

P.868　須恵器杯片で，低い高台を平らな底面のやや内側に付ける。

P.871　須恵器杯蓋で，やや低い鳥嘴状口縁となる。外面はナデており，緑灰色を呈する。

P.872　白灰色を呈する須恵器杯蓋で，低い撮を付ける。天井外面は回転ヘラ削りを施す。

P.873　須恵器長頸壺で，高台径9.4cm，胴部最大径18cmを測る。胴部内外面横ナデを施し，底外面はナデている。胴部が算盤玉状に鋭角となるタイプである。

P.879　土師器鉢で，口縁内面と外面に煤が付着する。薄手で丸く屈曲する口縁につくる。

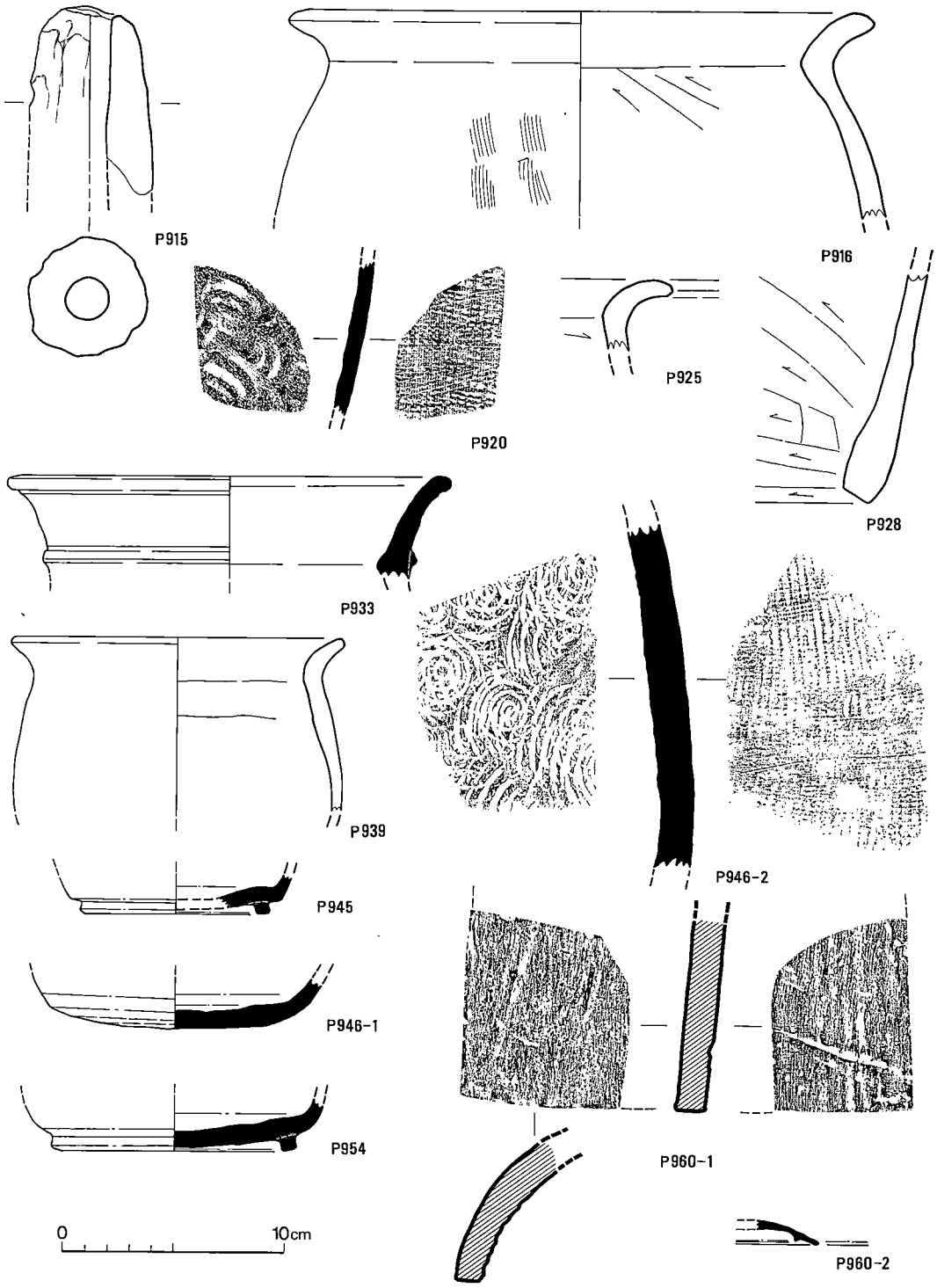
P.895　土師器小甕片で，寸詰まりの口縁につくる。胴部外面は磨滅する。

P.902　土師器鉢で，口径32.2cmを測る。外面に煤が付着し，鍋的用途であったと考えられる。

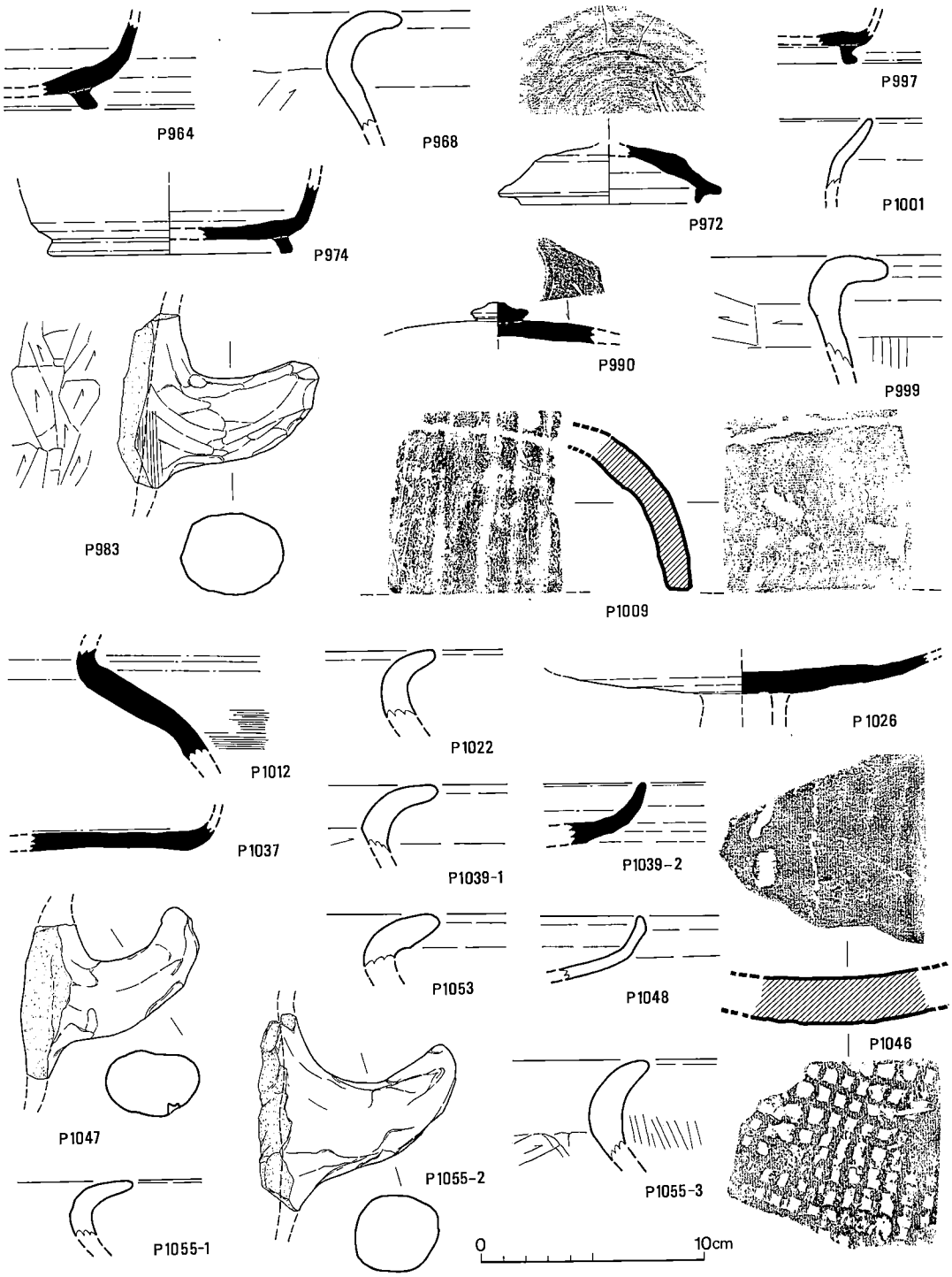
P.903　やや生焼けの須恵器高杯で，脚部内外面は横ナデを施す。脚端径9.8cmを測る。

P.912　土師器杯で，口径13.9cmとなる。口縁内外面横ナデ，体部下半は磨滅する。

P.913-1　土師器甕片で，厚く，内面で稜をつくる。



第362図　柱穴群出土土器実測図（その９）(1/3)



第363図　柱穴群出土土器実測図（その10）(1/3)

P.913-2　口径20cmの土師器甕片で，口縁外端は部分的に削っている。強く外方へ屈折する。

P.913-3　サヌカイト製で，縁辺を表側で幾らか細調整して刃部とする。表面は風化が進む。

P.915　土製ふいご羽口先端部分で，径5.4cmと細身タイプである。先端外面は高熱のため石炭殻状を呈する。胎土に細砂粒を多く含む。

P.916　土師器甕で，口径26.3cmを測る。口頸部が肥厚し，内面に稜をつくる。

P.920　須恵器甕胴部片で，内面は青海波，外面は条蓆状叩きの上にカキ目を施す。

P.925　土師器甕口縁片で，外面は磨滅している。内面には煤が付着する。

P.928　土師器甑底部片で，外面はナデている。下端付近は黒色変している。

P.933　白灰色をなす生焼けの須恵器壺口縁で，頸部に凸帯を付ける。口径20cmを測る。

P.939　土師器小甕で，口径15cmを測る。内外面磨滅しており，調整は不明である。

P.945　第８号掘立柱建物の柱穴内出土品で，既にその項にて説明した。

P.946-1　須恵器壺底部で，底外面は回転ヘラ削りを施す。やや小ぶりの短頸壺となるか。

P.946-2　須恵器甕胴部で，外面は条蓆状叩きの上を部分的に横ナデ，内面は青海波を施す。

P.954　須恵器杯底部で，体部内外面は横ナデ，底外面はナデ調整を施す。高台径11cmを測る。

P.960-1　白褐色で生焼けの丸瓦片で，凸面は磨滅する。凹面は縦位のスノコ状圧痕がみられる。下端外面が突出する特徴がみられる。

P.960-2　須恵器杯蓋片で，薄手で小さい返りを付ける。外面灰かぶりで，横ナデを施す。

P.964　須恵器杯で，踏ん張る高台を付け，外面は横ナデを施す。底外面にはヘラ記号がある。

P.968　土師器甕片で，胴外面は磨滅する。内面には煤が付着する。

P.972　口径８cmの須恵器杯蓋である。天井外面は，回転ヘラ削りを施す。

P.974　高台径11cmの須恵器杯で，体部下端には回転ヘラ削りを施し，外面は灰かぶりをする。

P.983　土師器甕の把手で，長く太い類である。胴内面には煤が付着する。

P.990　須恵器杯蓋で，天井外面は横ナデ調整で仕上げている。

P.997　須恵器杯底部片で，下端が外方へ突出する高台を付ける。外面は横ナデを施す。

P.999　土師器甕口縁で，強く屈曲して外方へ開く類である。

P.1001　薄手の土師器鉢で，内外面とも磨滅している。胎土精良で，肌色を呈する。

P.1002　滑石製紡錘車で，径4.5cm，厚さ0.8cmを測る。表・裏に線刻があり，意図的なものかどうかわからない。本来厚手のものが薄く割れて，再加工されたものと考えられる。

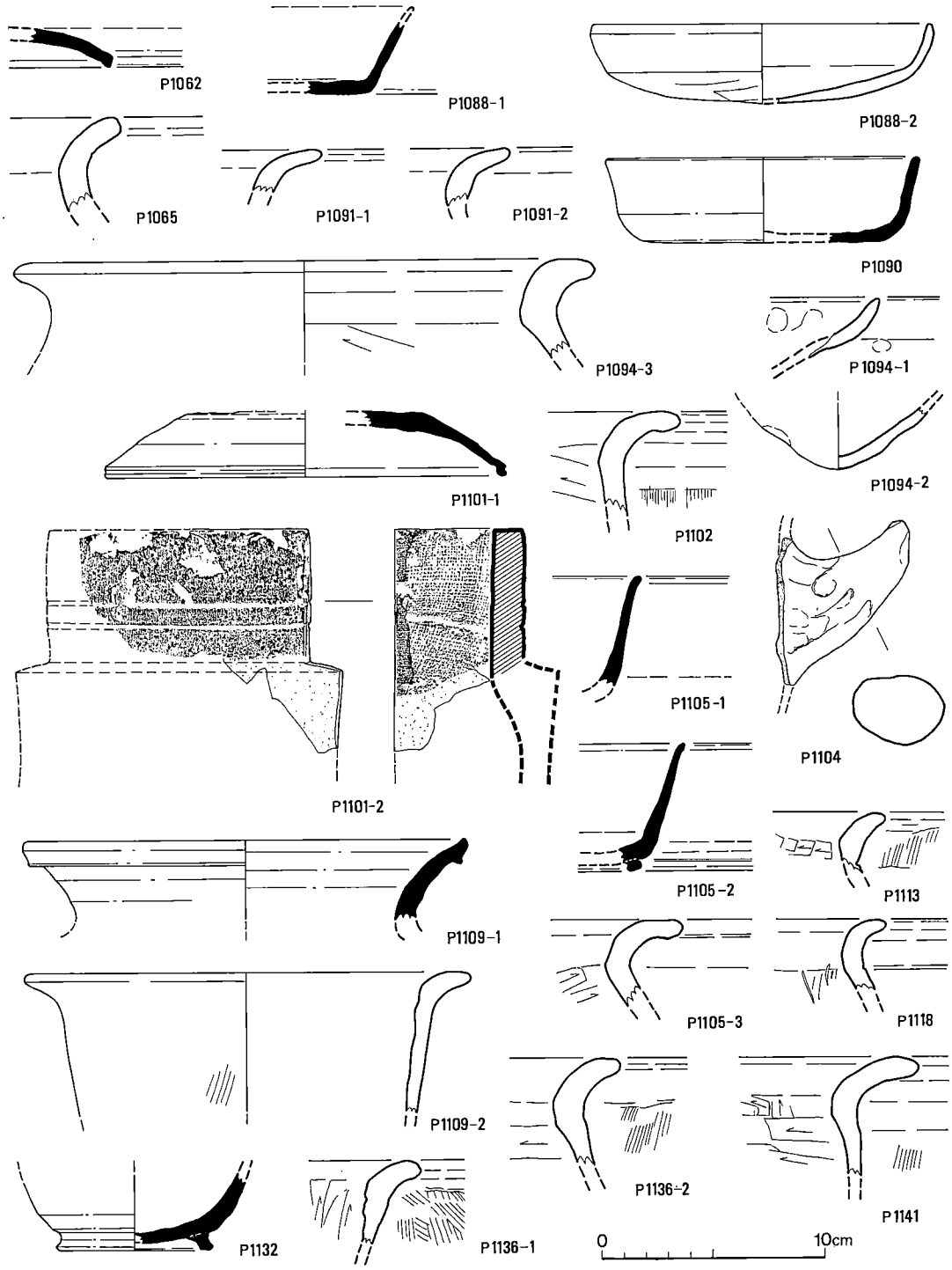
P.1009　生焼けの丸瓦片で，凸面はナデ，凹面は模骨圧痕が残る。

P.1012　須恵器壺片で，胴部外面中位にカキ目，その他内外面は横ナデを施す。外面灰かぶり。

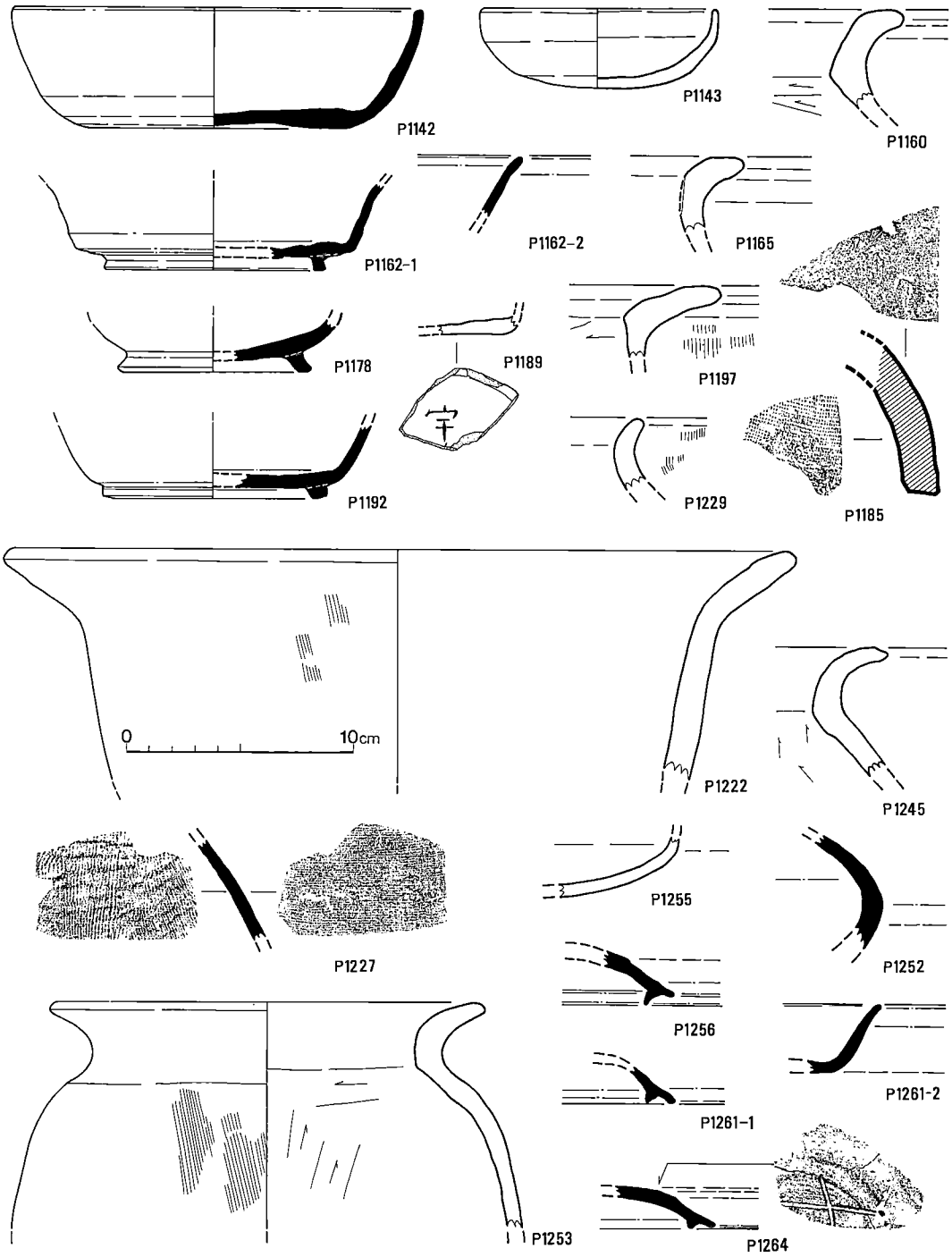
P.1022　土師器甕口縁片で，内外面磨滅する。

P.1026　須恵器高杯片で，底外面中途に回転ヘラ削り痕を残す。大口径の杯部となろう。

P.1037　白灰色の生焼けの須恵器皿底部で，底外面は回転ヘラ削りを施す。



第364図　柱穴群出土土器実測図（その11）(1/3)



第365図　柱穴群出土土器実測図（その12）(1/3)

P.1039-1　土師器甕口縁片で，胴部内面はヘラ削りを施す。胴部の張るタイプとなろう。

P.1039-2　須恵器の皿状をなすが，厚手である。外面下半は回転ヘラ削りを施している。

P.1046　平瓦片で，凸面は大きめの正格子叩き，凹面は布目をナデ消している。生焼け品。

P.1047　土師器甕の把手で，長くやや扁平気味である。下端に刺突小孔が１個みられる。

P.1048　土師器杯で，胎土精良である。口唇部内端が内側へ突出する特徴を示す。

P.1053　土師器甕口縁片で，厚手で強く屈曲して外反する類となる。部分的に煤が付着する。

P.1055-1　土師器甕口縁片で，胴が張り丸く屈曲して開く類である。上端に化粧土を施す。

P.1055-2　土師器甕口縁片で，厚手で，頸部内面に稜をつくる類となる。

P.1055-3　土師器甕の把手部分で，大きく長い類となる。断面は円形に近い。

P.1062　須恵器杯蓋で，天井外面には回転ヘラ削りを施す。退化した鳥嘴状口縁となる。

P.1065　土師器甕口縁片で，現存部胴内面はナデている。上端に化粧土がかけられている。

P.1088-1　須恵器杯底部で，平らな底外面は回転ヘラ削りが施される。やや生焼け気味。

P.1088-2　口径15cm，器高3.6cmの土師器杯で，底外面は手持ちヘラ削り，内面はナデている。

P.1090　須恵器杯で，口径14cm，器高3.8cmとなる。体部内外面横ナデ，底外面はナデを施す。

P.1091-1　土師器甕口縁片で，全面磨滅する。

P.1091-2　土師器甕口縁片で，一度屈折してから開く形状となる。全面磨滅している。

P.1094-1･2　同一個体で，白橙色の土師質焼成の塩壷ではないかと考えられる。内面の布目痕は見出せないが，各所に指頭圧痕があり，胎土には細砂粒を若干含む。

P.1094-3　土師器甕片で，部厚い口頸部となる。口径26.2cmで，胴が上端で張る類である。

P.1101-1　須恵器杯蓋で，口径18cmとなる。天井外面には回転ヘラ削りを施す。

P.1101-2　玉縁丸瓦で，凸面は横ナデで２本の沈線がみられる。凹面には布の縫い目が残る。

P.1102　土師器甕口縁片で，長く丸く屈曲して開く形状となる。

P.1104　土師器甕把手部分で，煤が付着している。先端がとんがり気味の形状をなす。

P.1105-1　須恵器杯片で，外面は灰かぶりしている。体部外面下端は回転ヘラ削りを施す。

P.1105-2　低く内端で接地する高台を付ける須恵器杯で，体部下端に回転ヘラ削りを施す。

P.1105-3　土師器甕口縁片で，強く屈曲して長めに外反する類である。胴外面は磨滅する。

P.1109-1　須恵器壺口縁で，内外面横ナデを施す。口径19.8cmで，シャープな口縁となる。

P.1109-2　口径20cmの土師器甕で，全体に磨滅気味である。胴は張らず，小ぶり類となる。

P.1113　土師器小甕片で，口縁は外傾気味に開く。胴が張る類となろうか。

P.1118　土師器甕口縁片で，胴内面はヘラ削りを施す。やや胴が張る類となろう。

P.1132　須恵器杯で，高台径７cmを測る。底外面は回転ヘラ削り，他は全て横ナデを施す。

P.1136-1　土師器鉢口縁片で，胴内面はヘラ削りが明瞭である。

P.1136-2　土師器甕口縁片で，口頸部が厚手で，胴の張るタイプとなろう。

P.1141　土師器甕口縁片で，頸部内面に稜をつくり，強く屈折して長く開く口縁となる。

P.1142　須恵器椀で，口径18.2cm，器高5.3cmを測る。体部外面下端～底は回転ヘラ削りを施す。

P.1143　小型の土師器杯で，口径10.6cm，器高3.5cmを測る。全体に磨滅している。

P.1160　土師器甕口縁片で，厚く，頸部で鋭い稜をつくる。

P.1162-1　須恵器杯で，高台径9.8cmを測り，小さめの高台を平らな底面に付けている。

P.1162-2　須恵器杯口縁片で，外傾して開くタイプである。内外面とも横ナデを施す。

P.1165　土師器甕口縁片で，丸く屈曲して開く。口縁内外面には化粧土がかけられている。

P.1178　これは道路状遺構中の出土品で，その項ですでに記述した。

P.1185　丸瓦片で，凸面はナデており，側面もナデ仕上げを行う。

P.1189　刻字のある土師器杯で，底外面は回転方向のヘラ削り，内面は丁寧にナデる。胎土精良で，底外面に焼成前の「宇」のヘラによる鋭利な刻字が施される。その下にもう一字存在する。8世紀前半のもので，西隣の薬師堂谷遺跡からもこの字の墨書土器が出土している。

P.1192　須恵器杯で，内端で接地するが，低い高台を付ける。生焼けで，内外面磨滅している。

P.1197　土師器甕口縁で，内面で鋭い稜をつくり，長く開く類となる。

P.1204　小型の土錘2点で，長さ3.7～3.2cm，径1.1～0.85cmを測る。葉巻き形で胎土精良である。

P.1222　土師器鉢で，頸部で屈折して大きく開く口縁となる。口径35cmで，内面は磨滅する。

P.1227　須恵器壺片で，外面は細かいハケ目状カキ目，内面は蓆目状あて具痕がみられる。

P.1229　土師器甕口縁片で，胴の張るタイプになると考えられる。

P.1245　第19号掘立柱建物の柱穴出土の土師器甕片で，張る胴部から2段に屈折して開く。

P.1252　須恵器壺の胴部で，外面下端は回転ヘラ削り，他は内外面ともに横ナデを施す。

P.1253　土師器甕で，口径19.2cmを測り，肩が張る器形をなす。

P.1255　土師器杯で，内外面ともに磨滅して調整は不明である。

P.1256　須恵器杯蓋で，まだ返りがやや長い。天井外面には回転ヘラ削りを施している。

P.1261-1　須恵器杯蓋で短かい返りを付ける。褐色のやや生焼け品である。

P.1261-2　須恵器杯で，底外面は回転ヘラ削りを施す。体部が外傾して開く類である。

P.1264　須恵器杯蓋で，短かい返りを付ける。天井外面は回転ヘラ削りで，ヘラ記号を施す。

P.1265　須恵器杯蓋で，断面三角形の返りを付ける。天井外面はナデ調整を施す。

P.1266　須恵器杯蓋で，口径16cmを測る。天井外面は回転ヘラ削りを施す。

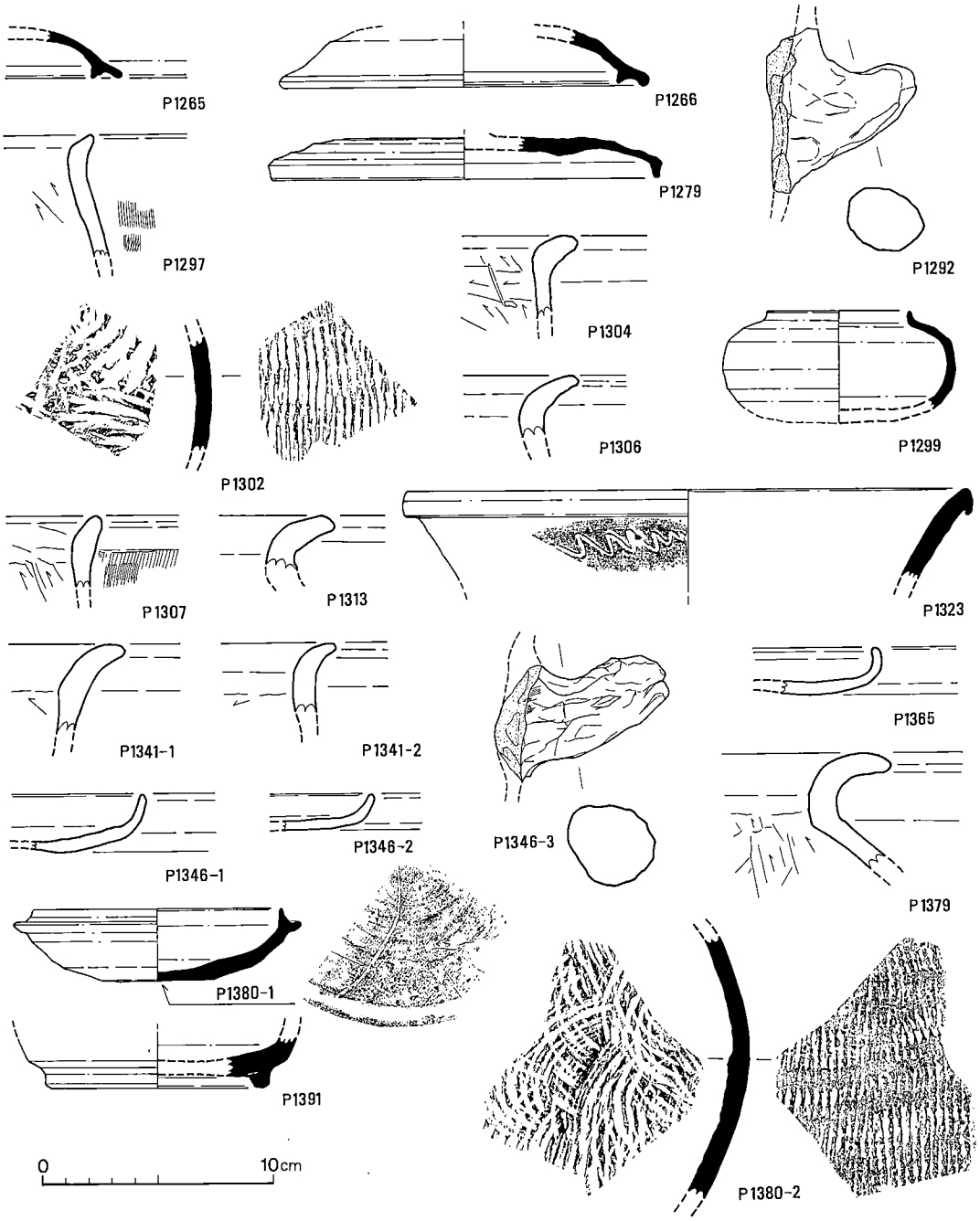
P.1279　須恵器杯蓋で，シャープな鳥嘴状口縁をなす。天井外面は回転ヘラ削りで，口径17cm。

P.1292　土師器甕の把手で，短かくずんぐりとしたタイプである。

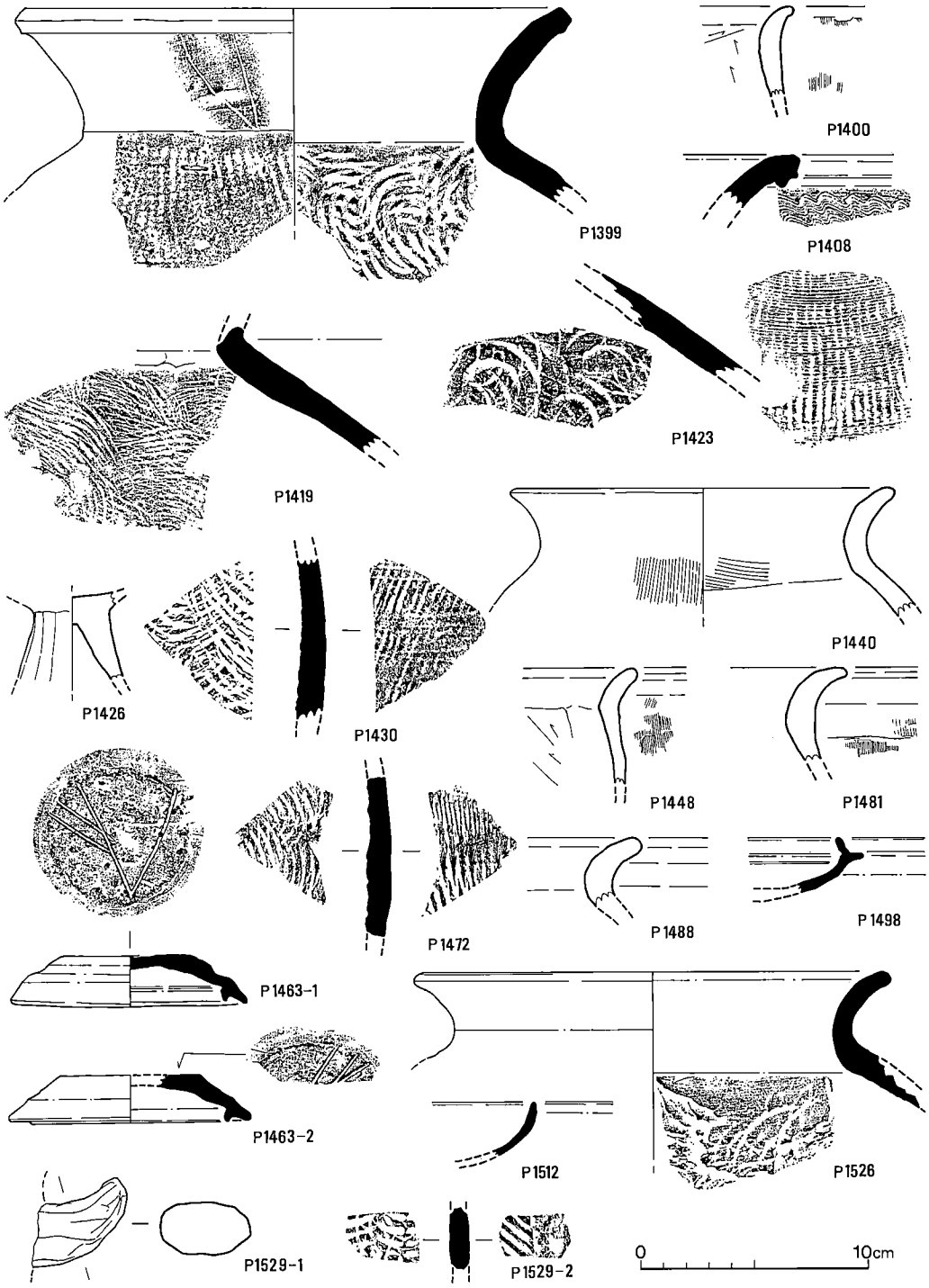
P.1297　土師器小甕口縁で，内外面に煤が付着する。短かく折れる口縁をなす。

P.1299　須恵器小壺で，口径6.2cm，胴部最大径10cmとなる。内外面横ナデで，外面は灰かぶり。

P.1302　須恵器壺片で，外面は平行叩き，内面は青海波がみられる。



第366図　柱穴群出土土器実測図（その13）(1/3)



第367図　柱穴群出土土器実測図（その14）(1/3)

P.1304　土師器小甕口縁で，短かく折れて開く口縁となる。

P.1306　丸く屈曲して開く土師器甕口縁片で，全体に磨滅著しい。

P.1307　僅かに外傾する程度の口縁となる土師器小甕である。

P.1313　土師器甕口縁小片で，内外面横ナデが施される。丸く外反するタイプとなろう。

P.1323　須恵器壺口縁で，口径24.4cmを測る。頸部にヘラによる波状文をめぐらす。

P.1341-1　土師器鉢口縁片で，胴部外面は磨滅している。内外面ともに煤が付着する。

P.1341-2　土師器甕口縁片で，ゆるく開く形状となる。胴内面はヘラ削りを施す。

P.1346-1　土師器杯で，底外面はナデている。

P.1346-2　浅い器形の土師器杯で，底部周縁に回転方向のヘラ削り痕を残す。

P.1346-3　土師器甕の把手で，器壁に挿入するタイプである。上端部にわずかにハケを残す。

P.1365　土師器杯で，底外面は手持ちのヘラ削りを施す。口縁は内湾気味となる。

P.1379　土師器甕片で，強く張る胴部から反転して長く開く口縁につくる。外面は横ナデ。

P.1380-1　須恵器杯身で，立ち上がり径10.7cm，器高3.1cmを測る。底外面は回転ヘラ削りで，長くのびる１本線のヘラ記号がみられる。

P.1380-2　須恵器甕片で，外面は条蓆状叩きの上を一部ナデ，内面は青海波を施す。

P.1391　茶褐色をなす生焼けの須恵器杯で，高台径9.7cmを測る。外面は横ナデ調整を施す。

P.1399　須恵器甕で，胴部外面は条蓆状叩き，内面は青海波を施す。口径24.4cmを測る。

P.1400　土師器小甕片で，ゆるやかに僅かに開き気味の口縁となる。

P.1408　須恵器甕口縁で頸外面に櫛描波状文をめぐらす。外面には黒色自然釉が付着する。

P.1419　胴部内面に細い青海波を施す須恵器甕で，外面は灰かぶりして叩きが不明瞭である。

P.1423　須恵器甕胴部片で，外面は条蓆状叩きの上をカキ目，内面は粗大な青海波を施す。

P.1426　土師器高杯脚部片で，胎土精良で，脚柱外面はヘラ削りを施す。

P.1430　須恵器甕胴部片で，外面は条線状叩きの上を粗いカキ目，内面には青海波を施す。

P.1440　土師器甕で，口径16.8cmを測る。胴は強く張り，内面はヘラ削りを施している。

P.1448　土師器小甕口縁片で，薄手でゆるやかに外傾する程度の口縁となる。

P.1463-1　須恵器杯蓋で，返り端径8.4cm，器高2.3cmを測る。天井外面平坦部はナデ，その外周に僅かに回転ヘラ削りが残る。天井外面にＶ字と，２本平行短線を合わせたヘラ記号を施す。

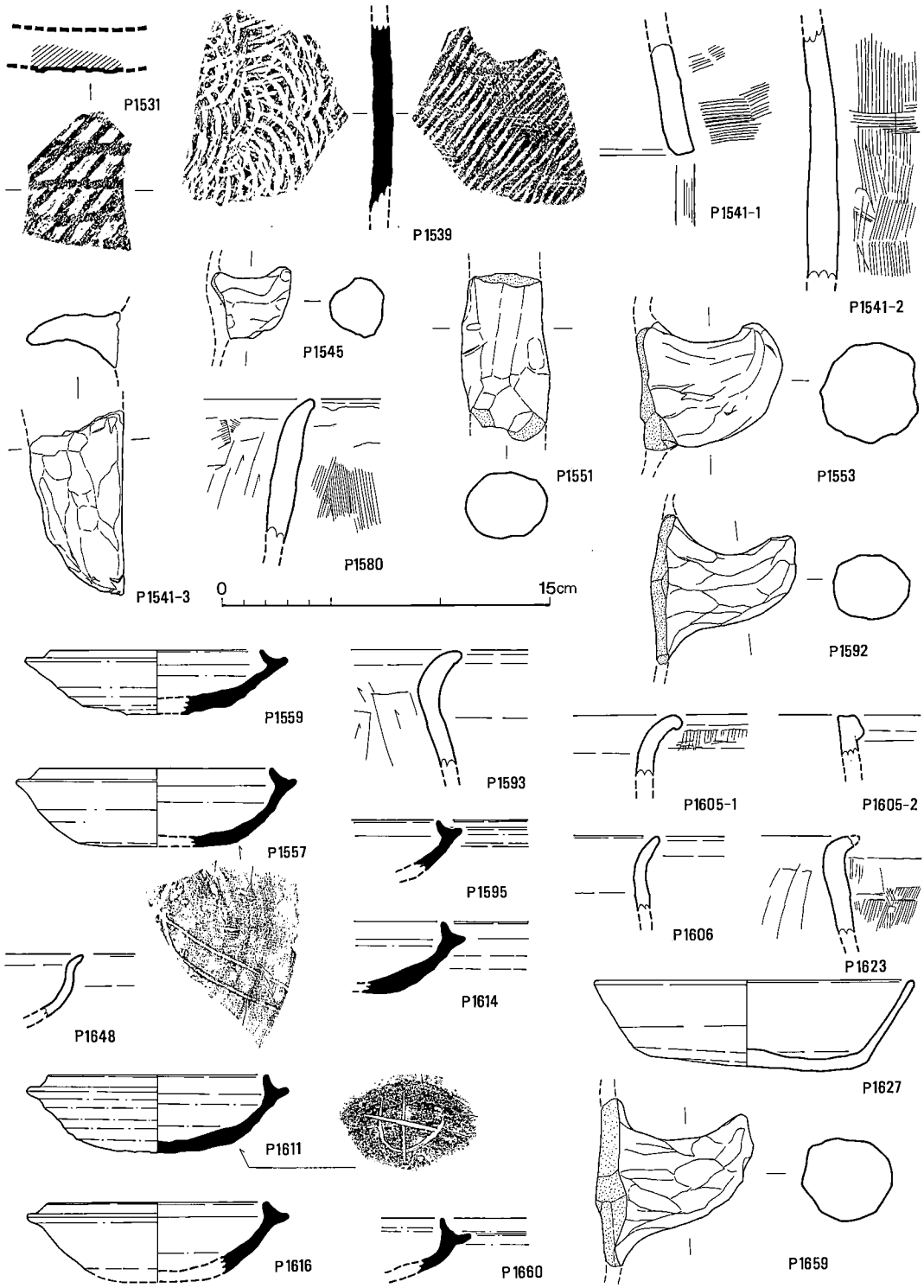
P.1463-2　須恵器杯蓋で，返り端径8.5cm，器高2.1cmを測る。天井平坦面はナデ，そこに前者と同種となるかと思われるヘラ記号が施される。

P.1472　須恵器甕胴部片で，外面は平行条線状叩き，内面は細身の青海波が施される。

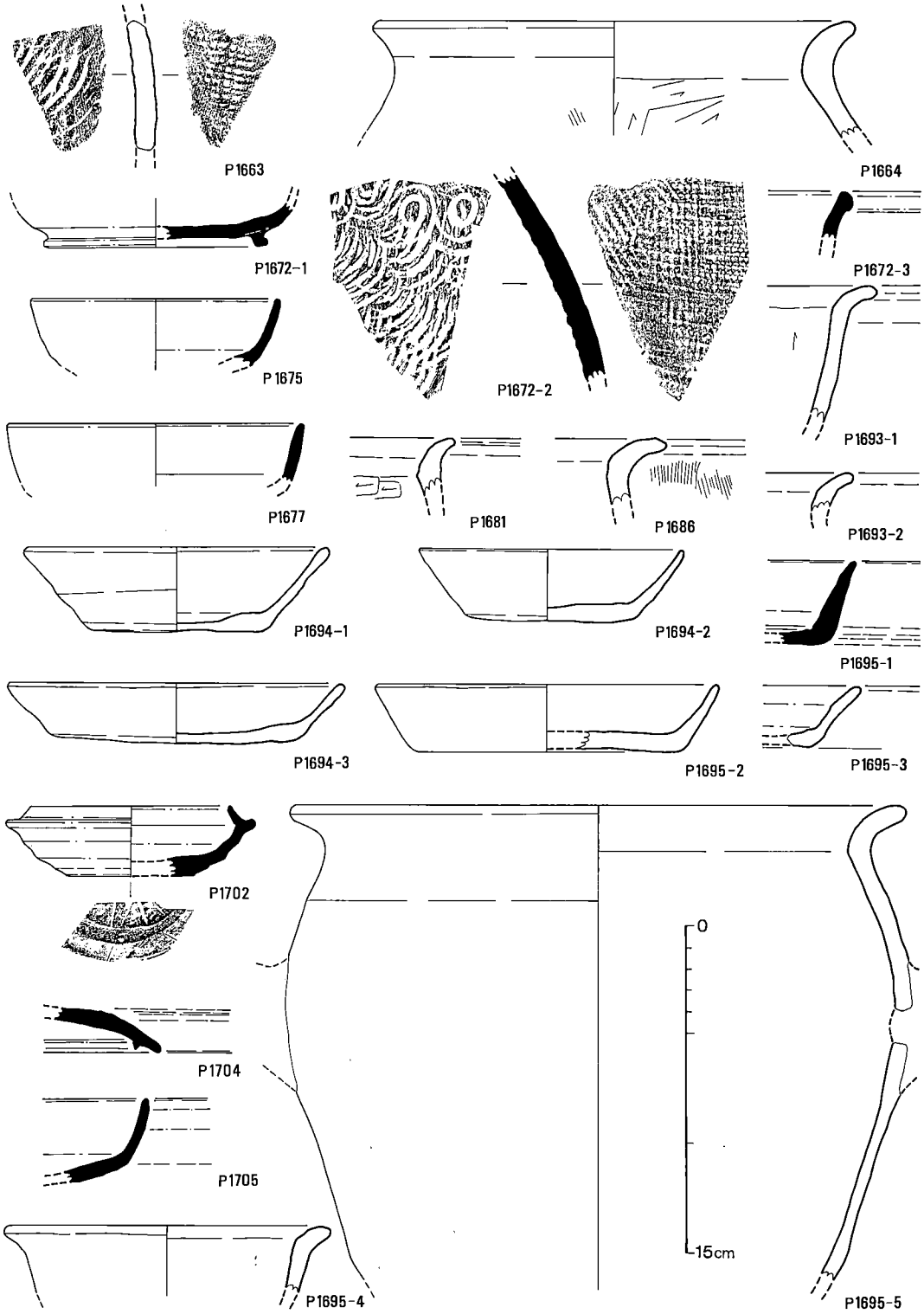
P.1481　土師器甕口縁片で，内面は磨滅している。上部で胴の張るタイプとなろう。

P.1488　胴部内面は磨滅する。土師器甕口縁片で，胴が強く張る類となろう。

P.1498　須恵器杯身で，全体に薄手である。立ち上がりが未だ長めである。



第368図　柱穴群出土土器実測図（その15）(1/3)



第369図　柱穴群出土土器実測図（その16）(1/3)

P.1512　須恵器皿あるいは杯的な形状となろう。薄手で内外面横ナデを施している。

P.1526　須恵器壺で，胴部内面には青海波がみられる。口径20.8cmを測る。

P.1529-1　土師器甕の把手で，小さく，断面が扁平なタイプである。

P.1529-2　褐色を呈する須恵器の生焼け甕片である。外面は平行条線状叩き，内面は青海波とも見えるが異様な短線連続のあて具痕がみられる。胎土は精選されている。

P.1531　本遺跡出土例としては珍しい大きい斜格子叩きの平瓦片で淡茶色の生焼け品である。

P.1539　須恵器甕片で，外面は平行状線条叩きの上をカキ目，内面はやや細身の青海波を施す。

P.1541-1　移動式土製カマドの下端片で，下端面にもハケを施している。内面はナデる。

P.1541-2　土師器の甕とも考えたが，内面はナデ，厚手であり，土製カマド片であろう。

P.1541-3　土製カマドの付け廂の下端部である。指頭圧痕が著しい。

P.1545　土師器甕の把手であるが，極めて小型で短かい。全体に指オサエ痕が著しい。

P.1551　手で捏ねた棒状土製品であるが，やや断面が扁平であり土師器甕把手の一種と考える。

P.1553　ずんぐりと太い土師器甕の把手である。

P.1557　口径10.7cm，器高3.6cmの須恵器杯身で，底部外面は雑に削り，ヘラ記号がみられる。

P.1559　口径9.7cm，器高2.9cmの須恵器杯身で，底部外面は回転ヘラ削りを施す。

P.1579　現存長3.6cm，直径1.3cmの断面正円の棒状土製品である。上端面には接合のためと思われる沈線を入れており，胎土精良で，器表に淡茶色のスリップをかけ，縦位のハケ状工具による整然とした調整が施されている。把手状となるとも想像されるが，用途不明である。

P.1580　土師器甑口縁で，ごく僅かしか開かない口縁となる。

P.1592　標準的な大きさの土師器甕の把手部分である。表面は強い指ナデを残す。

P.1593　土師器小甕口縁片で，ゆるやかに外傾気味に開く口縁となる。胴部外面は磨滅する。

P.1595　須恵器杯身で，未だ深い器形となろう。内外面とも横ナデ調整を施している。

P.1605-1　土師器甕口縁片で，頸部で全く肥厚しない。内面は横ナデを施す。

P.1605-2　土師質焼成の口縁片であるが，内外面横ナデで，煤が付く。中世の捏鉢片か。

P.1606　土師器小甕片で，内外面磨滅している。薄手で，僅かしか外傾しない口縁となる。

P.1611　口径10cm，器高3.6cmの須恵器杯身である。底外面はナデており，ヘラ記号が施される。

P.1614　須恵器杯身で，外面下半はナデており，その周縁僅かに回転ヘラ削り痕を残す。

P.1616　須恵器杯身で，口径10cmとなる。底外面に回転ヘラ削りを施す。

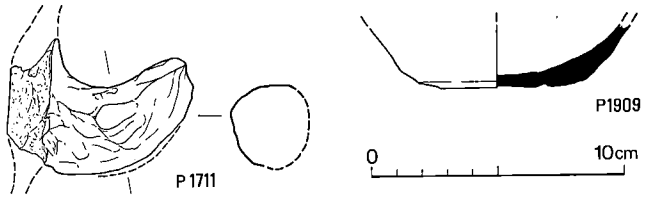
P.1623　土師器小甕片で，内面はヘラ削りを施す。いくらか張る胴部をなす。

P.1627　口径14.6cm，器高４cm，底径9.2cmの底部ヘラ切りの土師器杯である。

P.1648　土師器で，口縁で短かく屈曲反転して開く椀状となる。内外面に化粧土をかける。

P.1659　土師器甕の把手で，わりと整った形状を示している。断面は円形に近い。

P.1660　須恵器杯口縁片で，立ち上がりがまだ長めである。



第370図　柱穴群出土土器実測図（その17）(1/3)

P.1663　赤焼き土器で，外面は格子目叩き，内面は青海波を施す。胎土には砂粒を若干含む。

P.1664　口径22.1cmの土師器甕で，胴が強く張る。胴外面は磨滅気味である。

P.1672-1　須恵器杯底部で，低い高台を付ける。底外面はナデ，他は横ナデを施す。

P.1672-2　須恵器甕胴部で，外面は条蓆状叩き，内面は楕円状となる青海波を施す。

P.1672-3　須恵器壺口縁で，内外面横ナデ調整を施す。外面は灰かぶりがみられる。

P.1675　須恵器杯で口径11.4cmとなる。体部内外面とも横ナデ，底内面はナデツケを施す。

P.1677　須恵器杯口縁片で，口径13.5cmを測る。内外面とも横ナデ調整を施す。

P.1681　土師器小甕口縁で，短かく折れて開く口縁となる。

P.1686　土師器甕口縁で，内面は磨滅している。頸部から強く開く類となる。

P.1693-1　土師器鉢の口縁で，やや小ぶりのものとなる。内外面ともに磨滅著しく調整不明。

P.1693-2　土師器小甕口縁で，内外面ともに磨滅しており，調整は判らない。

P.1694-1　底部ヘラ切りの土師器杯で，口径14cm，器高3.9cmを測る。

P.1694-2　底部ヘラ切りの土師器杯で，口径12.1cm，器高3.3cmを測る。9世紀後半代。

P.1694-3　底部ヘラ切りの土師器杯で，口径15.4cm，器高2.7cmを測る。以上の3個は小ピット中に重なって出土したものである。

P.1695-1　須恵器杯で，体部下端から底外面は回転ヘラ削りが施される。

P.1695-2　口径15.6cm，器高3.1cmの大口径の土師器杯で，底外面は回転方向ヘラ削りを施す。

P.1695-3　土師器杯で，全体に磨滅著しい。須恵器模倣の形態をとる。

P.1695-4　土師器小甕口縁片で，内外面ともに磨滅して調整は不明である。

P.1695-5　口径28cmの土師器甕で，胴部に挿入法で接合する把手を付ける。全面磨滅する。

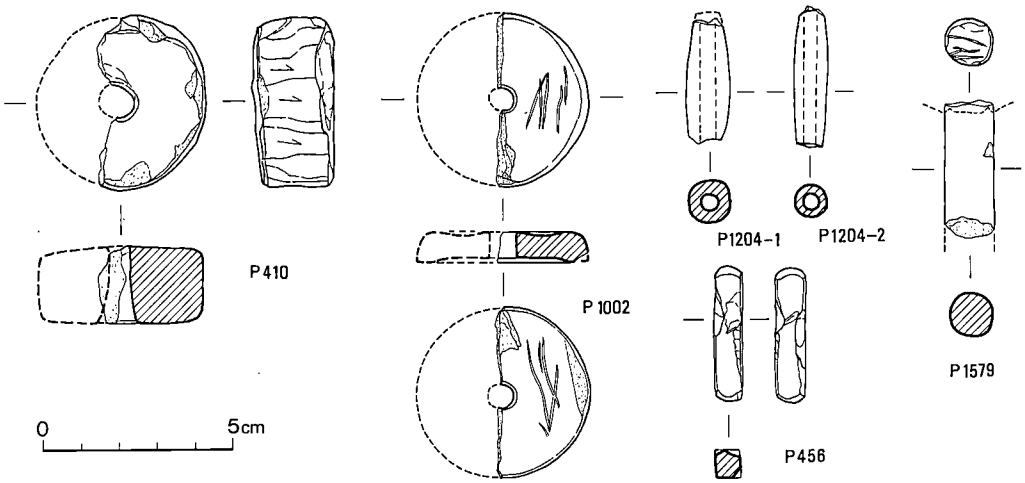
P.1702　須恵器杯身で，口径9.1cm，器高3.1cmを測る。底外面は平坦面をナデて，その外周縁に回転ヘラ削りを施す。底部平坦面にヘラ記号が施される。

P.1704　須恵器杯蓋で，小さく短かい返りを付ける。天井外面には回転ヘラ削りを施す。

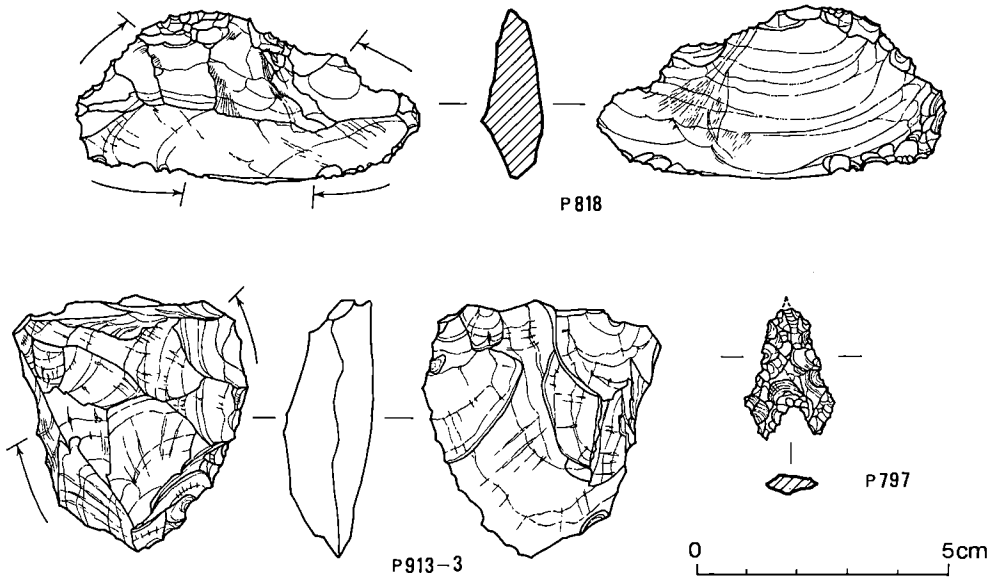
P.1705　須恵器高杯となりそうで，底外面には回転ヘラ削りがみられる。

P.1711　長くて曲がった土師器甕の把手で，断面は丸い。

P.1909　須恵器杯で，全体に丸っこく，内外面ともに横ナデを施している。



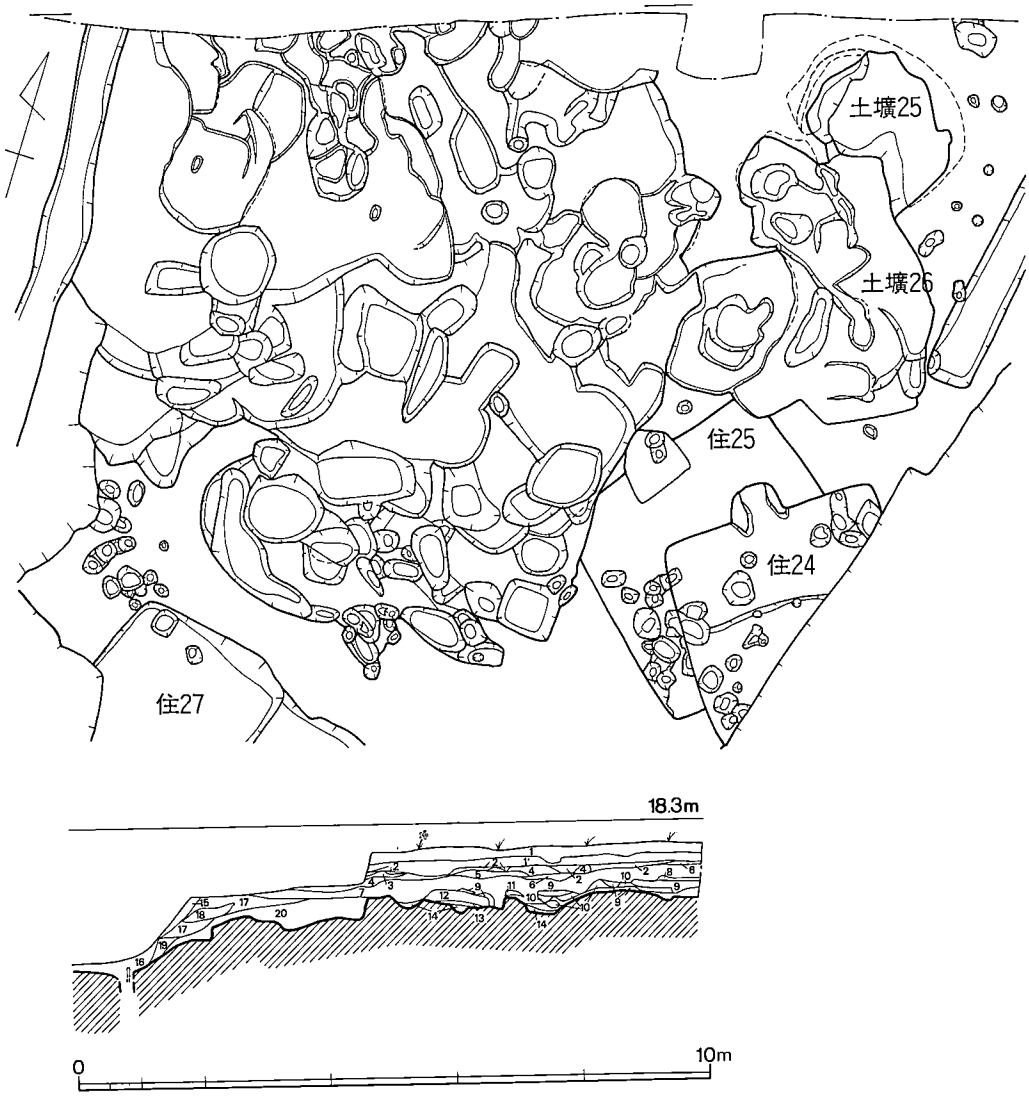
第371図　柱穴群出土土製品・石製品実測図（1/2）



第372図　柱穴群出土石器実測図（2/3）

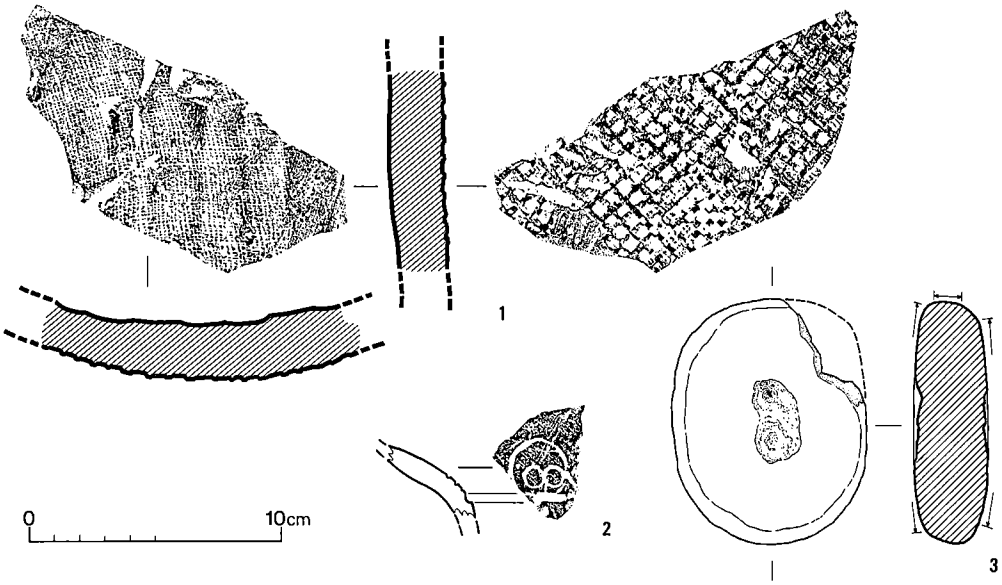
北西部落込み（第373図）

遺跡の北西端に極めて凹凸著しい範囲がみられた。第25・26号土壙，第24・25号住居跡の西側で，第26・27号住居跡の北側である。南北で９ｍ，東西９ｍ強の範囲に，底面が土壙の連なりのようになって拡がっていた。調査の結果，全体に新しく攪乱されたもので，第25号住居跡



1：耕作土，暗灰褐色土
1′．耕作土(床土)
2．少混黒色土粒・茶褐色土粒・暗褐色土
3．茶褐色粘質土
4．多混黒色土粒・茶褐色土粒・暗褐色土
5．暗褐色土
6．著多混黄色粘質土粒・黒色土粒集中層
7．多混黄色粘質土粒・黒色土粒・浅灰褐色土
8．黄色・茶褐色粘質土塊
9．少混黄色粘質土粒・黒色土
10．著多混黄色粘質土集中層
11．明黄橙色粘質土
12．灰白色粘質土塊
13．暗褐色土
14．多混灰白色粘質土粒・暗褐色土
15．暗褐色土(竹根多し，谷の表土)
16．暗青灰褐色土(溝埋土)
17．少混黄色粘質土粒・暗茶褐色土
18．黄色粘質土塊・暗褐色土
19．混黄色粘質土粒・浅黄灰褐色土
20．著多混灰白色・黄色粘質土塊・黒色土・暗褐色土

第373図　北西部落込み土層実測図（1/120）



第374図　北西部落込み出土遺物実測図（1/3）

も両端を切られていた。この落ち込み部から若干の遺物が出土しているので，以下説明したい。

出土遺物（第374図）

1は，平瓦片で，凸面に正格子叩きを斜位に施し，凹面は幅1.6～1.9cmの連接した縦位の模骨圧痕が明瞭に認められる。焼成やや軟質で淡褐色～灰黒色を呈する。

2は，茶釜形で土師質焼成の肩部片である。太い沈線の上方に大小の竹管文を組み合わせたスタンプを押圧している。内外面とも丁寧にナデており，胎土精良で淡褐色を呈する。室町期の所産であろう。

3は，凹み石で，角閃石を多く含む凝灰岩円石を用いる。表・裏両面中央に凹部をつくり，また表裏と側縁も全周磨っている。

高松家墓地周辺包含層

本遺跡の北西端に近く，近世大庄屋一族の高松家墓地が占地する。墓地そのものの報告は次回に譲ることにする。このあたりは古代のC住居群が集中する所で，近世墓壙発掘の際にもかなりの古代遺物が混入品として出土した。それらのうち，所属する住居が明確なものは，各住居出土土器として掲載したが，それ以外の所属する住居が不明なものや，墓地上層の土器・瓦などを，ここでとり上げることにする。いわば包含層の遺物ではあるが，いずれにしろC住居群に伴う一群と考えられる類である。

出土遺物（第375～379図）

須恵器（1～11・15～17）　1～3は杯蓋で，1は，口径11cmで7世紀初頭の所産である。2・3は，返りを持つが逆転した段階のもの。2の天井外面は回転ヘラ削りを施し，撮が剝離している。返り端部径8.8cmを測る。3は天井外面中央部はナデておりその周縁部に僅かに回転ヘラ削りが施される。端部径8.7cm，器高2.7cmを測る。

4～6は杯身で，4は口径11.1cmで，底外面中央はナデており，その周縁部に回転ヘラ削りがみられる。黄土色を呈する生焼けである。底外面にヘラ記号が施される。5は口径10.4cm，器高3.3cmで，底外面は雑なヘラ削りで，他は内面中心まで横ナデを施す。6は，口径9.3cm，器高3.2cmで，底外面もナデている。

8は高杯脚部で細身の脚柱となる小型類である。外面には灰かぶりがみられ，部分的にカキ目が施される。脚端径8.8cmを測る。

9～11・15は壺類で，9は口径15.8cmで内外面とも横ナデを施す。外面は灰をかぶっており，胎土はわりと雑である。10は底径8.8cmを測る厚手の平底となる。底外面はナデ，胴部外面と内面はヘラ削りを施している。11は安定した平底となり外面はナデの上にカキ目を施している。15は，口径21.8cm，胴部最大径28.3cmを測る。胴部外面は条蓆状叩きの上にヘラ状工具による雑なナデ，内面は青海波が密に施される。

7・16・17は甕で，7は胴部外面に条蓆状叩き，内面には太い青海波が施される。16は，口径21.6cmで，胴部外面は条蓆状叩きの上をカキ目調整している。17は口径20cmで，内外面ともに横ナデを施している。

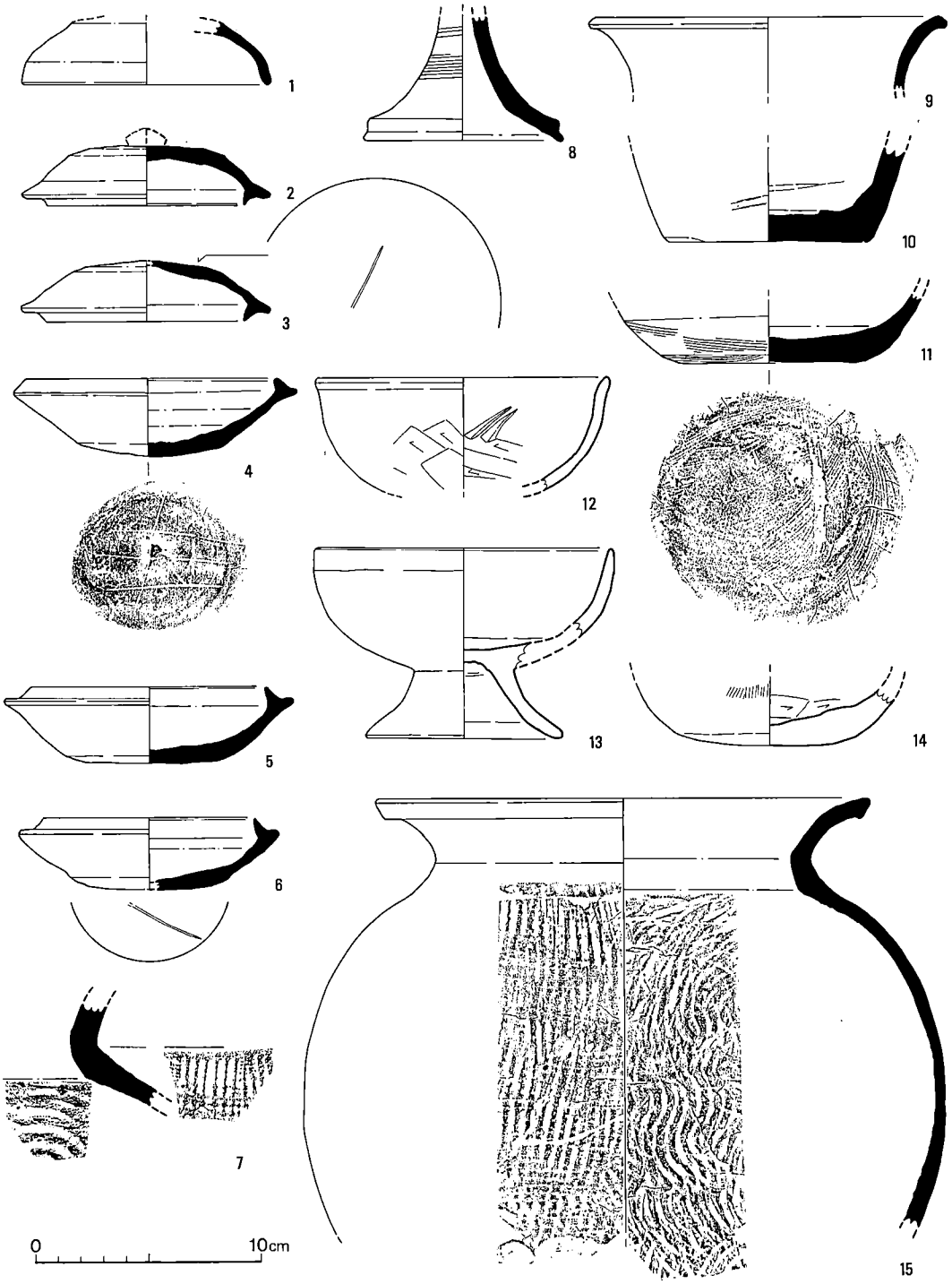
土師器（12～14・18～25）　12は下半の内外面に手持ちヘラ削りを施す椀である。口径13cmを測る。13は脚台付椀で，口径13.2cm，器高8.4cmを測る。脚柱内面は横位ヘラ削りと思われるが，他面は磨滅して調整不明である。

14・18は小甕で，14は厚く安定した底部で，胴外面下端から底部はヘラ削りを施す。18は口径13.5cmで，いくらか張る胴部につくる。

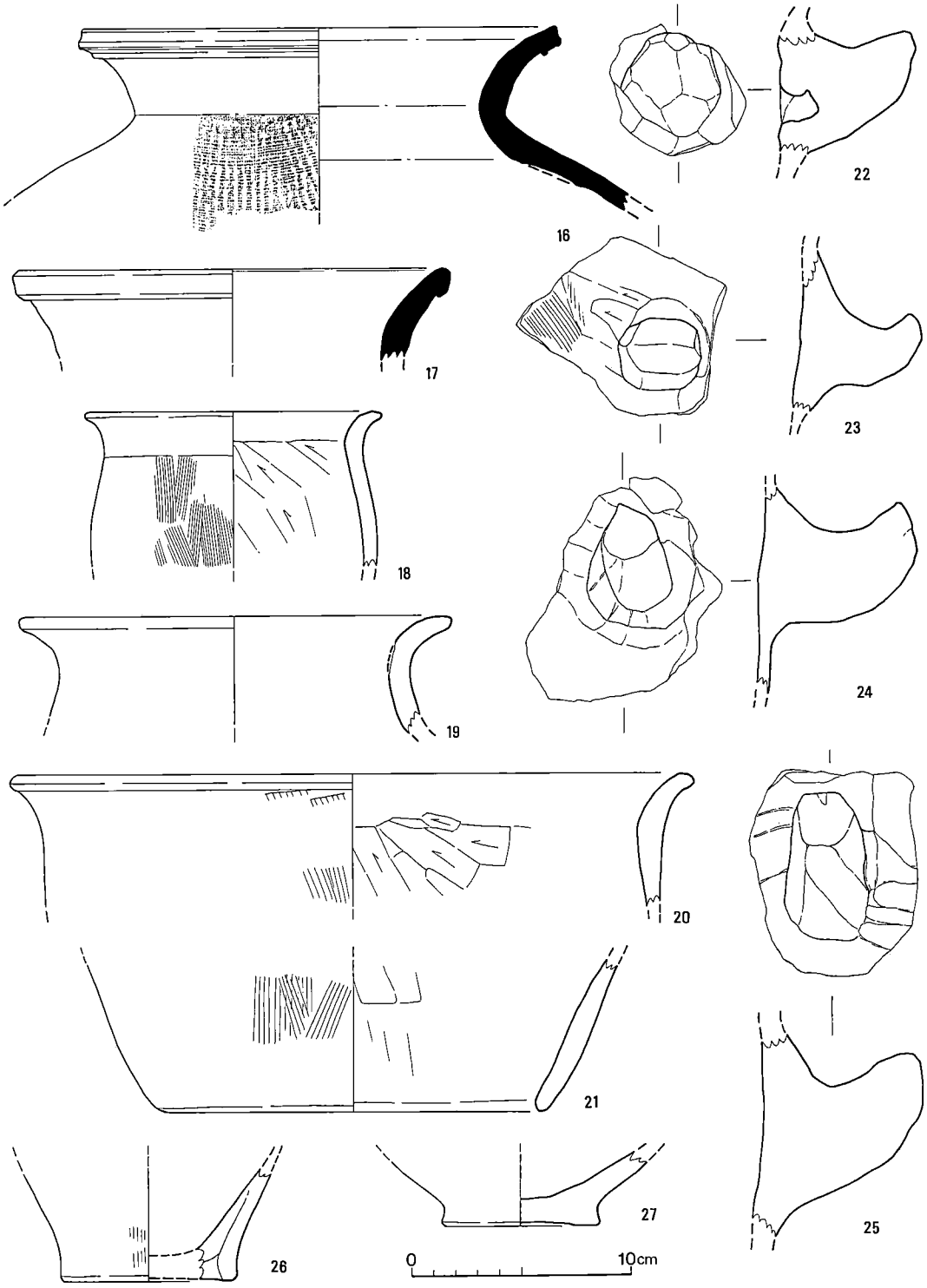
19・20は甕で，口径19.8cm，31.2cmとなる。19は全面磨滅して調整不明。21は甑底部で，下端周辺は横ナデを施している。22～25は，把手部分で，23は扁平な類となる。24は長く太いもので，ヘラ削りが施されている。25も太く，強い指オサエナデがみられる。

弥生土器（26・27）　26は底径8cmの甕底部で，僅かに上げ底となる。全体に磨滅気味となる。27は底外面中央がへこみ，全体に磨滅著しい壺底部である。

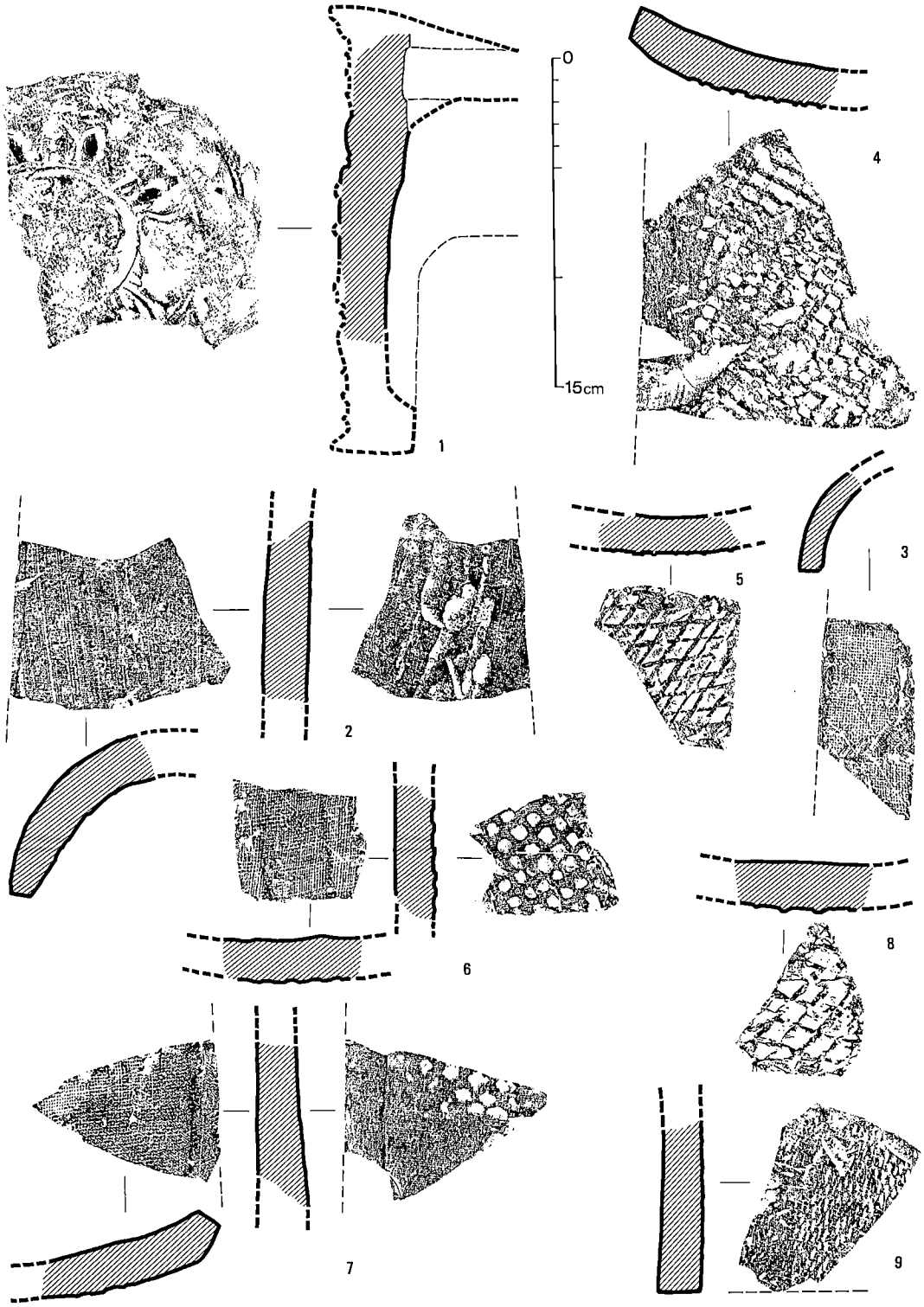
瓦（第377～379図1～15）　1は軒丸瓦片で，内外面とも剝落・磨耗が極めて著しい。かろうじて図上復原したが，詳細は不明な点が多い。複弁帯が中房の外にみられ，その外縁に圏線があり，珠文帯が外側にある。蓮子の数は判からない。全体の様相から，老司Ⅰ式軒丸瓦となると推定される。胎土精良で，焼成は軟質で白色に近い。内面は強い指ナデが施される。図上下



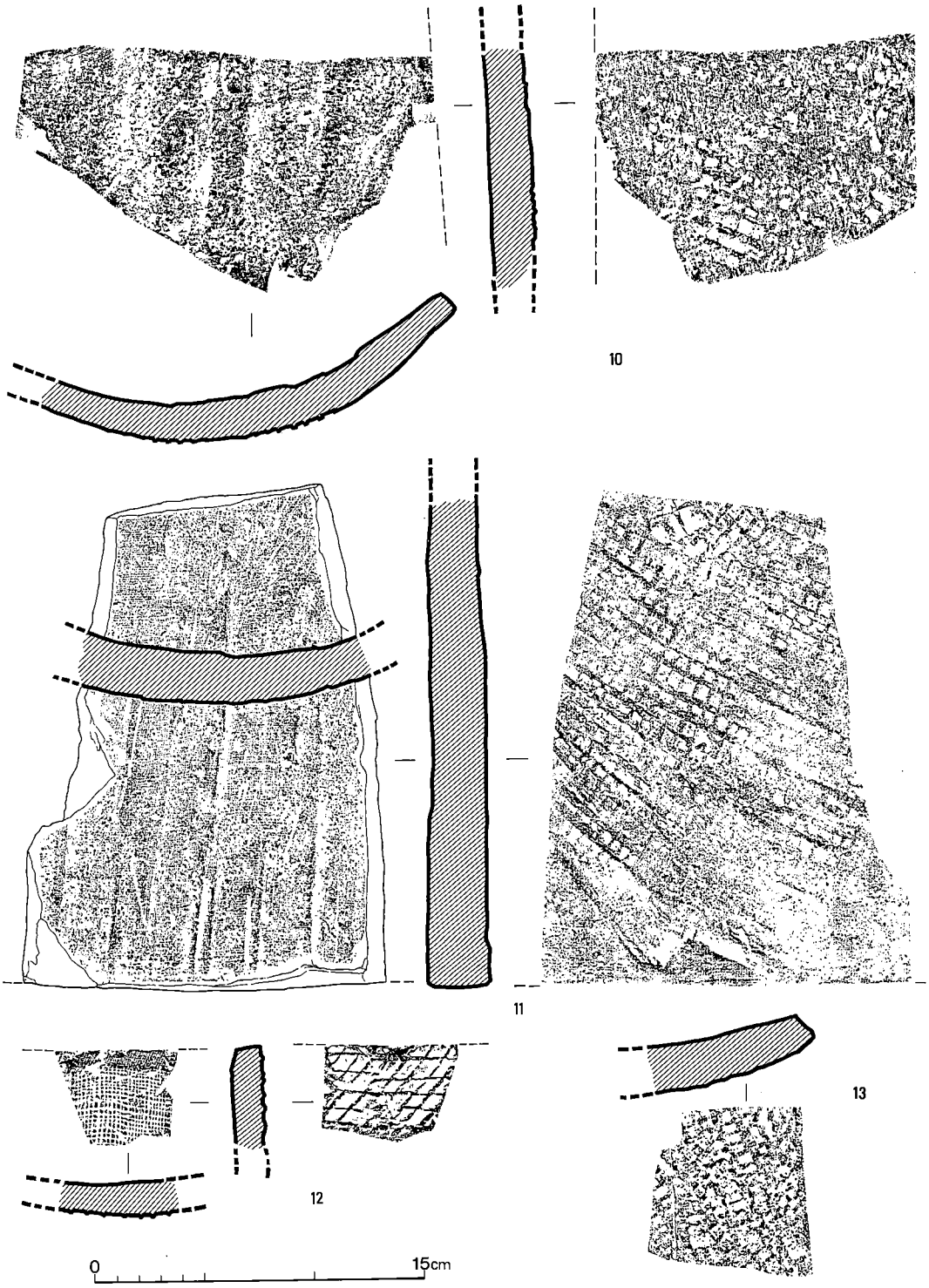
第375図　高松家墓地周辺出土土器実測図（その１）(1/3)



第376図　高松家墓地周辺出土土器実測図（その２）(1/3)



第377図　高松家墓地周辺出土瓦実測図（その１）(1/3)

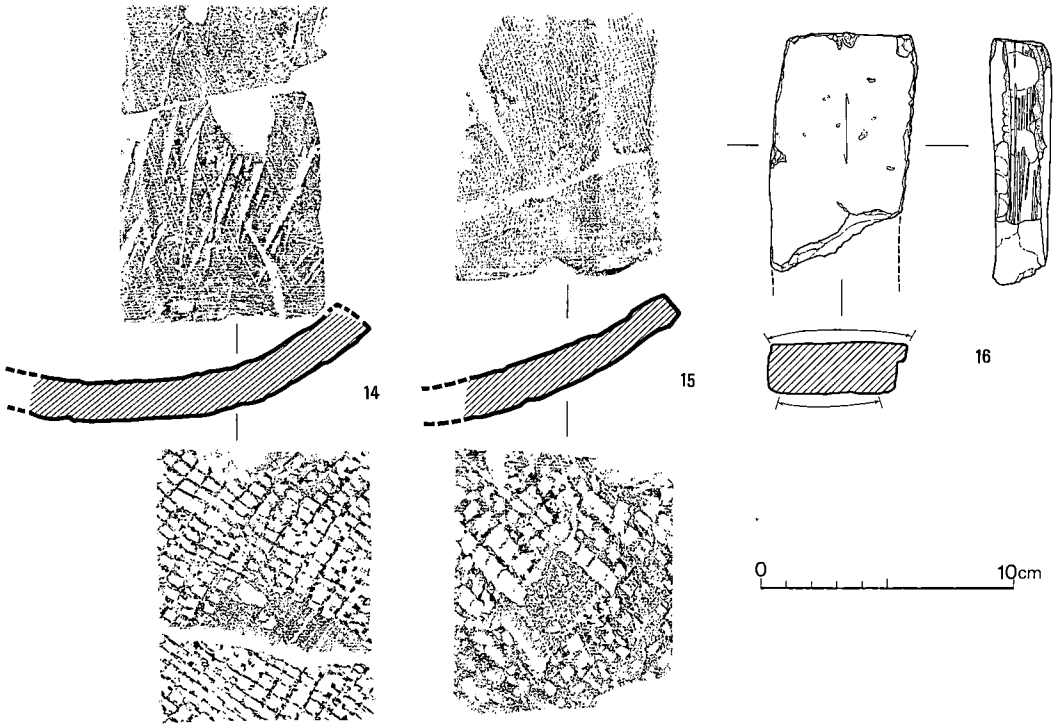


第378図　高松家墓地周辺出土瓦実測図（その２）(1/3)

端の顎の部分は，その接合痕が他の部位に明らかに確認されたため，その奥行き長さは推定であるが，一応復原図示したものである。

2は丸瓦片で，凸面には板状工具による縦方向擦過痕が明瞭に残る。凹面は布目の上を，ヘラ状工具によって縦方向に粗い削り込みが行われており，布目は殆んど残らない。3も丸瓦片で，凸面は横方向への板状工具による擦過がみられる。いずれも側面はヘラ切りによる。

4は平瓦片で，凸面は正格子叩きを斜位に施し，凹面は磨滅している。凸面側縁はヘラ削りが広く施される。5は薄手の平瓦片で，凸面には斜格子の叩きが施され，凹面は磨滅している。6は格子幅の広い正格子叩きを凸面に施し，凹面には2.6cm幅の模骨痕が残る。7は，高松家第14号墓の墓石基礎部根石に使用されていた平瓦片で，凸面は大きめの正格子叩きを施し，凹面は側縁をナデて布目を消している。凸面側の側縁を面取りして，側面とともにナデ仕上げを行っている。8は凸面に粗大な斜格子叩きを施し，凹面は全面指ナデで布目を消している。9は凸面に縄目の叩きを施し，凹面は横方向の丁寧なナデで布目を消す。下端面もナデ仕上げを行っている。10は淡褐色の生焼け平瓦で，凸面は正格子叩目を斜位に施すが，半分ぐらいはナデ消されている。凹面は，幅1.5cmの模骨圧痕が連接してみられ，かなり磨滅しているため布



第379図　高松家墓地周辺出土瓦実測図（その3）(1/3)

目は殆んど残らないが，ナデ消していることも充分考えられる。11はやや厚手の平瓦で，凸面には正格子の叩きを斜位に施し，下端付近はナデている。凹面は布目を部分的にナデ消している。12は薄手の平瓦で，凸面は斜格子の叩き，凹面は目の粗い布目が明瞭に残る。上端面と凹面側縁辺はヘラ切りを行う。灰白色で焼成軟質である。13は，凸面に正格子叩きを施し，凹面は布目をすり消している。14は，凸面は正格子目の叩きを斜位に施し，凹面は布目の上をヘラ状工具により粗くすり消し，その工具端痕が多く残る。側面はヘラ切りを行う。15はやや薄手の平瓦で，凸面は正格子の叩き，凹面は布目の上を部分的にすり消す。側面と凹面側縁辺はヘラ切りを行う。

砥石（16）　シルト岩製仕上げ砥で，表裏とも使用されている。残存長9.3cm，幅5.3cm，厚さ2.4～2.1cmで，中央が使用減りしている。右側面には条線状の鋭利な金属利器によるキズが多く残る。

黒色包含層とその出土遺物

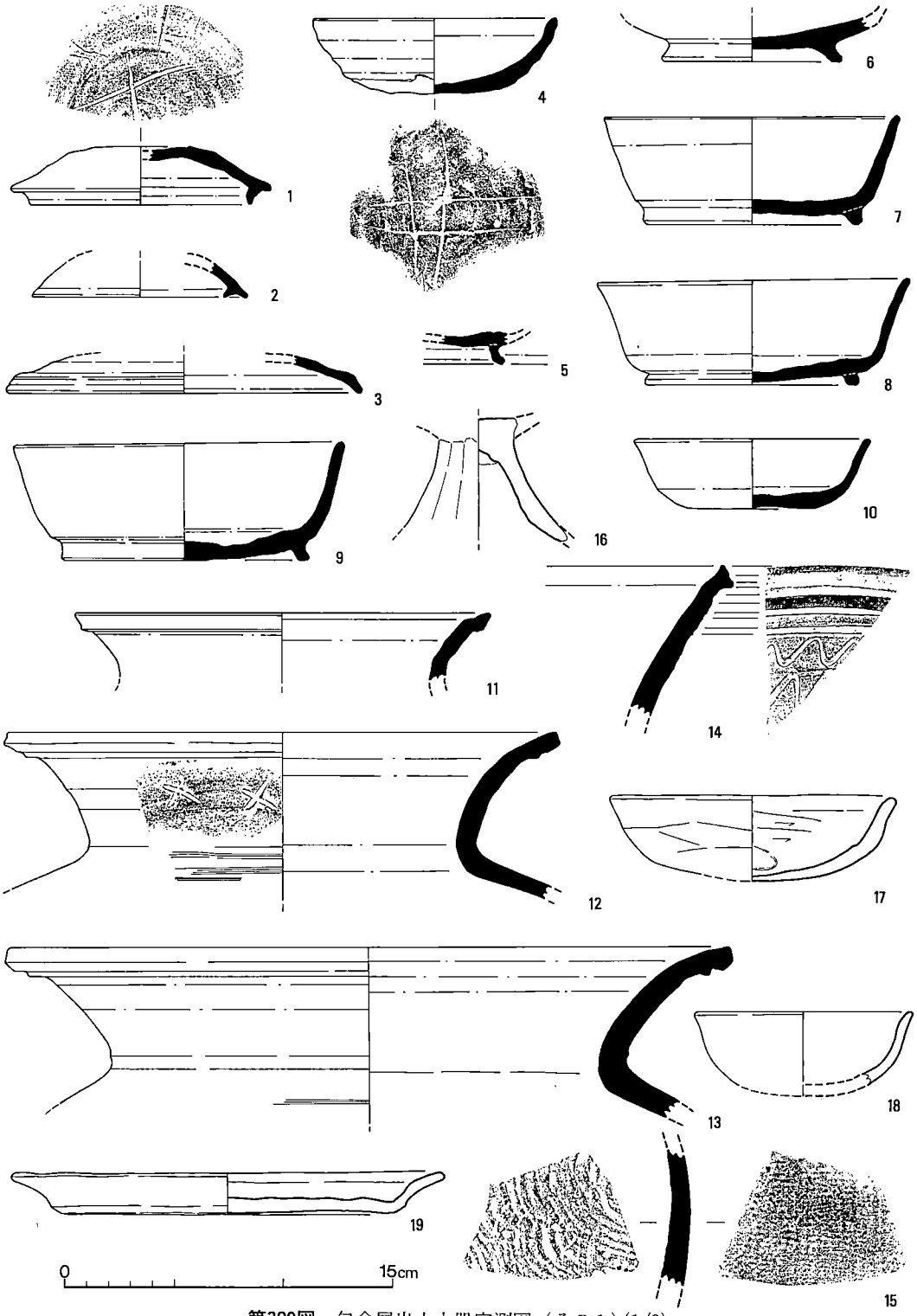
本遺跡のほぼ全域にわたって黒色土の遺物包含層が拡がっている。それは，本書の巻初に記した如く，表土（現耕作土）の下に畑の床土があり，その下に黒色土包含層があり，その下の面が古代遺構面となっている。遺物の包含状況は，遺構のまばらな東端側のあたりでは皆無に近い。今回の調査では，遺構面，つまり黒色包含層の下までを重機を用いて除去したため，遺物はあまり採集できなかった。ここでは，この包含層出土のものを主体に，遺構検出作業中に出土したものや，ラベル紛失により所属遺構が確定できなくなったものをも含めて掲載することとしたい。

出土遺物（第380～384図）

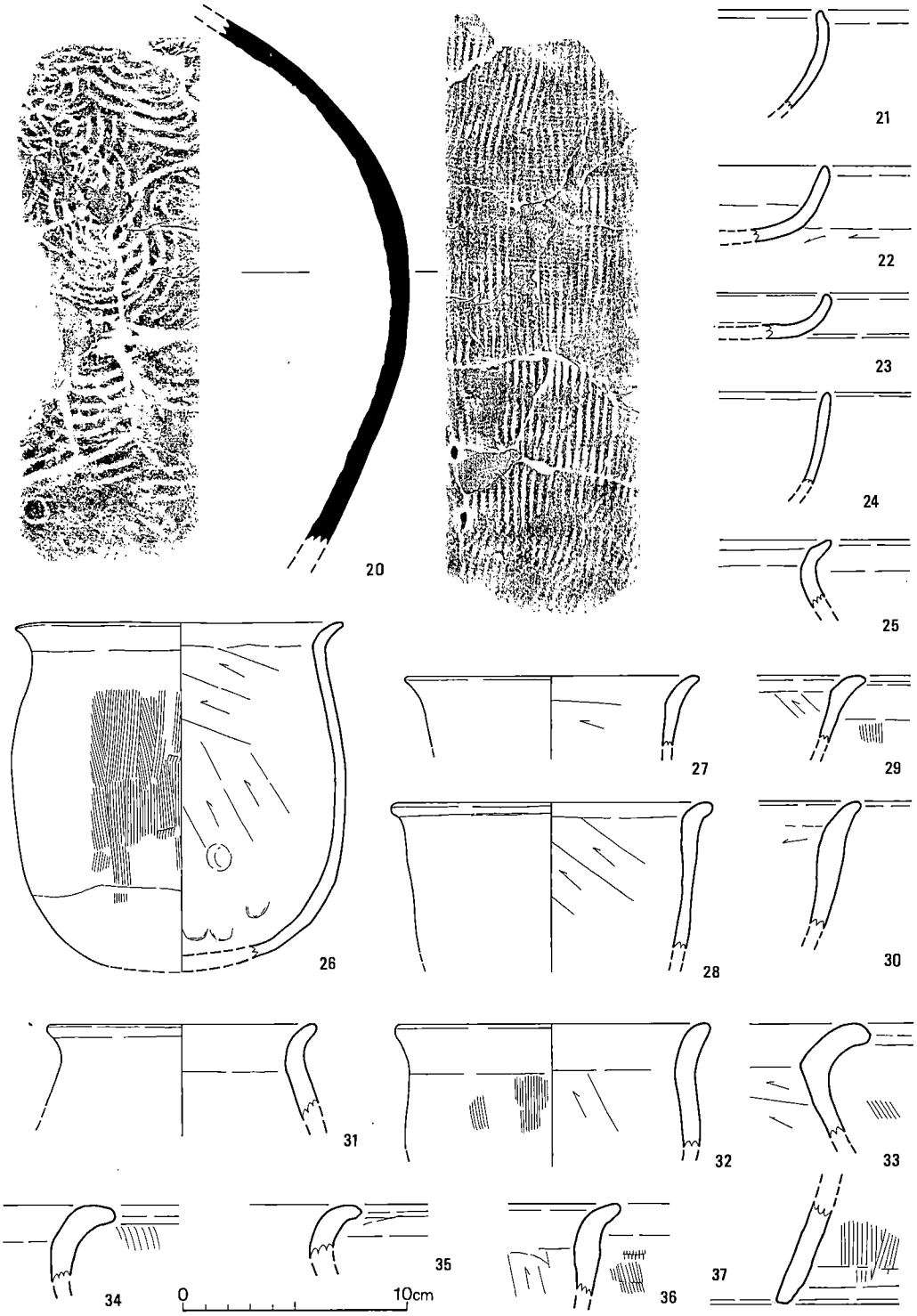
須恵器（1～15・20）　1～3は杯蓋で，1は口径10cm，器高2.6cmを測る。天井外面もナデており，そこに×印のヘラ記号が施される。丁度，杯身の4とセットとなる時期である。2は返り下端径7.6cmの7世紀中頃の小径品である。3は口径16cmで，端部は鳥嘴状口縁とは似つかぬ形状をなす。天井外面には回転ヘラ削りが施される。

4～10は杯身で各種ある。4は口径11cmで，底外面はナデており，そこにヘラ記号がみられる。5は全体に薄手で，細くて下半で折れて外方へ踏ん張る高台を付ける。6は外方へ強く踏ん張る高台を付ける。体部外面下端には回転ヘラ削りが施される。7は口径13.4cm，器高4.9cmを測り，体部は直線的に外傾する。8は口径14.3cm，器高4.8cmを測り，体部内外面横ナデ，底外面はナデている。9は口径15.1cm，器高5.3cmを測る。大口径品である。体部内外面横ナデ，底外面は回転ヘラ削りを施す。10は口径10.7cm，器高3.2cmを測る。底外面は手持ちのヘラ削りを施す。

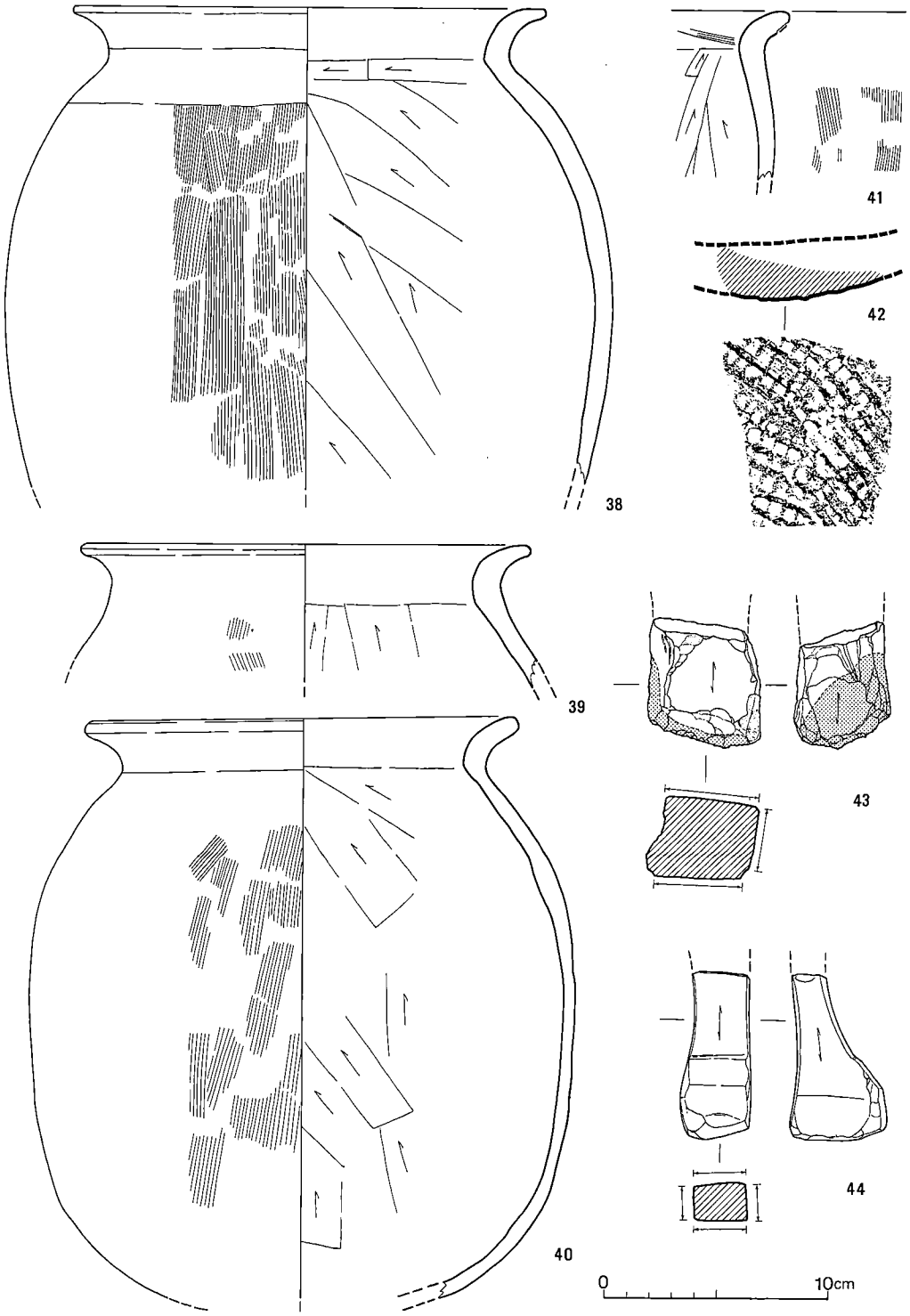
11～15・20は，壺或いは甕である。11は口径19cmを測り内外面横ナデを施す。12は口径25.1



第380図　包含層出土土器実測図（その１）(1/3)



第381図　包含層出土土器実測図（その２）(1/3)

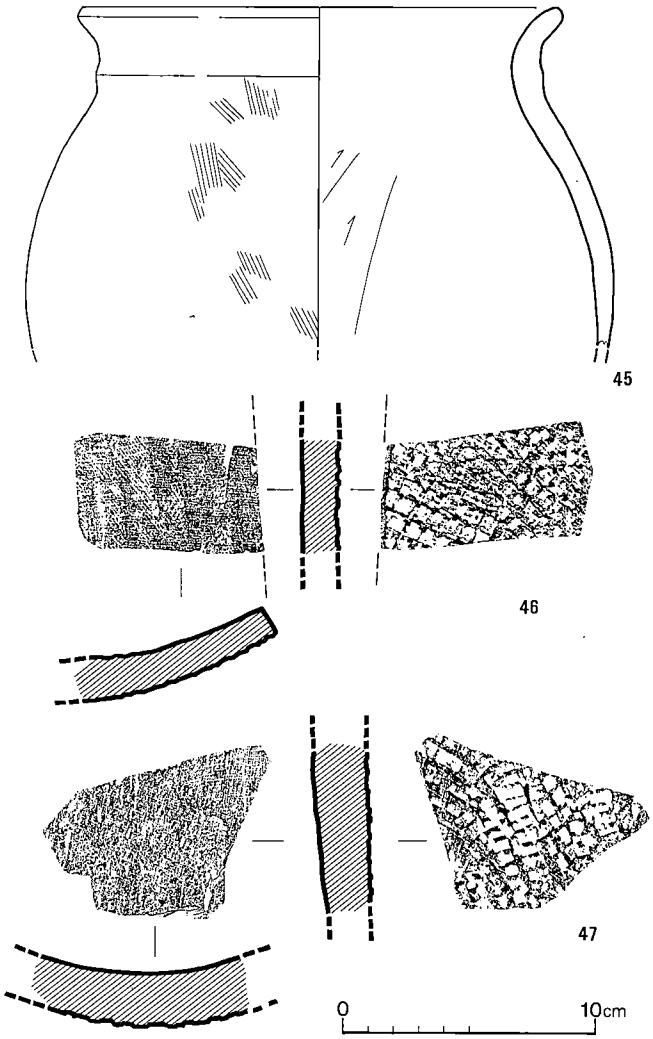


第382図　包含層出土土器等実測図（その３）(1/3)

cmで，胴部外面には細かいカキ目を施す。他は横ナデで，口頸部内面は灰かぶりしている。13は，口径33cmで，胴部外面にはカキ目，内面には青海波が施されている。14は口縁下に2条の太い沈線を平行させ，その下にヘラ描き1本線による波状文を2段に巡らしている。内面は灰かぶりがみられる。15の外面は灰かぶりで不明瞭だが，条蓆状叩きの上を横ナデしているようで，内面には青海波が施されている。20は，外面に条蓆状叩きを縦位に行い，内面には青海波が粗く施されている。

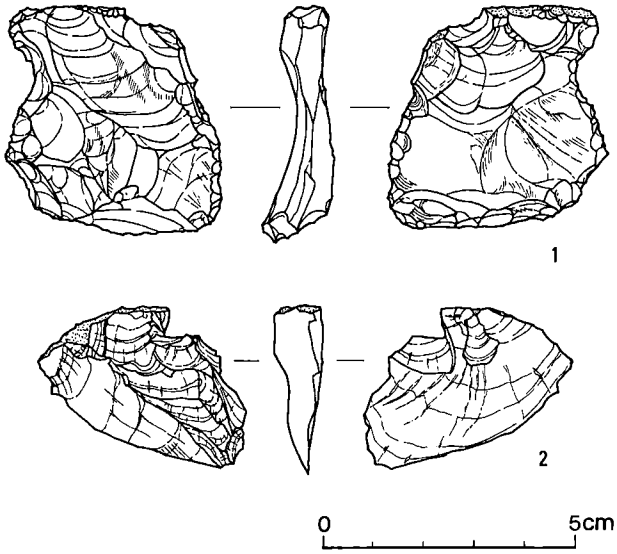
土師器（16～19・21～41・45）　16は高杯脚部片で，外面は縦方向ヘラ削りが施される。17は口径13.1cm，器高4cmの杯で，体部中位以下は内外面ともに手持ちのヘラ削りが施されている。18は口径10cmの小型品で，内外面ともに磨滅している。19は須恵器模倣の大口径の皿で，口径19.8cm，器高1.8cmを測る。体部が中途から更に大きく開く類で，底外面には回転方向のヘラ切り痕が残る。体部外面下端は横ナデを施す。21は内湾して立ち上がる椀で，深い器形となる。22は，体部下位で屈折して，不安定な丸底状となる杯で，体部外面下半は手持ちヘラ削りがみられる。23は浅い皿形となるが内外面磨滅しており，詳細は不明である。24は深い椀形，或いは須恵器模倣の杯となるかと思われる。

25～32・36は，小甕或いは小型の鉢となるものである。25は薄手の胴の張る鉢か小甕となる類で，内面はヘラ削りと思われる。26は，口径14.5cm，器高15.5cmほどとなる小甕で，全体に



第383図　包含層出土土器等実測図（その4）(1/3)

薄手で胴がゆるく張る類となる。胴部下位は内外面ともナデている。27は，口径13.1cmで，薄手の胴が張らないものとなろう。外面は磨滅している。28は，口径14.2cmで，張らない胴部に短かく外に折れる口縁を付ける。外面は磨滅している。29も張らない胴をもつ小甕か小型鉢になりそうで，頸内面に稜をつくる。30は，鉢もしくは甑口縁となるかもしれない。内外面磨滅して調整不明。31・32は小甕で，口径はそれぞれ12cm，14cmとなる。36も張らない胴部をもつ小甕となる。



第384図　包含層出土石器実測図（2/3）

33～35・38～41・45は甕である。33は頸内面に稜をつくり外反する口縁となる。34・35は，ゆるやかに屈曲して開く口縁である。38は，口径21cm，胴部最大径27.1cmを測る。外面には煤が付着する。39は口径20cmを測る。40は口径19.3cm，胴部最大径24.3cmを測る。底部外面には黒斑部がみられる。38～40はいずれも頸部内側に稜をつくり，強く胴が張るタイプで，7世紀代から8世紀初頭ごろまでの特徴を示している。41は胴がゆるやかに張る程度で，口縁も長くは伸びない。45は頸部がやや肥厚はするが，内側に稜をつくらず，口縁もゆるやかに外傾する程度となる。胴部は，頸部直下の肩で張ることは無く，中位で丸くふくらみ，おそらく長胴化せずに球形胴に近いタイプとなろう。7世紀初頭乃至6世紀末まで上ると考えられる。口径19.3cm，胴部最大径23.3cmを測る。

37は甑の底部片で，内面はヘラ削り，下端面から外面下縁は横ナデで仕上げている。

瓦（42・46・47）42は平瓦片で，凸面は正格子の叩きを施している。46は薄手の平瓦で，凸面は正格子の叩き，凹面は布目の上を縦方向ヘラ削りで布目を縞状に半分以上消している。側面はヘラ切りが行われている。47は，やや厚手の平瓦で，凸面には正格子叩きを斜位に施す。凹面は布目の上を指縦ナデで半分ほど消している，。

砥　石（43・44）43は砂岩製の粗砥で，表裏面とも右側面の3面が使用されている。図中の網をかけた部分には二次火熱痕がみられる。44は，携帯用仕上げ砥で，4面とも使用するが，とてもよく使用しており，大きく磨り減っている。（中間）

Ⅳ　各　　論

A　集落の構造と変遷

本書で報告してきた薬師堂東遺跡の古代遺構について，７～８世紀の集落内部での変遷状況を追ってみたい。更に，本書頭初において便宜的に線引きした，住居群を主眼としたグルーピングの内容深化と，それを基にしたこの集落の構造について分析を試みることとする。

集落の変遷（第385図）

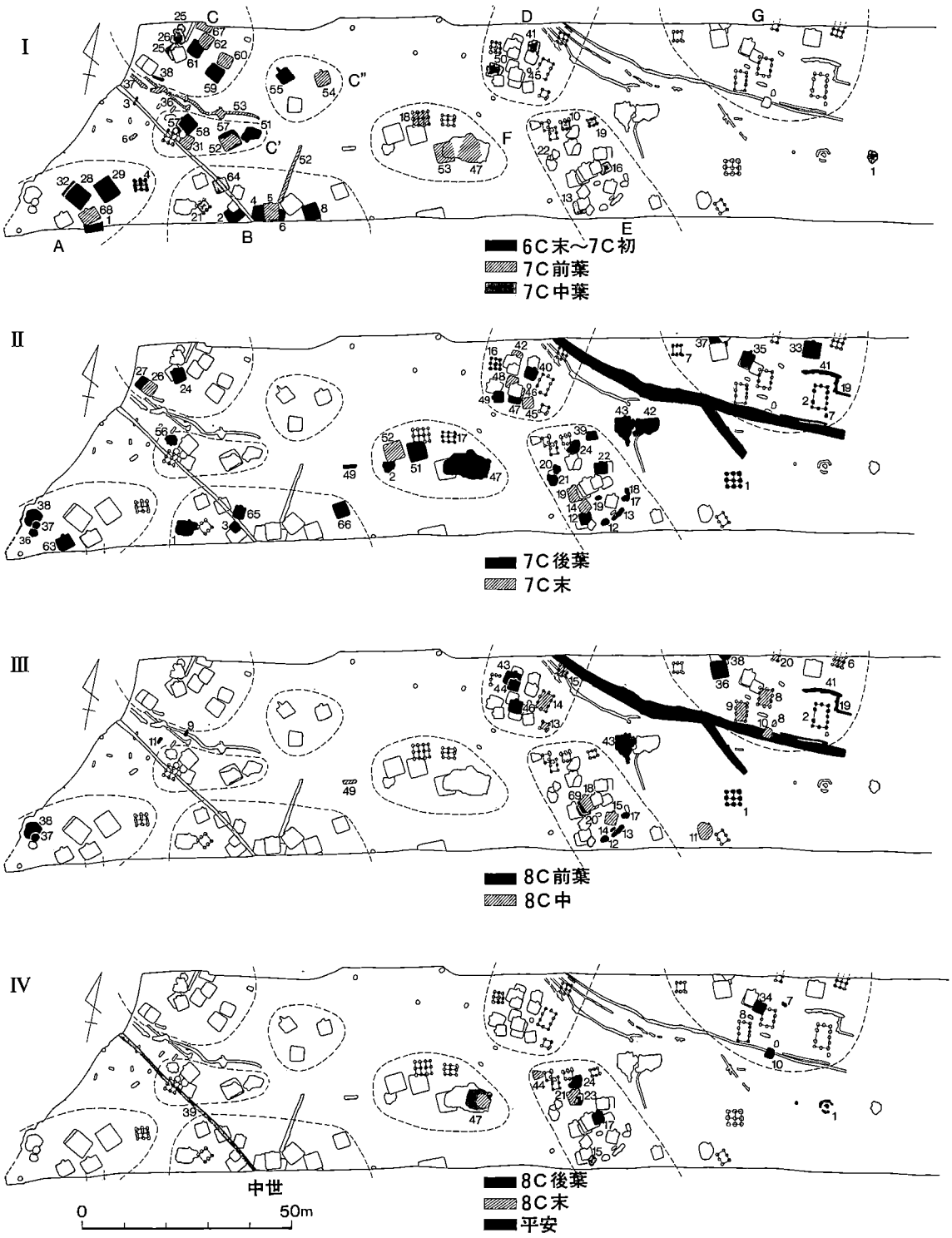
ここではまず，本遺跡で明らかになった住居群をはじめとする各遺構群全部を,「ひとつの集落」として把えておきたい。これは，地形的にも別々の集落として分ける要素も無く，人工的な大規模な溝や，配置上の明確な分離状況も認められないからである。また，各住居支群に分けたが，それらは，全くそれぞれに発生・発展したという状況ではなく，全体が常に関連しながら変遷過程をたどったことが判かるからでもある。ということから，ひとつの大きな集落の中の何分の一かが今回の調査で明らかになったにすぎないのだという認識を強調しておきたい。

本遺跡の竪穴式住居は，６世紀末から，途中で切れることなく，８世紀末まで連続して営まれている。大まかに４時期に分けて図示した。Ⅰ～Ⅳ期は各々約50年ずつの幅があり，それだけでは細かい点を明らかにし得ない為に，更にそれらの内部を２～３時期に細分して表わしてみた。以下，各時期毎に各遺構の変遷をたどってみたい。

Ⅰ期（６世紀末～７世紀中葉）　この時期には住居の大半が西寄りに営まれている。まず，６世紀末～７世紀初頭期にこの集落が誕生する。Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｃ′・Ｃ″の各住居群にそれぞれ１～３軒ずつ，計９軒が，西寄り部分に集中する状態である。次に，７世紀前葉期になると，更に東のＦ群にまでその範囲が拡がり，大よその集落の格好がついてくる。即ち，Ａ～Ｃ″の住居は前代のすぐ近くに建て替えられて存続し，新たに出現したＦ群は，大型住居と総柱の大型倉庫棟と，第47号土壙東半の大型土壙とがセットになるという特殊な状況を示す。また，この時期には，Ｃ群とＣ′群の間を区切る溝と，Ｂ群中央から北へ走る溝が掘削され，各支群間の区画的意味あいが示されたものと考えられる。また，Ｃ′群の西側は墓が営まれ始めたこともこの時期の特徴である。これ以降，谷に面したこのあたりが墓地として認識されてきて，住居等の遺構は作られない。次の７世紀中葉になると，集落は更に東へ拡がり，Ｄ・Ｅ群に住居が営まれるようになる。Ｄ・Ｅ群の住居は各２軒ずつで，Ｅ群では更に２棟の小規模な倉庫が建て

られる。D・E群でのこの時期の住居は，カマドの方向が，まだばらばらで，一定していない。A～C″とF群では図中にこの時期の住居が無い群もみられるが，前代の7世紀前葉期の住居が継続するのか，或いはA・C群では調査範囲外に存在するものと思われる。また，西端の墓地も継続して使用されている。また，この時期で特筆すべきは，集落の東端よりももっとはずれた東側に，井戸が掘削されたことである。これは，D・E群が東側へ進出してきて，西側の谷の湧水地から遠くなったせいであろうか，確かにD・E群にとっては，谷の方へ行くよりも，新しく掘ったこの第1号井戸の方が近いのである。以上の第Ⅰ期の状況は，集落誕生と，東側への拡大化の過程であり，そこには人口の自然増と，他集落からの移住ということもあったと考えられる。

Ⅱ期（7世紀後葉～末）　前代までの東側への集落拡大傾向は，この時期になって最大となる。7世紀後葉期は，新たに東端地区にG住居群が作られ，本集落が最大の規模を誇ることになる。住居軒数も総数16軒と，多くなり，Ⅰ期が平均8軒前後であるのに比較しても，2倍近くの人口増となっていることがわかる。これは，C′・C″群は別としても，他は，2～3軒ずつ万遍無く各群に存続している。この時期の最大の特色は，D群からG群南辺に走る道路が設けられたことであろう。そして，本遺跡で最もしっかりした倉である第1号掘立柱建物が建てられ，それに通じる枝道も設けられる。或いは，後の道路状遺構の論中で詳述する如く，この倉が建てられた為に，この道路が設けられたのかもしれない。いずれにしろ，この両者の在り方は本集落の存在意義をも示す可能性がある。更に，この時期には，G群中に掘立柱の住居が営まれる。これは，北側と北東側に，建物に沿った溝を設けており，この住居の専有範囲を示すものと考えられる。また，この時期の井戸は集落のほぼ中央のF群中に設けられる。更に，大きな土壙が各所に見受けられる。即ち，西端の第36～38号土壙，本遺跡最多の土器量を誇る第1号土壙，集落中央の巨大な第47号土壙，E群西側の第20・21号土壙，同じく東北側の第42・43号土壙などである。これらはいずれも大規模で，大量の土器一括投棄がみられることも共通する。また，住居の主軸方向も，前代のものに合わせて，各住居群毎に独自の方向を守るようになる。この傾向は，8世紀末まで，即ちこの集落の少くとも調査範囲内での終焉の時期まで保持されている。これは，竪穴式住居の方向が，単に時間的変化や，その時々の気ままな意志によって左右されているのではなく，最小居住集団の中で，伝統的に守られたものであることを示している。次の7世紀末の時期は，この集落に何が起ったのだろうと思わせるが如き，一大変革の時期である。即ち，前代をピークとして，全体的に衰退化現象が始まると考えてよい。前代では各住居群にわりと万遍なく住居があったのに，この時期になると，A～Cの西側の住居群で，かなりまばらな状況となってくる。A・B両群では，より南方へ移動した可能性もあるが，これら西半分側では遺物量も明らかに僅少であり，衰退化していったことは間違いなかろう。第36～38号土壙や，第1号土壙の前代の土器の大量一括投棄が，西半集団の移動を物語るのではなか



第385図　薬師堂東遺跡集落変遷図（1/1,800）

かろうか。それも，土器を持ち運べない程の遠くへ，しかも自らの意志ではなく強制的に，移住させられたと想像することもできる。以上のような西半部の状況に対して，東半部はまだ健在で，D・E・F群には従来程度の住居が営まれている。G群には明らかなこの時期の遺構がみられないが，まだ後代まで続いているので，調査範囲外の北側に存在する可能性が強い。幹線道路も存続していたと思われる。

Ⅲ期（8世紀初～中葉）　この時期は，最大のピークをむかえ，更に西半部が衰退し始めた後の，完全に集落の中心が東半部に移ってしまった状態をむかえた時期である。かつて村の中心であった西半部は，今や家一軒無い閑地となってしまったのである。8世紀初～前葉期には，B・C・F群には遺構が無くなり，ただA群西端の土壙が再び使用されているだけとなる。集落の中央を占めていたF群の大住居も無くなる。東半部ではD・E・G群ともに，前代程度の住居数が存在している。そして，幹線道路もこの時期まで，維持されていたと考えられる。また，G群西南端の掘立柱の住居や，重要な倉である第1号掘立柱建物も，この頃まで存続していたものと推定される。大土壙の1つである第43号土壙や，E群南辺の土壙群も再使用されている。以上のことから，集落の西半は閑散となったとは言え，東半部はまだ従来の機能を充分に保っていた時期であるといえる。次の8世紀中葉ごろになると，東半部の集落の様相も大きく変わる。即ち，幹線道路が無くなり，中央北側のD群では竪穴式住居が消えて，倉庫と物置きを備えた掘立柱の住居ができる。G群でも，同様に掘立柱の住居が立ち並ぶ。中央南側のE群では，相変らず竪穴式住居が継続している。また，前代まで続いて使用されていた西端の墓地も，もうこの頃には顧られなくなっている。大きな土壙も，E群東の第11号土壙を除いては，新たに掘削されることもない。D群にみられる第13～15号掘立柱建物は，時期が出土遺物からみて皆目分からなかった。ただ，これらが主軸方位を同じくして，一連のものであると考えて，第15号建物が道路状遺構を切っていることから，この時期と推定した。これらは竪穴式住居から平地住居への変換の時期を示しているものと考えられる。一部に竪穴式住居が平安期にまで残るとしても，大勢的には，この8世紀中葉前後に，この地方では平地住居への転換が進んだものと理解しておきたい。

Ⅳ期（8世紀後葉～9世紀）　この時期は，一部に細々と竪穴住居が存続するものの，調査範囲内を見る限り，既にかつての大集落の面影はみじんも無い状況である。集落の中心が大きく移動してしまった後の，集落のはずれあたりの状態を示している。厳密に言えば，平安期に入る住居そのものはみられず，土壙・墓等の存在で集落の一端であるという推定をしたに過ぎない。8世紀後葉期になると，E群で1軒，G群で1軒の竪穴式住居が営まれるが，いずれも小型で，主柱穴のみられないタイプである。通常の日常生活の起居する場としては，このような住居は不適当と思われ，やはり，村はずれの特殊な性格の施設と考えられる。土壙も，それぞれに1つずつみられる。掘立柱建物も明確なものが無く，全体に閑散とした状況とはなるが，

遺物もこの東半では若干各遺構に混入してみられ，東半部には生活臭が残っている状況である。ただ，集落の中心が既にここには無いということは，事実上，この時期までで機能変化によるこの集落の終焉をむかえたと言ってよかろう。次の8世紀末葉期になると，更にその状況は進む。即ち，前代まで存続していたG群が，全くその居住地としての機能を失い，そこには墓が営まれるようになる。E住居群では1軒の竪穴式住居が存続し，土壙も作られている。更に，この頃に，かつてのF群中の巨大土壙であった第47号土壙内に井戸が掘られている。このことは，7世紀中葉から存続してきたE群の子孫が，衰退化した前代までの集落状況から脱皮して，再びこの地に新たな生活意欲を持って定住したことを示すものであろう。そして，この1軒だけではなく，E群の南側にもこの時期の住居が存在するものと考えられる。G群あたりの墓地化は，その南側の埋甕・円形周溝墓をも含めて，この後まで継続される。そしてその利用者は，やはり，E群の住民だったであろう。次の平安初期に入ると，住居こそみられないが，E群で土壙2基がみられ，F群中の井戸埋没土中にこの期の土器がいくらか在ることから，南側近辺に居住地があったものと考えられる。東端の墓地はこの期まで利用されている。この時期をもって，この集落は消えてしまう。あとは，はるか後世の14世紀に溝1本が掘削されるまで，生活の形跡は無い。

以上，本遺跡の集落の変遷を概観してきたが，ここで，その過程における，幾つかの問題点を提議してみたい。

集落の誕生　6世紀末ごろに，西端の谷寄りの部分に竪穴住居が営まれ始める。これ以前の周辺の状況をみると，西側の薬師堂台地遺跡(註1)では弥生中～後期の小規模な集団の居住があり，古墳時代初頭にも集落が形成されている。しかし，その後は,6世紀後葉期に至るまでは空白である。また，現在の井上の集落北側の北内原遺跡(註2)では，6～7世紀の住居がみられる。このように，近辺では6世紀後葉以後の新たな集落の形成が認められる。それでは，この期の集落誕生の契機は，如何なる理由によるのであろうか。本遺跡や，上記の周辺のこの期の集落は，低位段丘上に占地しており，農業生産用水の確保は困難である。近年まで，畑地灌漑の井戸が各所に設けられる程である。ただ，一歩段丘を下ると，そこは沖積平野や，複雑に入り組んだ開析谷の湿地である。これらは水田耕作には良好な自然条件を備えている。更に生活用水の確保にも便利である。このようなことから，段丘下の，沖積微高地に営まれていた生活居住地が，可耕地として見直されたことに，段丘上への集落移住がなされた一原因があると考えられる。これは，中央集権化を図ろうとする各種の施策が，農民層の把握・農業基盤としての田畑の開発・整理を計った時期と推測されるからである。条里制の前段階である地割り事業の一環であったと推定するのは年代的に無理があるとしても，やはり同様な意図のもとに，穀倉地帯であるこの地域において，中央権力の波及の結果として，沖積平野の開発が進められたものと考えられる。その影響をこうむって，恐らく半ば強制的な移住が行われたと推定されるの

である。

集落の盛期　7世紀後葉代にこの集落では最大のピークを示している。各住居群にも万遍なく住居が営まれ，人口も最大であったと考えられる。この増大期以降，急激に衰退化をたどる。またこの時期には，特殊な施工法による幹線道路も設置される。このような，急激な大集落化と，その後の衰退化は一体何を物語るものであろうか。B住居群西端の第1号土壙からは，本遺跡で最多の遺物が出土した。その土壙底においては，行基丸瓦が完形品を入れて5個体出土した。また最上層からは単弁六葉の軒丸瓦が出土した。この土壙から出土した土器類は極めて多量であるが，8世紀代に降るものは皆無で，これらの瓦が7世紀後葉代のものであることは疑い無い。即ち井上廃寺創建の時期を示すものと考えられる。九州でも最古段階の瓦を使用する壮大な建物の建築にあたり，大がかりな資材の調達・作業人員の確保が計られたことであろう。このうち，労働力の確保には，近在の集落からの動員だけでは不充分で，この建設事業のための移住も行われたのではなかろうか。それが，本集落の最大のピーク時の様相を物語っているのではないかと推定される。それは，瓦片がかなりの量，この遺跡に持ち込まれている状況からも，井上廃寺との関連が強い集落であったと考えられるからでもある。因みに，西側の薬師堂遺跡では，谷部では多量の瓦が出土したが，台地の集落部分からは，ずっと井上廃寺に近いにも関らず，本遺跡出土量よりぐっと少量の瓦しか出土していない。単なる後世の持ち込みではなく，当時，生焼け類等の不良品を何らかの理由で，各自の居住地へ持ち帰ったものと考えられる。残念乍ら瓦窯の所在がつかめていないが，それに携わる工人も中には居住していたのかもしれない。いずれにしろ，本遺跡集落の7世紀後葉代の盛期状況は，井上廃寺創建に関わるものであると考えられる。そして，その後の急激な衰退ぶりは，大事業が一段落したことを示し，後には維持管理に必要な人員のみを残して，単に経済基盤を荷負う集落と化していったと思われる。そして，更に平安期におけるこの集落の終焉は，井上廃寺自体の衰退と期を同じくする故ではなかろうか。

集落の構造

ここでは，集落の構成要素としての各種遺構を概観し，それらの中の問題点を指摘してみたい。更に，集落構成上の諸問題をとり上げて検討することとしたい。

竪穴式住居　本文中の各住居の説明の中や，一覧表において，平面形とその規模から，いくつかのタイプに分類呼称した。それらについての時期的特徴がみられるので，若干記述しておきたい。まず，中型の正方形に近い方形住居は，各時期にみられる。普遍的なタイプと言えよう。次に，大型住居については，7世紀代の中でおさまり，8世紀代にはみられない。縦長方形のものは小型のものも含めて，7世紀後葉までで8世紀代にはみられない。しかも6世紀末～7世紀初頭の時期に多い。横長の住居では，普通の大きさのものは6世紀末～7世紀初頭に集中

しており，古い様相と考えられる。これに対して，小型の横長方形のものは７世紀後葉に集中する。正方形に近い平面形の小型・特小型のものは，二種類に分けられる。即ち，小型方形ながら４主柱をきちんと有するものは７世紀初頭前後に集中し，古い様相と考えられる。これに対して，主柱穴を持たないか，２本のみの変則的な小型方形住居は，７世紀後葉以降８世紀いっぱいまでみられ，新しい様相と思われる。カマドについては，Ａ・Ｂ・Ｃ類に分類した。Ａ類は壁ライン外方へ掘り込まないもの，Ｂ類は掘り込むもの，Ｃ類はＢ類のうちで煙道が長く延びるものである。これを時期別に見てみると，Ａ類は７世紀中葉までに６例みられ，さらに８世紀前葉期に１例みられる。このことから，大まかに言って，Ａ類は古い様相と考えられる。次にＢ類は，全期にわたってみられ，古い時期にも多く，一概に新しい様相とは言えず，普遍的なものと考えられる。次にＣ類は類例が少なくて，確実な検討はできないが，古い時期に１例，７世紀後葉代に３例，８世紀後葉代に１例みられる。本遺跡例で見る限り，時期的特徴は認められない。住居の主軸方位及びカマドの設置位置については，時期的変遷を示しておらず，むしろ，その所属住居群内における方向規制が継続して守られている。カマドの方向は，全体としては，圧倒的に北西・北が多く，他は南・北東が各１例ずつ在るのみである。これは気象条件を考慮したものであろう。竪穴式住居の存続時間については，第17～20・69号住居の５回の切り合い状況が参考となる。即ち，７世紀末から８世紀後葉までの間に５軒の家が建て替えられたわけで，単純計算すると，１軒が17～18年しか続かなかったということになる。今回本書で用いた土器編年観における１型式分とほぼ一致する時間である。また，小郡市向築地遺跡（註3）でも，７世紀後葉から８世紀後葉までに５軒の住居が重複しており，平均20年の存続期間が推定されている。また，甘木市塔ノ上遺跡（註４）では，「８世紀中葉のやや古い頃」から50～60年の間に７回の建て替えがみられ，ほぼ７～８年がその期間と単純計算される。ただ，報告者は他の諸検討から，「多くはやはり10年前後は存続」していたものと考えている。住居毎に個々の事情はあろうが，少くとも竪穴式住居の耐用年数は，以上の検討から，20年を越えることはあるまいと考えられる。

掘立柱建物　まず，出土遺物が少なくて年代決定に困難をきたしたことが，この遺構の最大の特徴である。また，通常行われることの多い主軸方位の類似性で判断する方法も，ここでは単純には当てはまらないようでもあった。主軸方位から大まかに眺めてみると，やや西に振るものは，下限を７世紀後葉代とする古い時期のものが多く，真北に近いものや，わずかに西に振れるものは，上限を７世紀後葉代とするものが多いようである。もっとはっきり言えることは，所属する各住居群の竪穴住居の方向に近似しているということである。これはある程度時期を越えた方向規制と考えられる。建物の種類としては大きく２類に分けられる。２×２間総柱の倉庫棟が７棟みられ，各住居群に散らばっている。また１×２間の小規模な建物も６棟みられ，かなり普遍的である。これは全体が正方形に近いものも多く，小規模な倉庫或いは高倉的なも

のと思われる。これらに対して，南北に長い住居棟と考えられるものが，D・G群中にみられる。これは時期的変遷の項で述べた通り，8世紀前葉以降の段階になって，竪穴式住居からの転換の現象を示すものと考えられる。柱間距離は，4～9尺と，各種あるが，5尺乃至6尺を用いるものが多い。推定使用尺は，30.0cmを中心とするものが圧倒的に多いが，中には29.5cm前後と考えられるものもあり，また31cm弱を考えねばならぬものもみられ，それらの差は，時代的差・主軸方向における差・建物の種類による差のいずれとも関連していない。

土壙　多数の土壙が検出されたが，それらは多量の遺物を有するものも多く，単なるごみ捨場としての価値以上に，当時の集落の盛衰をも物語る重要な手だてとなった。しかし，やはり，我々はあくまでもごみ捨場であるという認識に立たなければ誤ちをおこすことになる。特に一括遺物という認定は，土壙においては難しい。また，竪穴住居も格好のごみ捨場である。第57号住居跡を掘り直して第52号土壙が使用されるが如きは，その最たる例である。ごみ捨場は掘り直される。たびたび掘り直される。これは，旧状のままにきちんと掘り直すのではなく，その都度必要に応じて掘られる。拡大を伴った掘り直しの結果として巨大な1基の土壙の如くみえることもある。第47号土壙がそのよい例である。そして本遺跡例では，各住居群に対して一定の決まった場所が，ごみ捨場としてきちんと認識されていたことが判かった。まさに，ごみ捨場は考古学の宝庫である。

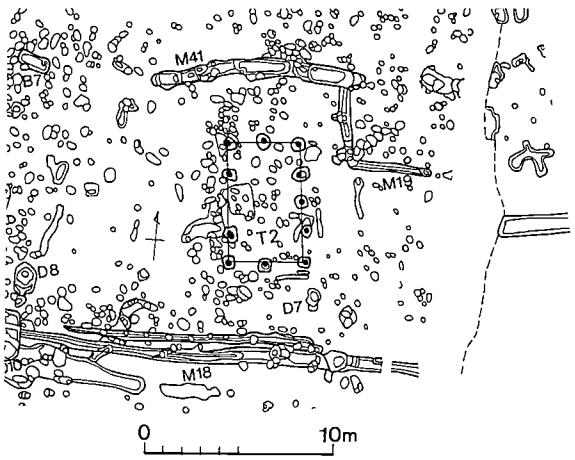
住居の単位　ここでは，集落の構造の基礎となる，構成状況を探ってみたい。まず，本書頭初に区分した住居群のグルーピングに従ってみてみよう。集落の大きいⅠ・Ⅱ期についてみても，1グループあたりの竪穴式住居の同時存在は，多くても3軒，通常は2軒である。これは，各時期にわたって変らず，これが集団構成の最小単位であると判断する。即ち，2軒分で大人が4～5名で子供も入れて10名前後の家族そのものの集団であったと考えられる。それらが小さな倉を各自所有して蓄えを計っていた訳である。

人口　これらのことから，この集落の人口を推定してみると，Ⅰ期の7世紀中頃までの間を平均8軒として40人，Ⅱ期の最盛期の7世紀後葉が16軒で80人，それ以降30人前後から次第に減少する。調査した範囲が本来の集落からみて，仮りに1/3だとしたら，この3倍の人口となる計算で，最盛期には250人弱の人口を擁していたことになる。

F住居群の存在　本遺跡の中央に位置するF群は，大型住居と，大型倉庫棟，大型土壙とで構成される特異な存在である。これらは7世紀前葉期から，7世紀末まで連続して存在していたと考えられるが，それも1軒ずつで，大型倉庫棟と対になっていたものと推定される。7世紀末頃とされる第52号住居は，主柱穴を持たず，カマドの存在も疑問で，出土遺物も殆んど無いという特殊な状況を示している。また，井戸もこの群中にみられる。第18号建物は，総柱では最大の建物で，個人的な通常の家族私有のものとは考え難い。以上のことから，このF群は，北側に広場をひかえる共同の集会場的な性格を持っているのではないかと考える。この集落の

中央に位置し，或いは集落の長(おさ)的な管理者が住んでいたのかもしれない。もしそうであったとしても，階層差の結果ではなく，自然発生的な性格を有したであろう。これが７世紀末を最期に途絶えるのは，恐らく，次項で述べるＧ群の台頭の故であろう。

Ｇ住居群の役割り　本遺跡の東端に位置するＧ住居群は，この集落の最も新しい一群の人々で構成される。それは，７世紀後葉代になって幹線道路が出来，しっかりした倉が立って，全村が井上廃寺創建で活気立つ時期である。その当初からＧ群内には溝で区画されて雨落ち溝を持つ掘立柱の住居が構えられる。かなり平地住居化が進む８世紀中頃にずっと先立って，既に７世紀後葉にこのような新奇な住居を構えた人間は，従来から土着の通常農民では無かろう。恐らく，井上廃寺創建事業に関連して移住してきた，新たな管理者であろう。そして当初は，第１号掘立柱建物の倉に関連する役割を負っていたのではなかろうか。そして道路の建設も行い，自分の居宅までの道を延長させたのではないだろうか。そうでなければ，この道がここで途切れる理由が全く見当らないのである。こうして，後になると，集落全体を掌握して，８世紀になると，共同施設的な村のみんなのものであったＦ群が，Ｇ群権力の下に吸収されて消滅してしまったものと想像される。このようにしてＧ群は土着化するが，井上廃寺の衰退とともに没落したのか，移住して行ったものと思われ，８世紀末になると，かつての栄華の跡は，今や寂しい墓地と化してしまったのである。



第386図　溝に囲まれた平地住居（1/400）
（Ｇ群第２号掘立柱建物）

小型住居　本遺跡では10㎡前後の小型住居が12軒，更にそれよりも小さな規模のものが５軒みられ，最小のものは6.6㎡しかない。これらのものは，カマドを設けていなかったり，４主柱穴を持たない変則的なものが殆んどである。それらは通常の日常生活には適さないものも多い。ただ，その配置からみると，各住居群或いは集落全体から特別に離れているものは無く，むしろ，住居群中央付近に位置するものも多い。これらの中で，紡錘車を持つ住居が３軒ある。第12・17・27号住居がそれで，いずれも小型住居の部類に入り，主柱穴が全く無いか，２柱のみで，他の２柱はカマドと反対側の壁沿いにある変則的なものである。第17号住居では２点も出土している。この紡錘車と，変則的な小型住居のセットは，女性用の作業場を連想させる。未婚青年男子が共同生活をする青年宿に対して，民俗例でも確かめられている『娘宿』の可能性を提議しておこう。また，特小型住居に対しては，カマド小屋と称されることもあるが，ここ

ではカマドを持たないものの方が多く，一概には判断し難い。　（中間）

註１）　福岡県教育委員会が昭和59・60年度に発掘調査を行った。その東側の谷，即ち本遺跡との間の谷部の調査は既報告である。
福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』10　1987

註２）　小郡市教育委員会『井上北内原遺跡』小郡市文化財調査報告書　第20集　1984

註３）　副島邦弘『向築地遺跡』小郡市教育委員会　1978

註４）　伊崎俊秋他『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』9　福岡県教育委員会　1987

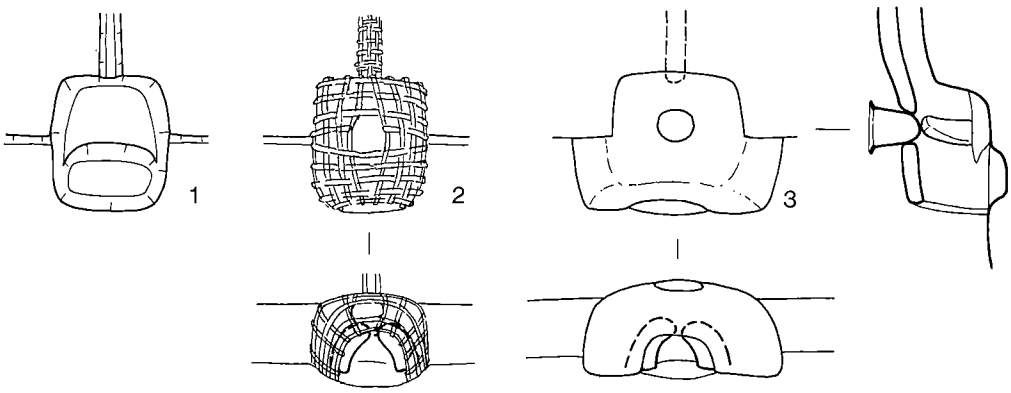
追補）カマド内小杭痕について

薬師堂東遺跡において第48～50号住居跡のカマド内で検出した小杭痕は，これらのカマドと無関係に存在するとは考え難い。では，如何なる理由により存在するものか，その実証には現段階の資料ではほど遠い。しかし，以下カマドと検出した小杭痕の関係について若干の試論をおこなう。(第387図参照)

カマドは本質的には土で築かれるもので，左右の袖から架けられるドーム状の天井は，単に粘土を築きあげるだけで高架できるものではないであろう。

カマド構築の作業過程として第１段階は，住居の掘開とともに火床や煙道を穿つ。次に第２段階として「ワク」が焚口から煙出口へかけてアーチ状に骨組みされる。この際の使用材は，弾性をもつ小枝や竹等が考えられる。次に，成形段階として「ワク」の両脇に袖部を築き，天井部に粘土を張り，カマドを形成する。以上のようにカマド構築作業を想定した。

つまり，今回検出した小杭痕は第２段階の「ワク」との関係を有するものである。小杭痕自体が「ワク」か，または「ワク」を固定する杭跡と考えられる。今回の調査例は，その数が僅か



第387図　カマド築造序模式図（谷旬氏「古代東国のカマド」を基本として）

であることや，その配列に規則性も見られない点から，これらの杭跡は後者の「ワク」の固定やアーチ状の形状を保つ支えと考えられる。

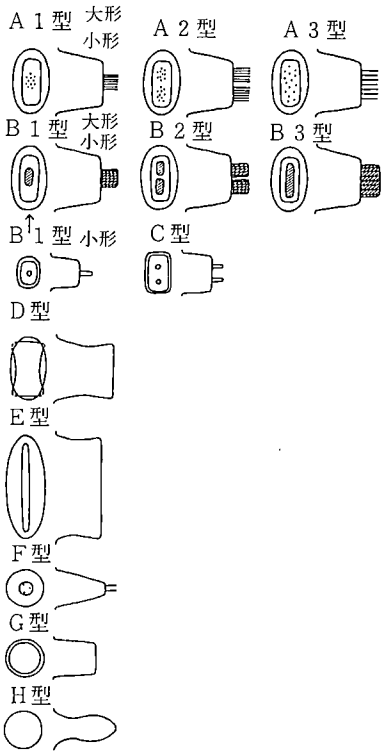
今回，偶然にもカマド内より小杭痕を検出できた。しかし，前述のごとく数も僅かで，検出状況も散在しており，その実体に迫ることは出来なかった。しかし，今後資料の充実を図りその核心に迫りたい。

(平嶋)

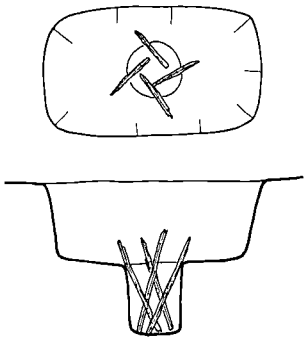
B　落し穴状遺構

県内における落し穴状遺構の発見例は年々その数を増している。当薬師堂東遺跡においても小穴を有する11基と小穴を有さない１基を検出した。

落し穴状遺構の種類　落し穴の分類についてはすでに今村啓爾氏により詳細におこなわれている(註１)。それによると薬師堂東遺跡の落し穴状遺構は，そのほとんどがＢ１型の小形のものとなる(註２)。また，第11号落し穴状遺構の小穴内で検出した棒状痕の状況もＢ１型に一致している。しかし，若干棒状痕の状況が異なり，４本ともに垂直に立つものではなく，若干の傾斜をもち小穴を中心に擬螺旋状に開いている(第389図)。これは，明らかに上から落下してくる獲物に対して方向を違えており，殺傷力が弱いことを表している。すなわち，致命傷を与えることを目的とせず，傷を負わせて落ちた動物が穴から跳び上ることや，またその他の脱出行動をとらせないためのものであろう。県内における落し穴の類別はすでに小田和利氏によりおこなわれ(註３)，今村氏の分類のＢ１型，Ｂ２型かもしくはＣ型，Ｆ型となるものであろう。薬師堂東遺跡と同じく県内においてもその大半をＢ１型が占めている。また，そのほとんどが120～130cmの小型のものである。次に，全国的に概観してみると，北海道や東北北部においては，狭長なＥ型がその主流を占め，遺跡によってはＡ型やＢ型に類似する落し穴も検出されている。規模も狭長なＥ型を除いてもそのほとんどが150cmを越えるものである。つぎに関東においては，霧ヶ丘遺跡(註４)に代表されるように落し穴の種類は多種に



第388図　落し穴状遺構の分類
(今村啓爾著文献註１より転載)



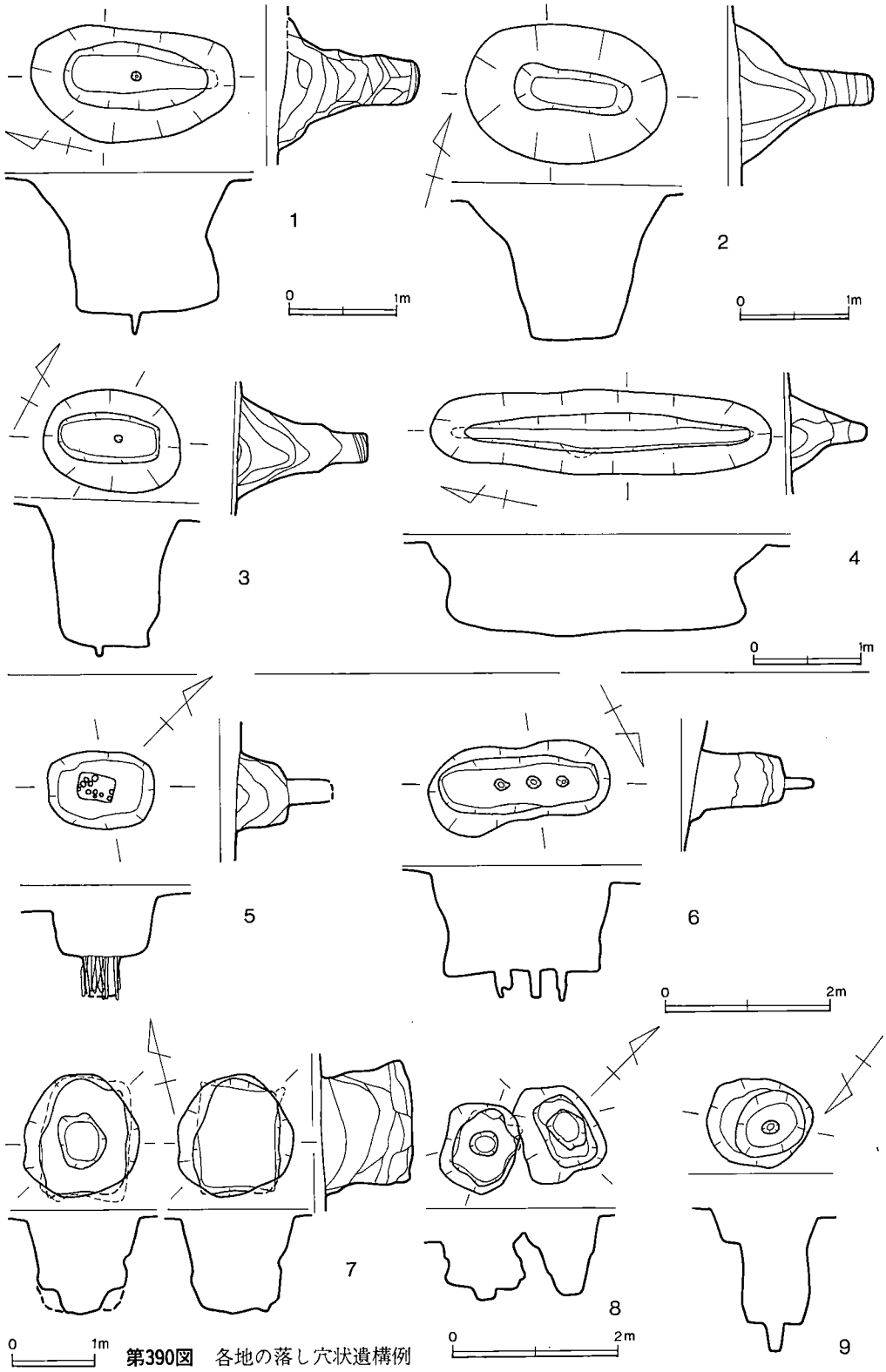
第389図　第11号落し穴状遺構概念図

富む。しかし，その主なものはＡ型やＢ型である。規模的には福岡の類例と等しくやや小型のものである。また，中国地方においては，青木遺跡(註５)が著名であり，Ｂ１型やＦ型が検出され，福岡の例に酷似している。また規模的にも酷似している。以上のように北海道や東北北部においては大形の落し穴であり，南下するにしたがい落し穴が小形化をし，西日本においては小形の落し穴のみとなる。その中間様相を示すのが関東とその周辺部においてである。これは捕獲対象動物が地域により異なっていることを表わすものであり，北海道などにおいては大形獣を主に捕獲対象とし，西日本においては小形獣をその対象としていたものであろう。これについては，落し穴の分類とともに捕獲対象獣の研究の進展が必要となる。そこで認識不足ではあるが可能性として落し穴内の土壌分析＝残存脂肪分析(註６)により捕獲獣の認定はできないであろうか。これは今後筆者の課題としたい。

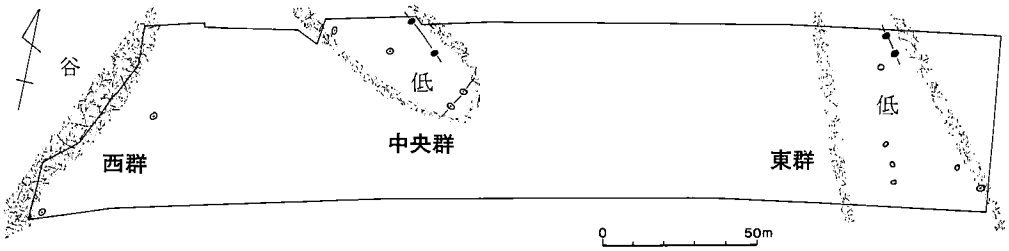
落し穴状遺構の配置　薬師堂東遺跡は低段丘上でほぼ平坦な地である。その中で中央の群と東の群は，平地の若干凹み際に配置されている。これは，平地から進行してくる獣の視覚を避けるためであろう。また，中央群の７号と８号，10号と11号，東群の４号と５号は凹地の稜線に並列し，長軸方位もほぼ等しい。それらの配置が意図的になされたことが窺える。一方，他の遺跡においても，落し穴の興味深い配列が見られる。下原遺跡(註７)では西方に開く形で弧を描く２群と南北に直線的に並列する１群が観られる(第392図)。また，立野遺跡(註８）においては並列し直線的に並ぶ3群と南東方向に開き弧を描く１群が観られる(第393図)。これらの配列は落し穴に動物が自然に落ちるのを待つにしては，その間隔があまりにも広く捕獲の確率が低いことは容易に知れる。しかし落し穴と落し穴の間に灌木や雑木等により障害物を設置すれば，おのずと捕獲の確率は高くなる。さらに今村氏の説(註９)のように巻狩式の追い込みを行うと捕獲の確率はさらに高くなる。以上の３遺跡はともに開けた平地に立地し，獣のテリトリーも周辺部に存在したことが窺える。すなわち，同時に猟場であり巻狩の存在を疑う余地もないであろう。特に下原遺跡や立野遺跡の弧を描いて密集する落し穴は，巻狩の絶好の罠といえる。また，薬師堂東遺跡の落し穴はやや疎に存在するが，凹み地に２基並列に配置されているものも，平地からの追い込み狩の罠とも考えられる。

以上，落し穴について概観してみた。しかし筆者の資料収集が不充分なため，明白に成し得ない点も多く，今後資料の充実を図り考察を加えたい。　(平嶋)

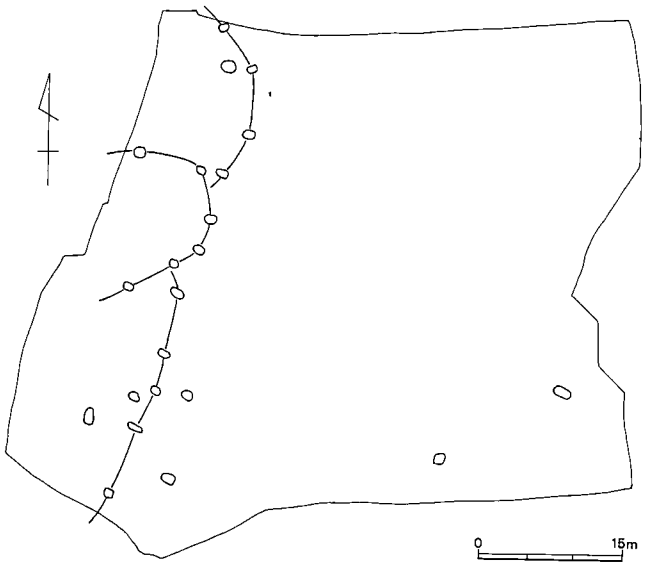
第390図　１．Ｓ267遺跡，２～４．Ｓ268遺跡(以上『札幌市文化財調査報告書XIV』）５．No.182遺跡，６．No.463遺跡(以上『多摩ニュータウン遺跡』昭和60年度）　７．８．帷子峯遺跡(『帷子峯遺跡』）９．青木遺跡Ｄ地区(註５文献)



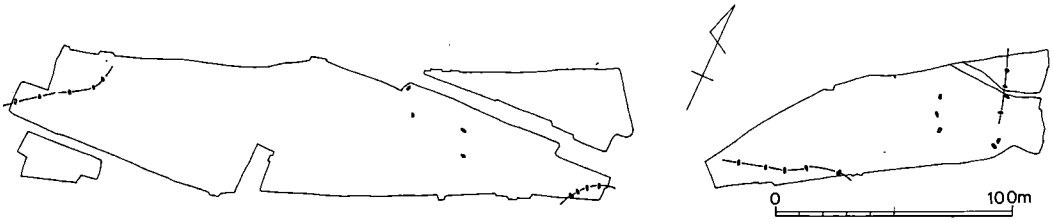
第390図　各地の落し穴状遺構例



第391図　薬師堂東遺跡 落し穴状遺構の群（1/2,500）



第392図　下原遺跡落し穴状遺構の群（1/800）



第393図　立野遺跡落し穴状遺構の群（約1/3,300）

註　1）　今村啓爾「霧ヶ丘遺跡の土壙群に関する考察」『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団 1973

註　2）　今村氏の分類では，第６号落し穴状遺構のようにＢ１型で小穴を有さないものはない 。

註　3）　福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－７－1986

註　4）　註１に同じ

註　5）　青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1976
青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1977
青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1978

註　6）　中野益男「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』No.103 1984

註　7）　福岡県教育委員会「下原遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－2－1983

註　8）　福岡県教育委員会「立野遺跡２」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－5－1984
福岡県教育委員会「立野遺跡３」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－8－1986

註　9）　今村啓爾「陥穴」『縄文文化の研究』2　雄山閣　1983

C　道路状遺構

本遺跡東寄りの北半部にて検出された，道路と推定した遺構について，補足としての若干の検討と，他遺跡における同種遺構との比較を試みることにしたい。

本遺跡の道路状遺構　第18号溝とその南側に平行して走る溝との間，幅が2.0～3.4mで，長さは約90mにおよぶ。東端は，遺構の無い微低地の直前で無くなる。西端は調査範囲外に延びており，どこまで続くか見当がつかない。井上廃寺の方へ続くとすれば，或いは寺院建築資材の礎石に用いた大石や，太い柱材，多量の瓦などを運んだのかもしれない。

また，この幹線とも言うべき東西方向の道路から別れて，枝道とでも称すべき道路状遺構が中央付近から南東方向へ20mほど延びている。この南東端から先のあたりは，本遺跡でも遺構が極めて少ない，というよりも皆無に近い状態の場所で，いわば村はずれに近いあたりと言える所である。ただし，この南側には，本遺跡で最も掘方の大きいしっかりした倉である第１号掘立柱建物が在る。そうすると，この枝道はまさに，この倉へ通じているとしか考えられないのである。この第１号掘立柱建物の周囲は，おもしろい事に，その３m幅の間が，全く小ピットもみられない空閑地となっていることが判かる。（第174図中で点線の範囲）つまり，この倉庫棟の北・西・南側が，各辺の方向に従って，南北11mの間がこの倉のための占有地となっていたことが考えられるのである。或いは，基壇等があったのかもしれない。そうすると，上記の枝道はこの占有地のすぐそこまで通じていることになる。

以上のことから，わざわざ枝道をつけてこの倉への運搬道を設置したということは，この倉が如何に重要視されていたかが察せられるのである。この倉自体の規模は12尺四方で，さほど大きいものでもない。また，この位置からみて，どの住居群にも属しておらず，集落全体の共同管理，或いは，公けの性格を有していたものであったのかもしれない。ということは，集落全体にとって大切なもの，といっても米全部がこの１棟に収まるとは思えないので，出挙のような公けの性格を持つものがこの倉で管理されていた可能性も考えていいだろう。

以上のように，本遺跡の道路状遺構は，単に生活用通路というに留まらず，半ば公道的な性格も考えねばならないと言える。それは，丸太を敷き並べるという，大がかりな共同作業を必要とする事業であることからも推測できる。また，側溝と考えられる第18号溝の北側に沿う第43号溝や，第２号掘立柱建物の南側で第18号溝に沿って検出された溝などの存在から，度々の側溝さらえ以外にも，ある程度の道路拡張をも伴う新たな側溝の掘り直しが幾度か行われたことが判かる。大がかりな整備事業が為されていた訳である。

また，本遺跡の道路状遺構の時期については，既に本文中で検討した如く，７世紀後半代から，８世紀前葉期まで使用されていたと考えられる。そして，８世紀後葉には既に廃絶されていたことが判かっている。

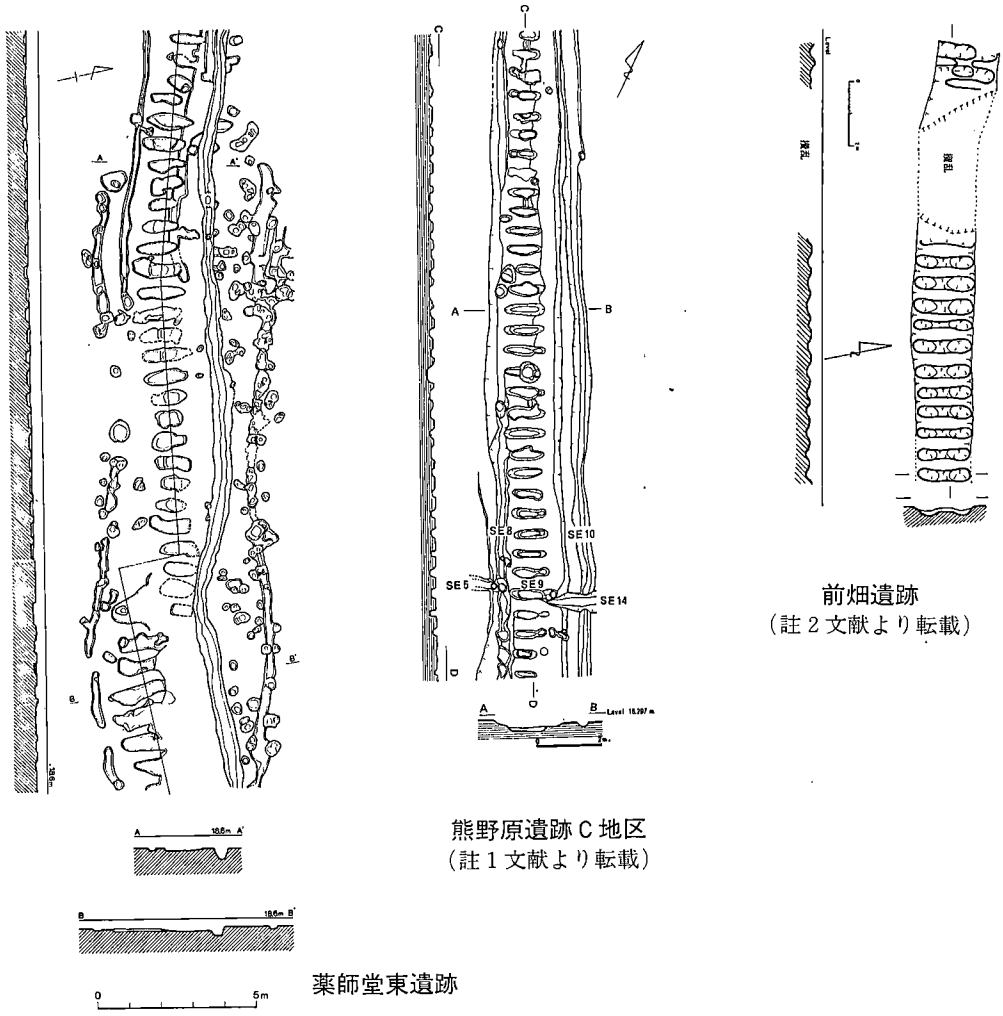
このような道が，九州の初期の重要な寺であった井上廃寺へ向かい，更に西方の小郡官衙にまで通じていたのか，と想像してみるだけでも楽しいではないか。

以下，各地の同種例を見てみよう。

熊野原遺跡Ｃ地点　宮崎市大字熊野に所在し，宮崎学園都市建設に伴って調査されている。(註１）ここの溝状遺構ＳＥ９（第394図参照）は，薬師堂東遺跡の道路状遺構に酷似している。つまり，幅が1.4～1.7ｍで長さ75ｍ分調査されており，ほぼ直線的に南北に延びている。底面には長さ110cm，幅30cm，深さ10cm前後の楕円形ピットが30cm間隔で並んでいる。またその埋土状況については，報告に「楕円形ピット及びその直上の埋土は，赤褐色あるいは褐灰色系の硬い0.5cm前後の薄い層が互層となっており，検出時には一層ずつ剝離が見られた。」と記されており薬師堂東遺跡例と同様の状況を示している。時期は「ヘラ切りの土師器」などから14～15世紀の所産と考えられている。

この熊野原例で問題なのは，報告者は何ら指摘していないが，このＳＥ９の両側に沿うようにして走る細い溝ＳＥ８・10・11の存在であろう。これは，薬師堂東遺跡例と同じく，側溝と考えていいのではなかろうか。

前畑遺跡　宮崎県えびの市眞幸町桃ヶ迫に所在し，本遺跡例とよく似た「溝状遺構」が検出されている。(註２）幅が２～1.8ｍ，52ｍの長さまで確認されており，やや蛇行して東西に走っている。長円形の窪みは，深さ20～10cm，幅が40～20cmのものが20～30cmおきに並んでいる。ここではその窪みの両端部分も更に窪む特徴を示す。近世の陶磁器片を混じえているとのことで



熊野原遺跡C地区
（註1文献より転載）

前畑遺跡
（註2文献より転載）

薬師堂東遺跡

第394図　道路状遺構集成図（1/720）

あり，時期は明確でない。

南九州の古道遺構　上記2例は，その形状が極めて薬師堂東遺跡例と類似するものであるが，鹿児島県下でも，基本的に踏み固められた古道がいくつか発見されている。ただ，これらは，楕円形ピットが並ぶ類ではない。

鹿児島県姶良郡栗野町牛瀬戸所在の山崎A遺跡では，幅30～70cmの狭い古道跡が，南北方向に6本，東西方向に5本検出されている。(註3）砂層と黒色土層の互層でその表面は固くなっており，奈良～平安時代の所産と考えられている。

また，加世田市上ノ城遺跡では，中世と考えられる古道4本が確認されている。(註4）これ

らは幅が30～90cmで，砂礫を２～５cm厚さに敷きつめたもので，中世城跡に伴うものと考えられる。

これ以外にも，鹿児島県内では，姶良郡隼人町西光寺所在の入道遺跡(註５)，姶良郡溝辺町山神遺跡(註６)，肝属郡田代町岩崎遺跡(註７)などでも道の跡と考えられる遺構が発見されている。これらの鹿児島県例は，幅も狭く，中央の長楕円形ピットも無いなど，宮崎県２例や薬師堂東遺跡例とは基本的性格が異るものと考えられる。

干潟遺跡　本遺跡の北方３km弱に位置する7～8世紀の集落である(註８)。ここの北端の集落支群と中央の集落支群との間に，遺構の疎らな空閑地帯がみられ，そこに南北方向に道状遺構が走っている。長さ50mほどの間が確認され，その北半では長円形窪みが並んでおり，全体に凹凸著しく，その埋土は硬くなっている。報告者によれば，集落とほぼ同時期のものであろうとのことである。側溝等はみられず，幅も1.5m弱でやや狭く，集落内部を結ぶ生活道路跡と考えられる。

ただ，北部九州でも今後注意して調査すると，この種の道は多く検出される可能性がある。

道路状遺構の性格　本遺跡の発掘当初，首をひねりひねりして，この凹凸著しい遺構の性格を思案していたが，調査終了後に図面整理の段階で，側溝の存在から，道路ではないかと推測していた。そして，昭和62年に北郷氏の文章(註９)に出会い，まさに我意を得たりの感をもった訳である。氏は，江戸初期の大仏殿再建にあたり，巨大な棟木を日向白鳥山から引き出していることに目を付け，上記前畑遺跡の「溝状遺構」がその作業道ではないかと可能性を問われた訳である。これは，大仏殿再建に関係するかどうかは別問題としても，氏の推定される「木馬(きうま)道(みち)」である可能性は強いと考える。それも，重量物を運搬するために丸太のころを敷き込んでいる点は理にかなっている。

福岡県春日市では九州大学春日キャンパス建設予定地の調査で，官道と考えられる道路遺構が検出されている。幅も広く，おそらく，博多湾岸方面から大宰府へ通じる官道であろうとされている。

また，近年福岡県吉井町塚堂遺跡Ｅ地区において，楕円形ピットが連続する遺構が発見されている。(註10) ただ，薬師堂東遺跡例のように側溝もみられず，水路状遺構に直角方向に何列も検出されており，調査担当者は道路以外の性格を想定している。

以上掲げたように，同種類似遺構にしても，性格が全く異なる場合もあり，道路状遺構にしても，踏み分け道程度から官道までみられる。こういう状況の中で，薬師堂東遺跡の道路状遺構は，少くともこの集落の幹線道路であり，共同管理が必須なものであった。更に一歩進めると，頭初に述べた如く，倉との関係からも，半ば公けの性格を有するものであったと推定しておきたい。

(中間)

註　1）　北郷泰道・面高哲郎『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告』第２集　宮崎県教育委員会　1985

註　2）　北郷泰道『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)　宮崎県教育委員会　1979

註　3）　牛ノ浜修・吉永正史『山崎Ａ・Ｃ遺跡，木場Ｃ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告(17)　鹿児島県教育委員会　1981

註　4）　諏訪昭千代・池畑耕一『上ノ城遺跡』加世田市教育委員会　1980

註　5）　吉永正史『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　Ⅱ』鹿児島県教育委員会　1978

註　6）　鹿児島県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』1974

註　7）　河口貞徳「南九州における縄文式文化の研究」『鹿児島県考古学会紀要』３号　1953

註　8）　橋口達也・副島邦弘『干潟遺跡　Ⅰ』福岡県教育委員会　1980

註　9）　北郷泰道「東大寺虹梁と日向――神話化の構造――」『えとのす』32　1987

註　10）　福岡県教育委員会が浮羽バイパス建設に伴って発掘調査した。調査報告書は今年度発刊予定である。担当の馬田弘稔氏より御教示を賜った。

V　結　　語

薬師堂東遺跡では，主体となる７・８世紀の集落の他にも，縄文時代と考えられる落し穴状遺構の存在や，次回へ報告を見送った近世高松家墓地の重要性など，多くの貴重な資料を得ることができた。若干の問題と成果をまとめて本書を締めくくることとしたい。

１．縄文時代の遺物は僅少であったが，その層位的状況を周辺他遺跡の層位のあり方と比較して，今後の指針を得ることができた。また，落し穴状遺構が各々群をなし，またそれぞれに対をなして獲物の追い込みに使われたことも判断された。

２．７・８世紀の集落は，７世紀後葉にピークをむかえ，最大規模となる過程が知られた。そして，その原因は，深く井上廃寺建設と関わっていたことが推測された。

３．各住居群は２～３戸程度の最小集団をなしていたことが明らかになった。そして当初西半部に在った集落の中心が，東半部へ移った経緯も判明した。また，道路状遺構の発見も重要な成果であろう。

４．墓地も，東・西の各群に分かれるが，西から始まって，東に移った状況が判かった。これらは伸展葬土壙墓で，土器の副葬のみであったが，墓地を営み得る一族の階層の存在が浮かび上がったことも成果のひとつである。

５．井上廃寺創建時の行基丸瓦が，共伴した土器によって７世紀後葉期のものと判断された。これは北方の干潟遺跡住居跡でも同様の結果が確められており，井上廃寺そのものの年代の決定に有効な資料を提供し得ることとなった。

６．墨書土器・刻字土器が出土しており，その書かれた内容は未だ定かではないが，役所的な性格を示すと思われるものもあり，井上廃寺の性格を知る上でも重要な資料になろう。

７．今回の言わば，幅60ｍのトレンチの中のみでは判断し難いことも多々在る。今後，集落の全体像をはじめ，井上廃寺とのより具体的な関係をつかむ必要があろう。また，この地域における，より精密な土器の編年作業も，実年代の根拠を踏まえて，着実に進めねばなるまい。

文末にあたり，発掘現場にて寒暑の苦労をともにした地元作業員の方々に，改めて心からお礼申し上げます。

（中間）

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 ６２	登録番号 ７

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

— 13 —

中　巻

昭和63年３月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

印刷　福岡印刷株式会社

福岡市博多区東那珂１丁目10－15